

屋島名勝調査報告書

2016年3月

高 松 市
京都府公立大学法人



図絵1 「源平合戦図屏風」

高松市歴史資料館蔵



図絵2 吉田初三郎『香川県名所交通屋島史蹟鳥瞰図』木村謹扇堂、1930年

京都府立大学蔵



図絵3 歌川国芳『美盾八艘 八嶋夕照』
高松市歴史資料館蔵



図絵4 「海瀬舟路図」(部分)
高松市歴史資料館蔵



口絵5 『国立公園 屋島の絶勝』(袋)
高松市歴史資料館蔵



口絵6 『国立公園屋島 講岐遊覧案内』
(血ノ池茶屋本店森與八)
高松市歴史資料館蔵



口絵7 『(講岐屋島名所) [源平古戦場]
屋島全景』
京都府立大学蔵



口絵8 『国立公園屋島百景』
京都府立大学蔵



口絵9 『(講岐屋島絶景) 屋島談古嶺巒々靈巖ヨリ見タル右ヨリ男木島・
女木島・中央大槻・小槻・左高松方面ヲ望ム』
京都府立大学蔵



図10 海上から眺めた屋島1（東から）
(撮影日：2015年10月26日、撮影：棟田成紹)

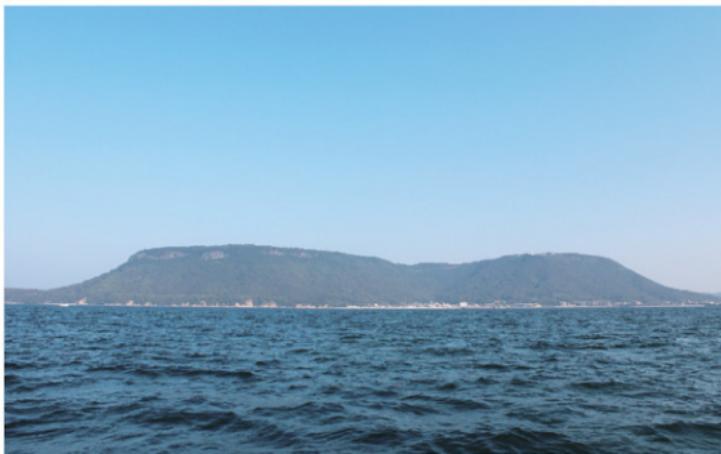


図11 海上から眺めた屋島2（西から）
(撮影日：2015年10月25日、撮影：棟田成紹)

屋島名勝調査報告書

例　言

- 1 本報告書は、高松市が平成 26・27 年度に屋島名勝調査事業として、京都府公立大学法人に委託して実施した屋島の名勝的価値に関する総合的な調査報告書である。
- 2 屋島名勝調査業務の委託業務期間は下記のとおりである。
平成 26 年度 平成 26 年 5 月 26 日～平成 27 年 3 月 31 日
平成 27 年度 平成 27 年 5 月 11 日～平成 28 年 3 月 31 日
- 3 京都府公立大学法人においては、京都府立大学文学部を中心に調査体制を整備し、調査にあたった。

序

本書は、名勝的価値という観点からみた屋島の位置づけに関する調査成果を報告するものである。

調査は平成 26 年度・27 年度の 2 年間で実施され、以下のような調査体制で資料・文献収集、現地調査、資料分析がなされた。調査メンバーは、各自の分担に従って報告書執筆にも従事した。

上杉和央（代表）	京都府立大学文学部・准教授
東 昇	京都府立大学文学部・准教授
橋 ツツ	神戸山手大学現代社会学部・教授
川口成人	京都府立大学大学院文学研究科・博士後期課程
島本多敬	同上
井上真美	京都府立大学大学院文学研究科・博士前期課程
川崎雄一郎	同上
宮下 達	同上
棟田成紹	同上
百瀬ちどり	同上
稲穂将士	同上
山崎祐紀子	同上
上中理帆	京都府立大学文学部・学部生
佐々木夏妃	（平成 26 年度）京都大学大学院文学研究科・博士前期課程
長谷川斐悟	（平成 26 年度）日本学術振興会特別研究員（PD）
松村祥志	（平成 26 年度）京都府立大学大学院文学研究科・博士前期課程

また、調査に際し、以下の機関に資料閲覧等でお世話になった。記して感謝申し上げる。

愛媛県立図書館、愛媛県歴史文化博物館、王立園芸協会リンドレー図書館、岡山県立図書館、香川県立図書館、香川県立ミュージアム、香川県立文書館、香川大学瀬戸内圏研究センター、香川大学附属図書館、九州大学附属図書館、瀬戸内海歴史民俗資料館、東京大学史料編纂所
(50 音順)

なお周知のように、屋島は記念物のなかの史跡および天然記念物の指定をすでに受けている。天然記念物としての価値については、近年、高松市・香川大学天然記念物屋島調査団編『天然記念物屋島調査報告書』（高松市、2014）が公表された。そこに掲載されている植生の状況や地質のあり方、そして何よりも山容の形成過程に関する最新の調査成果については、本報告書で取り上げる名勝的価値の基盤であると同時に、名勝における自然的な観点からの評価に重なるものである。よって、これら自然的な観点からの評価については先の報告書の成果にゆだね、本書では人文的な観点からの評価を中心に、屋島の名勝的価値について、検討をおこなうこととした。

目 次

口絵	
序	
総論 屋島像の展開	5
〈資料調査編〉	
1 中世史料からみた屋島・屋島合戦イメージ	12
2 屋島寺と遍路 一創建から近世の屋島寺一	24
3 近世・近代の文芸にみる屋島・源平合戦	32
4 近世における屋島の顯彰	43
5 中近世の絵画資料にみえる屋島像	47
6 近世地誌・名所案内記にみえる屋島表現	62
7 近世の紀行文・四国遍路案内記にみる屋島	74
8 絵図・地図に描かれた屋島	85
9 明治前期の屋島、官林と塩田	101
10 近代西欧のまなざしからみた屋島と瀬戸内海	103
11 ガイドブック・リーフレットにみる屋島像	119
12 絵葉書における屋島表現	126
13 屋島点景 一モチーフの「今」はむかし一	133
〈現地調査編〉	
14 屋島合戦跡の石造物	149
〈資料編〉	
資料編1 歴史資料一覧	181
資料編2 文献一覧	277

※1 〈資料調査編〉の各章で用いる資料に付された番号は、〈資料編1〉の歴史資料一覧の番号である。

※2 〈資料調査編〉の各章においては、主要参考文献のみを掲げた。関連文献については〈資料編2〉の文献一覧を参照いただきたい。

総論 屋島像の展開

文化財としての名勝

文化財保護法が規定する記念物のひとつに名勝がある。それは「庭園、橋梁、峡谷、海浜、山岳その他の名勝地で我が国にとって芸術上又は鑑賞上価値の高いもの」（同法第2条第1項第4号）であり、より具体的な基準については「特別史跡名勝天然記念物及び史跡名勝天然記念物指摘基準」（昭和26年（1951））に次のように述べられている。

名勝

左に掲げるもののうち我が国すぐれた国土美として欠くことのできないものであって、その自然的なものにおいては、風致景観の優秀なもの、名所的あるいは学術的価値の高いもの、また人文的なものにおいては、芸術的あるいは学術的価値の高いもの

- 一 公園、庭園
- 二 橋梁、築堤
- 三 花樹、花草、紅葉、緑樹などの叢生する場所
- 四 鳥獸、魚虫などの棲息する場所
- 五 岩石、洞穴
- 六 峡谷、瀑布、渓流、深淵
- 七 湖沼、湿原、浮島、湧泉
- 八 砂丘、砂嘴、海浜、島嶼
- 九 火山、温泉
- 十 山岳、丘陵、高原、平原、河川
- 十一 眺望地点

名勝の価値を備えているかを判断する基準としては、まずすぐれた国土美を有するかどうかが問われる。そのうえで自然的な観点としては①風致景観、②名所的価値、③学術的価値のいずれかにおける評価、人文的な観点としては④芸術的価値、⑤学術的価値のいずれかにおける評価が高いことが求められている。屋島については自然的な観点、人文的な観点が、いずれも重要となる。よって①～⑤をまとめてA景観美としての屋島、B歴史文化の源泉としての屋島、C学術的对象としての屋島、という点での価値の高低を確認していく必要がある。このうち、CについてはA・Bそれぞれに関する学術的関心の高さとその持続が問わることになるが、この点については本書に付した「文献一覧」をみれば、常に一定の学術的関心が集まってきたことを確認することができるだろう。その内容は多岐にわたるが、それらをふまえた調査成果については本書の各章で触

れられている。

また当該地の特徴によって 11 の分類が示されているが、文化庁の資料などをみると、実体に即して細分した 19 種類に分類しているようである。その細分のうち、屋島に当てはまるのは「島嶼」「山岳」「展望地点」であろう。

今回の調査成果にもとづけば、この 3 つの要素のうち、「島嶼」は上記 B と、「山岳」は A、そして「展望地点」は A・B に主に関わるものと言えそうである。よって、以下では、このような関係性を意識しつつ、それぞれの側面から屋島の特徴を簡潔に述べていくことにしたい。ただし、そのような具体的な記述の前に、名勝の定義にもみえた「名所」という語について、その意味を確認することから始めたい。

I 名所—共有された地域イメージ

近世地誌である『撰陽群談』（元禄 14 年（1701）刊行）では、名所が「歌名所」と「俗名所」とに区分されて掲載されている（上杉 2004）。 「歌名所」とは和歌に詠まれるべき地名、すなわち「歌枕」として知られた場所であり、古代の和歌文化のなかで誕生・定着していくものである。それに対し、「俗名所」は和歌には依らないものの、有名な出来事が起きたことで知られる場所、もしくは物語等の舞台となった場所を指している。もしくは過去の事跡ではなく、現在の状況や事がらによって有名となっている場所であっても「俗名所」となる。「俗名所」という意味での「名所」の用例も中世には確認でき、近世以降の新しい用法というわけではない。いざれにしても、中近世における「名所」には、このような 2 つの名所観があった。

注意したいのは、「歌名所」も「俗名所」も、その場所イメージが共有されている必要があるという点である。和歌文化に即せば、たとえ「歌枕」を詠み込んだ歌を作ったとしても、その地名に付与された共有イメージをまったく無視した内容であった場合、それは個人ないし歌の評価を貶めてしまう結果となる。

また、これに関わって重要なのが、「歌名所」も「俗名所」も、現地を訪れない限りできないわけでは決してないという点である。むしろ「名所」たらしめている根拠としての和歌や出来事・事がらを深く理解している方が重要であり、それによって場所のイメージが豊かになる（上杉 2015）。

このような特徴を持つために、歴史文化を源泉として創出された共有の場所イメージは、時として、現地の風景とは大きく乖離することがあった。旅が一般的な文化として定着する近世以前においては、現地を知らない者が大半を占めており、乖離はなおさらであった。近世に入り、旅行文化が成熟するにつれ、そのような乖離は徐々に小さくなる——言い換えれば、現地の風景もまた共有イメージの源泉として利用されていくようになる——が、それまでに流布したイメージを用いた文化芸術活動が継続されることもあり、たとえ現地の情報が伝えられても、その溝が完全に埋まることはなかった。その解消は、少なくとも写真技術やマスメディアの発達を待たねばならない。

逆に言えば、近世においても乖離が残る場所ほど、歴史文化を源泉としたイメージの再生産と共有が続いている場所ということになる。

II 「島」としての屋島

2つの名所觀という点からみれば、屋島は「俗名所」としての名所であった。(俗)名所たる屋島像を下支えする歴史・文化的なイメージの源泉の候補としては、屋嶋城、屋島寺、屋島合戦が挙げられるだろうが、圧倒的に大きな影響を持ったのは屋島合戦である。屋嶋城は『日本書紀』に記載され、歴史的にはもっとも古い事跡となるが、その後、人々の記憶から忘れられていく。また、本書第2章に示される通り、屋島寺については現在、鑑真や空海などの登場する寺伝がよく知られるが、近世初期には荒廃していたようであり、少なくとも四国八十八所巡礼が盛んになる時代以前に、屋島イメージの源泉として縁起や寺伝が地域外まで広く伝わっていた形跡は乏しい。

それに対して、屋島合戦をめぐっては豊富な文化的営為がなされてきた。ただ本書第1章で指摘されているように、史実としての屋島合戦については同時代資料が少なく、その詳細は分かっていない。巷に流布しているのは、そのような史実としての合戦ではなく、物語化された合戦譚であり、その起源は「平家物語」となる。「平家物語」のなかで、屋島合戦は源平合戦終盤のハイライトとして大きく取り上げられ、佐藤継信討死、那須与一の扇的、源義經の弓流、藤原景清の鎧引など、豊富なエピソードが語り継がれていくようになった。これらのエピソードの中で同時代資料にも登場するのは佐藤継信が合戦で命を落としたというくらいであり、その他についてはその真偽を確かめる術はない。

重要なのは、そのような史実としての評価ではなく、「平家物語」あるいはそれをもとにして生まれた諸芸能・芸術作品を通じて、人々の中に「歴史に残る名勝負」として屋島合戦が刻まれていったことである。実際、長編の「平家物語」のなかから、屋島合戦の諸場面を抜き出して能や歌舞伎といった芸能、小説などの文芸、合戦図屏風や錦絵といった絵画芸術に展開した例は實に多い（本書第1・3・5章）。また、屋島を訪れている旅人の紀行文などにも、必ずと言ってよいほど屋島合戦の話題が盛り込まれている（本書第7章）。源平合戦図屏風が一隻で描かれる場合、そこで取り上げられる場面としては一の谷合戦と屋島合戦が抜きんで多いが（本書第5章）、それだけ「絵になる」エピソードがたくさんあったということかもしれない。

そのようなエピソードの1つに義経率いる源氏が高松・牟礼側から屋島へと渡る場面がある。高松・牟礼と屋島との間にある海／河（現・相引川）に浅い部分があることを知って、馬で渡っていくというものである。「平家物語」やそこから派生した文化の享受者たちは、このエピソードによって、屋島の「島」性を理解することになった。とりわけ、屋島合戦の全体が描かれる絵画芸術などに採用されるとき、視覚イメージをも伴って「島」であることが意識（ないし無意識的に享受）される。これに関して、必ずしも屋島合戦を主題とはしていない近世絵図においても、俯瞰的な構図で屋島が表現される場合、相引川で隔された屋島をとらえ、かつ東側からの視点で山を描き、そこに屋島合戦古跡の情報を添えるものが多くなる（本書第8章）。

注目したいのは、このような「平家物語」およびそこからの派生文化において、屋島は「八嶋」（「八島」）と表現されることが多く、「屋嶋」（「屋島」）という表現の方がむしろ少いという点である。現実の山容を知る者にとっては、「屋島」という漢字表記から「屋根の形をしている山だから屋島」という理解をしてしまいがちだが、本来、これは「屋島『山』」と補わないといけないものである。独特的の山容と近世以降の干拓の歴史によつて、我々は屋島の「島」性に気が付くことが困難となっている。しかし、現地の理解からある程度自由であった近世の「平家物語」系文化の享受者たちは、「八嶋」（「八島」）とそこに付与されるイメージから、適切に「島」性を受け取ることができたのである。

もちろん、その代價としてとでも言おうか、これらの者たちは屋島の「山」性について十分に理解することができないままであった。実際、屋島合戦を描いた近世絵画のなかで、屋島の山容を意識して描いた作品は、地元の者が携わったことが明らかな作品を除けば、一点もない。「平家物語」系の作品によって共有された屋島イメージは、海で活躍した与一らのエピソードに大きく拘束された「島」（「八嶋」）であった。

この点で、松平家の初代高松藩主である松平頼重の事績はこのようなイメージを継続させたものとして大きな意味を持つ（本書第4章、現地調査編）。頼重は高松藩主就任直後に、屋島合戦関連古跡の整備に乗り出し、佐藤信信の墓・碑などを建立する。そして生駒期に干拓で埋め立てられてしまった相引川についても、旧跡の保存という点から再び水を入れ、屋島を「島」として復活させたのである。近世のガイドブックには、屋島を語る記述の中で、これら頼重の行為についても触れられることが多く、屋島合戦の「義」や「忠」といった道徳的側面に加え、藩主頼重の「恩」についても屋島イメージに追加されることになった（本書第6章）。

さらに頼重は讃岐国八景を歌に詠む中で、屋島を「秋月」として歌った。

八嶋秋月

もろともにあはれはそらにしらけり
屋しまにのこる秋のよの月

ここで読み込まれた源平合戦への追慕と秋・夜・月というモチーフは、その後の屋島を詠んだ文芸作品のなかで共通して取り上げられるようになる（本書第3章）。屋島の詠歌ではこれらのモチーフを歌い込むものというイメージが共有されているという点で、屋島は「歌名所」ともなったのである。

III 「山」としての屋島

現在、「屋島」と言えば「山」としてイメージされることが多い。実際、近世後期に谷文晁によって日本の名山がまとめられた『日本名山図会』において、屋島山も取り上げられており（本書第5章）、その時点からすでに名の知れた山であったことが知られる。

ただし、『日本名山図会』で取り上げられるのは南側からみた屋島、すなわち「屋島富士」とも呼ばれる三角形の山容となる方向からの屋島である。南側からの山容が絵画資料で取り上げられることは少数であり、谷文晁の山に対する個人的な志向性が反映している可能性がある。

全体的にみれば、絵画資料に描かれた屋島の山容としては、西側から眺めた構図が圧倒的に多い。そしてそれは屋島だけを描くのではなく、手前に高松城下や海、船、松といった諸要素を配置し、画面奥に台形の屋島が優美に横たわる構図で描かれることがほとんどである。このような傾向は近現代のガイドブックやリーフレットの表紙などでも採用されており、「屋島の見方、書き方」の作法として定着していた（本書第5・13章）。屋島合戦に彩られた「東側からの見方」という点と対比的にとらえれば、「西側からの見方」が臨海都市高松を含みこむピクチャレスクなものであったということもできる。

ピクチャレスクなイメージの中で屋島がとらえられ、それが芸術作品のモチーフとして本格的に利用されるようになるのは、近世後半になってからである。それ以前においても、たとえば『高松城下図屏風』に屋島の山容が描き込まれるといったことはあったが、屋島を主題とした作品ということになれば、その隆盛はやはり近世後半以降となる。今

回の調査のなかでみると、絵画の分野では谷文晁の「山水図・七絶詩」が早く（本書第5章）、詩歌の分野においては、明確に山の形が謳われることは少ないが、船中から屋島を詠んだ細川林谷の漢詩に「元来屋島是家山」とあるのが早いだろうか（本書第3章）。

そして、このような動きは、近代以降により強く表れるようになる。その遠因として西洋人が「瀬戸内海」を発見したことがある（本書第10章）。近代における西洋人の記録に屋島そのものを特記したものは少ないが、瀬戸内海を日本の美の象徴や世界的に見てもすぐれた景勝地であると、その景観美を絶賛するようになった。それまでの日本人には「瀬戸内」としてあたり前の景観でしかなかった世界が、自然美を愛するピクチャースクな「瀬戸内海」として創造されたのである。

そして、このような自然美的重視は、昭和2年（1927）の日本新八景の選定や昭和9年の国立公園の指定などにもつながっていく。屋島は日本八景には漏れたものの、日本二十五勝の1つとなった。また周知のように第1回国立公園指定地の1つとなっていく。近代のガイドブック・リーフレットなどをみていくと、この時期あたりから、屋島の自然美が強調される文言が多数現れる（本書第11章）。特に屋島は小豆島と並んで瀬戸内海国立公園の中心的な存在だったこともあり、「内海第一の勝地」などと謳われていく。絵葉書においても、複数枚の絵葉書をセットにして販売する際に「国立公園 屋島の景観」「国立公園 屋島の絶勝」といったタイトルがつけられ、屋島を中心とした景観美が盛んに販売されていくことになる（本書第12章）。

とはいって、このような西側からの景観美が東側からの歴史認識を圧倒し、屋島合戦イメージが失われてしまったわけではない。ガイドブックやリーフレットにおいて、屋島合戦の古跡は詳細に解説され続け、また絵葉書のモチーフにも屋島合戦は重要な素材として採用され続ける（本書第11・12章）。なかには、西側のピクチャースクなイメージの中に那須与一の図像などが配されるなど、地理的には錯認しているデザインも作られていくが（本書第13章）、屋島の歴史イメージがそのような景観美的な見方に加味されているという点で興味深いものである。いずれにしても、歴史物語からの屋島像と景観美からの屋島像は、基本的に東側と西側といったある種の地理的分担をしつつも、共存しながら屋島全体のイメージを高めていくことになった。

IV 「展望地点」としての屋島

東側＝歴史、西側＝景観といったイメージの源泉に加えて重要なのが、屋島山上からの風景である。屋島はその立地的特性と山の地形的特性から、標高はそれほど高いわけではないが、広範囲の眺望を得ることができる山となっている。

歴史上、最初に注目されたのは北側——海上側——への展望である。近年、発掘調査によって、その全体像の一部が明らかになりつつある屋嶋城は、白村江の戦い後、唐・新羅側に対する備えとして日本海・瀬戸内海沿岸に造られていった山城の1つである。その立地をみると、海路を進んでくるであろう唐・新羅軍を強く意識したものとなっており、海への眺望が開けた場所が選ばれている。屋嶋城の場合、現在、復元整備がなされている城門跡からは現在よりも内陸まで広がっていた高松湾を、そして北嶺付近からは備讃瀬戸を、広く見渡すことができた。

その後、山上には屋島寺が建立され、信仰の場となっていくが、修行者に加えて一般的の者たちが屋島山上に頻繁に上がるようになっていくのは、近世の四国遍路の成立、もしくは旅行文化全般の隆盛以降となる（本書第2章）。多くの参詣者が屋島寺を訪れ、その次の八栗寺に向かう途中で屋島合戦の古跡を巡っていく。山上から屋島合戦古跡全体を眺めての感想などは記されることはなかったが（本書第7章）、先にも挙げた谷文

尾の『日本名山図会』の五剣山は、明らかに屋島の山上ないし山腹から東側を捉えた構図となっており、展望地点としての屋島という側面が確認できる（本書第5章）。

展望地点としての屋島イメージが、本格的に取り上げられていくのは、パノラマ的な景観美が社会の中に浸透していく近代になってからである。なかでも山上からのパノラマを映し出す絵葉書は、その象徴的な作品と言ってよいだろう（本書第12章）。そこでは東側のパノラマと西側のパノラマ、そして北側のパノラマが作られた。

東側は「談古嶺」からの眺めであり、屋島合戦の各エピソードの古跡が一望された写真である。「談古嶺」という名称がそもそも、屋島合戦談義をする場所という意味であり、村雲尼公（皇族による最初の登山でもあった）によって明治30年（1897）に命名された。

西側は「獅子の靈巖」からの眺めである。眼下には香川県を代表する産業であった製塩場の塩田があり、その先には高松市街地と築港を中心とした臨海部、そして穏やかな瀬戸内海が広がる。さまざまな点で海を活かした産業を中心に発展する高松を展望する場所、それが山上西側である。

そして北側は「遊鶴亭」からの眺めである。ここからは多島海とも言われる瀬戸内海の自然美が一望でき、大正11年（1922）に登山した摂政宮（後・昭和天皇）がこの地点からの眺めを特に賞賛、さらには大正12年には良子女王（後・昭和天皇皇后）も同地を訪れ、この地を「遊鶴亭」と命名している。国立公園の候補地として調査される中にあって「屋島の溶岩台地は自から見晴台をなし内海の明媚雄大なる風光を展望すべき絶好の地点となって居る」（中越1929、13頁）とあり、屋島はその溶岩台地としての特徴に加えて、展望地点として優れていることが解説されている。

このように歴史、産業、自然といった様々な要素が展望できる場所、それが屋島であった。これらの要素は、塩田景観など今では見えなくなったものも一部あるが、基本的には現在もなお屋島から眺めることができるものの、展望地点としての屋島の価値は変わっていない。

V 名勝的価値からみた屋島像

以上、屋島の名勝的価値を探るにあたり、「島」「山」「展望地点」という視点から、A景観美としての屋島、B歴史文化の源泉としての屋島について概観した。結果として浮かび上がったのは、屋島の持つ様々な相貌である。

「島」もしくはB歴史文化の源泉という点については、当初は実態の屋島とは離れて中で「名所」として成立したこと、その後、旅行文化や視覚芸術の展開の中で、おもに東側からの視点と結びつく中で屋島合戦が捉えられていったことなどを明らかにした。「山」もしくはA景観美という点についてみれば、台形なし「屋根のかたち」と形容される独特のメサ地形が生み出す山容美は、近世になって高松城下との景観的連続性の中で強く意識され始め、おもに西側からの視点から捉えられて描写されるようになったこと、さらに近代に瀬戸内海の自然美が発見される中で賞賛されるようになったことを指摘した。また南側からの「屋島富士」といった三角形の山容に視点が当てられていたことも確認した。そして「展望地点」という点についてみれば、東側=歴史文化、西側=都市・産業の発展、北側=自然美、といった要素を眺める場所としての屋島が位置づけられていたことをとらえた。

このような成果を簡略に示すと図のようになるだろうか。名勝的価値という点からみた屋島の特徴はその多様性にある。中世以来の俗名所、近世後半以降の山容美、そして近代のビクチャレスクな自然美といった、各時代の象徴的な景観のまなざしが、屋島を眺める方向と緩やかに結びついで積層ないし併存していること、そして眺める対象のみならず、屋島自体が歴史の舞台や都市発展、自然美を眺める絶好の地点としてもとらえ

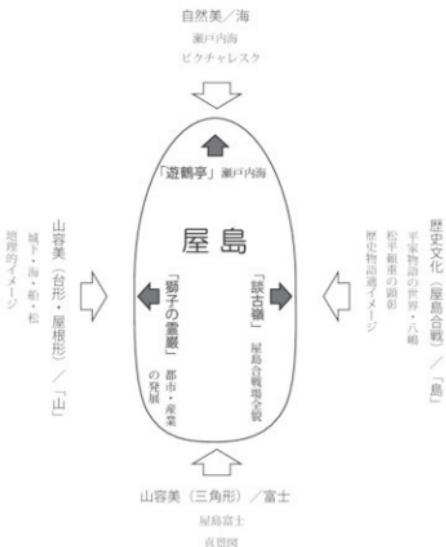


図 屋島の名勝的価値の多様性

られてきたこと、こういった多様な相貌を併せ持つ場所は、日本のなかでもそう多くはないだろう。

本章は、本書各章でとらえられた成果を総合したものであり、概略を示したに過ぎない。また、本調査はあくまでも基礎的な段階のものであり、さらなる追究が不可欠であることは言うまでもない。しかしながら、その屋島の備える基本的な点は指摘することができたのではないかと思う。この成果が高松市のシンボル、屋島の保存・活用に対して、少しでも寄与できるのであれば、望外の喜びである。

〈引用文献〉

- 上杉和央 2004 「17世紀の名所案内記にみえる大阪の名所觀」、地理学評論 77・9
 上杉和央 2015 「想像世界の歴史地理」、竹中克行編『人文地理学への招待』ミネルヴァ書房
 中越延豊 1929 「国立公園候補地観測（四）[小豆島及屋島]」、国立公園 1・7

※本書各章で取り上げられた各文献を参考としているが、巻末の文献一覧にあるものは省略し、ここでは文献一覧にないもの、もしくは引用したものののみを掲げた。文献一覧を合わせて確認いただきたい。

(担当：上杉和央)

1 中世史料からみた屋島・ 屋島合戦イメージ

はじめに

現在に至るまで、屋島のイメージを規定している歴史上的事件が、いわゆる源平合戦における「屋島合戦」であることは衆目の一一致するところであろう。元暦2年（1185）2月、源義経を大将とする源氏軍が、平氏が都落ち後に拠点を構えていた屋島を奇襲し、勝利を収めたというのが、合戦の概要である。義經郎等佐藤継信の壮絶な最期、那須与一の扇の的、藤原景清の鏡引、義経の弓流などのエピソードが知られ、現在も屋島周辺には古戦場の伝説地が多く残されている。

ところが、中世の屋島で起こった出来事、様子を知ることができる確実な史料は、源平合戦期を含めても、さほど多く残されているわけではない。それでは、現在知られる屋島・屋島合戦のイメージはどういった形で形成され、広く受容され、展開していくのであろうか。言うまでもなくそこには、屋島合戦を含む源平合戦を描いた「平家物語」と、それを題材とした絵画・芸能・文芸の広がりが大きな役割を果たしている。そして、屋島合戦が語られ、描かれ、演じられていく過程は、断片的ながら中世の文献史料からも見出すことができるのである。

さて、「平家物語」とそれを題材とする諸作品については、文献史学・美術史・芸能史・国文学・民俗学などでそれぞれ重厚な研究史を有し、屋島合戦について論じたものも多く存在する¹。本章ではそれらの先駆の成果に学びながら、中世における屋島・屋島合戦イメージの形成と展開について述べていきたい。

以下、本章の構成を述べる。まず「I

中世史料からみた屋島の概観」では、屋島合戦を含め、中世の屋島で起こった出来事について概観する。次に、「II 『平家物語』と屋島・屋島合戦」では「平家物語」諸本における屋島の描かれ方についてみる。「III 文献史料にみる屋島関係の絵画・漢詩」では屋島を題材とした絵画・漢詩について言及する。「IV 中世芸能にみる屋島」では屋島合戦を題材とした能をはじめとする芸能について述べる。「V 伝承の中の屋島合戦」では、佐藤継信・那須与一といった屋島合戦で活躍した武将に関する説話・伝承を紹介する。

I 中世史料からみた屋島の概観

本節では、中世史料からみえる屋島について概観する²。

「はじめに」で述べたように、屋島合戦は現在の屋島イメージを規定する一大事件だったが、このことは同時代史料にどのように記録されているのであろうか。まず都落ちした平氏たちが屋島に移ったことについては、京都の公家である藤原經房（1142-1200）の日記「吉記」から確認することができる。

【史料1】「吉記」(A002) 寿永2年（1183）
11月4日条

四日、甲午、天壽（中略）

平氏在八島逐出鎮西之由注進事

或說云、平氏在讃岐八島、九國輩菊池已下
為追討進巳出文司闖了云々、又安芸志芳脚
力到来云、平氏十月廿日一定被逐出鎮西了、
事已必然也、可哀々々、又出家人有其數云々、

平氏が「讃岐八島」にあり、「九國輩菊池

已下」がその追討のため、門司閥へ出発したことが記されている。「或説云」とある通り、経房は伝聞によってこの情報を入手したのであろう。

次に、九条兼実（1149-1207）の日記「玉葉」の記事にも、平氏が屋島に移ったことを示す記事がある。

【史料2】「玉葉」(A003) 寿永3年(1184)

2月19日条

十九日、戊寅、天晴（中略）。
此日、中御門大納言被来、伝聞、平氏帰住
讃岐八島、其勢三千騎許云々、被渡之首中、
於教經者一定現存云々、又維盛卿三十艘許
相卒指南海去了云々、又聞、資盛貞能等、
為豊後住人等乍生被取了云々、此說、日來
難風聞、人不信受之處、事已實說云々、又
聞、重衡卿万事被尋問之間、下官可知天下
之由、平氏定之之間令申云々、仍被嚴問云、
若有通音信事歟云々、申云、其條一切不然、
只依為傍若無人、當其仁云々者、

伝聞として、平氏が「讃岐八島」に帰住したとあり、三千騎の軍勢があったとしている。そのほか、平氏一門の動向についての多くの伝聞が記されている。

このように平氏たちが讃岐国屋島に移ったことは、京都の公家たちも伝聞という形で情報を得ていたことがわかる。

そして、元暦2年（1185）年2月に源義経を大将とする源氏軍が屋島を攻撃する。この屋島合戦が記録されているのは、「玉葉」である。

【史料3】「玉葉」元暦2年3月4日条

四日、丁亥、天晴、隆職注送追討之間
事、自義経許申上状云々、去月十六日解纜、
十七日着阿波國、十八日寄屋島、追落囚党了、
然而未伐取平家云々、

屋島合戦を終えた義経は朝廷に奏上をおこなっており、その内容が記されている。2月16日に解纜（=出帆の意）し、同17日に阿波国に到着、18日に屋島にて、凶党を追い落したが、未だ平家は討ち取っていないという。「玉葉」においては、屋島合戦につ

いての記事はこれだけであり、「はじめに」で触れたような多数のエピソードは全く記録されていない。

続いて、鎌倉幕府が編纂した歴史書である「吾妻鑑」を確認する。ここでは、屋島合戦はどういうふうに描かれているだろうか。まず「吾妻鑑」元暦元年（1184）9月19日条には、一の谷合戦後、源氏方の先陣となった橘公業という人物が注進した「平家当国屋島落付御坐捨参源氏方奉參京都候御家人交名事」として、源氏方についた讃岐国の14人の御家人の名前が載せられている。

そして、屋島合戦に関係した記事が続く。以下に列挙しよう。

【史料4】「吾妻鑑」(A004) 元暦2年2

月16日・18日・19日・22日・

3月8日条

十六日庚午、関東軍兵為追討平氏赴讃岐國、
廷尉義経為先陣、今日酉刻解纜、大藏卿泰
經朝臣称可見被行粧、自昨日到附旅館、而
卿諫云、泰經雖不知兵法、推量之所覃、為
大將軍者、未必競一陣歎、先可遣次將哉者、
廷尉云、殊有存念、於一陣欲奔命云々、則
以進發、尤可謂精兵歎、平家者結陣於兩所、
前内府以讃岐国屋嶋為城郭、新中納言知盛
相具九國官兵、園門司閥、以彦鶴定營、相
待追討使云々、

十八日壬申、廷尉昨日自渡部欲渡海之處、
暴風俄起、舟船多破損、士卒船等一艘而不
解纜、爰廷尉云、朝敵討討使暫時逗留、可
有其恐、不可顧風波之難云々、仍壯剋、先
出船五艘、卯剋着阿波國椿浦（常行程三ヶ
日也）、則率百五十餘騎上陸、召當国住人
近藤七親家為仕臣、發向屋嶋、於路次桂浦、
攻櫻庭介良遠（散位成良弟）之處、良遠辭
城逐電云々、

十九日癸酉、（中略）又廷尉義経、昨日終
夜越阿波國與讃岐之境中山、今日辰剋、到
于屋嶋内裏之向浦、燒払牟礼、高松民屋、
依之、先帝令出内裏御、前内府又相率一族
等、浮海上、廷尉（著赤地錦直垂、紅下瀆
鑑、駕黒馬、）相具田代冠者信綱、金子十
郎家忠、同余一近則、伊勢三郎能盛等、馳

向汀、平家又棹船、互發矢石、此間、佐藤三郎兵衛尉繼信、同四郎兵衛尉忠信、後藤兵衛尉実基、同義子新兵衛尉基清等、焼失内裏并内府休幕以下倉屋、黒煙聳天、白日蔽光、于時越中二郎兵衛尉盛継、上總五郎兵衛尉忠光（平氏家人）等、下自船而陣宮門前、合戦之間、廷尉家人繼信被射取畢、廷尉太悲歎、屈一口衲衣葬千株松本、以秘藏名馬（号大馬黒、元院御厩御馬也、行幸供奉時、自洞洞給之、每向戦場駕之）賜件僧、是撫戦士之計也、莫不美談云々、同日、住吉神主津守長盛参拝、絆泰聞稱、去十六日、当社行恒例御神樂之間、及子剋、鳴镝出自第三神殿、指西方行云々、此間奉仕追討御祈、靈験揚焉者歟、

廿二日丙子、梶原平三景時以下東土、以百四十余艘、着屋島磯云、

八日辛卯、源廷尉義経飛脚自西国參着、申云、去月十七日、僅率百五十騎、凌暴風、自渡部解纏、翌日卯刻、着于阿波國、則遂合戦、平家從兵或被誅、或逃亡、仍十九日、廷尉被向屋島訖、此使不待其左右馳參、而於播磨國顧之処、屋島方黒煙聳天、合戦已畢、内裏以下焼亡無其疑云々、

「玉葉」に比べると、非常に多くの情報が載せられている。16日条では解纏が記され、18日条では阿波への到着までが述べられる。ここで注目しておきたいのが、16日条にみえる「前内府以讃岐国屋島為城郭」という記述である。これによれば、前内府平宗盛が屋島を「城郭」としていたことがわかる。後で触れるが、「延慶本平家物語」(A006)に「屋島ノ浦ハ吉城郭ニテ候ナリ」という記述があることと関わって興味深い。

2月19日条では、屋島合戦当日の様子が記されている。義経が屋島の対岸に位置する牟礼高松の民家を焼き払ったことや、戦いの最中に内裏が焼失したこと、源氏軍と平氏軍のメンバーについても確認することができる。中でも注目したいのが、佐藤繼信の戦死が記事にみえることである。これによれば、義経は戦死を大いに哀しんで千株松のもとに葬り、院から下賜され、常に戦場に乗っていた秘蔵

の名馬大馬黒を「件僧」に賜ったという。以下、22日条では、梶原景時が屋島に到着したことが記され、3月8日条では、義経が遣わした飛脚が申した内容が述べられている。飛脚は播磨国で後を顧みた際、屋島方には黒煙が天にそびえており、合戦はすでに終わって内裏以下が焼亡したことは疑いないという。

屋島合戦前後の史料については、「玉葉」「吉記」といった公家の日記に記述がみられるものの、非常に簡潔である³。一方「吾妻鑑」は、屋島合戦前後を詳細に記しており、特に平家方を屋島が城郭としたこと、佐藤繼信の最期についても言及されていることは注目される。しかしながら、その繼信の最期を除くと、現在よく知られているエピソードについては全く記録されていないのである。こうしたエピソードの広まりについては次節以降で論じることとし、屋島合戦以後の屋島についてもみていきたい。

屋島南嶺に位置する屋島寺は、慶長16年(1611)の「屋島寺龍巣勸進帳」(A060)によると鑑真が創建し、弘仁年間に空海が千手觀音を作り、曼荼羅堂などを建てたとされている。この屋島寺に現在も残る梵鐘（国指定重要文化財、A005）には、貞応2年(1223)の銘文で「讃岐国屋島峰千光院」とあり、鎌倉時代には千光院と呼ばれていたことがわかる。屋島寺に関するいえば、「西大寺末寺帳」(A015)に「屋島普賢寺」とあり、明徳2年(1391)段階では大和国西大寺の末寺だったことが知られる。

建武2年(1335)には、屋島は再び戦場となっている。軍記物語ではあるが、同時代に編纂された「太平記」に次のような叙述がみえる。

【史料5】「太平記」(A013) 卷14「諸国朝敵蜂起事」

カヽル処ニ、十二月十日、讃岐ヨリ高松三郎頼重早馬ヲ立テ京都へ申ケルハ、「足利ツ一族細川卿律師定禪、去月二十六日当国鷺田庄ニ於テ旗ヲ揚ル処ニ、詫問・香西コレニ與シテ、則三百余騎ニ及ブ、是ニ依テ、頼重時剋ヲ廻ラサズ、退治セシメン為ニ、先ツ矢島ノ麓ニ打寄テ國中ノ勢ヲ催ス処ニ、定禪遂テ夜討ヲ致セシ間、頼重等身命ヲ捨

テ防戦フト雖モ、属スル所ノ国勢忽ニ翻テ
剩ヘ御方ヲ射爾間、賴重ガ老父、井ニ一族
十四人・郎等三十余人、其場ニ於テ討死仕
畢、一陣遂ニ彼ガ為ニ破ラレシ後、藤橋岡
家・坂東・坂西ノ者共残ル所ナク定禪ニ屬
スル間、其勢已及三千余騎ニ、近日宇多津
ニ於テ兵船ヲ点ジ、備前ノ兎鳴ニ上テ已ニ
京都ニ賈上ント仕候、御用心有ベシ。」ト
ゾ告申ケル、

後醍醐天皇に対し反乱を起こした足利尊
氏に呼応し、足利一族の細川定禪が讃岐国驚
田庄で挙兵、讃岐国の詫間氏・香西氏がこれ
に与同した。これに対し、建武政権に属して
いた高松三郎頼重は「矢鳴ノ麓」に打ち出で
て国中の軍勢を集めたものの、定禪の夜討を
受けて賴重老父他一族が討ち死にし敗北した
という。

室町時代の記録としては、「兵庫北関入
船納帳」(A017) という史料が挙げられる。これ
は、播磨国兵庫北関における文安2年
(1445) 正月から同三年正月にかけての入船
に対する課税納帳であり、室町時代の流通経
済史をみる上で重要な史料として知られている。
この史料には北関に入津する船の船籍地・
積載品・関料・船頭といった情報が記されて
いる。この中には「方本塙」という記載があり、
また「方本」を船籍とする船も運航していた
ことがわかる。方本は湯元のこと、屋島の
南麓に位置する地域である。方本からの船は、
のべ11回兵庫北関に入津しており、運ばれ
た塙は6,600石余という。400~500石積の
大型船が運航できる重要な港津であったこ
とがこの史料からわかる。

戦国時代の史料としては田中健二氏・藤
井洋一氏によって紹介された「さぬきの道
者一円日記」(A037) がある。これは永禄
8年(1565)に伊勢神宮の御師岡田大夫が、
讃岐国の檀那廻りをした時の記録である。屋
島の南麓の「かたもとノ里」・西麓の「にし
かたもと」も、ともに一円が岡田大夫の檀那
となっていたことがわかる。また檀那のなか
には「八幡寺」とあり、先述した屋島寺も檀
那となっていた(田中・藤井 1996)。

以上、屋島合戦前後の時期を中心として、
中世史料にみえる屋島について概観した。改

めてまとめておく。屋島合戦前後の動きにつ
いては、「玉葉」「吉記」といった古記録から
平氏が屋島に拠点を置いたことがわかるもの
の、屋島合戦の記録は非常に簡潔なものであ
る。「吾妻鑑」にはそれらに比べると詳細な
記事がみえるが、著名なエピソードは佐藤織
信の最期を除くとみえていないということを
確認しておきたい。一方、屋島合戦以後につ
いては、梵鐘や末寺帳からは屋島寺の動向が、
「太平記」からは屋島が再び合戦の場となつ
たことがわかる。また室町・戦国期の史料か
らは屋島の港津としての機能や伊勢信仰の広
まりを知ることができる。

II 「平家物語」と屋島・屋島合戦

前節で確認したように、屋島合戦前後の
史料からは、一部を除いて現在の屋島・屋島
合戦イメージにつながる記述を見出すことは
できなかった。よって本節ではそのイメージ
の源泉となっていると考えられる「平家物
語」の記述をみていく。なお、「平家物語」
には読み本系・語り本系の諸本があることが
知られているが、諸本によって屋島合戦の記
述・構成が異なることが指摘されている(佐
伯 1997、松尾 2011など)。本節では、屋
島合戦の描写や各エピソードの構成を確認す
る。

まず、平氏が屋島に拠点を構えた時の叙
述をみてみたい。「延慶本平家物語」(A006)
卷8「平家九国ヨリ讃岐国へ落給事」では、
讃岐屋島にいた阿波民部成良という人物が、
都落ち後に九州に向かったものの現地の武士
に追い出されていた平氏の船団を見発し、屋
島に迎え入れている。この時、成良は「此屋
島ノ浦ハ吉城郭ニテ候ナリ、只此ニ渡セ給ベ
キナリ」といって平氏に申し入れており、屋
島が要害として強調されている。こうした屋
島の情報については、語り本系の「覚一本平
家物語」に次のような叙述もある。

【史料6】「覚一本平家物語」(A007)

卷11「勝浦付大坂越」

あくる十八日の寅の刻に、讃岐国ひけ田
といふ所にうちおりて、人馬のいきをぞやす
めける。それより丹生屋・白鳥、うちす

ぎゝゝ、八橋の城へよせ給ふ。又近藤六親家をめして、「八橋の館の様はいかに」ととひ給へば、「しろしめさねばこそ候へ、無下にあさまに候。塙のひて候時は、陸と嶋の間は馬の腹もつかり候はず」と申せば、「さらばやがてよせよや」とて、高松の在家中に火をかけて、八橋の城へよせ給ふ。

屋島を攻撃するに当たって、義経が阿波の武士近藤親家に屋島の情報を尋ねている場面である。ここでは、「無下にあさまに候。塙のひて候時は、陸と嶋の間は馬の腹もつかり候はず」という記述に注目したい。この描写からは、屋島が陸地と離れた島であり、その間が干潮時は馬の腹もつからないほど、大変浅い海であったことがわかる。近世・近現代に至って、絵画・地図をはじめとする資料に視覚的な情報が付与されるが、中世段階ではこういった屋島の景観をあらわす情報はない。「平家物語」からはこうした情報をもうかがうことができる。

屋島合戦記事の内容については、諸本の合戦記事を検討した松尾草江氏の成果に依つてみていく（松尾 2011）。まず、合戦そのものの日時が諸本ごとに異なっている。「屋代本」（A010）「覚一本」では、屋島合戦は18日におこなわれたことになっているが、「四部合戦状本」（A009）では20日となっている。また「延慶本」「長門本」（A008）「源平盛衰記」（A011）では20日となっており、21日に再度合戦がおこなわれている（合戦に至るまでの日時も異なる）。

屋島合戦が1日で終わったか2日にわたったかという点は大きな違いである。これにより、著名なエピソードの構成も異なっている。例えば「屋代本」「覚一本」は「嗣信最期」→「那須与一」→「鎌引」→「弓流」という構成になっているが、「四部合戦状本」では「嗣信最期」の後、志度合戦という別の合戦にて「那須与一」「鎌引」「弓流」がおこなわれている。「源平盛衰記」では、「那須与一」→「弓流」→「鎌引」→「嗣信最期」という順番である。

エピソードの細部も諸本ごとに異なっていることが知られる。例えば那須与一の実名は、「覚一本」では那須太郎資高の子「与一宗高」だが、「延慶本」では那須太郎資宗の

子「余一資高」となっている。またそもそも屋島合戦を描かない「源平闘諍録」もある⁴。

このように、屋島合戦の記述・構成は諸本間で異同の多いことが知られている。佐伯真一氏は、「那須与一」「嗣信最期」「鎌引」「弓流」といった屋島合戦の題材が多様であり、一続きの合戦として叙述するのが難しく、矛盾をきたしている箇所があることを指摘し、各々がその矛盾に対処していくために、諸本の異同が生まれたとする。そして義経による奇襲と平氏の海への脱出を描きさえすればよいという自由さと、平氏を長年の根拠地から追い出したという合戦それ自体の歴史的重要性が、内容の豊富さを形成し、後に屋島合戦が様々に語られてゆく原因を作ったとしている（佐伯 1997）。

多くの異同を含むものの、中世段階に成立した「平家物語」では、大枠として屋島合戦に含まれるエピソードは共通する。13～14世紀にかけて、「平家物語」を所持・書写・賃借をしている史料や、琵琶法師による語りを示す文献史料が散見されるようになる。こうした「平家物語」の享受の過程で、屋島合戦の諸エピソードも受容され、広く認知されていったものと考えられる。「平家物語」の享受については、膨大な研究が存在するため本章では直接触れないが、屋島合戦に即して一例を挙げておきたい。

【史料7】「太平記」（A013）卷33「京軍事」
老母泣々委縫ニ返事ヲ書テ申送ケルハ、「古ヨリ今ニ至マデ、武士ノ家ニ生ルゝ人、名ヲ借テ命ヲ不借、皆是妻子ニ名残ヲ慕ヒ父母ニ別ヲ悲ムトイヘ共、家ヲ思ヒ嘲ヲ恥ル故ニ惜カルベキ命ヲ捨ル者也、始メ身体髮膚ヲ我ニ受テ残傷ザシリカバ、其孝已ニ頗ヌ、今又身ヲ立道ヲ行テ名ヲ後ノ世ニ揚ルハ、是孝ノ終タルベシ、サレバ今度合戦ニ相構テ身命ヲ輕ジテ先祖ノ名ヲ不可失、是ハ元暦ノ古ヘ、異祖那須与一資高ハ、八橋ノ合戦ノ時扇ヲ射テ名ヲ揚タリシ時ノ母衣也」トテ、薄紅ノ母衣ヲ錦ノ袋ニ入テゾ送リタリケル。

文和4年（1355）、足利尊氏方で出陣した那須五郎が戦死を覺悟し母に手紙を送った。

母はそれに答えて「今度合戦二相構テ身命ヲ
軽ジテ先祖ノ名ヲ不可失」とし「那須与一資
高」が「八嶋ノ合戦」に「扇ヲ射テ名ヲ揚タ
リシ時ノ母衣」を手紙とともに送っている。
この「資高」という名前は「延慶本平家物語」
にみえる名前であり、「太平記」の作者が「延
慶本平家物語」を下敷きにこのエピソードを
記したのである（山本 2012b）。「太平記」
が書かれたとされる南北朝時代には、「平家
物語」がかなり享受されていたことを示す一
史料である。

以上本節では、先学の成果によりつつ、「平
家物語」に描かれた屋島について述べてきた。
次節以降では、こうした「平家物語」の享受
を前提としつつ、様々な形で屋島・屋島合戦
が描かれ、演じられていったことについてみて
みたい。

III 文献史料にみる屋島関係の 絵画・漢詩

本節では、文献史料にみえる屋島関係の
絵画やそれに関連して詠まれた漢詩について
取り上げる。絵画そのものの分析については、
本書第5章に依頼したい。

「平家物語」に関する絵画の存在を示す文
献史料は、鎌倉時代末期から確認できるが、
屋島合戦を明確に描いたことを示すものは、
この時期にはみられない。屋島合戦を描いた
ことがわかる史料としては、次のものが挙げ
られる。

【史料 8】「看聞日記」(A016) 嘉吉元年 (1441) 4月 15 日条

一五日、晴、結夏精進写経書初、禁裏御湯
目出之由申入、御劍進之、繪五巻被下、(大
仏繪上下『慈恩院』平家八嶋三巻『喜多
院』) 南都絵也、(以資任朝臣被召云々)、
詞持経朝臣読之、狂言繪盛賀厚之、法楽詠
草飛鳥井合点進、今日披講六月ニ延引云々、
室町殿依軽服如此、

「看聞日記」は伏見宮貞成親王(1372-
1456)の日記である。後花園天皇から貞成親
王へ下賜された5巻の絵巻の中に「平家八
島」を描いた三巻があり、それは「南都絵」

で、興福寺の喜多院のものであったという。
時代がやや下って、興福寺大乘院門跡の尋尊
(1430-1508)の日記「大乘院寺社雜事記」
(A022) 延徳3年(1491)9月条の絵注文
には「八嶋合戦繪三巻 北院」とあり、貞成
は観賞後に、南都に返却したものとみられる
(麻原 2014)。

同様に屋島合戦の絵巻の存在を示す史料
として、次のものがある。

【史料 9】「実隆公記」(A024) 永正 6 年 (1509) 閏 8 月 12 日条 (前略) 則參入江殿、心静御雜談、平家物 語八嶋繪詞讀申之、(後略)

「実隆公記」は三条西実隆(1455-1537)
の日記である。ここでは八嶋合戦の場面の詞
書を読んだものと考えられる。「実隆公記」
からは他に「細川屏風〈平家繪扇流〉」とい
う記述もあり(文明18年(1468)5月19
日条)、屏風絵の存在も知られる。屏風絵に
ついては「蔭涼軒日録」(A020)寛正4年
(1463) 閏6月12条に「平家屏風」、「梵怨
記」永正5年(1508)5月11-12日条には、
「源平両家ノ画」「源平両家繪、合戦の巻」と
いうものがみえており、これらが屋島合戦を
題材としたものかはわからないが、存在が確
認される。なお、近世に至ると、屋島合戦に
題材をとった屏風絵が朝鮮通信使に送られて
いたことが指摘されている(星 2013)。

ほかに絵画としては、扇に「平家物語」
の一場面を描いた扇面画が挙げられる。これ
らについては、禪僧たちが扇絵に合わせた贊
(漢詩)を著しているのが多数確認でき、中
世段階での存在が裏付けられるとともに、絵
画と漢詩のつながりもみることができる。以下、
史料を例挙しよう。

【史料 10】「梅花無尽藏」(A027) 卷四 取弓判官畫贊二十韻

元暦二載	乙巳支干	正月十八
八嶋某壇	平家油断	詠花餘寒
源氏大將	九郎判官	百騎未満
各擊旗竿	丹生屋戰	被景清曉
逆潮追北	脱弓波濶	全非罰落
挑敵窺看	髭戴在掌	熊手無端

萌縱沈盡 取得豈難 憂於斯日
名譽般々 佐藤繼信 代命忠肝
使能登守 投菊王丸 那須進出
射扇扣鞍 兵船有幾 迷志渡難
勝負夢脆 推枕耶鄧 国史雖記
客猶補纂 中樂田樂 琵琶調殘
如是英傑 尤堪贊嘆 一張之勢
至今萬安

【史料 11】「翰林五鳳集」(A062)

源九郎落弓図 天隱
萬頃滄波顯落弓、恰如初月掛晴空、忽伸左
臂取来看、天下英雄在彀中

【史料 12】「梅溪集」(A045)

扇面執弓判官
天下英雄入彀中、源平得失一張弓、揚鞭墻
浦弦聲定、掛在扶桑日本東

【史料 13】「策彦和尚詩集」(A042)

八島戦場
招箭代君堪碎身 源平如若此忠臣 千古功
名一麟足 漢有紀信倭繼信

【史料 10】は万里集九(1428-?)の詩集「梅花無尽藏」に収録されたもので、「弓流」「嗣信最期」「那須与一」といった屋島合戦の主要エピソードを多く収録している。注目すべきは、「国史雖記 夷猶補纂 中樂田楽 琵琶調残」という箇所である。「これらのこととは、国史にも記してあるが、略してあるのでなおこれを補って記す。このことは中樂や田楽、琵琶の調べにも残されている」と万里集九は説んでいる。のことから、「弓流」「嗣信最期」「那須与一」のエピソードが当時の「国史」(具体的に何を示すかは不詳)に記されており、また琵琶法師による語りは言うまでもないが、猿楽・田楽の題材としても受容されていることを示している。

【史料 11】は近世初期に以心崇伝(1569-1633)によって編まれた詩集で、詩を詠んだ天隱龍沢(1422-1500)は室町時代の人物。【史料 12】は龍沢の弟子の雪嶺永瑾(1447-1537)の詩集で、いずれも「弓流」を題材としたものである。【史料 13】は策彦周良(1501-1579)の詩集で、「嗣信最期」を題

材としている。

また次の詩は注目される。

【史料 14】「月庵酔醒記」(A043)

一 八島合戦之絵 万里贊
射手名人能登守 兵法達者源九郎 春風有
恨八嶋浦 狼藉忠信荒菊王

「月庵酔醒記」は古河公方家臣一色直朝(?) -1597)の手による説話集で、詩は万里集九のものとして伝えられている。柳原千鶴氏は「松雲本平家物語」(A061)卷 11 の末尾にこの詩とほぼ同じ詩が一休宗純の作として「賛八島合戦」と題して付され、「取弓判官画贊二十韻」もまた記されているということを指摘している(柳原 2000)。「平家物語」の書写過程と、「平家物語」の享受によって生まれた漢詩のつながりを示すものとして興味深い事例といえる。

以上、本節では、「平家物語」の広がりを受けて制作された絵画資料と、扇面画に著された漢詩のうち、屋島合戦を題材としたことを示すものを挙げた。こうした絵画資料や漢詩を受容してきた階層は、基本的には支配者層に限定されたものと考えられる。しかしながら、受容した階層の屋島・屋島合戦イメージの形成に大きな役割を果たしたことが推測される。

本節で挙げた史料を含め、絵画資料は『平家物語』だけではなく、幸若舞曲や能をもとにして作成されたことが指摘されている。そこで、次節では芸能関係の史料についてみていくたい。

IV 中世芸能にみる屋島

本節では、屋島に関係する芸能関係史料についてみていく。

まず、能を取り上げたい。『平家物語』を題材とする能は非常に多いことが知られているが、その中で屋島合戦を題材とした能には「八島」「景清」「熊手判官」「撰待」「繼信」「延年那須与一」「屋島寺」といったものが挙げられる(A046 ~ A051、A064)。能は室町時代に入り、観阿弥世阿弥親子のもとで大成し、古記録などに上演記録を多く確認する

ことができる。しかしながら、上演のみを記して演目を記さないものが多く、演目の記載は稀であるとされる（能勢 1938）。ここでは、能勢朝次氏が検出した永享元年（1429）～慶長 7 年（1602）までの演目史料をもとに、上述の屋島合戦を題材としたものを抜き出し、場所・能の名目・演者・演目を表にしてまとめた（表）。なお、演目については原則史料中の表記のままとした。この表をみると、「禁裏や將軍御所、聚楽第といった権力者の邸宅、春日大社や本願寺といった寺院で能が演じられていることがわかる。屋島・屋島合戦イメージが広く享受されていく上で、「嗣信最期」や「那須与一」を題材とした能の上演が大きな役割を果たしたといえる。

他の演目に比べて、圧倒的に上演を記録した史料の多い「八島」について触れてみたい。この能は世阿弥作の「中樂談儀」に「道もり、たゞのより、よし常、三ばん、しゆらがゝりにはよき能也」とあるうちの「よし常」が当たるとされている。あらすじは次のようなものである。西国行脚の途中で屋島を訪れた旅の僧と同行が、塩屋で宿を取り、そこの主の老人から、屋島合戦の話を聞く。老人の不審を問うと、老人は自分が義経であることをほのめかして消える。その後、塩屋の男から鑑引の話と老人が義経の化身であるということを聞く。そして義経が登場し、修羅道の苦しみと弓流を語る。ここで、屋島の塩屋が舞台となっている点に注意しておきたい。塩屋とは「海水を煮て塩を作る家。塩窯のある粗末な小屋」（『日本国語大事典』）である。先に述べた通り、中世段階から屋島は塩の名産地であった。そうした屋島の情報が、この能「八島」に盛り込まれているものと考えることもできるだろう。

次に幸若舞曲について取り上げる。幸若舞とは 14～17 世紀に流行した長編の物語を語る芸能で、曲舞とも言った。屋島合戦を題材としたものとしては、「八島」「那須与一」「岡山」などがある（A054～A056）。幸若舞に関係する文献史料としては次のものがある。

【史料 15】「私心記」（A044）永禄 2 年（1559）3 月 4 日条

暮々御番ニ參。於御三間曲舞之本八島一番被讀之。相番予茶々丸代公達朝臣公卿代両人也。

「私心記」は本願寺蓮如の息子実従（1498-1564）の日記である。「曲舞之本八島一番被讀之」とあり、幸若舞の語り台本を読み物に転用したことわかる。これを「舞の本」というが、その存在を知ることができる史料である。

この他、近世に入ってからの芸能として、淨瑠璃や歌舞伎が挙げられる。中世史料ではないが関説する。屋島に関係する淨瑠璃については、本書の巻末にまとめてある。これらは、「平家物語」に題材をとったものが多く、先に挙げた能や幸若舞曲を取材したものも含まれる。「嗣信最期」を題材とする近松門左衛門作「津戸三郎」（『門出八島』）（A069）や、「那須与一」を題材とした並木宗助・並木丈助作「那須与一西湖硯」（A074）などがある。歌舞伎については、「世界綱目」（A077）という歌舞伎狂言作者の手控え本に「源判官義経」「佐藤三郎次信」「那須与一宗高」ら、屋島合戦に関係した人物が役名として載せられており、屋島合戦を題材とした演目も多く上演された。

ここまでみてきた中世の絵画・芸能は、先述したように主に支配者層を中心に受容されたと想定できる。一方で近世に入って以降、淨瑠璃や歌舞伎、絵画史料でいえば錦絵の登場は、民衆層を対象とした屋島・屋島合戦イメージの広範な定着に大きく寄与したと考えられる。

だが、中世段階においても、民衆層が屋島・屋島合戦イメージの形成に寄与するようなものがなかったわけではない。「多聞院日記」（A033）天正 17 年（1589）7 月 8 日条には、記主の興福寺の学僧英俊が南都の郷民たちの祭礼において、人形などの作り物を見物している。この作り物には「平家物語」に題材をとったものがあり、その中の一つとして「ナスノ与一」が挙げられている。また京都の祇園祭で、応仁・文明の乱以前に運行していた山の一つに「なすの与一山」があったことが「祇園会山鉾事」（A025）という史料から確認できる。中世史料の多くは支配者層に残さ

表 屋島に関する能を示す中世史料

和暦	西暦	月日	場所	名目	演者	表記	出典
寛正 5	1464	4/4	札河原	勧進猿楽	觀世大夫	八嶋	「札河原勧進猿楽日記」
寛正 6	1465	2/28	院御所	將軍院夢	觀世大夫	やしま	「親元日記」
寛正 6	1465	9/25	南都一乗院	將軍南都下向	金剛	クマンキリ	「蘇涼軒日錄」
文正元	1466	2/25	飯尾之種亭	飯尾之種御成	觀世大夫	景清	「飯尾宅御成記」
明応 8	1499	2/29	相国寺	撰州儀者	奥州佐藤兄弟	「鹿苑日錄」	
文亀 3	1503	9/19	室町殿御所	觀世太夫	八嶋判官	「室町公記」	
永正 2	1505	4/16	栗田口	勧進猿楽	金春大夫	八嶋	「栗田口茶樂記」
永正 11	1514	1月	南都八幡宮	法楽能	金春大夫	八嶋	「禪風申坐歌儀」
永正 16	1519	1/26	禁裏	手猿樂	八嶋	「二水記」	
天文 5	1536	2/14	泰日大社	薬猿樂	十二大夫	八嶋	「中臣祐金記」
天文 8	1539	11/13	六角定頼亭	觀世大夫	八嶋	「親俊日記」	
天文 9	1540	1/15	石山本願寺	春日大夫	八嶋	「証如上人日記」	
天文 10	1541	2/6	石山本願寺	大藏大夫	八嶋	「証如上人日記」	
天文 10	1540	11/28	泰日大社	春日若宮祭後日能	金春大夫	八嶋	「多聞院日記」
天文 12	1542	2/11	春日大社	新能	盲景清	「多聞院日記」	
天文 12	1542	2/19	石山本願寺	觀世大夫	八嶋	「証如上人日記」	
天文 14	1544	3/21	禁裏	童子手猿樂	八島	「言繼卿記」	
天文 18	1548	1/12	石山本願寺	春日大夫	八嶋	「証如上人日記」	
天文 18	1548	2/12	春日大社	新能	宝生	八嶋	「中臣祐記」
天文 23	1553	2/21	石山本願寺	六町中沙汰	八嶋	「証如上人日記」	
文禄 4	1561	3/30	三好義長亭	將軍御成	觀世大夫	八島	「三好夢樹成記」
永祿 7	1564	10/22	禁裏	手猿樂	八島	「言繼卿記」	
永祿 8	1565	8/18	樂堂在所	神事能	日吉孫四郎	八島	「言繼卿記」
永祿 10	1567	6/24	松尾神社	社頭能	八田大夫	八島	「言繼卿記」
永祿 11	1568	10/11	將軍亭	觀世大夫	八嶋	「信長公記」	
天正 4	1576	1/28	禁裏御方御所	八嶋	「言繼卿記」		
天正 16	1588	2/26	石山本願寺	下間少進	八嶋	「能之留帳」	
天正 16	1588	6/1	大谷刑部宅	下間法印	春日大夫	八嶋	「能之留帳」
天正 17	1589	2/18	本願寺	觀世大夫	八嶋	「能之留帳」	
天正 18	1590	2/5	下間法印宅	太閤小姓衆所望	下間法印	八嶋	「能之留帳」
文禄元	1592	1/25	本願寺新門跡	下間法印	春日大夫	八嶋	「能之留帳」
文禄元	1592	2/18	本願寺	石田三成御出	下間法印	春日大夫	「能之留帳」
文禄元	1592	5/17	下間法印宅	法印一族	八嶋	「能之留帳」	
文禄元	1592	5/24	大谷刑部宅	下間法印・一族	春日大夫	八嶋	「能之留帳」
文禄元	1592	11/6	大谷刑部宅	下間法印・一族	春日大夫	八嶋	「能之留帳」
文禄 2	1593	4/3	本願寺	豊臣秀次御成	下間法印	春日大夫ら	「能之留帳」
文禄 2	1593	4/26	聚楽第	豊臣秀次	八嶋	「能之留帳」	
文禄 2	1593	10/29	聚楽第	豊臣秀次	八嶋	「能之留帳」	
文禄 3	1594	3/3	大和郡山 豊臣秀保亭	豊臣秀次御成	豊臣秀次	八嶋	「能之留帳」 「駒井日記」
文禄 3	1594	3/4	宇喜多秀家亭	豊臣秀吉御成	觀世大夫	八嶋	「駒井日記」
文禄 3	1594	12/8	三州吉田	豊臣秀次	八嶋	「能之留帳」	
慶長 4	1599	8/14	興福寺大乗院	金春大夫	八嶋	「多聞院日記」	
慶長 5	1600	4/22	禁裏	近衛殿中沙汰	下間法印	虎屋兵衛	「能之留帳」

れたものであるが、これら的事例は奈良・京都の民衆がそれぞれ屋島合戦で知られる那須与一を認識していたことを示すとともに、民衆層にも屋島・屋島合戦イメージを認知させる機会になっていたと考えられる。

以上、本節では能・幸若舞曲・淨瑠璃・歌舞伎など、屋島に関係する芸能についてみてきた。本章での検討範囲をやや越えることになってしまったが、中世と近世では、やはり屋島・屋島合戦イメージの主たる受容層が異なっていたのではないかと考えられる。

V 伝承の中の屋島合戦

本節では、史料からうかがうことのできる屋島合戦に関する伝承・説話について取り上げる。

「源平屋島檀浦合戦縁起」(屋島寺蔵、A059)、「屋島軍断簡」(A014)、番外曲「屋島寺」(A064)、「月庵醉醒記」(A043)には、屋島の佐藤継信の墓を訪れた僧が、継信の亡靈と和歌の贈答をするという説話が残されている。これらの説話には異同がある。例えば、登場する僧が佐藤継信の末裔である「信空」「空信」(「源平屋島檀浦合戦縁起」・「屋島軍断簡」)、末許(「屋島寺」)、実在した曹洞宗禪僧である石屋真梁(「月庵醉醒記」)とそれぞれで異なっていることが挙げられる。これについては、多くの研究が存在し、その展開過程についても諸説が存在している(武久 1986・砂川 2001・岩崎 2009・大橋 2010など)。ここでは、これらの説話の中には、相引川や檀浦といった在地の地名や、佐藤継信の墓の位置が明確に示されたものがあるということ、屋島の佐藤継信の墓を舞台とする説話伝承が中世～近世にかけて形成され、広く流布していたことのみを指摘しておきたい。

一方、佐藤継信については、次のような史料が興味深い。

【史料 15】「佐藤継信・忠信之旗由緒書」 (A041)

此継信・忠信両旗ニ為追善法然聖人六字名號書給、右両旗宰相藤原成頼卿子毘沙門堂中納言、法名明禪法印所持給而、洛東禪林寺邊草庵結住給、歴仁元年ニ鎌倉將軍頼経

上洛之時、彼明禪庵室入、佛且御賢有ハ、旗ト見ヘ而佛且ニ掛六字名號書、為菩提有之、由來法印ニ問給ヘハ、右由具ニ語書、將軍殊勝思食、頼経帰國之後、明禪法印彼ノ両旗鎌倉指越給ヘハ、將軍不斜而安置ノ給、其後鎌倉住僧玄林和尚ト云有安置之、則弟子代々六世伝之、其以後藤原閑白經嗣成恩寺安置、其後因幡堂納、永享六年甲寅年二月十四日因幡堂炎上、其後取出、伝々而義政安置之、其後細川政元所持、同高国安置者也、

天文元年二月十四日 源義信(花押)

佐藤継信・忠信の旗の由緒書である。両人の追善のために法然が六字名号(南無阿弥陀仏)を書いたことから始まり、藤原成頼の子の明禪法印から、九条頼経、鎌倉の住僧玄林和尚、一条経嗣、足利義政、細川政元・高国と所持者・安置場所が転々としていたことが語られている。天文元年(1532)2月14日の年紀をもつが、この段階ではまだ改元していない。また差出の源義信なる人物についても未詳である。現段階ではこの由緒書に書かれていることが事実かどうかについては疑問である。一方で、屋島合戦で活躍した佐藤継信・忠信の追善供養を法然がおこなったとされている点はどういった意味をもつか、後考を待ちたい。

このほか、那須与一については多くの伝承が残されている。京都伏見の即成院に残る「即成院縁起」には、那須与一が登場する伝承がある。それは次のようなものである。那須与一宗高が光明院(即成院の前身)に参詣し、戦功を祈願したのち、屋島合戦で扇の的を射抜き、高名を挙げた。与一はその礼に私領を寄進し、その後出家し、上洛して即成院本尊の前で往生を遂げ、その墓碑が現在も残されているという。この縁起については、様々な要素が入り組んで構成されている。瀬田勝哉氏はこの縁起のエピソードが「平家物語」を受けて作成されたものであるということや、伏見宮で催された茶会の勝負の懸念に那須与一「扇の的」の風流の作り物が出品されていることから(『看聞日記』応永23年(1416)3月1日条)、当時すでにあつた「即成院縁起」の原型を周知していた伏見の人々

にとって、那須与一が特別な存在だったことなどを指摘している（瀬田2005）。

以上、屋島合戦で活躍した佐藤継信・那須与一に関する伝承・説話について紹介した。明確な形をもった絵画・芸能だけではなく、こういった伝承の存在も、屋島・屋島合戦イメージの広がりを示していると言えるだろう。

おわりに

以上、先学の成果を踏まえつつ、屋島・屋島合戦イメージの形成と展開について見てきた。Iで述べたように、屋島・屋島合戦そのものを記録した同時代史料は少なく、記述も簡潔なものが多い。しかし、II以下で述べてきたように、「平家物語」やそれを題材とした絵画・漢詩・芸能・伝承といった様々な形での屋島への言及は、断片的ながら中世史料でも追うことができる。もっともそれらが現実の屋島と無関係に展開したわけではない。「平家物語」でわずかにみられる景観描写、能「八島」の舞台となった塩屋・在地の地名や伝承を盛り込んだ能「屋島寺」の存在などは、そうした現実の屋島とイメージの中の屋島とのつながりの一端を示しているといえるだろう。そして、中世段階では支配者層を中心として受容された屋島・屋島イメージは、近世段階に至り民衆向けの芸能・絵画が登場し、さらには出版文化の展開によって、民衆層をも捉えた射程をもつようになっていく。また現実の屋島でも高松藩初代藩主松平頼重による顕彰活動がおこなわれるなど、屋島・屋島合戦イメージの定着が図られる。これらの動向については、それぞれ本書の別章を参照されたい。

〈文末脚注〉

- 史料の検索や「平家物語」関係の諸事項については、主に日下・鈴木・出口（2005）、小林編（2007）、大津・日下・佐伯・櫻井編（2010）を参照した。
- 本節で述べる屋島の基本的事項については、平凡社地方資料センター編（1989）の屋島関係部分及び、最新の成果である屋島風土記編纂委員会（2010）に多くを依拠している。
- このほか、「高野春秋編年輯録」（A012）元暦2年3月15日条に、「小松惟盛勾引従者阿波守宗親及二三輩、自屋島内裏來奔、受説戒於心蓮上人」という記事がみえ、平惟盛が屋島を離れ高野山で受戒したことがわかる。
- 「源平闘諍録」は東国で成立した異本である。山本隆志氏は、「屋島合戦・那須与一の場面がないことについて、「関東武士にとっては、那須といえば那須の那須家であり、那須野は頼朝以来の狩り場なのである。その記憶が強く、与一と扇財は後景に退いてしまっていたのである」としている（山本2012a、24-25頁）。

〈主要参考文献〉

- 麻原美子 2014 「『平家物語』屋島合戦譚とその芸能空間をめぐって」、『平家物語世界の創生』 魁誠出版
- 岩崎雅彦 2009 「番外謡曲『屋島寺』の周辺」、『能楽演出の歴史的研究』 三弥書店
- 大津雄一・日下力・佐伯真一・櫻井陽子編 2010 『平家物語大事典』 東京堂出版
- 大橋直義 2010 「『平家物語』の内と外—「異説」をめぐる考察—」、『転形期の歴史叙述—縁起・巡礼、その空間と物語—』 慶應義塾大学出版会
- 日下力・鈴木彰・出口久徳 2005 『平家物語を知る事典』 東京堂出版
- 小林保治編 2007 『平家物語ハンドブック』 三省堂出版
- 佐伯真一 1997 「屋島合戦と『八島語り』についての覚書」、『青山学院大学総合研究所人文学研究センター研究叢書』 12
- 柳原千鶴 2000 「1600年前後一軍記物語と扇面画—五山禅僧による軍記物語享受の一端ー」、『国文学』 45-7
- 砂川博 2001 「番外謡曲『屋島寺』の成立」、『平家物語の形成と琵琶法師』 おうふう
- 瀬田勝哉 2005 「伏見即成院の中世—歴史と縁起ー」、『武藏大学人文学会雑誌』 36-3
- 武久堅 1986 「合戦譚伝承の一系譜—『屋島軍』の場合ー」、『平家物語成立過程考』 桜楓社
- 田中健二・藤井洋一 1996 「冠襷神社所蔵永禄八年『さぬきの道者一円日記』(写本)について」、『香川大学教育学部研究報告 第1部』 97
- 能勢朝次 1938 「演能曲目考」、『能楽来源流考』 岩波書店
- 平凡社地方資料センター編 1989 『日本歴史地名大

- 系38 香川県の地名』平凡社
- 星瑞穂2013『『通航一覧』に見る「贈朝屏風」の画題と外交—「基督教忠信」を中心に—』、石川透編『中世の物語と絵画』竹林舎
- 松尾葦江2011『屋島合戦記事の形成』、千明守編『平家物語の多角的研究—屋代本を拠点として—』ひつじ書房
- 屋島風土記編纂委員会編2010『屋島風土記』屋島文化協会
- 山本隆志2012a『那須与一と扇の的一平家物語の叙述と構想—』、山本隆志編著『那須与一伝承の誕生—歴史と伝説をめぐる相剋—』ミネルヴァ書房
- 山本隆志2012b『国家・社会の統合と那須家』、山本隆志編著『那須与一伝承の誕生—歴史と伝説をめぐる相剋—』ミネルヴァ書房

(担当:川口成人)

2 屋島寺と遍路 —創建から近世の屋島寺—

はじめに

屋島の山頂に四国八十八ヶ所の第 84 番札所である屋島寺がある。天平勝宝 6 年(754)、屋島の北嶺に鑑真¹により創建され、弘仁元年(810)に空海により南嶺に寺域が移されたとされている。現在の所在は屋島町大字西湯元字山上であり、宗派は古義真言宗御室派²、本尊は千手十一面觀音座像である。

宝物としては小松天皇御宸翰、後陽成天皇御宸翰、枳迦像、五切思惟阿弥陀像、千手觀世音銅像、本尊千手觀音旧光背、屋島寺本堂再建勸進牒、絹本着色楊柳觀音像、屋島一山の図、源平合戦図、熊野権現縁起絵詞、源平合戦図屏風、屋島寺縁起、源平合戦縁起、梵鐘³が挙げられる。これらの中、源平合戦に関するものや縁起などは屋島寺宝物館でみることができる。

本章では、屋島寺の創建から近世にいたるまでの屋島寺の変遷と、遍路や名所・觀光地として人が参集していた様子をみていく。

I 屋島寺の創建と変遷

1. 屋島寺の成り立ち

はじめに屋島寺の創建について触れておきたい。屋島寺蔵「屋島寺縁起」(A001)、「屋島寺龍藏勸進帳」(A060)、澄禪の「四國遍路日記」(C004)によれば、鑑真が來朝時に屋島山に瑞光が立つのを見て、船を海岸に寄せ山を登り、山の形勢を見ているときに老翁が現れた。そして、この山(=屋島山)は七仏說法の地であるとして、この地を授けると

した。仏法の興隆により患難を救うよう言ったのち、その老翁は忽然と消えた。鑑真是この地を神秀の地であるとして、一室を築き、普賢菩薩と華嚴經をその中に安置してから京都へ赴いたとされている。この一室こそが屋島寺である。その後、孝謙天皇が鑑真に歸依したことにより、鑑真是東大寺大仏殿の西に戒壇院を構え、戒法をおこなった。この時、鑑真が屋島の奇瑞を奏しており、孝謙天皇は詔を出して屋島山を鑑真に授けたのである。鑑真是再度「屋島山」に戻り、弟子の空鉢惠海律師に鉢を一つ与え、普賢堂を北嶺に営ませ、千願王の像を安置し、かつ坊舎を創建して僧徒を居住させた。なお、この空鉢律師については後述する。

このようにして、寺伝では鑑真により創建されたとされている屋島寺であるが、その場所は当時から「屋島山」として認識されていた。

鑑真の弟子、惠海律師の学徳を聞いてその教えを請い、空の一宇を受けたのが空海である。嵯峨天皇の代である弘仁元年、空海は再び屋島寺を訪れ、北嶺にあった伽藍を南嶺へと移し、千手觀音を本尊として、南面山千光院と号した。そして治安元年(1021)、性純阿闍梨の代から南面山千光院屋島寺と称することとなった。また、村上天皇の代には四天王堂が建立され、その中に四王の像が安置された。

現在、昭和 55 年(1980)度の屋島北嶺の千間堂跡における発掘調査を始めとして、平成 8 年(1996)度から高松市教育委員会が屋島寺周辺で調査を継続的に実施している。平成 10 年度から 13 年度にかけては、屋島北嶺の千間堂跡で調査がおこなわれた。これ

ら発掘調査の成果により⁴、それまで実際に存在したのかどうかが不明であった北嶺の伽藍の存在が明らかになった。発掘された遺物からみて、北嶺に伽藍があったと考えられているのは10～11世紀の間である。12世紀以降の遺物となると、主に南嶺で見られるようになる。寺伝とは時期が異なるとはいえ、北嶺から南嶺へと伽藍が移ったことが、発掘調査からも示唆されている。

2. 屋島寺に残る伝承

屋島寺が人びとから崇敬され、繁栄を迎える転機となったのが、鑑真的弟子である空鉢恵海律師の伝承である。先に記した恵海律師が鑑真から与えられた鉢は鑑真の持っていた衣鉢で、これを恵海律師は空に上げ、沖を漕行する。そして、船に飛んで行っては斎料、つまり食事のための寄進を請うていた。船人たちが飛んできた鉢に驚いて米穀を鉢に投入し、米を入れた鉢は屋島山頂に飛んで帰ってきたという。このようなことが度々あったことで、人々の崇敬を集め、次第に繁栄するところとなり、42坊を設けるまでに至ったとされている。しかし、あるとき、漁師が船に飛んできた鉢に魚類を入れたところ、鉢が砕け散り船と共に海底に沈むということがあった。これより屋島寺は衰微したと言わわれている。

さて、屋島寺にちなんだ伝承は他にもあり、小海基治や清原孝章の話がそれにあたる。小海基治は兵庫寮の官人であり、天徳年中(957-961)、その妻が懷妊後15ヶ月間絶つても出産しなかったため、屋島寺の西廊に参詣したところ、半月もしない内に痛みもなく石の瓶を産んだ。しばらくしてから、その瓶の中から端正な男子が現れたという。清原孝章は、無実の罪で讃岐国に配流されていた折、安和年間(968-970)に屋島寺に参詣した。その後に夢の中で官吏となり、帰洛を告げた。13日後、勅命が下り、無事に帰洛したという(松原1981)。

いずれの伝承においても、どこまで信憑性があるかは判然としないが、これらが屋島寺に一種の特殊性を与えていたことは確かであり、それが信仰を集める起点となった。坊

が42まで増えたという伝承からも、多くの寄進があったことが推測される。中世においては修行僧による参詣が多く、一般人へ開かれた場所となるのは近世に入ってからであるが、中世では修行空間として、人が参集する場所であったといえよう。

しかし、恵海律師の伝承の中にもあるように、屋島寺は繁栄を迎えたのち、衰微するに至った。衰微していた間の屋島寺については、史料に乏しく詳しく述じることはできないが、次項にて近世における屋島寺の復興について触れたいと思う。

3. 屋島寺の復興

近世に至るまでに、屋島寺は大きく衰退していた。慶長6年(1601)に住僧であった龍巖は徳川家康の御教書を得て、諸国を勧進して伽藍を修復することになった。この勧進の様子は、先に挙げた「屋島寺龍巖勧進帳」から見てとれる。また、この勧進の際に「源平屋島檀舎合戦縁起」(A059)が製作され(出口2013)、また「屋島寺縁起絵」(B033)と「屋島合戦図」(B007)も寺の縁起を絵解きで語った可能性が指摘されている(香川県立ミュージアム2014)。堂宇は非常に廃れた状況にあったようだが、元和4年(1618)に落成した。万治年中(1658-1661)には龍盛が堂宇を修繕している。下記に挙げた史料(F005)からわかるように、再建にあたって生駒一正により、屋島寺へ米300石が寄進されている。また、このとき米が寄贈されただけではなく、人足として40人が遣わされていることも注目されよう。

星嶋寺堂之建立之覚

- 一 八木三百石遣候、万入用可、遣之事
- 一 手伝四十人づゝ國中へわり可、遣之事
- 一 材木ハ入次第、財田、綾両所見計可。
- 遣之、猶入用事可。申候也、
- 謹岐

三月四日 一正(花押)

佐藤掃部殿

再建にあたっては、生駒一正は屋島寺領の安堵もおこなっている(F001)。寺領自



図1 『金毘羅參詣名所圖会』内「屋島寺」
出典:『金毘羅參詣名所圖会』臨川書店、1998年

体は往古より 25 石であったが、寛永年中（1624-1645）に松平頼重によって 59 石余りが加増された。

（前略）

星嶋寺領之儀、如_前々_高式拾五石余遣置候者也、

慶長六年 生駒謙岐守

正月八日 一正（花押）

星嶋寺

（返り点は筆者の加筆、旧字は新字に改めた。）

この寺領は明治維新を経て失われ、屋島寺は再び衰退することとなった。しかし、明治 33 年（1900）に屋島保勝会ができ、寺門の經營に尽力したことによって、今日の状況にまで至っている。

さて、以上のような寺領を有し、伽藍が再建された屋島寺であるが、近世においてど

のような状態にあったのであろうか。『金毘羅參詣名所圖会』（D013・図1）から、その伽藍の様子がうかがえる。本堂（写真1）や大師堂、鐘楼、仁王門（写真2）など、現在にも見られる堂宇が確認できる。17世紀時点で、屋島寺の復興は充分に進められていたのだろう。また『金毘羅參詣名所圖会』には、伽藍内に何人か笠を被った参詣者が見られる。これについては、次節にて詳述することになるが、近世には人々が多く屋島寺に参集していたことがわかるだろう。

II 屋島寺と遍路、観光

1. 札所としての屋島寺

（1） 四国八十八ヶ所のはじまり

四国八十八ヶ所の起原・歴史とはいかなるものであろうか。真念の「四国徳福記」



写真1 屋島寺本堂
(撮影:井上真美)



写真2 屋島寺仁王門
(撮影:井上真美)

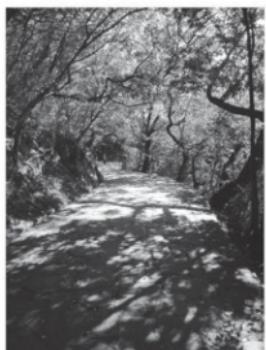


写真3 遍路道
(撮影:井上真美)



写真4 八栗寺までの道標
(撮影:井上真美)



写真5 遍路姿の屋島寺参詣者
(撮影:井上真美)



写真6 大師堂とお遍路
(撮影:井上真美)

(A072) の賛録に「遍路所八十八ヶ所とさだめぬる事、いつの時、たれの人といふ事さだかならず」と記していることから、その詳細については不明なところが多いとされる。行基や空海、空海の弟子である真済、真如法親王に四国八十八ヶ所開創の伝承があるが、いずれも伝承の域をでないため、開創者を明確にすることは困難である。しかし、四国・讃岐は空海の誕生地であることから、多くの弟子や血縁者を輩出していた（頼富・白木2001）。また、空海の四国遍路の伝承から、四国以外の場所で弟子となった僧が遍路へと赴いたと考えられる。

上記のようなはじまりであることから、屋島寺が具体的にいつごろから八十八ヶ所に組み込まれたのかは判然としない。しかし、空海が現在の寺域に伽藍を移していることから、屋島寺がその中に組み込まれたことが予測される。つまり、遍路の開創者と考えられることの多い空海とのつながりから、屋島寺は八十八ヶ所の札所に組み込まれたのだろう。

(2) 近世における遍路

近世初期の遍路をうかがうことができる史料として挙げられるのが、先にみた澄禪の「四国遍路日記」である。これは遍路の詳細な記述だけでなく、札所となっている各寺院の寺号、本尊、寺觀、縁起なども記されている。

頼富・白木（2001）も取り上げているが、この「四国遍路日記」のなかに当時の遍路の状況として特筆すべき部分が見られる。

海部ノ大師堂ニ札ヲ納ム。是ハ辺路屋也。
爰ニ辺路札ノ日記ノ板有リ、各買之也。

この「辺路札所ノ日記」というものが、どのようなものか断言はできないが、頼富らはこれを各人が購入していることから簡単なガイドブックのようなものだとしている。ガイドブックを購入している人物がいることから、当時先達のみではなく一般の人も遍路に赴いていたのだろう。中世では修行僧など、修行を主とする者が多く赴いていた四国八十八ヶ所に、近世初期には一般人も参加していたのである。四国遍路が更に一般の人々に普及するようになるのは、もう少し後の

ことになるが、徐々にその片鱗が見られる。八十八ヶ所の一つである屋島寺もその例外ではなかっただろう。屋島には中世に比べて多くの人が参詣していたと考えられる。

少し時代を経て、17世紀後半になるとその様相は更に顕著にみられるようになる。真念の『四国遍路道指南』(D003) のような遍路に赴く人々が持つて歩く案内書が出版された。また遍路屋が建ち、標石が設けられたことで四国遍路は一般人にも非常に普及したものとなつたのである。現在では、道路が整備され（写真3）、標石も作られており（写真4）、観光気分で札所を参詣しにいくことができる（写真5・6）。そのような一端が近世後期から見えていたのである。

では、先に挙げた『四国遍路道指南』のなかで、屋島寺はどのように記述されているのだろうか。少し長くなってしまうが、屋島寺の一つ前の札所である一宮寺の部分から以下に引用したいと思う。

八十三番之一之宮 平地、堂はひがしむき。
かゞハ郡一宮村。

本堂正觀音 立三尺五寸、大師御作。

詠歌 さぬき一の宮の御まへにあふぎて

神のこゝろをたれかしらゆふ

是より屋島寺迄三里。但仏生山へかくるときハ、二宮より屋島寺まで三里半。

又高松城下へ行バ、一宮より屋島寺まで四里有也。

○かのつの村○大田村、八幡、標石

有。○ふせいし村、八まん宮。○まつ

なわ村、行て大池有。堤を行。○北村、

三十番神宮有、過て小川有。○ゑび

す村○春日村○かた本村、これより屋

島寺十八町、坂、地蔵堂有。

八十四番やしま寺 山上、堂はミナミむき。
やまと郡やしま。

本尊千手 坐三尺、大師御作。

あづさ弓やしまの宮にまうでつゝ

いのりをかけよいさむものゝふ

是よりやくりじまで一里有。寺より東

坂十丁くだり、ふもとに佐藤次信のは

か有。領主より、一丈四方の切石にて

壇きづき、其上に五尺の石塔を建立し、

碑の銘あり。古の五輪塔も有。後小松

の御宇、崇徳元年四月五日に、奥州より、佐藤氏族のしやもん空信此はかに詔来て回向のまことをつくし、
いたはしや君の命をつぎのふが
印の石は苔ころもきて
とよまれければ、そとば勧説して
をしむともよも今迄へなふがらへじ
身をすゝこそ名をバ次信
と、はかの中にこゑしけるよし、屋島
軍ゑんぎに見えたり。それより先帝・
院院行幸の内裏の跡有。この所を壇となづけ、浦を壇の浦となづく。又あい
引の汐、にしひがしより汐みち、南面
山のふもとをめぐり、両うみの中辺にて
満合、たがひに引なり。此入うみ三
町ばかり渡りて、森須の与市駒立岩有。
又いのり石有。其南臨にすさきの堂、
本尊正觀音、大師御作、其南に懇門、
次信觀をとさるゝ所有、大友黒といふ
なん馬のはかも有。或ハさじきの岡、
名切水井に瓜生山とて、源氏の本陣所
あり。其外旧跡かずゝ有。惣名はむ
れ村といふ。右の懇門よりやくりへ十
八町行て坂。

案内記として書かれていることもあり、札所と札所の間の距離や標石などの目印も逐一示されていることがわかる。また、遍路の案内書としての機能だけではなく、札所の近くにあるいわゆる観光地となりうる歴史のある名所にも記述が及んでいる。屋島寺の周辺でいえば、佐藤継信の墓や駒立岩、祈り岩、洲崎寺、総門跡や太夫黒の墓など屋島合戦の旧跡が挙げられている。また、このような旧跡は分かりやすい目印にもなったであろう。遍路に来た一般人はこれらの旧跡を札所の間に回りながら、八十八ヶ所を巡っていたのである。また、屋島寺に至る前には高松城下に訪れるることも想定されていた。遍路として屋島寺に訪れた人々はそのまま屋島内にある名所も訪れることができるという環境にあったのである。

2. 屋島を訪れる人々

さて、近世において屋島を訪れたのは遍路者だけではなかった。最後に、遍路者が遍路の間に見物していた場所へと訪れていたのとは反対に、見物の一環として八十八ヶ所の一つである屋島寺へ訪れた人々の一例をみてみよう。

寛文7年(1667)に俳人である松山玖也が記した紀行文である「小豆嶋紀行」(CO05)の中で、松山は見物のために八島(屋島)や檀ノ浦に赴いている。屋島寺については、その創建時の様子から先述したような伝承が記されているほか、「八島」が「屋島」と呼ばれるゆえんにまで記載が及んでいる。以下に屋島に関する部分を引用する。

窟の觀音に行ってみるに、左の方に淡路島よ
こおりふしたるに、やまと島はちへにかぐ
れてみへす。かうへをめくらせは、岩屋の
瀬戸、明石の戸も見ゆ。阿波の鳴門をめの
下に、汐の引田、波の白鳥、志渡、八嶋、
壇浦、高松、はるかに西につゝきて、白峯、
金毘羅、屏風浦、穂の戸と云も見たされ
て、致景筆にうつし詞にのへかたし。遼き
国に其名聞ゆる松島、松庵、又謙倉、金沢
のなかめにも、をさゝとをとるましむ覚ゆ。
(中略)

明れば又八島、壇浦など見んとて出立。
汐のひまをかうかへて、干潟の道一里は
かりを歩わたりして、鶴本と云江の村に打
休て、濁酒などをきのりて呑。

かたもとや入江の村の新酒口
南面山八嶋寺千光院に上る。抑此八島寺は、
孝謙帝天平宝字年中、唐龍興寺苾芻鑑真和尚來朝時、此八島は仙境なりしに、真和師
仙人に逢給て、願くは此處を我に譲り給へ。
伽藍を建て衆生濟度の地となさんと申され
しかば、仙人此旨をゆるし畢。即七堂伽藍
僧坊四十二宇、年を経ずしてなりぬ。本堂
五間四面、本尊千手千眼云云。後には此山
を御弟子道得に譲給て、鐵鉢一つあたへ給
ふ。此鉢みつから往来の客船に飛揚て物を
こぶ。鉢に物漁る時は、飛揚て四十二坊を
扶持しけるとなり。されと末の世となり
て、法力もうすらきけるにや。或時此鉢獵

船に飛至しかば、漁人魚をとりて此鉢に入けるより、飛引叶はずして、寺門僧坊もやうやく破壊しけりとなり。此山昔は八所の鎮守有ける故に八島と云しを、後入此山の屋の棟に似たれはとて、屋島と改けるとなり。其後又嵯峨帝御時空海本堂二王門を一夜に建立ありて、自作の本尊を安置し給ひしより、脇坊機に三字残りて、今も猶在し。愛にも縁起物宝など數多あり。悉見侍れと事多ければ、愛にもらしつ。是よりあないの為、若僧ひとりを先にたてゝ東の方におりもて行に、洲崎堂の跡、内裏屋敷、奈須与一扇射ける所、謙信石塔、同石碑などあり。後小松院御宇至徳元年四月五日、奥州住人佐藤庄司末商信寶といふ僧、此所に来て此石塔に向て、

痛しや君の命を謙信の印の石も苔衣きてとよみたりければ、石塔内より返し、

おしむともも今までにはからへし

身を捨てゝこそ名をもつきのふ

此事處の人語しまゝに記付侍る也。石碑は今は国守より建給ふ、彼教經の弓勢、今おもふもおそろしくて、

今聞も胸ひやす人の矢しま哉

終日此島めくりして、爰かしこの隈ゝ残らず見侍るに、(後略)

今は「屋島」と記載される屋島であるが、元は8つの鎮守がある島であることから「八島」と表記されていたという。それを後人が屋島山を「屋の棟に似たり」といったことから「屋島」と改められた。「八島」と表記されていたとき、屋島は島としてのイメージを持っていたのだろう。それが山の形状によつて表記が変わったころから、名山にも選出されるような山としての屋島のイメージへと転換していたことが、漢字表記の違いから推測される。しかし、松山の「小豆嶋紀行」をみると、屋島を「此山」「此島」と山・島のどちらでも表現している。屋島寺に参詣するために屋島を登るときは「山」のイメージ、佐藤謙信の墓など屋島にいくつかある源平合戦にちなんだ旧跡を巡るときは「島」のイメージを持っていたのだろう。上記引用箇所の下線部「終日此島めくりして」という部分は、その島イメージを反映させた書きようと

言えるのではないだろうか。このように、どこへ訪れるかによって異なるイメージを形成していた人物が、近世において存在したこと非常に興味深い点である。

おわりに

さて、以上にみてきたように、屋島・屋島寺は創建から中世までは修行空間として修行僧などが参集する場所であった。近世に入ると遍路の札所として一般人も参集するようになり、屋島合戦の旧跡と合わせて見物のために人々が訪れる名所の一つとなつたのである。近代に入り、そのような名所としての側面がどのように継承、もしくは変容したのかについては、本書別章に委ねることにしたい。

〈文末脚注〉

- 寺伝では鑑真の創建とされているが、平成11年度の史跡天然記念物屋島の発掘調査によれば、現在発掘された遺物をみると、鑑真的ころまでさかのぼるものは発見されていない。このことから、鑑真を創建とするのは困難であり、鑑真是勘請開山といえよう。
- 明徳2年(1391)9月28日の西大寺末寺帳(西大寺文書)に屋島寺の名が見えることから、当時、真言律宗で西大寺の末寺であったことが確認できる。(出口2013)
- この梵鐘については、『鎌倉道文 古文書編 補遺 第2巻』に銘文が掲げられている。
- 「高松市埋蔵文化財調査報告書第62集 史跡天然記念物屋島—史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査報告書1—」(高松市教育委員会、2003年)、「高松市埋蔵文化財調査報告書第107集 屋島寺宝物館改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書屋島寺」(高松市教育委員会、2007年)

〈主要参考文献〉

- 香川県立ミュージアム 2014『空海の足音 四国へ
んる展 香川編』香川県立ミュージアム
出口久徳 2013『屋島合戦図屏風を読む—「御堂」
イメージを中心にして』、石川透編『中世の
物語と絵画』竹林舎
松尾剛次 2013『中世叡尊教団と泉涌寺末寺の筑後
国への展開—新発見の中世西大寺末寺帳に

触れつつ一』、『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』10
松原秀明編 1981『日本名所風俗図会 14 四国の巻』
角川書店
屋島風土記編纂委員会編 2010『屋島風土記』屋島
文化協会
賴富本宏・白木利幸 2001『日文研叢書 23 四国遍
路の研究』国際日本文化研究センター

(担当:井上真美)

3 近世・近代の文芸にみる 屋島・源平合戦

はじめに

本章では、近世・近代の文芸（漢詩・和歌・俳句・川柳・俚謡）等に詠まれた屋島の景色、屋島寺、源平合戦について紹介する。これらの作品は主に、近世後期「讃岐志」(D021・D022)、大正4年(1915)「讃州府志」(G018)、昭和8年(1933)『讃岐文芸読本』(G011)、昭和15年『木田郡誌』(M021)、昭和39年『新修高松市史』I (M024) の「やしま詞花集」に採録されたものである。

I 近世の文芸、漢詩と和歌

1. 近世の漢詩、源平合戦と秋の月

近世の文芸の最初に紹介するのは、高松初代藩主松平頼重の寛永19年(1642)「麓塵集」(A063) の「讃岐国亀山八景之歌」である。

亀山晴嵐

かめ山や嶺にあらしのはけしくて
雲もかすみもいつちゆくらむ

八橋秋月

もろともにあはれはそらにしられけり
星しまにのこる秋のよの月

香西落雁

雲井よりおちくる雁の声きけば
浦邊の波によるととなり

北海帰帆

あま小舟いてゝも北の海はらに
柁とりなほしかへる浦なみ

西浜晩鐘

聞声の色はありけりわきてなほ
この夕くれの鐘そものうき

男木島夕照

遠からすまたかゝらずなかめやれ
は

入日さやけき男木のしま山

姥池夜雨

おり姫や池の蓮の絲をはへて
こよひは雨にぬれて繰らむ

高松暮雪

くれかけてふるしら雪のつもるより
むれ高松もなへてみえつゝ

屋島を秋の月の名所として位置づけつつ、「あはれ」という言葉で、屋島における源平合戦を含み込んでいる。そしてこの頼重の歌に対して岡部拙斎(1593-1655)が答えた漢詩「屋島秋月」がつぎの七言絶句である(『高松藩祖松平頼重伝』(G021)に所収)。岡部拙斎は、播磨生、京都の菅得庵にまなび、水戸藩主徳川頼房に仕え、頼重の侍講となり、佐藤繼信碑の銘文も記した。

落木蕭々屋山秋 山光水色深吟吟

源平矛盾英雄尽 月影空隨一釣舟

頼重の歌に答え、屋島の秋の月、源平合戦、そして山の光や釣り船等の景色を加えている。この秋の月と源平合戦は、近世の文芸の一貫したテーマとなる。以下、大まかな編年順であるが、題、作者名、出身、身分、出典を記して、屋島関連の漢詩を分析したい。

①「壇浦懷古」江村宗珉（1608-1661）、
京都生、尼崎藩儒者（「讃州府志」）

漠々風煙落日愁 征鞍吊古下寒洲
沙場自傍青山遠 海水空蒙孤島流
万壑崕嶺宮殿尽 長河寂寞甲兵收
潛然相憶旧時淚 況又不堪蘋萩秋

②「屋島懷古」桂山義樹（1679-1749）、
幕府儒者、書物奉行（「讃岐志」「讃州
府志」「翁鷗夜話」（D008））

開門風浪怒難平 此地曾屯十万兵
金鑄頻飛魚鼈窟 樓船空保鳳凰城
宋帝遺臣迷北極 周王君子尽南征
不知英魂何處所 月明波上夜吹笙

宮車一去帝王州 大海風雲寄冕旒
井底有緣還玉蟹 水浜誰復問膠舟
舞姬執扇隨朝落 飛將影去學月流
那識寒烟蓑草外 幾人曾倚望鄉纏

③「登屋島」岡長祐（?-1767）、
高松藩の儒者、記録所總裁（「讃岐志」「讃
州府志」）

絕頂登臨北斗齋 石壇人去暮花低
月中風度千林竹 似有簫声帰故溪

④「登屋島」後藤芝山（1721-1782）、高
松藩の儒者、藩校講道館初代総裁、柴
野栗山の師（「讃州府志」）

登臨日落雨初乾 滿目千山霧裡看
回磴躋森盤樹杪 飛泉淒冷泻林端
雲深古寺梵声靜 草沒殘碑月色寒
幽壑時時陰鬼哭 長教遊客淚闌干

⑤「屋島懷古」中村文輔、高松藩の儒者、
延享元年（1744）「栗林莊記」（「讃岐志」）

山擁大荒地勢雄 激波相擊折西東
仙鐘遙響鳥声外 帝座忽看靈氣中
一隊旌旗雲出巒 千房棟宇草連空
女牆曾照旧時月 独落江流似學弓

⑥「屋島懷古」那須資明、18世紀後半の
旗本（「讃州府志」）

屋島戰塵元曆年 源軍金鼓震城邊
朱旗欲亂飄雲樹 星鵠終飛映海天
檀浦浪花隨夕散 乘山風月經秋圓
猶余平氏轍門跡 鬼哭応知夜雨前

⑦「屋島懷古」松平頼儀（1775-1829）、
高松藩8代藩主（「讃岐志」「讃州府志」）

宮車一出狩南州 洋海風雲寄冕旒
戰合縱橫金鑄亂 城高左右旆旌流
臨營月影懸愁夢 打岸潮声落客舟
遙憶英魂何所処 蒼々曉色星河慘

⑧「屋島懷古」梶原藍渠（1763-1834）、
讃岐の商人、後に高松藩士、史家
(「讃岐志」「讃州府志」)

先年白日一朝昏 西狩翠華出九關
八歲天皇何所識 徒成孤注博乾坤

⑨「巖賦所見」後藤漆谷（?-1831）、
高松の商人、文人（「讃岐志」「讃州府志」）

獅巖眺望所人伝 聯枝擎掌半嶺嶺
溪鳥不驚吟客側 風帆欲到酒盃前
數掌春島玻璃海 一刷萬霞金鏡天
元曆亂離誰又說 吾曹公在太平年

⑩「屋山懷古」高尾竹溪（?-1848）、
高松藩の儒者（「讃岐志」）

屋山秋老一寥然 此處戰攻元曆年
水煮血池蕭寺外 若理碑銘石橋前
風声入樹驚兵走 紅葉映霞醉楓連
岸畔潮流猶有怒 英魂今日在何邊

⑪「屋島懷古」片山沖堂（1816-1888）、
讃岐の儒者、史家（「讃州府志」）

落日無光草木悲 行宮何處認荒基
宵山前水戰爭地 一汴二杭漂白時
英氣不磨跡印石 譬風猶見血成池
獨憐黃土埋忠骨 便是南州墮淚碑

⑫「舟中望屋島」細川林谷（1782-1842）
嘉永元年（1848）序「林谷詩鈔」（A081）、
讃岐の篆刻家、漢詩人

雲遊蘆宿鬱斑々 東走西奔猶未還
莫怪舟中顛願望 元來屋島是家山

作者は、ほとんどが高松関係者で、高松藩主⑦、高松藩・讃岐の儒者③④⑤⑩⑪、商人・文人⑧⑨⑩、その他、他藩・幕府の儒者①②、旗本⑥となる。特に⑥の那須資明は、那須与一につながる家である。那須家は近世一時鳥島藩主となったが改易され、元禄14年（1701）旗本交代寄合那須衆の筆頭となる家である（工藤編2008）。那須資明は、和歌や漢詩、絵画等を嗜む文人であり「那須家軍器図」（大田原市那須与一伝承館所蔵）などを作成しており、那須家の歴史に关心が高かった（那須与一伝承館2010）。ただ漢詩には与一のことは取り上げず、源平合戦全体の描写となっている。

これらの漢詩に共通するのは、すべて源平合戦が詠み込まれていることである。合戦自体を表す、①甲兵、②十万兵、⑥源軍・平氏轄門、②⑥⑦金鏑金鼓、⑨⑩元暦、⑪戦争地をはじめ、安徳天皇や内裏である②帝王、⑤帝座、⑧八歳天皇、①宮殿、②⑦宮車、⑪行宮の言葉がある。また戦死者の悲哀を②⑦⑩英魂、④⑥鬼哭で表現する。屋島合戦の特定の人物や史跡も多く、那須与一について触れる②⑪、佐藤繼信碑と思われる④草没残碑、⑩苔埋碑銘、⑪埋忠骨や、血池⑩⑪を含む内容もある。

一方で、松平頼重以来のテーマとなる秋と月、夜については、秋①⑩⑪、月②③④⑤⑥⑦、落日等①④⑨⑪と、これもほぼすべての漢詩に共通する。そして岡部拙斎が付加した波・風・霞・霧・雲等の屋島の景色を構成する要素も、①風煙、④霧、⑥檀浦浪・雲、⑦風雲・潮声、⑩風声・潮流と随所に登場する。また本書第7章で紹介した波や風の音から源平合戦を想起する文も、②海上夜吹笙、③簫声等にあり、紀行文との共通性がうかがえる。

屋島の景色に関しても、③絶頂、④回磴
僧森盤樹杪、⑤山擁大荒地勢雄、⑨獅巖眺望、

聯杖躋攀半嶺嶺など、山と森、獅子靈巖の様子が詠まれ、屋島寺についても④古寺梵声などで表現する。幕末の細川林谷は、「元来屋島は是れ家山」（⑫）と、屋島の形狀を述べた漢詩を詠む。

2. 近世の和歌

近世の和歌は採録作品が少なく、『讃岐国名勝圖会』を補訂発行した『古今讃岐名勝圖会』（J012）の、増補項目に「可正桜」がある。可正桜は、屋島寺四天門前の老桜であり、高松藩主松平半左衛門可正が寛文5年（1665）に植えた。当時可正が詠んだ和歌として以下の3首がある。

此の寺の庭を植ゑおかん
わが後の世の花がたみなり

花の時人きてもしも間ふならば
可正桜と名を知らせてよ

空蝉のからはいづこに埋むとも
名をは屋島の峯に置くなり

3首目に屋島が詠まれているが、いずれも当時のものか不明であり、「可正桜」に限定された内容である。本格的に屋島が詠まれるのは、備中の国学者藤井尚商（1764-1840）の和歌である。「屋島懷古」と題して、「弓はりの月を屋島の峯に見て、ともの音せし昔をを思ふ」（『木田郡誌』）とある。また「いくさんふきし小笛のふる声を、のこす屋島の峰の松風」（『新修高松市史』）がある。いずれも、屋島の月や松風から想起する小笛、源平合戦の史跡など、近世の漢詩と同様の傾向である。藤井尚商の「松屋文後集」によると、高松に来訪し月見をしており、高松からみた屋島の景色を詠む（『讃岐郷土讀本』（G013））。

梓弓矢しま遙に見えぬなり
薄霧なびく月のよはには

うきみるのよるかと月に見えたるは
磯の松影うつるなりけり

ここでも屋島と弓、月を主に霧や松等の近世の主要なテーマが詠み込まれる。

II 近代の漢詩と和歌

1. 近代の漢詩

近代に入り明治前半の漢詩には、近世と同じく源平合戦、秋、月が詠まれている。

「夜過屋島有懷那須與市」水越成章（1849-1933）神戸生、漢詩人（「讃州府志」）

射扇当年跡已空 片帆吹度矢洲風
剩有波心余古影 一痕新月大於弓

「屋島秋月」久保蘿谷、讃岐の漢詩人、片山冲堂門（「讃州府志」）

落木秋寒古戰場 流光空見映僧坊
鶯輿一去無消息 片山依然六百霜

正岡子規は、明治16年（1883）松山から上京する際に船で屋島を通過した（「東海紀行」（G017）。この時子規は16歳、松山中学を退学し東京へ行く途上であり、併人として世に出る前である。屋島以外にも一ノ谷の敦盛墓、生田森の源平の古戦場、楠公神社に参詣している。ここでは「八島ヲ前面ニ望ム、是レ義経ノ古戦場ナリ、古ヲ感ジテ作ル」とある。

万里吹來波浪風 追思往事已成空
青山一帶無不見 唯有淡濃烟霧籠

波と風、山、霧等の屋島の風景、源平合戦の直接の記述はないが、往事を思うとの言葉と紀行の内容から推測できる。

2. 与謝野夫妻と近代の和歌

明治以降、近代の和歌で特筆すべきは、与謝野鉄幹・晶子夫妻の屋島に関する歌である（菊池寛記念館編2007）（G031）。昭和6年（1931）徳島、香川、愛媛をめぐった夫妻は、10月29日鳴門から自動車で午

後屋島に到着した。昭和4年に開通したケーブルカーに乗り山頂へ向かい、屋島寺・獅子の靈巖をまわる。このとき夫妻は、明善高等女学校教諭の椎名六郎（後の香川県立図書館長、図書館学）・加藤増夫（歌人、郷土史家）の案内で、山上から源平合戦の説明を受けたとある。このように高松市や保勝会は著名な文人や画家を招いて宣伝をおこなっていた（田井2014）。

つぎに屋島に関する、与謝野夫妻の和歌をあげる。

与謝野晶子

①山に見ぬ屋島の浦に浮ぶ藻と
くらべて城の高さの勝る

②地を相し屋島内裏の置かれしを
思ふ廷尉はさてのちのこと

③木田郡塩を採る日は廉く穂も
鳴る葉も無くて海に隣す

④屋島なる物見の台の石の窓
文治二年のきさらぎを置く

⑤源平はいさや波より現はるる
扇の船のあれかし屋島

⑥屋島浦うす丹の色の塩田も
若き與一のおもかげとなる

⑦客中の秋の半日あはれなり
屋島の上をまろく歩みて

⑧屋島村古高松にそこばくの
けぶりの立ちて讃岐渦晴る

⑨塩田は大榎小榎女木男木の
浮島のごとたのしまぬかな

⑩竝笠に平家のすゑの隠るなど
云はぬ屋島の悲しかりけれ

⑪平家ゆゑ名のあはれなるこちして
遍路と入りし屋島寺かな

与謝野鉄幹

①屋島より見る瀬戸の島ほのぼのと
みな青雲に浮くけしきかな

②真下なる松の木末の黒くして
入江ひかりぬ屋島に見れば

③見下ろせる屋島の村の黄なる田も
平家の貴女の櫛箱に似る

④かしこぞと内裏のあとを屋島より
指さす方も田の黄なるかな

⑤屋島にて與一を開けば身に沁みぬ
我が待めるも一心なれば

鉄幹に比べて晶子の歌が多く、源平合戦、屋島寺、風景いずれも歌に取り入れている。同じく眼下に広がる塩田や刈り入れ前の黄金色の田についても触れている。また与謝野夫妻を案内した加藤増夫（博揚）は、この時かどうか不明であるが、源平合戦の史跡、菊王丸の墓について歌を詠む。郷土史家でもあつた加藤の歴史への視点が感じられる。

稲刈られ菊王丸を葬りし
積石墓はさむぎと見ゆ

桜の木ふるびて赤き実をもてり
菊王丸がおくつきどころ

ただこの時期の和歌に詠まれるテーマは、源平合戦の史跡から屋島の風景に変化している。晶子の③⑥⑧⑨は塩田、①⑦と鉄幹の①②は屋島の風景である。

また明治38年11月12日高松市開庁14回記念祝典において、屋島山へ楓800株が植えられた（『古今讃岐名勝図会』（J012））。その際の小田知周市長の歌は屋島と楓を詠み込む。

今日かかる屋島の山の若楓
弓手も右手もしけれどと思ふ

わか楓かかる屋島の山里は
日あたりもよし生しけるらん

屋島の観光化を進める高松市長の意気込みが伝わりつつ、観光の屋島への変化が見て取れる。明治から戦後にかけて次の歌も、景色を詠むものが多い。

「屋島山上にて」坂正臣（1855-1931）、
名古屋生、御歌所歌人（『木田郡誌』）
ここは何かしこは何と教へられ
見やるむかしのたたかひのあと

「屋島山に登りて」猪熊夏樹（1835-1912）、
香川生、国学者（『木田郡誌』）
やしま波津つ汐路にしほけぶり
けふるあなたや吉備の遠山

「宇野より船にて高松に渡る」昭和9年、
尾上柴舟（1876-1957）津山生、国文
学者、書家（水齋社編（1968））
午後深く内海霞む日ぐせなれや
蒼茫として達し屋島は

安宅苔花、戦後徳島の歌人（『新修高松市
史』I）
朝もやにつつまれて立つ談古嶺
いにしへの話は静かにきけり

安宅苔花の歌には、明治30年村雲尼公（九
条日淨 1896-1962）が源平合戦の話を聞いて
命名した、新しい名所「談古嶺」も詠み込まれる（『木田郡誌』）。また鉄幹の門人である
北原白秋（1885-1942）は、「六月五日屋島に來りひた暑し、少女が群に我かこまれぬ」
と、源平合戦・屋島の景色もない、観光した
自身を詠む歌も登場する。

また和歌ではないが、詩も多く作られて
おり、「平家蟹」吉川賢一郎、「屋島にて」河西新太郎等がある（いずれも『新修高松市
史』）。近代西欧のまなざしについては本書
第10章に詳しい。西欧人の詩として、イギ
リスの詩人エドマンド・ブランデン（1896-
1974）「屋島を訪ねて」（1949）には、「まこ
とに長い屋根のように」「強者らが築まる
この丘」「突如眼前に聞く新しい驚き、男帰
の青海原」「ここにもまた土産品や茶店や街
路がある」と屋島の形状と源平合戦、屋島の
景色、観光が描写される。一方でフランス

の詩人・外交官ポール・クローデル（1868-1955）の「屋島山」は、「屋島山登り来りて、今ぞ見る、蒼海の波浪、大和衣装に織りなせる、光芒の帯の美しさ」とある。屋島合戦等ではなく、屋島に登りそこから見える景色の美しさを表す。

3. 近代の俳句

近世の俳句はほぼ掲載されておらず、蕉門十哲で美濃の各務支考（1665-1731）の「秋の野も花ともさかで平家蟹」がある。近世の地誌に登場する平家蟹は、近代の和歌・俳句、後述する川柳でも数多く登場する。

南無庵（長尾）真海（1860-1912）、香川白鳥（『木田郡誌』）
木枯れの浪に怒るや平家蟹

栢亭（『古今讀岐名勝圖会』）
潮引て見る日も暑し平家蟹

藤乃屋浪好
いかめしき顔はみゆれと平家がに
琴をしらふるてしなやさしも

また近世、満願寺住職令中がまとめた「阿字八景記」の庵治八景「屋島の晴嵐」には、暁峰「能登殿の矢風か沖の春あらし」の句がある（『庵治町史』（M036））。源平合戦の能登殿平教経の矢風と春の嵐のすさまじさを表す。高松側の八景では、松平頼重の「屋島秋月」であったが、庵治側では「屋島の晴嵐」となる。後述する『山家鳥虫歌』でも志度に八島嵐が吹くとあるように、地域別の微細な気候の状況も表現している。

近代の俳句にも『木田郡誌』に、「屋島懷古」としてまとめられるように、源平合戦、秋の月等近世から続くテーマを詠む句もある。

芦江
矢叫のあととも見えず春の海

久保不如帰（1849-1914）香川
弓はりの月や屋島のほととぎす

久保不如帰（惣門跡句碑）
夏草やここにもひとつ觸體

しかし高浜虚子（1874-1959）を代表とする「ホトトギス」派の多くの俳人の句には、和歌と同じく観光の屋島が詠み込まれていく。虚子のつぎの句も秋の屋島観光である。

薙寄せの太鼓たたくや草紅葉
秋の山上り下りの茶店かな
秋の山日いっぱいに下りけり

登山駕があることから、昭和4年の屋島ケーブルより前と判断されるが、駕での上り下り、茶店等、屋島観光の一端が詠まれている。つぎにみるのは香川県内の俳人で、大正12年（1923）創刊、香川の地方俳誌「紫苑」で活躍、または昭和23年（1948）『ホトトギス同人第二句集』に掲載された人々である。

村尾公羽、香川高瀬、主宰
鳥わたら屋島の端山にぎやかに

前川舟居 香川、主宰
雲の峰裏より立ちし屋島かな

森婆羅（1877-1970）香川高瀬
萩にふれて芒にふれて屋島舞竈

久保五峰、香川
旗立てて屋島にふるき遍路宿

白川朝帆、香川
屋島嶺の茶店の落花海へ掃く

平尾春雷、香川
次の駕こしおくれし秋の山

三木朱城、香川小豆島
漬えたる相引川の芦の花

佐々木令山（1899-1966）香川
裏山は屋島につづく月の庵

そして香川以外の俳人の句である。

小山白猶、徳島ホトギス会を結成 屋島駕ぐらきによせて月の茶屋	家蟹」の7項目24首がある。
青木月斗（1879-1949）大阪満月会を結成 春潮に乗る大船や壇ノ浦	屋島落 鐵漿葱は積んだかと聞く屋島落 屋島攻め船を漕せる下手講師
田中王城（?-1939）京都生 短夜や開け放たれる大星島	壇の浦 壇の浦笏で四五杯盛つて食ひ
前田普羅（1884-1954）東京生 大空の星島平に明け易し	那須与一 源氏から大工が出たと慰まれ 玉虫をよけてねらふが要なり 顔見い見いよつ引いてひやうと射る 警められて与一も鎧しほるなり 二本目は与一も困る扇かな 要を射られて散り散りになる平家がた
酒井黙然（1883-1972）福岡生、愛媛の 医者 落葉插き北の嶺より現はるる	鎧引 景清は尻餅四郎はつんのめり おはぐろにしろと景清船へ投げ 千の手で引くに三保谷気がつかず 鎧から切れずば首をひんぬかれ 三保谷の帰りに樵に日が当り
岩木躑躅（?-1971）淡路生、接 骨医 麦打つや屋島の山の登り口	弓流し 義経さん何か落したと能登守 義経の弓はあらめにひつかり 弁慶に一本借りて弓を取り 弓流十日も鎌倉殿はふところ手
山口誓子（1901-1994）京都生、俳人 晩涼の塩焼くけぶり壇ノ浦	佐藤繼信 繼信も百に一つはあたらぬ氣 胸板をすえて忠義のために立ち 繼信を損にして置くかちいくさ
松尾いはほ（1882-1963）京都生、内科 学者 冬雨や平家の話みなかなし	平家蟹 赤旗の怨霊海を横に這ひ 平家の怨霊打物は鉄なり 平家の怨霊ゆでても赤くなり
青木月斗、松尾いはほが源平合戦を詠む が、その他は虚子と同じく、駕、茶屋等觀光 の屋島、和歌と同じく塩田、そして近世から 続く秋と月である。 近代においては、和歌・俳句、特に俳句 において源平合戦から觀光の屋島へと変化し ていることがわかる。また近世の漢詩に比べ て、近代は実際に屋島に登る、頂上から眺 望する視点が多い。これらも駕やケーブル カー等の交通機関の発達による、訪れやすくな った屋島を表す。	いずれの川柳も、源平合戦、特に「平家 物語」の名場面をテーマとしている。そして 川柳の基本といえる風刺、滑稽を織り交ぜた 内容である。

III 川柳

川柳は、すべて『讃岐文芸読本』(GO11)、『木田郡誌』(MO21)掲載のものであり、時代は全く不明である。つぎの「屋島落、壇の浦、那須与一、鎧引、弓流し、佐藤繼信、平

IV 俚謡・流行歌

1. 近世の俚謡・歌

近世の俚謡・歌として、まず明和9年(1772)刊、天中原長常南山編『山家鳥虫歌』(A078)に、つぎの屋島関連の俚謡がある。

志度はよい町西北をうけ、八島軍はそ
よゝと
八島山には大谷小谷、なぜにこなたに子が
無いぞ

屋島の景観を詠んだ歌であり、後半は後述する郷土俚謡にも採録される。その他、藩の参勤交代で使用する船の船頭の船歌として、讃岐丸亀藩(『新編香川叢書文藝編』(A087))、伊予松山藩(『松山市史』史料編2(A084))のものが残る。いずれも「八嶋」「かい揃」の二種類があり、「八嶋」の前半は、讃岐沿岸の屏風浦、崇徳天皇陵、志度などを紹介し、後半は源平合戦を語り、佐藤継信の話が中心となる。

八嶋と聞はなかゝに爰は古しへ源平船となきさのたゝかひに沖は平家の御陣より○弓箭取は大将乗常続く味方は大友左京木朽原田松浦等船を渚に寄られて陸の敵を待に揚も源氏の御陣より○数多の武者が見へにける中にとりわけ大将召した裝束はなやかに○赤地の錦のひた(た)れに○弓箭おどしの鎧めし五枚兜を召れゝゝ○真先かけて見へにける続く兵おふしうの佐藤兄弟次信龜井片岡伊勢駿河むさしかいぞん三保のやも○しのきをけつりたゝかひし(エイヤヨ)エイヤコノ三重△沖にまばらの合引のエイ汐のひかたの荒磯に○寄せくる浪の音そへて○ものすさましき段の浦○心を尽しかんたんし是をいかにとたづね君に御おんの次信も○名は高松にとゞめ置今は名のみを残し○かたみの石に葛衣來て見よエイヤ是もお僧のつらぬ給ひし歌ぞかしおしむとも○世も今迄はながらへし身を捨てこそ名をば次信と○よしみも断りけになおしむ弓取は

たれもかくこそ有べきと跡をわひしく打詠め

「かい揃」は「八嶋の外も静かにて箱に納むる兜貝、恋を信濃の木曾路貝」と各地の名所を貝にたとえた内容である。屋島は兜によって屋島合戦を想起させる。

2. 郷土俚謡、流行歌

その他、郷土俚謡、流行歌として、剣舞節、さのさ節「屋島山」、四季節「屋島の四季」、鶴絵江節、国境警備節「屋島唄」「屋島行進曲」等がある。すべて昭和15年(1930)刊行の『木田郡誌』(M021)採録分であり、近世から戦前にかけて作られたものと考えられる。さのさ節は明治30年(1897)頃、鶴絵江節は大正年間、流行歌として親しまれた(『日本国語大辞典』)。

(1) 郷土俚謡

- 一、屋島壇の浦山ほととぎす
啼いて昔をしのばせる
- 一、屋島山から八栗を見れば
山と山とに橋ほしや
- 一、平家いとしや盛の花よ
仇な一夜の風に散る
- 一、都はなれて浪路が枕
千鳥鳴く夜はねむられぬ
- 一、波の屋島でかりねの夢が
さめて驚くときの声
- 一、昔ながめし雲井の月を
今じや屋島の浦で見る
- 一、見ても見事な屋島の山は
根から生えたか浮島か
- 一、屋島山には不穏の梨よ
獅子の靈巖これ不思議
- 一、屋島山には遊覧電車
恋のドライブ・ケーブルカー
- 一、昔先年屋島の戦
今にござんす血の池が
- 一、餌鮒蒲団切りや屋島の戦
駒を早めて切りかかる
- 一、いとし可愛や継信さんは
四国屋島の士となる
- 一、屋島小坂に鳴く時鳥

- 声はすれども眼に見えず
 一、星島山から八重垣見れば
 痩せた女が三味を弾く
 一、星島山から飛んで来る鳥
 銭が無いのに買ふ買ふと
 一、星島八栗の間は壇の浦
 根来白峰稚児が嶽
 一、葛は根来に葉は白峰に
 花は星島の嶽に咲く
 一、示度で餅焼く星島でちぎる
 播磨灘から舟が出た
 一、星島八栗の間の小姐は
 屋島小蘿で色白い
 一、星島山にも大谷小谷
 何故にお前さんにお子がない
 一、星島浦生は塩船どころ
 沖へ出船の帆が続く
 一、思ひだによりに宝笠きせて
 星島壇の浦でうろうろと
 一、船は出て行く星島の沖へ
 又と逢ふやら逢へぬやら
- (2) 流行歌
 剣舞節
 一、星島山から眺むれば
 安徳天皇や菊王丸
 相引勝橋目の下に
 惣門柱が北南
 洲崎の御堂が西東
 登りつめたる五鶴山
 五鶴山より北見れば
 庵治の名所や才田屋の
 沖には白帆走り船
 どんどん棹を引き廻し
 庵治の港へとろとろと
- さのさ節
 一、星島山
 古蹟なれば只の山
 漢の高祖も秀吉も
 天下取らなきや只の人
 天下取らなきや只の人 サノサ
- 四季節
 屋島の四季
 (一) 春は花見に星島山
- 氣も浮き浮きと豊石
 恋を咲かせた可正桜
 可愛い順礼の笠に散る
 (二) 夏は涼みに星島山
 恋のドライブ心地よく
 青葉の風もそよそよと
 夜の靈巖懐しや
 (三) 秋は月見に星島山
 招く薄に誘はれて
 昔を偲ぶ古戦場
 月に思ひを談古巣
 (四) 冬は雪見に星島山
 床しい眺めの銀世界
 花を咲かせた相生の
 松の風情も美しや
- 鴨緑江節
 一、星島山世界に誇るアノ公園地
 輝く晝はアラ相生のヨイショ
 松の緑はヨッコラ千代かけてヨ
 栄ゆるマタ町こそ日出でけれ
 チョイチョイ
 一、名産は塩に薺にマグネシウム
 酒の香もよい醤油もよい
 国へ土産は星島焼
 源氏餅には平家蟹
 一、虫が鳴く秋の眺めは星島山
 登る小径に萩桔梗
 風情を添ふる女郎花
 其処に古戦場の月がさす
 一、雲をしのぐ五鶴山下の栗山堂
 鏡引きやら弓流し
 的射し与一は花の武士
 星島内裏に月がさす
- 国境警備節
 屋島唄
 一、此處は日本の二十五勝
 海岸屋島は樂々と
 登る山路はケーブルカー
 一、昔源平の古戦場
 那須の与一や維信の
 勲をしのぶ談古巣
- 屋島行進曲
 (一) 此處は国立公園地

- 名勝旧蹟數多く
其名も高い屋島山
- (二) 周遊ドライブ心地よく
遊覧電車で相引の
川を渡ればケーブルカー
- (三) 昔を偲ぶ瑠璃宝池
四国靈場の屋島寺
獅子の靈巖談古嶺
- (四) 跳め見飽かぬ瀬戸の海
墨絵の島々美しく
沖に連る真帆片帆
- (五) 出船入船暖やかに
浦生港の花と咲く
富田工場の偉大さよ

これまでの文芸作品に登場する、屋島の景觀、源平合戦、塩田やケーブルカーの觀光等、すべての要素が含まれる。例え、「屋島壇の浦山ほととぎす」「屋島小坂に鳴く時鳥」にみえるホトトギスは、俳句にも「弓はりの月や屋島のほととぎす」とあったが、実はもっと古い歌にも詠まれる。延宝5年(1677)「玉藻集」(D002)は、屋島の最初に「古今和歌集」の「ほとときす鳴声きけば別れにし、ふるさとさへ恋しかりける」の歌がある。現在も香川の県鳥であるほととぎすは、屋島を表す鳥として歌い続けられた。四季節には「秋は月見に屋島山」とあり、近世の漢詩以来の秋の月も繼承される。また「屋島行進曲」には、昭和9年指定の国立公園、周遊ドライブ、遊覧電車、ケーブルカー等、当時の觀光の諸相が含まれる。大正9年(1920)創業の富田製薬屋島工場も登場する。

V 近代の皇族の屋島來訪

近代の文芸からみえてくる觀光の屋島への方向性は、特に明治33年(1900)以降の皇族の屋島來訪が重要な役割を果たしている。皇族最初の登山は、先述した①明治30年村雲尼公で、屋島の合戦の話を聞き「談古嶺」と命名し新しい名所が登場した。続いて②明治33年6月小松宮彰仁が、日本赤十字社香川支部総会で来県した際に屋島へ登っている(『木田郡誌』(M021)、以下同)。③明

治36年10月11日には皇太子時代の大正天皇が徒步登山し、不喰梨、獅子の靈巖、談古嶺を來訪し、郡民が記念の「仰之碑」、記念式・記念運動会を開催、つぎの記念日の唱歌を作った。

- 一、今は昔の明治の世
三十とせ余り、六つの年
今日の此の日に、畏くも
日嗣の御子の、登らせて
海原かけて、國原を
国見せさせし屋島山
- 二、其いでましを、偲びつつ
あきつ飛びかふ、秋の空
老も若きも、打集ひ
遊ぶ遊びの、楽しきを
いざや歌はん、諸共に
とはに仰がん、屋島山

天皇の來訪から歌が生まれたが、ここには源平合戦、屋島の景觀はない。④大正3年(1914)3月21日三皇子(皇太子(昭和天皇)・秩父宮・高松宮)、⑤大正5年8月7日賀陽宮恒憲王が屋島、安徳天皇社へ参拝した。⑥大正11年11月20日には摂政宮(昭和天皇)が、陸軍特別大演習で来県、屋島山を徒步登山し、獅子の靈巖、談古嶺、北嶺に來訪、「御登臨之碑」を設置、その後記念式、記念運動会を実施している。

①大正12年5月11日久邇宮家(邦彦王・妃・良子・信子王女)一行は、屋島の風景、屋島寺、古戰場を來訪、北嶺にて「遊鶴亭」の命名を行う。⑧大正14年4月19日李王、⑨同10月17日朝香宮両子女、⑩同12月6日北白川宮大妃が來訪。⑪昭和9年(1934)5月梨本宮守正王は、県設愛國飛行場開場式に出席、ケーブルカーで登山、屋島寺、獅子の靈巖、談古嶺を來訪、南展望台で大川中学校長の源平合戦の講演を聞き「瞰蹠亭」を命名する。⑫昭和10年8月16日澄宮崇仁親王(三笠宮)は、四国各県の見学の途中、ケーブルカーで登山、談古嶺で丸亀高等女学校長の史跡、多田少佐の戦術上の屋島合戦の講義を聞き、獅子の靈巖で展望した。戦後の⑬昭和28年9月第8回国体で屋島陸上競技場を訪問した昭和天皇は「いにしへの

書（ふみ）に名高き屋島見ゆる 広場にこそ
ふ人のたのもし」と、「平家物語」などに名
高い屋島と和歌を詠んでいる（『新修高松市
史』II（M025））。

このように近代の皇族の来訪は、屋島寺、
獅子の靈巖など、近世以来の名所を訪れ、徒
歩やケーブルカーを利用して、源平合戦の話を
聞くなど、近世・近代の紀行文や文芸にもみ
られた内容といえる。一方で「談古嶺」「遊
鶴亭」「蹠跡亭」の新名所の命名、大正天皇、
昭和天皇の来訪時の記念碑建立、記念式、記
念運動会の開催、そして記念日唱歌や天皇自
らの歌等、新しい文芸も作りだされたといえ
る。

おわりに

近世・近代の文芸（漢詩・和歌・俳句・川柳・
俚諺）などに詠まれた屋島の景色、屋島寺、
源平合戦について、作品紹介を中心まとめた。
近世の漢詩では、源平合戦を中心として、屋島
の景色をテーマとし、和歌では松平頼重の「屋
島秋月」以来、秋の月が主要なテーマとなっ
た。近代以降の文芸では、これらのテーマが
引き継がれつつ、明治後半の観光の屋島の進
展により、特に俳句において源平合戦から觀
光へと変化していることがわかる。川柳や郷
土俚諺等、近世・近代の判別が難しい作品も
多いが、ホトトギス派等の新しい潮流の俳句
とはテーマが違っていた。これらは漢詩・和
歌・俳句・川柳・俚諺、それぞれの性格、目的、
成立背景、作者の身分など、検討すべき

要素が多い。

また近世の漢詩に比べて、近代は実際に
屋島山に登る、頂上から眺望する視点が多い。
これらも駕やケーブルカー等の観光に伴う交
通機関の発達による、訪れやすくなった屋島
を表す。それは近代における皇族の屋島来訪
の増加からもいえる。その皇族たちは、源平
合戦の史跡を見聞しつつ、新名所を創設し、
地域行事の開催のきっかけを作り、唱歌や歌
を詠むなど新しい文芸の担い手にもなった。
近世の遠くから遠望する屋島、源平合戦の英
魂・怨念など近づきがたい屋島から、近代の
観光で登山する屋島、親しみやすい屋島へ変
化したといえる。

〈主要参考文献〉

- 菊池寛記念館編 2007『菊池寛記念館 16回文学展』秋
風遍路、四国路の与謝野寛・晶子』菊池寛
記念館
工藤寛正編 2008『江戸時代全大名家事典』東京堂
書籍
水漁社編 1968『尾上柴舟全詩歌集』短歌新聞社
田井静明 2014『香川県の保勝会の国立公園指定運
動と瀬戸内観光の特徴』香川県立東山魁夷
せうち美術館『瀬戸内海国立公園指定 80
周年記念事業 美しき日本瀬戸内の風景』
那須与一伝承館 2010『那須家の芸術と学問』
皆吉與雨等編 1948『ホトトギス同人第二句集』か
に書房
『日本人名大辞典』講談社、ジャパンナレッジ版
『日本国語大辞典』小学館、ジャパンナレッジ版

(担当：東 昇)

4 近世における屋島の顕彰

はじめに

本章では、松平氏治世の高松藩における屋島顕彰活動及びその整備事業を中心に、近世において屋島がどのように扱われてきたかについて述べる。高松藩松平氏による統治は初代松平頼重より11代の頼聰までの約230年わたる。ここでは特に初代の頼重と2代頼常、9代頼恕の治世における顕彰活動について取りあげる。

I 松平頼重の治世

松平頼重は元和8年（1622）に水戸藩主徳川頼房の長男として生まれた。その出生については、父である初代水戸藩主徳川頼房が、当時、尾張・紀伊の両家に男子がないことを憚って、堕胎を命じたが、家臣であった三木仁兵衛之次がひそかに産ませ育てたと伝えられている。寛永16年（1639）に常陸国下館5万石の領地を拝領し、その後、寛永19年に讃岐高松12万石を拝領した。その治世では上水道の整備、塩田開発などをおこなったため、頼重という人物は「名君」として描かれる。その後家督を頼常に譲り、元禄8年（1695）に死去している。

そのような頼重の治世における屋島の顕彰は高松入封直後から確認できる。「英公日曆」(FO10) 寛永19年8月28日の条には以下のようにある。

【史料1】

一 八月二十八日屋島江被成御座、屋島寺
迄(カ)縁起など御聞被成、夫ち次信石塔

御覽被成、御船ニ面御帰り

ここでは入封直後の頼重が屋島史跡を巡察する様子が描かれている。またそのおよそ1年後には佐藤継信の墓を整備したことが確認できる（写真1）。

その際、岡部拙斎に命じて銘文を作成させたようである。「讃岐国大日記」(D005)の寛永20年5月の条に銘文とともに、佐藤継信の碑を作るに至った経緯が記載されている。また、「讃岐府誌」(D006)の屋島の項目にも「元暦二年、罹源義経兵火、而悉灰燼矣。兵士佐藤嗣信討死ス。其墳有山麓。寛永中、有刺史之命、建碑銘」とある。また、整備の経緯は不明であるが、大夫黒の碑も同じ時期に建てられている（写真2）。裏面には「寛永癸未」とあり、これは寛永20年のことであるため、佐藤継信の墓とほぼ同時期に建てられたと推察できる。

さて、先に述べたように、塩田の開発をおこなった頼重であるが、その一方で、旧跡としての相引川を保存することにも力を入れている。もともと相引川は生駒氏治世の寛永14年に西郷八兵衛によって堤が作られ、水田や塩田になり、潮の満ち引きによって陸地が現れるさまが見られなくなってしまったつたと伝えられている。

屋島風土記編纂委員会（2010）によると、福岡新橋から木太滑浜海岸、富岡海岸（春日川・新川尻）に堤防を築き、その南側の地域に水田を開発した。また、その際、現在の国道11号の前身である下往還道路ができ、その時「相引の瀬」が埋め立てられ塩田が作られたということである。

しかしながら、頼重は正保4年（1647）に、



写真1 佐藤継信の墓 (左:表面、右:裏面)

(撮影: 棚田成紹)



写真2 太夫黒の碑 (左:表面、右:裏面)

(撮影: 棚田成紹)



写真3 総門跡 現地説明板

(撮影: 棚田成紹)



写真4 総門跡 標木

(撮影: 棚田成紹)

旧跡であるとして、潮の満ち引きによって東西から潮が満ちるよう堤を壊したと伝えられている。「翁嶼夜話」(D008)では「(正保)四年夏四月 公命毀屋嶼下交 緩 堤防面復古存名蹟」とあり、「讃岐國大日記」では「同四年、屋島相引、依生駒氏下知、作隣坡為鹽屋、然今太守、謂古來之名跡、以四月上旬破却隣坡、亦成潮汐之相引」と記述されている。

頼重は名跡としての「相引の瀬」を守るために、生駒氏の治世に作られた塩田を廢止したわけであるが、その代わりに改めて、相引川の北岸から櫓ノ浦にかけて塩田を整備している。

また、現地を訪れた際に、牟礼町総門跡にて写真3のような説明板を見つけた。残念ながら根拠となる史料は確認できなかったが、現地では、この標本(写真4)も頼重によるものだとする意識があるようである。

頼重による屋島頭影は史跡にとどまらない。歌人としても有名であった頼重は、多くの和歌を残している。そのなかで、頼重は『麓塵集』(A063)に次のような句を残している。

【史料2】

屋島秋月

もろともにあはれはそらにしられけり
屋しまにのこる秋のよの月

また、頼重に仕えた儒者岡部拙斎も自身の詩集である『拙斎詩集』(明暦4年刊)に漢詩を残している(『高松藩祖松平頼重伝』(G021)所収)。

【史料3】

屋島秋月

落木蕭々屋島秋 山光水色澹吟畔
源平矛盾英雄尽 月影空隨一釣船

II 松平頼常の治世

頼重の次代である頼常の治世は、頼重の時代におこなった土木事業により藩財政が窮乏した時代であった。顕彰事業としては十河順安による太夫黒の碑銘文作成が挙げられるが、この治世においてはそれ以外に確認でき事績はなかった。

梶原(1973)によれば、順安は通称であり、本名は保定といい、頼常によって召し抱えられた儒者である。銘文の作成年代についてははっきりとは判断できないが、屋島寺宝物館の収蔵品の内、元禄16年(1703)に、保定によって作られたとされる太夫黒碑銘文があることが確認できた。

また、藩による顕彰活動は頼常の治世以後、9代頼恕の時代まで見られなくなる。

III 松平頼恕の治世

9代頼恕の治世で注目したいのは、古跡の保存がおこなわれていることである。

【史料4】

一古城跡之義ニ付往古ち領主性名迄も相傳、諸記録共見候程之古城跡之儀ニ付、末代其形残居申候義勿論之事ニ候処、無弁者共ハ何の心得も無ク右土ヲ取其形変、且寺地ニ在之分者土居等切崩塌等ヲ埋メ、有形ヲ変候様之義も在之哉ニ相聞不埒之至ニ候、自今已後ハ御林ハ勿論百姓自分林又ハ野山等ニ在之分たり共、右石を取井埋候様之義堅ク停止候、尤平地ニ在之分も同様相心得可申候、但御用等ニ右古城跡ニ石土等取候様之義在之節ハ、其段申出指図ヲ請可候、尤右之場処有形之促ニ而竹木等生候義井耕作仕付之義ハ是迄仕来之分ハ不苦候

【史料4】は「高松藩諸達留」(G042)の一部で、木原ほか(1997)によると、この史料は文政11年(1828)に比定されている。この後、頼恕は、天保6年(1835)に雲井御所に碑を建てるのであるが、治世において史跡の保存を明確に示している点で、先に挙げた頼重・頼常とは史跡保護についての視点が異なっているといえよう。

IV 近世後期における屋島

藩によるものではないが、近世後期にも屋島は和歌・漢詩に詠まれている。三千舎桃源は屋島について、次のような和歌と漢詩を

のこしている。

【史料 5】

星島時雨
軽風惹雨断夕陽 遠擁連山近散塘
千秋兵罷空軍墜 落木蕭々古戰場
吹き迷ふ峯の嵐にさそはれて
そことも波に時雨行くなり
引きちぎる雲のしころや片時雨

三千舎桃源は本名を渡辺桃源といい、安永・天明頃の人物であるとされる。平賀源内と親交があったとされる人物で、志度寺に句碑が残っている。「古戦場」や「引きちぎる」「しころ」などという単語がみられることから、屋島の源平合戦をイメージしながら詠んだものであろう。

中村三蕉も屋島を題材にした漢詩を詠んでいる。

【史料 6】

星島晚濤
此地曾経源与平 両軍相対決輪贏
波濤打岸秋風晚 尚作当年金鼓声

中村三蕉は文化 13 年（1816）丸亀藩主中村弥門の五男として生まれた。嘉永 2 年（1849）に満校正明館の副助教兼詩文係となり、その後丸亀藩主の侍講などを歴任し、明治 27 年（1894）に没した人物である。これもまた源平合戦について詠んだものである。

先に松平頼重の治世においても和歌や漢詩が詠まれたことに触れたが、本章で挙げた、松平頼重・岡部拙斎・三千舎桃源・中村三蕉の和歌・漢詩はすべて「讃岐景勝詩歌」(G043) に所収されているものである。香川県（1985）によると、「延宝三年序の黒川道祐の『遠碧軒記』によれば、早くもその頃全国に九十八通の八景・十景・十二勝の詩歌があったといふ。その中に「讃州八島岡部拙斎玄友」とあるのは『拙斎詩集』下巻所収の「讃岐龜山堂八景」であろうか」とあるため、明暦期には風景を評価する観念があり、その中に屋島が含まれていることは、屋島の風景的価値が認められていたからではないだろうか。

おわりに

本章では近世における屋島の顕彰について述べてきた。史跡整備については松平氏の高松入封直後からおこなわれ、特に初代頼重による顕彰行為が主であった。2 代頼常以降は、9 代頼忽まではその動きがみられず、頼忽の治世になって史跡を保存するための制度が整備された。一方、和歌や漢詩においては八景の 1 つとして屋島が詠まれていることを確認できた。

のことから、近世では源平合戦史跡としての屋島と風景の価値を認められた屋島が併存していたといえるだろう。

〈主要参考文献〉

- 永年会 1973『増補高松藩記』臨川書店
香川県 1985『香川県史 第十五巻 資料編 芸文』
四国新聞社
香川県 1987『香川県史 第九巻 資料編 近世史料 I』四国新聞社
香川県 1989『香川県史 第三巻 通史編 近世 I』
四国新聞社
梶原竹軒 監修 1973『複刻讃岐叢書 改訂増補讃岐人名辞書』藤田書店（初版は 1928）
木原溥幸・丹羽佑一・田中健二・和田仁編 1997『香川県の歴史』山川出版社
高松市役所 1974『高松市史』名著出版
松平公益会 1964『高松藩祖松平頼重』牢禮印刷所
満済利博 2013『藩政成立期における藩主の「躊躇逍遙」的行為の政治文化史的意義—初代高松藩主松平頼重の藩政における「逍遙」「舟遊」等の位置づけ—』、『(高松大学・高松短期大学) 研究紀要』58・59
屋島風土記編纂委員会編 2010『屋島風土記』屋島文化協会

（担当：棟田成紹）

5 中近世の絵画資料にみえる屋島像

はじめに

本章では、中近世に作製された絵画資料から屋島像のバリエーションを確認することを目的とする。

いわゆる「源平合戦」をモチーフとした絵画作品に、屋島周辺を描いた作品は多い。近世に参詣を中心とした旅行文化が定着するまで、そしてそれ以降も、屋島像の源泉の一つに屋島合戦があったことは間違いない。ただ、とりわけ近世中期以降になると、合戦イメージに必ずしも依らない形で屋島が描写される場合もあった。また、作品の作製地によつても、描写イメージに差が生じた。これらの点を具体的に示していくが、その前に、簡単に研究史を概観し、また確認てきた資料を整理することから始めたい。

I 取り上げる資料と研究史

本章で取り上げるのは、芸術性が追求され、また鑑賞者が想定されて作られている絵画作品である。地理的位置を把握するために描かれた絵図・地図類は含まず、また個人の旅行記の中の挿絵なども含めていない点、了承願いたい。これらの資料については本書内の別章で扱われている。

屋島に関わる絵画資料として今回確認できた作品を巻末の資料一覧表に掲げている。これらは、香川県内およびその周辺地での資料調査のほか、確認した利用図録・集成・報告等一覧に挙げたものに収載された画像などを確認するなかで得たものである。このうち、源平合戦を中心に取り上げた主要な資

料集としては『平家物語・美の旅』(日本放送協会 1992)、『源平合戦図絵の世界』(高松市歴史資料館 1999)、『源平物語絵セレクション』(神戸市立博物館 1997)、『源平の美学』(サントリー美術館 2002)などを挙げることができるだろう。

形式としては屏風、襖絵、扇面、掛幅などさまざまである。また近世後期に刊行された錦絵も重要だろう。さらには刊行本の挿絵も含まれる。これらのうち、先行研究が充実しているのは屏風絵であり、屋島合戦図屏風ないし源平合戦図屏風全体についての研究は、個別の資料に関する専論や全体の分類に関する総論まで、豊富にある。本章の課題に沿う形で概観しておきたい。

源平合戦図屏風の基礎的類型を提出したのは川本桂子（1984）である。そこでは、源平合戦図には二つのタイプがあり、「平家物語」に描かれる合戦を大観的にとらえる構図を持つ第一類と、個別の有名なシーンを取り出して人物を中心に描く第二類とに分けられること、第一類はさらに構図や描写対象の違いから甲・乙に分けられること、さらに第一類・第二類ともにその起源は室町時代末にさかのぼる可能性が高いことが指摘された。

源平合戦図屏風は、いくつかの合戦がモチーフとなるが、そのなかで屋島合戦図屏風に関して、川本の成果を展開させたのが田沢祐賀（1992）と伊藤悦子（2014）である。いずれも川本の第一類を中心に分析し、田沢は川本の第一類甲種を A 類として継承する一方、乙種を B ~ D の 3 類、および「その他」に区分した。また伊藤は屋島合戦図屏風に絞って、その描写内容を基準とした分類をおこない、13 グループを見出している。

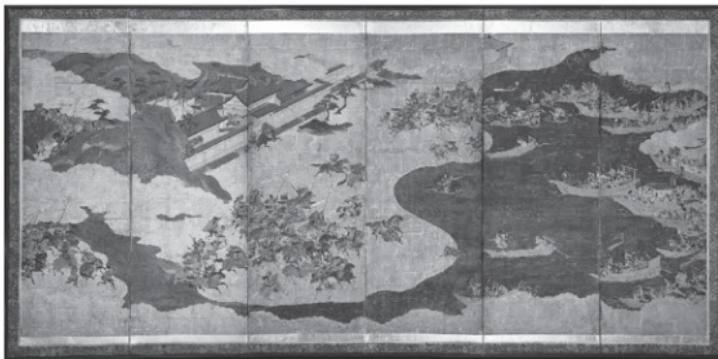


図1 「一の谷・屋島合戦図屏風」

メトロポリタン美術館蔵

II 屋島合戦図屏風の構図と屋島

先に挙げた屋島合戦図屏風（源平合戦図屏風）の分類は、描かれた内容に焦点を当てて分類されている一方で、屋島の形状についての注目はない。確認の意味も込めて、ここでは屋島の形状や合戦を描く構図に注目してみたい。その際、対象となるのは、全体が俯瞰されている第一類（日本本分類）である。最新の伊藤分類ではその中が13グループに分けられるが、そのうち、【9】は「独自性の強いもの」、【10】は「その他」となっており、また【11】・【13】グループについては屋島合戦だけではなく、他の合戦との組合せとなっているので、ここではひとまず除外しておきたい。また、ここで取り上げるのは京都や江戸などで活躍していた絵師が描いた作品、もしくはその系譜にあると考えられる作品である。言い換えるならば、屋島についての地理や景観を必ずしも十分には理解しない者たちが構想した源平合戦像である。これらを取り上げるのは、中世から近世にかけての屋島合戦ないし屋島の一般的なイメージが抽出できるからである。

伊藤分類【1】【2】【3】は、大坂越の場面および菊王丸の様子の違いによって分類され

ているが、構図自体は基本的に同一である。これらに属する作品のなかで、もっとも古い形態を残しているとされている天真寺所蔵「一の谷・屋島合戦図屏風」（B005）や、その同系にあるメトロポリタン美術館蔵「一の谷・屋島合戦図屏風」（B029・図1）、宇和島伊達保存会蔵「源平合戦図屏風」（狩野興甫作・B014）で、その構図を確認しておくと、川本の指摘にあるように、屋島合戦を描いた左隻は、「平家物語」の流れが画面の左から右に向かって描かれている。ただし、「平家物語」はいくつもの系統があり、その内容・構成に大きな違いがあることが知られるが（松尾2011など）、以下のような流れとなるのは、語り本系の「覚一本平家物語」（A007）などである。

すなわち、第六扇の上側では源氏が大坂峠を超えて讃岐に入る姿が、下側では第五扇にかけて高松から屋島へと海を渡る姿が描かれる。第五扇から第三扇の上側にかけてが屋島の描写であり、屋島館（第五扇上～第四扇上）、継信の死（第三扇下）や鎌引（第三扇上）がみえる。屋島館などが右上がりの角度を持って描かれており、屋島の汀線も同じような方向を緩やかに示す。第三扇から第一扇までは海上となっており、那須与一（第三扇中）と扇（第二扇中）、弓流（第二扇上）といった場面が描かれ、第一扇は船に乗る平家軍と

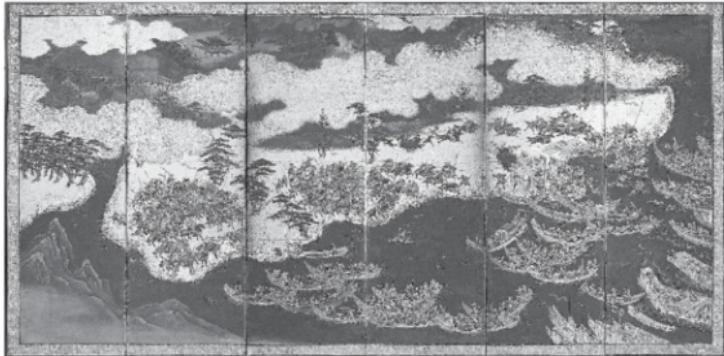


図2 「屋島合戦図」

フリア美術館蔵

なっている。この流れは、基本的に他のグループも同じであり、屋島合戦全体を描く絵画イメージの基本構図になっている。

これらの図では基本的には屏風の右上（第一扇上）を北とするような構図で描かかれている。大坂越の場面だけが左上（第六扇上）に挿入されているが、その場面だけが金雲と山並で画されおり、場面のみならず地理的な違いも屏風に暗に表現されている。逆に、その他については金雲等で区別されている場所はなく、場面の違いはあっても地理的には同一の場所でおこなわれていることが意識された構図となっている。

そのようななかで屋島の山容についてみると、屋島館の裏側、第五扇から第六扇にかけて表現されている山がそれであることが分かる。しかし、その山は先述した大坂越を画している山と同一であり、またいわゆる山形をした山容が連続しており、頂上部が平坦な屋島独特の山容を表現する意図は全く感じられない。むしろ、ここで強調されているのは、島としての屋島であろう。とりわけ、渡海する場面から連続する画面の中で表現されることが、そのような「島」性を強調させている。

なお、「高松市歴史資料館蔵の六曲一隻「源平合戦図屏風」（B065）は、伊藤の検討から漏れているが、大英博物館本と同系統であり、伊藤分類の【2】に該当することが明らかで

ある。

次に、伊藤は分類【4】で7点の作品を挙げている。多くの作品が依ったパターンと言える。フリア美術館蔵「屋島合戦図」（B028・図2）や埼玉県立歴史と民俗の博物館蔵「一の谷屋島合戦図屏風」（B041）などで確認すると、右がほぼ北、すなわち東側から合戦の地を俯瞰するような構図となっており、【1】～【3】では比較的垂直方向に目線が動く場面配置であったのに対し、【4】では水平方向が強く意識されたものとなっている。

具体的な場面を比較していくと、まず、大坂越の場面がないことが大きな違いとなる。【4】では、代わりに水田と茅葺きの家屋が配置されている。平家物語との関連で見れば、源氏が燃やした在家を表現している可能性があるが、やや意図が読み取りにくい。また、その在家に続く形で第五扇から第三扇にかけて、その上部に館が表現されている点も【1】～【3】とは異なっている。汀付近に屋島館が表現されておらず、その表現がこちらに移動したと考えればよいのだろうか。いずれにしても、これらは金雲で隔てられており、別の場面として表現されている。

次に画面の左下（第六扇下）に目を転じると、ごつごつとした荒々しい岩山が表現されている。位置的にみれば古高松の山となるが、その山容から五剣山と比定したくなる。



図3 「源平合戦図屏風」

高松市歴史資料館蔵

ただし、もしそれが五剣山とした場合、同じく特徴的な山容を持つ屋島については、まったく表現されていない点をうまく説明できない。そして、その意味で【4】も、屋島合戦のイメージのなかで捉えられているのは、山としての屋島ではなく、島としての屋島であることを押さえておきたい。

なお、【7】と分類された一群も、描かれている内容は異なるものの、全体的な構図としては【4】に連なるものである。

伊藤分類【5】は、馬の博物館蔵「平家物語図屏風」(B050)と高松市歴史資料館蔵「源平合戦図屏風」(B039・口絵1および図3)が挙げられている。源氏が阿波國勝浦に到着した場面を第六扇上に表現する。上陸した地点にある屋敷で戦いがおこなわれているが、屋島館は第四扇下に表現されているため、この屋敷が何を示すか不明である。また第六扇下には在家が燃えているが、これは高松の民家を燃やした場面であろう。

第三・四扇上部に勝利後、休息する源氏軍の様子を描いているのも特徴的である。義経と伊勢三郎義盛だけが起きて見張りをしているが、そこは山の上として表現されている。その山は炎上する屋島館の直上に位置しており、屋島と見まごうが、休息は高松と牛乳の間の野山での場面であり、屋島ではない。全体として、金雲や山で場面が区切られており、屋島館と休息する源氏との間にも確かに金雲がある。

高松市歴史資料館本の場合、構図としては第六扇の上が阿波國、その他の第六扇から第四扇が陸地となり、第三扇に海岸線が位置している。馬の博物館本では第四扇が海岸線となっており、両図の海陸の画面内の比率が異なる。とはいえ、いずれも屋島地域については、基本的に北を上とする構図と言つてよい。

伊藤分類【6】は【5】の一部が描かれているものとされているが、構図という点ではやや異なるものが一つに分類されている。ジエノバ東洋美術館蔵「平家物語 一の谷・屋島合戦図屏風」(B027)は馬の博物館本とよく似た構図を持ち、屋島周辺は北を上とした構図となるが、勝浦上陸の場面が第六扇上に、また岩山が第五扇下に表現される点などが異なる。それに対し、個人像「一の谷・屋島合戦図屏風」(B015)はフリア美術館本と構図は同じで、フリア美術館本で第六扇上の水田表現が、こちらでは源氏の休息に変わっている点が異なる。いずれにしても画面右側が北となる水平的な表現である。

伊藤分類【8】は全体として海岸線での攻防がクローズアップして表現される。構図としては六曲全体を左下から右上に対角線を引き、おおよそ、その左上部分が陸地、右下部分が海というような配分である。山の表現は、金雲と同じく場面の転換のために利用されるが、屋島の地理的特徴が反映されているわけではない。

伊藤分類で【12】とされた東京国立博物館蔵「屋島・壇の浦合戦図屏風」(B049)は、一の谷合戦ではなく、壇の浦合戦と組み合わされ、屋島合戦図が右隻に配置される点が大きく異なる。右隻となつたためと思われるが、場面が右から左に流れていく構図になっており、屋島合戦図屏風のなかでは特異な位置を占める作品である。具体的にみれば、第一扇上に勝浦上陸、第二扇上に大坂越がある。第一扇下には高松の在家の焼き払いがあり、第二扇～第三扇中に継信最期の場面がみえる。その下には与一の扇の的が第四扇中にわたって表現される。そして第五扇下では鎌引の場面が描かれている。なお、第四～第六扇の上には屋島内裏から海上に逃げ出す平氏の場面があるため、目線としては、屏風の上部に合戦以前の状況が右から左に描かれ、中～下部に合戦の具体的な場面が右から左に配置されていると見た方がよい。いずれにしても、同様の構図を持つ作品は現時点では確認できず、他作品から、ないし他作品への構図の影響関係をたどることはできない。

以上、源平合戦図屏風の類型を確認した。最後に取り上げた「屋島・壇の浦合戦図屏風」のように、特異な位置づけにある作品もあるが、全体を通じてみれば、ひとまず次のような指摘をすることができるだろう。

- 1：屋島合戦の描写については、南側から東側にかけて、すなわち古高松から牟礼付近に視点を置いたものが基本である。ただし、構図としては南から北をみたような構図から、南東から北西、さらには東から西をみたような構図まで、バリエーションがある。
- 2：屋島の山容が意識されることではなく、むしろ「島」としての特徴が表現されることが多い。それは源氏の渡河（渡海）場面の描写がある場合に顕著である。
- 3：山については、金雲と同じく、場面の区切りとして利用されていることが多く、地理的なアリティが追求されている側面は乏しい。
- 4：画面の左下に険峻な山容が描かれる場合がある。五剣山と比定できなくは

ないが、3とあわせて、考えるべきである。

5：物語（「覺一本平家物語」系統）の進行に合わせて、左から右に各場面が配置される。すなわち、屋島へ渡河（渡海）した後、南側から継信最期、扇的、弓流が順になされていく地理的配置となっている。一部、右から左に配置されていく屏風もあるが、南から北へという点では共通する。実際に合戦がなされた場所との整合性は別として、このようなイメージが流布していく。

もちろん、個別の作品をみると細部に違いがあるため、すべての特徴が当てはまるというわけではないが、屋島合戦図屏風から想起される一般的な屋島合戦ないし屋島のイメージについては、おおよそこのようなものであるとまとめられる。

III 切り取られた屋島合戦

前節では屋島合戦の全体が表現された屏風を取り上げたが、それ以外にも川本が第二類とした、個別の場面が切り取られて仕立てられたものも多い。本調査ではこれらの資料を網羅的に集めることはしていないが、それでもいくつもの作品が確認できた。屏風としては、たとえば扇的のモチーフとした個人蔵「那須与一射扇図屏風」(B059)や、弓流と鎌引を題材にした馬の博物館蔵「屋島合戦図屏風」(B051)、弓流を描いた高松市歴史資料館蔵「弓流し図屏風」(B099・図4)、一の谷合戦との一隻で屋島合戦では鎌引と菊王丸（継信討死）の場面に焦点を当てた同館蔵「源平合戦図屏風」(二曲一双)(B063)、「敦盛最期」と「那須与一」を一隻ごとに描いた滋賀県立琵琶湖文化館蔵「源平合戦図屏風」(B018)がある。これらは、モチーフを大きく表現しており、背景描写などはほとんど見られないか、海岸線や山稜の一般的な表現があるので、屋島の実景を伝えるような側面はまったく意識されていない。しかし、屋島合戦のイメージを具体的に伝えていく作品として重要である。そして、そこに「武」、「忠」、「哀」といった精神的な要素も加味さ



図4 「弓流し図屏風」

高松市歴史資料館蔵

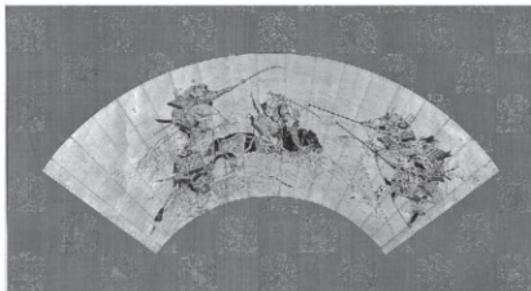


図5 「弓流し図扇面」

高松市歴史資料館蔵

れることは押さえるべきであろう。

もちろん、これらのモチーフは屏風以外の作品にもみられる。高松市歴史資料館に所蔵される作品で言えば、「那須与一扇の的図」(B056)、「義経弓流の図」(B058)、「弓流し図扇面」(B064・図5)、「那須与一図」(B092)、「弓流し図」(B126)などがある。屏風形式ではあるが「源平合戦扇面貼交屏風」(B098)もここに加えられるだろう。これらに類する作品については、おそらく各地に遺されていると思われる。

このような図と、合戦全体を描いた図にある同一モチーフをみると、構成や表現に共通性がみられる。このような共通性の上台となっているのは、粉本や画帖に採録された各場面の表現だったと思われる。高松市歴史資料館に所蔵される「源平合戦図画帖」(B113)は、絵師たちが源平合戦を描く際に依拠する資料の一つと言える。このような画帖の存在

は、屋島（合戦）イメージが連続的に再生産されていたことを示すと同時に、そのような画題を求める動きがあったことを示している。

切り取られたモチーフの中には、「平家物語」や「源平盛衰記」では詳細に描写されていない場面もある。高松市歴史資料館蔵「牟礼高松図」(土佐光祐筆)(B057)は、義経が牟礼から兵士の様子をみたという別の伝承をモチーフとしたもので、義経にまつわるエピソードがさまざまに流布していたことがうかがえる。同じ題材の作品としては、たとえば茨城県立歴史館蔵「義経図（牟礼高松図）」(B010)、香川県立ミュージアム蔵「義経公牟礼高松之図」(B091)、徳川記念財团蔵「牟礼高松図」(B095)、永青文庫蔵「牟礼高松図譜」(B055)、高松市歴史資料館蔵「狩野常信筆牟礼高松図」(B016)、「牟礼高松図」(B093)、「牟礼高松図」(B094)などがある。

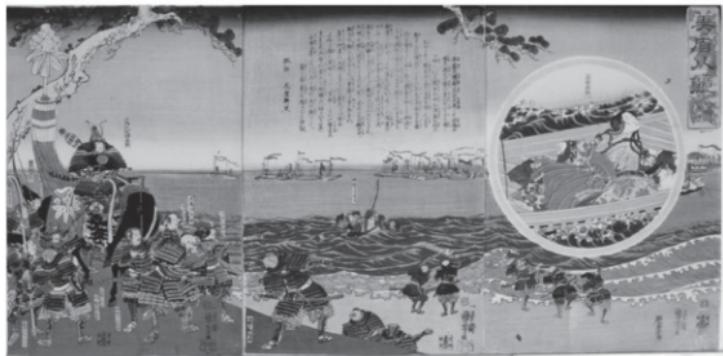


図6 歌川国芳『美盾八駿 八嶋夕照』

高松市歴史資料館蔵

永青文庫蔵の作品は刀の鍔の意匠となっており、武術・芸芸といった側面から屋島合戦の冒頭にあたるこの伝承をモチーフとしたのだろうか。

IV 消費されるイメージ

江戸時代、屋島合戦のイメージは、他のさまざまな媒体にも用いられた。その流布ないし消費に関しては、特に出版文化の諸メディアに取り上げられたことが大きい。そのうち、文芸作品および地誌・名所案内記類の動向については、本書第3章および第6章に譲り、ここでは前節からの流れを継ぎつつ、浮世絵(錦絵)のなかでの表現を確認しておきたい。

高松市歴史資料館蔵『美盾八駿 八嶋夕照』(B077・口絵3および図6)は、歌川国芳の作品で、那須与一の扇の的の場面を三枚続の錦絵に収めたものである。画面左手前に義経がいる。よって、手前に表現された陸地が屋島ということであろう。場面はまさに扇を打ち抜いた瞬間をとらえており、陸地にいる源氏の兵士の騒ぎ立てる様子が表現されている。また船に乗る「官女玉虫」が遠眼鏡で覗いたかたちでクローズアップされ、射抜かれて舞い落ちる扇を目で追う玉虫の様子が大きく映し出される。この趣向について、本図

内に「批評」を寄せた花笠野史は「遠望するものを。近く見せたる目録の中。画才の働き。高名こそ。一勇齋が勇気なれ」と歌川国芳の画才を称賛している。

国芳は多彩なモチーフをこなした江戸時代末期を代表する浮世絵師であるが、この「美盾八駿」は、蕭湘八景を下敷きとしつつ、著名な題材を用いて八つの「駿」(当然「景」と響くものである)を「美盾」すなわち「見立て」た連作と考えられ、ほかにも平将門を題材とした「高殿落雁」といった作品や、宮本武蔵(無三四)を題材とした「晴嵐」が残されている。この「八嶋夕照」は蕭湘八景の漁村夕照と屋島合戦を組み合わせたものであり、花笠野史が「平家の運命月に不翼として西海に傾き」と述べた状況に合わかるかのよう、平家の船団の向こうが夕焼けに染まり始めている。その静けさは、手前の源氏の兵士たちがはやし立てる動きをすればするほど、際立つこととなり、また与一付近までは波が立つのに対し、それよりも沖合、平氏の船団付近は静かな水面となっているような対称性も、その効果をうながしている。

ただし、平氏は屋島の東側の海上にいるはずである。そして、屏風絵などで流布したイメージにもとづき源氏が屋島にいるとするならば、平氏の向こう側に夕日は沈まない。また、済状の地勢であったことを考えれば、

屋島合戦のどの場所からも水平線が赤く染まる場所を眺めることはできなかつたはずである。すなわち、このような演出と構図は、地理的な知識との融合というのではなく、国芳の「画才」によって想像／創造された世界なのであり、その世界においてはじめて、平氏の船団は夕焼けを背負うことができたのである。

逆に言えば、瀧湘八景のなかでも「漁村夕照」に屋島合戦を見立て、なかでも扇の的をモチーフとして動と静を表現したところに、この作品の最大のポイントがある。これまでにみてきた「平家物語」の影響が強い屏風絵などの作品には、こういった想像力／創造力は乏しかった。芝居などの文化と密接に結び付きつつ展開した錦絵という文化的営為は、屋島合戦にあらたな視覚イメージを付与したのである。

なお、詩歌の世界では屋島は八景のうちの「秋月」にあてられることが多い。その点と比しても「夕照」にあてたところに本作の特徴がある。

さらに付言すれば、この頃、多くの「見立て」絵が作られ、歴史の題材から派生していった作品——それは風刺的意味合いもあれば、ある種のパロディ的因素もあった——が社会に流布していた。それは、庶民文化に歴史が濃厚に入り込んでいたことを意味する。というのも、派生的な作品を興じるために、その元となる題材についてある程度の知識が必要になるからである（上杉 2015a・b）。たとえば、先に示した同じ美術八競シリーズの「晴嵐」は、平賀梅雪『絵本二鳥英雄記』（享和3年〔1803〕）などがその元になっているが、その前段には当然、巖流島などを題材とした歌舞伎や淨瑠璃がある。

「八嶋夕照」もまた同じであり、江戸時代中期に歌舞伎や淨瑠璃として盛んに源平合戦が演じられ、また絵本などの読み物に、義経などが登場する作品が多くなるにつれ、「平家物語」を知らずとも、一般民衆の間にある程度の源平合戦のストーリーが知識として共有されるようになっていたのである。もちろん、そのストーリーは源泉たる「平家物語」からは逸脱し、混濁している。そのような混濁状態であったからこそ、より自由な発想で

の作品が次々と生まれてきたとも言えるだろう。

いずれにしても、この「八嶋夕照」は、そのような庶民文化のなかに屋島合戦というモチーフが確かに根付いていたことをうかがわせる資料として重要である。

ただし、その混濁状態は、時に混線と混乱を招くことも確認しておく必要がある。たとえば同じ国芳の作品であっても『八嶋大合戦』『源平八嶋大合戦』『八嶋大合戦図』(B075・B076・B078)は、「八嶋」というタイトルが含まれるもの、そこに描かれる主たる合戦モチーフは壇ノ浦合戦である。このような状況は、国芳の弟子にあたる月岡芳年の『源平矢嶋大合戦之図』(H002)や『八嶋壇ノ浦合戦義経八艘飛之図』(H003)にもみえる。

この混乱を「檀ノ浦」と「壇ノ浦」という紛らわしい地名によるものと解することもできようが、そのような微細な差異がそもそも情報として入っていたか疑わしく、また一方で地名表記そのものがこの時点で確定していたわけでもないため、このような地名に依存した解釈はひとまず留保しておく方がよい。むしろ、屏風絵などにおいても、一隻内に屋島合戦と壇ノ浦合戦が描かれるものがあつたこの方が重要であり、そのような先例からすでに屋島と壇ノ浦が混亂する要素があつたとみるべきだろう。もしくは「平家物語」そのものから取材するのではなく、江戸時代に生まれたさまざまな派生物から想像／創造されるのがこれらの錦絵であるとみれば、この時代、源平合戦の終局は、様々なメディアを通じて、「八嶋」という地名とともに、社会に広くイメージされ、消費されていたということになる。

すなわち、この混濁する絵画表現は、「八嶋」によって喚起されるイメージが源平合戦の終盤のハイライト全体となっていたということを示すものと評価できる。歴史的ないし地理的な点からみると誤りといふ一言で片づけてしまいそうなこれらの作品だが、文化の中に位置づけるならば、社会に広く伝播したがゆえの新たなイメージの想像／創造、そしてまた、それらのさらなる消費という文化的営為を例証するものとしてとらえられる。

V 地域で形成されるイメージ

前節までに取り上げたのは、先述のように、讃岐国や屋島の地理や景観についての十分な知識を必ずしも持っていない者たちの作品群である。それに対して、讃岐国ないしその周辺で作製されたと思われる作品も残されている。それらはこれまでに述べた作品群とは異なる特徴を持つ。

その代表的な作品が屋島寺所蔵の「屋島合戦図」(B007)である。本作品は屋島寺の宝物館に展示されており、また平成15年(2003)に香川県歴史博物館(現・香川県立ミュージアム)で開催された「源平合戦とその時代」展にも出品された。源平合戦に関する絵画作品には屏風絵が多い中にあって、本作品は袖装されている点が一つの特徴となっている。また、この作品の成立は江戸時代前半の17世紀代とされており、源平合戦の絵画資料のなかでも古い作品の一つとして位置づけられる。

こういった点もさることながら、他作品とは全く異なる特徴として挙げられるのが、屋島特有の山容が明瞭に表現されるという、本作品の屋島の描写である。より具体的に見れば、画面の右上に頂部が平坦で、急崖に続いて緩やかな尾根線となる屋島の特徴的な姿が示されている。そして相引川によって高松・牟礼側と隔された「島」としての屋島についても明確な表現である。また画面右下、屋島と湾をはさんだ対岸側には五つの険しい峰が屹立する山が描かれている。これが五剣山であることは言を俟たない。いずれにしても、本作品は屋島およびその周辺地域についての地理的知識を持った人間が関わって作られたことは明らかである。

その上で確認せねばならないのは、屋島合戦の各場面の位置である。というのも、屋島の描き方と同時に、この場面の位置もまた他の作品とは大きく異なっているからである。他の作品にほぼ取り上げられている継信最期の場面は、この「屋島合戦図」にも描かれる。しかし、屋島合戦全体を描く他の作品がその場面を屋島側に描くのに対し、ここでは高松・牟礼側に描かれている。また、那須与一の扇

の的の場面についても、他作品が屋島側から海に入った那須与一が描かれるのに対し、本作品の那須与一は高松・牟礼側の海岸線から海に馬を進めた構図となっている。「平家物語」の流れに沿えば、継信の死は屋島側であるのが自然だが、この作品はそのような流布したイメージとは必ずしも一致しない描写となっているのが特徴である。

この点に注目すれば、本作品の作者は屋島の地理については十分に知識を持っている半面、「平家物語」ないし源平合戦絵についての理解がそれほど高いわけではないということになる。これは他の作品群の作者たちの知識のあり方とはちょうど反転した位置にあると言えるだろう。

ただし、個別の場面の表現をみるとその描写は他の作品群の個別の場面とそれほど大きく乖離しているわけではない点にも注意が必要である。先に触れたように、源平合戦の個別の場面については図帖が作製されており、そのような図帖を観ることが可能な絵師たちであれば、そこに描かれた見本をもとに諸場面を一枚のキャンバスに散らすことで合戦を表現することが可能であった。他作品と類似しているということは、「屋島合戦図」の作者も、このような図帖にアクセス可能な位置にいた可能性もあるだろう。

そうなると、既存の諸作品と場面の配置が違うのも、その作法に通じていなかったからではなく、意図的な変更であった可能性が浮かび上がる。このような想定をした場合、重要なのが、作者が屋島の地理的知識を十分に得ているという点である。つまり、当時の屋島周辺に存在した源平合戦に関する在地の知や顕彰活動をふまえて、「屋島合戦図」の各場面を配置していくたという可能性が出てくるのである。

実際、現在の屋島合戦の顕彰地のなかには屋島側ではなく高松・牟礼側に位置するものが多い。これらの顕彰地の歴史は高松藩主、松平頼重(1622-95、藩主期間:1642-73)による史跡整備以前のこととはよく分かつておらず、慶長・元和期に無批判にさかのぼらせるることは慎む必要があるが、頼重が史跡整備をするにあたって在地の状況を完全に無視したという想定もまたやや無理がある。た

とえば頼重は佐藤継信の墓と顕彰碑の二つを整備しているが、顕彰碑を屋島から八栗にむかうルート上（屋島寺参道）に配したのに對し、墓は高松・牟礼側に設置している。それらの顕彰行為が寛永20年（1643）、すなわち、藩主就任の翌年であったことをふまえれば、墓の場所の決定に詳細な歴史検証がなされた可能性は低く、在地に流布する既存の情報に依拠したとしてもおかしくない。

これ以上の推定は屋上屋を重ねるにすぎず、まったく意味がないことだが、再度確認すれば、「屋島合戦図」に描かれる屋島の描写が実景に沿ったものであり、地域の地理に明るい者の手によるものであることは間違いない。あくまでも推論の域を出ないものの、そのような者であれば、当時の在地に広まる屋島合戦に関する情報ないし顕彰行為について何らかの知識があり、それが作品に反映されている可能性を一概に否定することはできないだろう。

別のある点から、「屋島合戦図」の作者像をもう少し、追いかけておこう。

「屋島合戦図」には高松側から屋島に向かって浅瀬を渡る牛の姿が描かれている。これは水を渡る赤牛をみて浅瀬の位置を知ったという話に基づいており、それに関する地名として、屋島南側には赤牛崎という地名がある。屋島風土記編纂委員会（2010）が説くように、この赤牛の登場する場面は「平家物語」や「源平盛衰記」ではなく、屋島寺の「源平屋島檀浦合戦縁起」（A059）に掲載される逸話である。この縁起は慶長期に屋島寺再建のための勧進活動に利用するために作られたものとされ、その創作に深く関わるのが屋島寺再建の主導者、龍巖上人であるといふ。勧進活動は慶長16年（1611）からなされているが、この作品には「慶長十七年三月日　屋嶋寺」という奥書があり、まさに勧進活動にともなって作製されたものであることが判明する。

また、「屋島合戦図」と合わせて双幅となる作品に屋島寺蔵「屋島寺縁起絵」（B033）がある。この作品は平成26年（2014）に香川県立ミュージアムで開催された「空海の足音 四国へんろ展 香川編」で展示された。図録の解説では、両図とも寺の縁起を繪

解きて語った可能性が指摘されており、注目される。「屋島寺縁起絵」が鑑真による創建譚、すなわち古代の屋島を語る装置であるならば、「屋島合戦図」は中世屋島を語る装置であり、双幅で一つの屋島の地域史（むしろ物語であろうか）が表現されていることになる。そこに「源平屋島檀浦合戦縁起」も加えてよいだろう。

これらのことをおわせれば、「屋島合戦図」もまた、屋島寺再建との関係で作られた諸作品の一つであり、その作製に龍巖上人やその周囲の人物が何らかの形で関わっていた可能性を推測することができる。

なお、龍巖上人は元和元年（1615）に京都高雄の高山寺に入山している。「源平屋島檀浦合戦縁起」には、下巻の末尾に別紙が継ぎ足され、そこに「元和第九四月日前住屋嶋後住高雄」という記載を伴って龍巖上人名が記されている。龍巖上人が高雄にて屋島の地理を語ったかどうか、それは不明とせざるを得ないが、少なくとも京都界隈の絵師——源平合戦を描く絵師——にその情報は伝わらなかつたということになるだろうか。

もう一点、注目すべき作品として香川県立ミュージアム蔵「高松城下図屏風」（B006）を挙げておきたい。本作品は、江戸時代前半の高松城下を詳細丹念に描いた鳥瞰図で、都市図屏風の代表的な作品としても知られている（金田・上杉 2012）。そして、図の左下に画面外から続いてきた形で屋島が描かれている。北嶺から長崎鼻あたりの形を適切にとらえた描写となっており、城下町の内容と同じく、精緻な表現と評価できる。

ただし、城下町との位置関係という点でみれば、屋島の位置は大きく歪められており、その点での正確さは乏しい。城下や山容に正確さが追及されている点とは正反対の方向性を示す。しかし、逆に言えば、そのような正確さを犠牲にしても屋島を画面内に表現することが優先されることになる。高松城下を描く際の不可欠な要素として屋島が理解されていたことがうかがえる。

VI 画題としての山容美

屋島の地理、より具体的にはその山容が

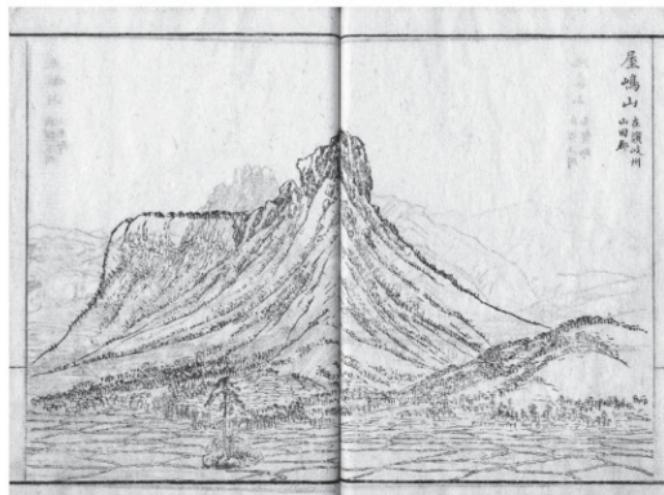


図7 『日本名山団会』所収「屋嶋山」

京都府立大学蔵

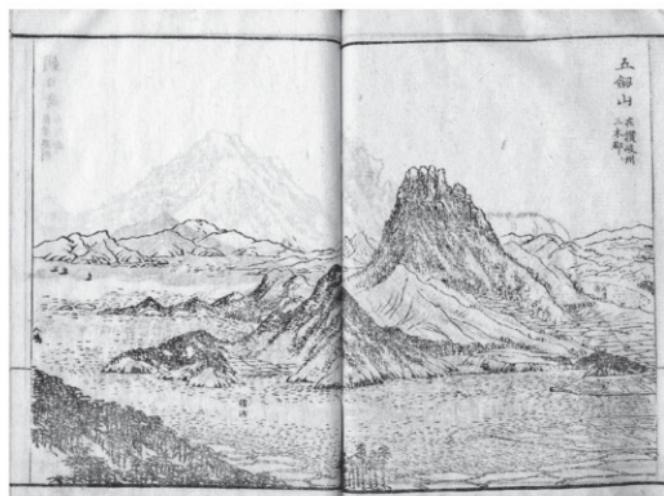


図8 『日本名山団会』所収「五鈴山」

京都府立大学蔵

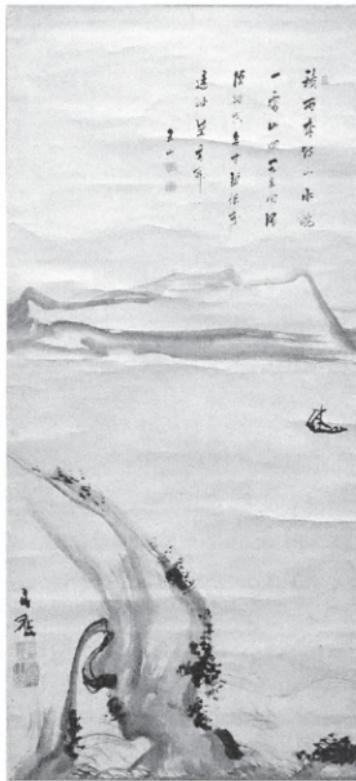


図9 「山水図・七絶詩」
高松市歴史資料館蔵

讃岐国以外の者の手で画題として描かれるようになっていくのは、江戸時代後期以降である。その代表として、谷文晁（1763-1861）の手によって作られた二つの作品をあげておきたい。谷文晁は江戸の南画を代表する人物であり、また真景図得意とする画家でもあった。日本全国を旅するなかで諸国の山をスケッチしていき、それらを集めた『日本名山図譜』を文化元年（1804）に刊行、後に『日本名山図会』（B074）として改めて刊

行したことでも知られる。

二つの作品のうち、一つ目がこの『日本名山図会』に所取される「屋島山」（図7）である。この作品は屋島の真景図として確認できる最初の作品であるが、そこに現れた屋島は、現代の私たちが一般的に想像する屋島——すなわち、頂上が平坦で台形の山容となる屋島——とはまったく異なる三角形の山容、いわゆる「屋島富士」となっている。現在で言えば、鞍掛松付近、もしくは高松琴平電気

鉄道志度線の古高松駅付近から北に相引川を渡って屋島寄りに進んだ付近が視点場となつておる。確かにその付近から見れば、頂上部が巣屋となった三角形の山容を持つ屋島が現れる。真景図としての最初がこの構図であることは、少々意外にも思われるが、これは谷文晁が山岳のなかでも富士山を特に好んでいたという、文晁個人の感性に影響された視点であることを考慮する必要がある。おそらく文晁が真景図としての山容美を尋ね歩いた時、台形の山容よりも、より富士山の形に近づく三角形の山容に興味をそそられたのだと思われる。

しかし、いずれにしても、まさに真景圖にふさわしいリアルな描写がなされている点からみても、またそのような構図の屋島がそれ以前に——またそれ以後にも——描かれていなかった点からみても、文晁が実際に現地を訪ね、スケッチをしたことは疑いない。

それは、同書に掲載された「五劍山」(図8)の垂直方向に誇張されながらも詳細に描写された山容表現からも、やはり指摘可能である。そして、それと同時に、いわゆる船隠しの小湾が表現されている点やその奥側に見える庵治半島の山並み描写、また画面手前の表現などから判断して、文晁が屋島に実際に登っていった可能性が高いことも指摘できる。

谷文晁が活躍した江戸時代後半になると、四国遍路や金毘羅参詣をはじめとした旅が盛んとなり、讃岐国、そして屋島周辺にも多くの人々が訪れるようになった。そのような者たちの目的は寺社参詣であり、またこれまでにも触れてきた源平合戦の故地を見て廻ることであった。そのようななかにあって、谷文晁のような山容美ないし自然美を追求した者も登場し始めたのが、この時期であると言えるだろう。

さて、谷文晁の名前による屋島を描いたと思しき作品は、もう一点が知られる。高松市歴史資料館所蔵「山水図・七絶詩」(B073)である(図9)。この作品は名山図会の真景図とは異なり、いわゆる山水画である。谷文晁の作品には、弟子の描いた作品も多いことが知られ、真作の判断が難しい人物である。筆者にはその真贋を判断する術も力もないが、先の資料から谷文晁が屋島を訪れていたこと

は理解される点を確認し、ひとまず本作品についてもその流れで見ておきたい。なお、本作の贊は高松生まれで江戸時代後期の知識人サロンで活躍した漢詩人の菊池五山(1769-1849)による七絶詩である。

本作品の視点場は高松城下町側にある。具体的な場所を探すのは困難であるが、視点場が少し高い位置にあるように思われる点からすれば、高松市街西側の西方寺周辺といったところであろうか。具体的に表現されたのは、①遠景：屋島の山容、②中景：海面と一艘の帆かけ舟、③近景：一本の松、という極めてシンプルな画材である。山・海・舟・松といった素材は山水画にはよく取り上げられるものであり、その組み合わせと言えばそれまでであるが、重要なのは、屋島合戦が繰り広げられた屋島東側ではなく、屋島西側を見通すものだったという点であり、またそれゆえに山容美が強調されているという点である。

管見の限り、単独の絵画作品としてこのような構図が採用されたのは本作品が初めてである。探していくれば、これよりも先行する作品の見つかる可能性は高いが、それでも江戸時代後半というところには落ち着くであろう。中世以来、屋島合戦というモチーフが先行的に屋島イメージを形成していた中にあって、江戸時代も後半になると、そのような歴史イメージに加えて、山容美が屋島を表現する要素として登場し、知識人たちの間に広がっていったことを思わせる。

そして実際に、このような西側からみた構図は、これ以降、近現代の屋島描写のなかで大きな位置を占めていくのであり、新たな屋島イメージの核として展開するのである。その点については本書第13章を参照していただきたい。

VII 地理と歴史の融合 ～まとめにかえて～

屋島像を構成するイメージには、合戦を中心とした歴史イメージと山容美を中心とした地理イメージとがある。しかし、地域で作成されたわずかな作品例を除き、地理イメージと歴史イメージが融合したことが明らかな絵画作品は、少なくとも江戸時代前期には見

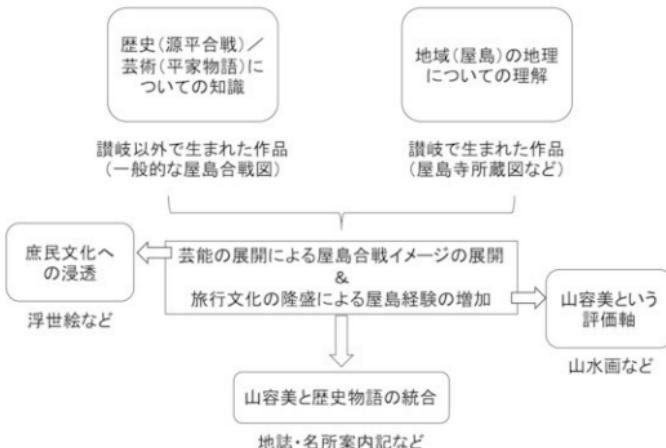


図 10 地理イメージと歴史イメージの融合

られない。江戸時代後期になると、出版文化の隆盛と源平合戦をモチーフとする諸芸能の影響を受けて流布した錦絵が盛んに作られるが、やはり江戸時代前半と同じような傾向を看取できる。逆に谷文晁の作品に顕著なように、山容美という視点から絵画が生み出されしていく流れも登場する。一般的に考えられる「絵画」というジャンルにおいては、江戸時代後期になってしまっても基本的に融合は図れていないということになる。

ただし、「絵画」の枠を少し広げてみると、その融合は江戸時代を通じて着実に進んでいた。それが端的に現れるのが地誌・名所案内記のジャンルである。名所案内記のなかには挿絵が充実したものが多くあり、なかでも18世紀後半の『都名所図会』にはじまる「名所図会」ものは、詳細な文字情報と現地での観察をもとにした絵画情報とが組み合わされた作品群として知られる。

讃岐国に関しては『金毘羅參詣名所圖

会』(D013) や『讃岐國名勝圖会』(D015・D016) などがあるが、たとえば『讃岐國名勝圖会』は「实景」であることが漏れており、実際の景観をもとにした絵画が取り込まれている。そこには「八栗屋島源平古戦場」と題された5ページにわたる島瞰図があり、地理と歴史が融合した屋島が表現されている。また「縊信討死之図」「義経弓流図」および無題ながらも扇的の意と鋸引の挿絵も加えられ、具体的な場面の絵画表現についての伝統も引き継がれている。なかにはきわめて近世的な表現がなされた「屋島合戦図」もあるが、少なくともその舞台となる屋島が地理を踏まえて描写されたものであることは間違いない。

これらの分析については本書第6章にゆだねるが、本章で論じた源平合戦に関する屏風絵類・錦絵類と、これら名所案内記(名所図会)との関係を簡略に図示して、理解の補助としておきたい(図10)。

〈主要参考文献〉

- 伊藤悦子 2014 「『源平合戦図屏風』の一考察 一いわゆる『一の谷・屋島合戦図屏風』の分類方法について」、『軍記と語り物』50。
- 上杉和央 2015a 「想像世界の歴史地理」、竹中克行編『人文地理学への招待』ミネルヴァ書房
- 上杉和央 2015b 「古図のある風景」、小野田一幸・上杉和央編『近世刊行大坂図集成』創元社
- 香川県歴史博物館 2003 『源平合戦とその時代』香川県歴史博物館
- 香川県立ミュージアム 2014 『空海の足音 四国へんろ展 香川編』香川県立ミュージアム
- カタログ編集委員会編 1992 『平家物語・美への旅』日本放送協会
- 川本桂子 1984 『『平家物語』に取材した合戦屏風の諸相とその成立について』、『日本屏風絵集成 第5巻』、講談社。
- 金田章裕・上杉和央 2012 『日本地図史』吉川弘文館
- 神戸市立博物館編 1997 『源平物語絵セレクション』神戸市スポーツ教育公社
- サントリー美術館編 2002 『源平の美学』サントリー美術館
- 高松市歴史資料館編 1999 『源平合戦図絵の世界』高松市歴史資料館
- 田沢祐賀 1992 『平家物語 一の谷・屋島合戦図屏風の諸相と展開』、『秘蔵日本美術大観Ⅰ 大英博物館Ⅰ』講談社
- 屋島風土記編纂委員会編 2010 『屋島風土記』屋島文化協会

(担当: 上杉和央)

6 近世地誌・名所案内記にみえる屋島表現

はじめに

本章では近世地誌・名所案内記における屋島関連の記述から、屋島の景観描写と屋島イメージについて検討する。

ここで扱う地誌・名所案内記には作者による見分・旅行の記録をもとに、書物としてまとめられたものがある。こうした事情から、とくに名所案内記において紀行文・日記に近い要素を含む場合があるが、紀行文・日記については本書第7章で取り上げられており、関連する地誌・名所案内記の比較分析もおこなわれている。合わせて参照されたい。

I 取り上げる史料とその類型

今回取り上げる地誌・名所案内記は表1の全21点である。近世に成立した屋島に関わる地誌・名所案内記のうち、各種所蔵機関及び刊本資料の調査で確認し得たものを挙げている。主要なものを取り上げたが、屋島に関わる全ての資料を網羅できている訳ではないことを了解されたい。

取り上げた21点の資料（以下、各資料は表1の通し番号で示す）は、主題・ジャンルに基づき、以下のように大きく3つのグループに分けられる。

- イ：編年史の書物（1・7・17）
- ロ：案内記（5・6・10・11・12）
- ハ：名所記・地誌（2・3・4・8・9・13・14・15・16・18・19・20・21）

イは、編年体で讃岐国の歴史・事件を記したもので、ここでは、歴史の観点から讃岐

国という地域を叙述した書物としておく。ロは、四国遍路もしくは金毘羅参詣の案内記で、参詣という主題に関連して、札所である屋島寺、あるいは讃岐の名所である屋島周辺を取り上げている。ハは、それら以外の書物が該当し、名所記あるいは地誌の体裁で屋島周辺地域が叙述されている。

成立・出版時期については21のみ不明であるが、それを除いてみても19世紀以降のものが若干多い。地誌・名所案内記の制作実態を一定程度反映しているものと思われる。また、17世紀の資料が多い点は、刊本資料に所取されていることに由来している。

II 作者・叙述様式の違い

上記のグループ毎に、屋島に関わる地物や歴史がいかなる様式で記されているのかをみていく。なお、各資料の書誌情報及び屋島に関連して取り上げられている項目については、表1に掲げている。

イのグループの1は上代から慶安4年（1651）に至る漢文の編年史を、石清尾八幡宮官の友安盛員が記したものである。7は承応2年（1653）から享保6年（1721）までを同様に漢文で記した編年史で、高松藩士矢野理助継雄とその弟伊八郎が編纂したと伝えられる。17は上記二書と同じく、享保元年から天保8年（1837）の編年史で、香川郡池西村出身の儒学者中山城山が著したものである（香川県編1941、小山1989）。

表1で確認できるイの資料に挙げられた項目は、歴史書に記述されているか、あるいは編纂者により讃岐国の歴史として取り上げられるべきと認識された、天保8年までの

屋島関連の主要な出来事を示しているといえよう。そこで地誌・名所案内記の記述の分析に先立ち、その内容を確認しておきたい。

中世以前については、天智天皇の時期の屋島城築造、鑑真による千光院の建立、安徳天皇の行宮設置や源平合戦など主要なものが取り上げられている。ただ、配流された天皇や屋島寺参詣に訪れた公家・僧侶などについての記述や詠じた詩歌の記述はなく、代わりに貞元2年(977)の官使中臣物部乙嗣が屋島に登山し、屋島寺の前の竹木を伐採しようとしたところ落雷に打たれ死亡したという記事が掲載されている。

江戸時代以降の記事には、佐藤継信碑建立、相引川堤防破却、屋島寺への仏像・図像や仏餉料寄進といった高松藩主松平頼重の事績、また、文化元年(1804)の同じく藩主松平頼儀による屋島南面への東照宮建立が記される。もっぱら高松藩主による屋島寺およびその周辺の整備について記されているが、これは、編纂者がいずれも高松藩に関わる人物ゆえに、藩主の事績を記述しようとする意図が働いたものと推測される。もっとも、屋島や源平合戦関連史跡をめぐる出来事は、これらの記事に留まるものではなく、実際には記録されなかつた動きがあったであろう。

次に、ロのグループの資料のうち、四国遍路の案内記には、貞享4年(1687)に刊行された大坂寺島に住む僧真念による5、元禄2年(1689)刊行の高野山宝光院の僧寂本による6がある。とくに5は、近世の四国遍路案内記の嚆矢とされ、17世紀末に遍路が一般民衆に普及し始め、また、八十八の札所を巡るという形式が定着し始めた当時の趨勢を反映して刊行されたと指摘されている(福田2015)。5はその後も刊行され続け、19世紀においても増補版の12が確認できる。ただ、札所の解説と案内を中心とする四国遍路案内記においては、屋島周辺の記述は旧跡の存在にいくつか触れられる程度で、旧跡自体の詳細な解説は掲載されていない。なお、11は、阿波国阿南富岡町の豪商河内屋武兵衛の手による遍路巡拝の記録であるが、記述は案内記同様に札所を順次挙げていき、名所図会風の挿図がみられる(小松2014)。文字情報としては表1に挙げた源

平合戦関連古跡が書き連ねられているが、「屋島寺」の挿図は寺の境内を俯瞰した様子のみが描かれ、周辺一帯や眼下の源平合戦関連古跡は表現されていない。金毘羅参詣の案内記の10は大坂船町の今村美景が著し、安永7年(1778)に刊行された航路図と案内記を兼ねた折本である。

最後に、ハのグループの資料であるが、作者は、15・16が既出の中山城山であるほか、3の七条宗貞と8・9の菊池武賢は高松藩儒、4の小西可春は延宝の頃には高松藩に仕え、12・13・18・19の梶原藍渠は高松の豪商で私撰の国史「歴朝要紀」を天保3年に高松藩主に献上し、以後土分に取り立てられた者である(小山1989)。また、19・20の刊行に関わった高松藩士の梶原藍水は藍渠の息子で、藍渠の死後、高松藩家老を務めた木村黙老の支援を受けつつ遺稿を編集している(松原1981)。これらの名所記・地誌は讃岐国内あるいは高松藩に関わりのある、地域の内部の者により記述されたものである。

一方、2と18は、地域の外からの視点で著述されている。2の江村宗眠は京都の人で、医師・儒学者の江村専斎の子である。当時尼崎藩主の青山幸成に仕え、寛永17年(1640)生駒氏改易時の高松城請取に同行した際の見聞に基づき、2を執筆した。18は、幕末期大坂の戯作者で『淡路国名所図会』等を著した暁鍾による、弘化4年(1847)刊行の名所図会である。18の執筆にあたって彼は2か月程度と短期間ながら絵師同行で現地を取材し、その内容と他の書物の引用を交えて、金毘羅参詣ルート以外の讃岐国の名所についても記述している(松原1981)。

なお、ハの各資料の叙述様式にはいくつかの違いがある。2は名所記として対象とする場所毎に記述されるのに対し、3・4では山川・陵墓・寺院などの分類別となっており、例えば3では山川としての屋島と「仏観」としての屋島寺が全く別の箇所で記されている。それ以降の資料については、全て郡別とし、一定の地理的まとまりを単位に叙述するようになっているが、15・16のように郡別の名勝と産物等の分類に基づく記述が織り交ぜられた地誌もみられる。また、18・

表1 近世地誌・名所案内記にみえる屋島関連項目

ID	タイトル	作者	成立時期
1 D005	讃岐国大日記	友安盛員	17世紀 (1651-)
2 D001	讃州歴覽志（『香川県史第15巻資料編 芸文』所収）	江村宗眠	1653
3 D006	讃岐府志上・下（『香川叢書 卷二』所収）	七条宗貞	1670-80
4 D002	玉藻集（『香川叢書 卷三』所収）	小西可春	1677
5 D003	四国遍路道指南（真念）（『四国遍路記集』伊予史談会双書 所収）	真念	1687
6 D004	四国遍礼塗場記（寂本）（『四国遍路記集』伊予史談会双書 所収）	寂本	1689
7 D010	続讃岐国大日記（『香川叢書 卷二』所収）	伝 矢野理助謹雄・伊八郎	18世紀 (1721-)
8 D007	鷦鷯夜話卷之四	菊池武賢	1745
9 D008	鷦鷯夜話卷之四、五	菊池武賢	1745
10 D009	金毘羅參詣海陸記	今村美景謹書、大坂書林吉文字屋市兵衛・柏原屋与左衛門・塙屋忠兵衛	1778
11 D011	四国遍礼名所団会（『四國遍禮名所圖會并近代の御影・塗場 写真』所収）	河内屋武兵衛	1800
12 D012	四国偏礼道指南 増補大成	宥弁（真念）、佐々井治郎右衛門刊	1815
13 D021	讃岐志 卷之三	梶原藍葉	19世紀頃
14 D022	讃岐志 卷之四（『大日本輿地通志』所収）	梶原藍葉	19世紀頃
15 D018	標註調点全讃史卷之九・十	中山城山	原著 1828
16 D019	標註調点全讃史卷之十一・十二	中山城山	原著 1828
17 D017	続々讃岐国大日記（『香川叢書 卷二』所収）	中山城山	1837-
18 D013	金毘羅參詣名所団会 卷之六	曉鐘成	1847
19 D015	讃岐国名勝団会卷之三 三木郡	梶原藍葉・藍水	1854
20 D014	讃岐国名勝団会卷之四 山田郡 D016	梶原藍葉・藍水	1854
21 D020	讃岐名所略記 完	—	近世

注1：項目立てされず記述されている箇所は、記述内容をもとに筆者が便宜的に項目名を付けて掲出した。

注2：屋島寺等の大きな項目内に他の地誌等で通常立項されている内容が包括されている場合は、< >に掲出した。

言及されている項目

屋島城築城／鷹真千光院建立／貞元2年官使屋島登山／春水2年安徳帝屋島行宮／源平合戦／寛永20年松平頼重佐藤継信碑建立／正保4年頼重相引川堤防破却

屋島＜血池＞／安徳帝行宮／佐藤次信墓／壇／浦／相引瀬／宇童ガ岡／高松ノ里

屋島城／屋嶋／継信墓／屋嶋寺

承久3年土御門院配流時屋嶋御覽／志度浦合戦／屋嶋＜大江忠名和歎、屋島城築城、安徳天皇屋島入りから源平合戦（教経の武勇、繼信戦死、鎌引伝承、与一伝承）＞／宇龍山／赤牛崎／惣門／渚／相引／洲前／堀／鉢之廻門／初音と云鼓之事／大森彦七カ太刀の事／鐘（鞍）掛松／獅子の塗巖／宝石・宝池／那須与一駒立石・同祈り石／馬塚（太夫黒の墓）／屋嶋崎／幣無太夫／南面山屋嶋寺千手（光）院／「讚岐國御家人」

屋島寺への行程／屋島寺／継信墓／内裏跡／壇の浦／あい引／奈須の母市駒立岩／いのり石／すさきの堂／惣門／太夫黒の墓／さじきの岡／名切水／瓜生山

屋島寺／次信墓／壇の浦／駒立岩／祈岩／洲崎の堂

万治4年松平頼重屋島寺千体仏・十一面千手観音像造立等／寛文13年頼重屋島寺等への愛染明王・五代空蔵図像・仏教料寄進

佐藤次信墓／太夫黒墓／太夫黒碑銘／至徳元年信空次信墓參／次信間諭者説／射落畠／洲崎寺／立駒石／祈石／大砂子（鎌引）／惣門／源氏ヶ峰／瓜生山

屋島寺／不食之梨／阿吽二字／南無阿弥陀仏刻銘／二王門／二天門／櫻樹／大悲闍／獅子塗巖／屋島城／鷹真千光院建立／屋島寺塔頭・頼重寺領海道／奥村景武「屋島記」／佐藤次信碑文／貞元2年官使登山／宝永7年巡見使權／浦来訪／享保2年造見使次信墓望見／桂山鶴汀「屋島懷古二首」／黄牛崎／屋島浦海参／平家蟹／長崎鼻／蟹女崎／深井興祖「遊賀女崎三首」

屋島寺（内裏跡－壇の浦、那須与市駒立石・祈り石・相引の沙、空信墓參）

屋島寺への行程、屋島寺、矢倉谷、樺浦、佐藤継信墓・佐藤次信石碑、内裏屋敷、安徳天皇社、赤牛崎、大墓、義経鞍掛松、宇龍岡、駒立石、相引沙、須崎觀音堂

屋島寺／佐藤継信の墓／須崎の堂／瓜生山

佐藤次信墓／行宮

屋嶋寺／鶴汀桂山義樹三郎左衛門「屋島懷古」／藍葉平景惇「屋嶋懷古」／佐藤次信碑文／宝劍記の本文／源壽公「屋嶋懷古」／高尾義「屋島懷古」／「登星島」／中村文輔「屋嶋懷古」／勝苟●【草かんむりに間】／「嚴賦所見」

屋島山

瓜生山／土肥／土屋／湛増／源氏が峰／菜切地藏／惣門／射落畠／大砂子／屋島／血池／名号石・阿吽石／獅子塗巖／忠名屋敷／駒牛崎／鐘掛松／鞍掛松／祈石／駒立石／相引／壇浦の海鼠

文化元年屋島南辺に東照宮建立／井原莊司盛漸者家

高松籠城／相引の潮／屋島寺前札所／不喰梨樹／蓼石／石鍊乳／南面山千光院屋島寺／獅子の頭巖、仙人窟、鉢／瀬、血之池／屋島山／屋島浦／屋島／古城／佐藤次信之碑／安徳天皇社／屋島内裏之古跡／洲崎ノ堂／惣門之古跡／那須与市宗高祈石／同駒立石／景済●【草偏に固】曳之古址／大胡小橋太水練高名之古址／源義経弓流之古蹟／小林新吾宗行と越中少郎兵衛盛嗣による鎌引／黄牛崎／佐藤次信墓（洲崎寺より三丁ほど南に所在）／義経乗馬太夫黒之墳／武例高松柴山（源氏ヶ岡）／瓜生山／鞍掛松／平家蟹／神櫛王之墓／長刀泉／菜切地藏

佐藤次信墓（王墓に所在）／太夫黒墓／源氏峰／菜切石／地藏堂／長刀泉／鎌田光政墓／宇龍山／惣門跡／射落畠／祈石／駒立石／洲崎寺／「義経弓流図」／扇の的の図／鎌引の図／「八栗星島源平古戦場」／「平家蟹全圖」

海参／鬼面蟹／鞍掛松／屋嶋寺／奥村景武「屋島記」、国君源義公（松平頼儀）「屋島懷古」、桂山義樹「全」、那智明「全」、中村文輔「全」、高尾義「全」、大江忠名・氏宗・可正和歌／南泉寺／阿吽二字／名号／不喰梨／磐石／瑞穂宝池／獅子塗巖／北峯（屋島北嶺）／鉢の廻門／屋嶋城跡／相引／屋島塙／權の浦／安徳天皇社／佐藤次信墓／菊王丸墓／見返橋

屋島寺／供詠聖人伝承、安徳帝内裏／物問へ、屋島合戦／継信戦死、駒立石与一伝承／、継信墳墓

19・20は郡別ないし任意の地域別に配列するが、名所図会の様式で挿図を交えて記述されている。

III 地誌・名所案内記に記された／描かれた屋島の景観・イメージ

1. 17世紀の地誌・名所案内記

まず、17世紀後半に登場した地誌・名所案内記の記述から確認し、近世成立期における屋島の景観描写・イメージをみておきたい。

屋島寺はほぼ全ての地誌・名所案内記に取り上げられ、鑑真の千光院建立、空海による千手観音奉納等の由緒について触れられている。四国遍路案内記の5では「あづさ弓やしまの宮にまうでつゝいのりをかけよいさむものゝふ」という屋島寺の御詠歌と共に、周辺の源平合戦に関する史跡が紹介され、「其外旧跡かずゝ有」と締めくくられている。四国遍路という文脈においても、屋島寺は源平合戦関連史跡と一緒にものとして語られている。ただ、「是は順礼所にはあらずといへども、道すじなるの故にこゝに截侍る」(6)と付記して、札所を巡る一環で立ち寄られる古戦場を紹介する一方、屋島周辺地域そのものを叙述する姿勢からは距離を置いている点は、ほかのグループの地誌・名所案内記とは異なる特徴であろう。

そのような四国遍路案内記においても取り上げられていた源平合戦関連史跡の筆頭は、佐藤藤信墓であった。主君に対する忠義を尽くして果てた武士という逸話の内容そのもののだけでなく、寛永19年(1642)の高松入封後間もない松平頼重による、翌20年の顕彰碑建立という出来事も、これ以後の地誌に顕彰碑の碑文が掲載されるなどの影響を伴って、藤信墓の存在を強く意識させる要素になったと考えられる。その背景には、すでに17世紀後半の1・3・4において、高松藩に関わる儒者により「讚岐国太守」(1)の顕彰行為が記しえられたことが重要だと考えられる。屋島寺と源平史跡が篤く領主に崇敬される存在であるとの説は、四国遍路案内記の5に「領主より、壱丈四方の切石にて塙きづき、其上に五尺の石塔を建立し、碑の銘

あり」、6に「迹を撫、人を思、義の隆なる事、君子の欽む所なり」と記されるように、以後の地誌・名所案内記、そして地域の外の人々の屋島・源平合戦関連史跡に対する認識へも影響を与えたものと思われる。このほか、天皇の行宮跡・檀ノ浦や那須与一伝承に関わる駒立岩・祈り岩が、すでに代表的な源平合戦関連史跡として取り上げられている。

一方、屋島の山容に関する表現について八葉嶺と相対し山形屋に似る故に之を名とす。或は南面山と号す」(2)、「高きこと数十丈。絶頂平易にして、之望に堂屋の如し。故に屋嶋と名く」(3)と、屋根形の形状に由来してその名を「屋嶋(島)」あるいは南面山とするとの説明が、この段階で確認できる。屋島寺の由緒においては、屋島は鑑真によって「靈地」(3)、「七仏說法の靈区」(4・6)とみなされた場所であった。また、屋島北嶺に「神人」(3)あるいは「空鉢聖人」(4)が住み、食物を乞う空飛ぶ鉢が魚肉により穢れ、海底に沈んだとの伝承記事(4)も、いくつか細部のバリエーションは異なるが、近世を通じてしばしば見出せる。屋島はその地形的特異性を基盤に、これらの縁起・伝承の源となり得る靈地としての性格を帯びた場所と考えられていたようである。

このような地形的特異性、屋島寺の存在と源平合戦の故地という条件が交差する場所として注目されるのが相引川である。相引川は満潮時には左右(東西)から潮がめぐり、干潮時には左右に退くことから「相引」と名付けられたとされ、その地理的特徴から項目を立てて説明されている(2・3・4・5)。また、生駒氏統治時代に「塩屋」とするため築造された堤防を、頼重が正保4年(1647)に「古来之名跡」を理由に破却させ、再度「潮汐之相引」とした事績の記述があり(1)、「屋嶋の謡に、あひひきに引汐と謡は此所也」(4)と謡曲に登場する「あひひき」の現地比定の対象にもされている。作者が実際に現地で観察した上に成り立っていたか否かは定かでないが、自然現象の上に、古戦場のイメージと領主の史跡顕彰行為が重ね合わされる場所であり、この段階の地誌・名所案内記における屋島の名勝イメージを体現する場所と評価することができるだろう。

2. 18～19世紀の動向1 —地域の内側からの視点—

18世紀半ば以降、屋島関連の地物に関する記述は全体として充実し項目も増加するようになる。この傾向は、地誌編纂の隆盛と觀光用ガイドブック・名所図会の刊行が背景にあったとみられる。前者は対象の地域・場所を内側の視点から、逆に後者は外側の視点からそれぞれ叙述するものであるが、まずは、17世紀後半から盛んに編まれていた前者について、18世紀以降の展開をみておきたい。なお、イの編年史的書物には18世紀以降の屋島関連記事はほとんど見られないため、ハの資料を主に取り上げることとする。

延享2年（1745）成立の8・9は郡別に記述された地誌で、8が三木郡、9が山田郡を対象とする。8には牟礼側の源平合戦関連史跡について記されるが、そのなかには既存の洲崎寺や立駒石・祈石などに加えて、射落島や大砂子（鏡引）などこれまで記述されなかった源平合戦関連史跡を見出すことができる。また、9でも獅子靈巖や産物である海参・平家蟹についての記述がみられ、地域の側からの視点や伝承・由緒に関する知識が、地誌の内容の充実に結び付いていることがわかる。

また、9には、「儒臣」岡部拙斎による佐藤繼信碑の銘、「台朝官備詩人」桂山鶴汀による漢文「屋島懷古二首」などが記されている。こうした引用は、15や20といった後の時期の地誌にも継承されており、作者の立場ゆえに、高松藩に問わりのある武士・儒者の著作を通じて漢文・漢詩の世界観から屋島の古戦場としての存在や風景が評価されていたとみられる。

15「全讀史」の名山志は、「屋嶋山」について「源平争鹿之所。名迹甚多。古伝曰。有仙人曰馬蘇」と記している。源平合戦の故地であること、そして「仙人」のいたとされる「古伝」を引きつつ靈地としての性格が示されている。ただ、同書の他の山についても靈性に関する記述は多数確認できること、また、「屋嶋山」において屋島寺の縁起については触れられず、空飛ぶ鉢のエピソードまでは言及されていないことから、靈地としての屋島という性格はそれほど強調されていないと考えら

れる。むしろ、同書において「名山」という分類の中で屋島を他と分かつものは、源平合戦の古戦場だと認識されていることがうかがえる。

16「全讀史」の名勝志は、これ以前の源平合戦関連史跡を継承する一方で、「土肥」「土屋」「淇増」といった源平合戦に従軍した人物に因んだ地名が挙げられるなど、源平合戦を素材に地域の由緒を説明する傾向もみられる。なお、ここでは「相引」の説明には「屋島謡話」。相引に引沢と有是なり」と記されており、17世紀後半に考証の対象として記述されていた相引川のイメージはこの時点でも継承されていることがわかる。

権原藍渠の遺稿に基づき編まれた19・20は江戸時代末期における屋島の景観描写・イメージの集大成といえるが、同じく藍渠の手による13・14をもとにしており、両書から引用されている箇所も多いことから（松原1981）、ここで合わせてみておきたい。19・20は、高松藩儒らを担い手とする、これまでの地誌における地域の内側の視点からの叙述を受け継いでいる。また、14の「文苑」の部において、高松藩儒や藩に問わりの深い儒者による漢文・漢詩が多数引用されている点は20に継承され、9で確認された18世紀半ば以来の流れを汲んでいる。

ただ、19・20はそれまでの地域内部からの地誌と異なり、名所図会の体裁で挿図が盛り込まれている。より写実性のある風景描写に加え、源平合戦の個別の場面も具体的に表現されている。19には「八栗屋島源平古戦場」（図1）と題した挿図が5頁にわたって掲載されており、屋島・八栗に点在する源平合戦関連史跡と、その舞台となった屋島周辺の様子が、一的な地域的まとまりをもって詳細に描かれている。タイトル通り「古戦場」を主題として古高松の辺りからパノラマの如く描かれたこの挿図は屋島東麓から檀ノ浦・牟礼を中心にしており、古戦場から外れる屋島西麓や北嶺は構図に入っていない。

同じく屋島周辺の様子を描いた挿図には、20における「四国八十四番札所屋嶋寺 塔頭南泉寺」「嶺巖眺望」「檀之浦 皇居跡 次信碑 菊王丸墓 洲崎寺 駒立石 祈石」（図2）がある。「四国八十四番札所屋嶋寺 塔

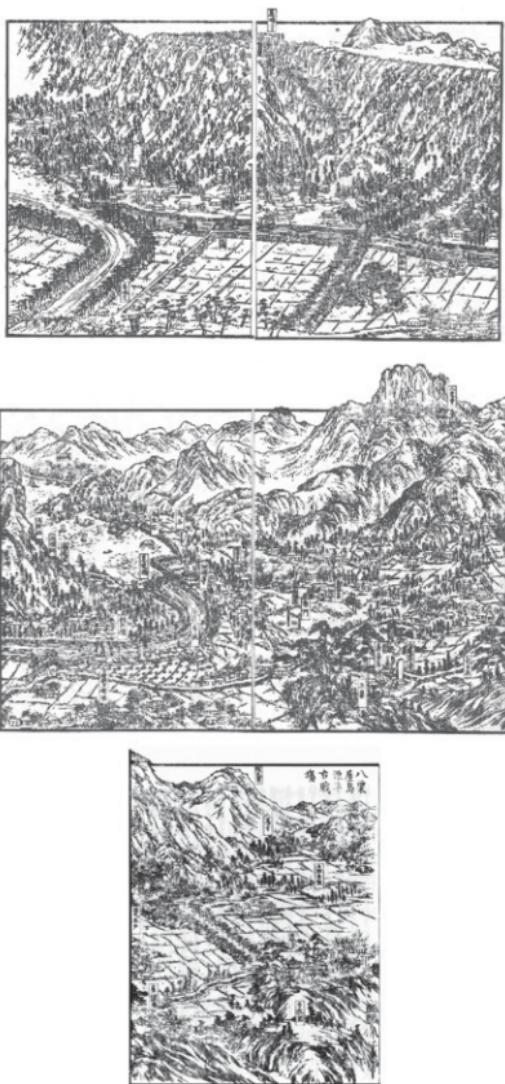


図1 「八栗屋島源平古戰場」

出典：『讃岐國名勝圖会 前編』臨川書店、1999年



図2 「檀之浦 皇居跡 次信碑 菊王丸墓 洲崎寺 駒立石 祈石」

出典：『諱岐國名勝図会 前編』臨川書店、1999年

「頭南泉寺」は屋島寺境内の俯瞰図で、「嶺巖眺望」は、獅子靈巖から西側を眺望し高松城下と帆船が浮かぶ沖合を描く図である。これらは源平合戦とは関係の薄い挿図で、特に後者は、屋島からの眺望をもって高松城下の繁栄を示唆する意味で、古戦場とは明らかに文脈を異にする表現であろう。一方、「檀之浦 皇居跡 次信碑 菊王丸墓 洲崎寺 駒立石 祈石」は、「八栗屋島源平古戦場」同様の主題をもって源平合戦関連史跡の点在する牟礼・屋島を八栗から俯瞰した図で、背景となる屋島の山容と、主戦場であった檀ノ浦の海面が大きく構図を割いて描き込まれている。

3. 18～19世紀の動向2 —地域の外側からの視点—

こうした地誌が盛んに著された同時期に、地域の外部の視点から、屋島はいかにして描かれたのだろうか。ここでは金毘羅参詣を主題とした案内記の10、名所図会の18を取り上げ、屋島に関する記述を確認しておきたい。

大坂を出港して船で丸亀あるいは多度津へ渡り、上陸して象頭山へ向かうのが金毘羅参詣の主要ルートであったが、10には「讃州の名所八栗屋島等見物乃望あらバ大坂にて

乗船之節船宿対して讃州高松へ船をつけさせ道筋所々見物してすぐに金毘羅へ参詣すべし」と記されている。金毘羅船を営業する大坂の多田屋新右衛門の引札にもこのルートと船賃が記載されている（松原1981）。18世紀半ば以降の金毘羅参詣の盛衰は讃岐国内の物見遊山の需要をも惹起させ、高松で船を降り八栗・屋島等を巡りながら金毘羅参詣するルートの定着をもたらした。屋島もまたそうした文脈のもとで訪ねられるべき名所となつたといえる。

こうした背景に基づく屋島見物は、10における「屋鳴寺」の項目が、屋島寺と源平合戦関連の史跡・伝承で占められていることから、有名な寺院と源平合戦の古戦場を訪ねる目的でなされていたことがうかがえる。金毘羅参詣を主題とする折本という性格ゆえ、屋島に対して多くの紙面を割いているわけではない。その中で、屋島寺については四国遍路八十四番札所であることと本尊の千手観音について記される。源平合戦に関連しては、「内裏跡を墳の浦といふ」「入海に那須与市駒立石祈の石有」「相引の汐 屋嶋ふもと東西より潮満来ル、干ル時ハ双方ヘ分ル」といった記述、また、「此所にて嗣信討死といふ」とある「洲崎ノ堂」、「惣門の渚」、「佐藤继信石碑」、「太夫黒の墓」が紹介されている。「駒

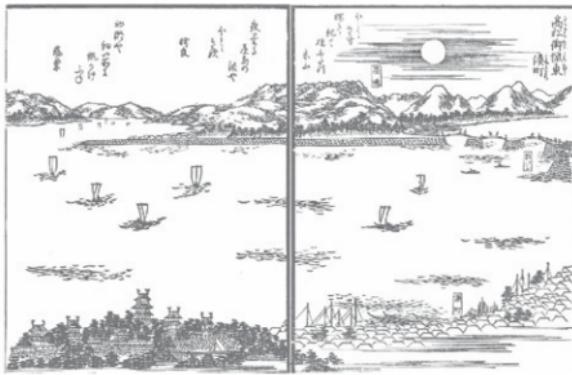


図3 「高松御城東湊町」

出典：『金毘羅參詣名所圖会』臨川書店、1998年

立石祈の石」については玉虫の前と「ある人」の2つの和歌が引用され、また「佐藤継信石碑」に関連して空信の來訪と継信の靈との和歌の掛け合いが掲載されている。代表的な源平合戦関連史跡として挙がっているものは、17世紀後半の段階を継承している。一方で屋島・屋島寺にまつわる伝承自体よりも、「内裏跡」「石」「墓」など具体的に來訪可能な場所の記述が多く、ガイドブックというメディアの性格も踏まえれば、源平合戦関連史跡ゆかりの場所へ訪れることが、屋島の見物の達成に必要であると認識されていたことが推測される。

その後、19世紀半ばに刊行された18は、金毘羅參詣に伴う讃岐国の名所の來訪という文脈を共にしているが、名所圖会という体裁ゆえに、外部者の屋島に対する視点を10より充実して叙述できるようになっている。内容は、「日本書紀」を利用した屋島城築造や空海関連の伝承、16世紀の長宗我部氏讃岐侵攻に関わる古戦場が若干含まれるもの、その他のほとんどが源平合戦関連史跡で、「屋島内裏之古跡」「惣門之古跡」「那須与市宗高祈石」「同駒立石」など随所に、史跡としての解説に加えて、「源平盛衰記」の引用が、ときに8頁に渡るほど多くの紙面を割いて挿入されている。「大胡小橋太水練高名之古

址」や、小林新吾宗行と越中次郎兵衛盛嗣による鏡引など、代表的な場面以外についても取り上げられており、名所圖会に特徴的な考證を織り交ぜ詳細を尽くしたスタイルで、源平古戦場としての屋島一帯が記述されている点が特筆される。反而、地域において信仰されている中小の寺社に関する記述は少なく、10に見出せる、合戦の舞台としての屋島を訪れる外部者、という作者・読者の性格に対応した叙述となっている。

しかし名所圖会特有の多数の写実的な挿図からは、古戦場の史跡としての解説だけに留まらず、屋島の山容や風景自体を評価する姿勢を見出すことができる。「高松鎮城」の項目では高松城下が「風景の勝地」であり、北の女木島・男木島・直島や西・南の山々とともに、東に屋島が眺望できると述べられている。また、「高松御城東湊町」(図3)に、東を眺望した際の屋島の全景が、手前の帆船が浮かぶ海とともに描かれている。高松城下の繁栄と同時に、そこからの屋島の眺望を評価していることがうかがえる。

源平合戦関連史跡の項目では、挿図に史跡の現況やそれらが点在する牟礼・屋島一帯の俯瞰的な様子が描かれている。「屋島山 檜之浦 次信之墓」(図4)は手前に屋島東麓の佐藤継信墓、置を挟んで奥に、屋島寺や

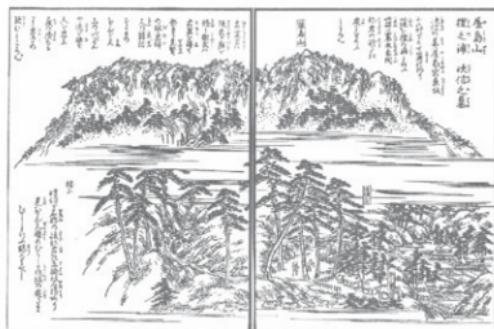


図4 「屋島山 檜之浦 次信之墓」
出典：『金毘羅参詣名所図会』臨川書店、1998年

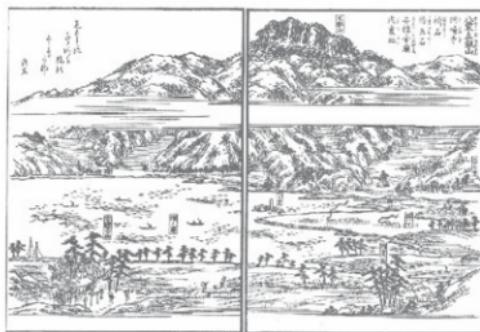


図5 「八栗五鈴山」
出典：『金毘羅参詣名所図会』臨川書店、1998年

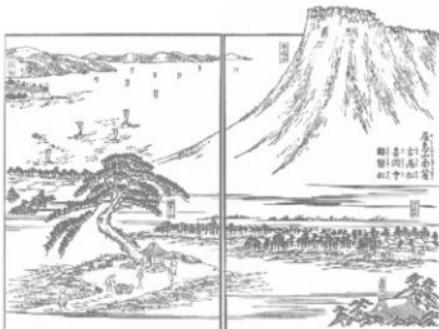


図6 「屋島山南麓 古高松 喜岡寺 鞍掛松」

出典：『金毘羅参詣名所図会』臨川書店、1998年

史跡を除外し山容のみを描いた「屋島山」のみが配されている。「八栗五剣山」(図5)は屋島東麓を視点場にして、手前に「安徳帝社」「檀ノ浦」「内裏跡」、中央から右にかけて「コマ立石」「祈石」「サキ寺」が描き込まれているが、最も印象的な表現は画面中央から奥にかけて大きく描かれた「五剣山」である。そして「屋島山南麓 古高松 喜岡寺鞍掛松」(図6)では、手前に鞍掛松等の史跡を描きつつ、画面奥右手には屋島南面の形状が印象的に表現され、奥左手には高松とその神合の帆船が進む様子が描かれている。18における屋島周辺の現況を描いた挿図は、いずれも山の存在が強調された表現になっているのが特徴である。

ただし、屋島自体についての文字による記述は、山容が「家屋の如し」と評される以上に言及されておらず、挿図も「屋島山」の地名が付されるほかは、史跡の解説や古歌の引用が添えられるのみである。つまり、山やその地勢・植生などを詳細に分析し善し悪しを評価するという段階ではなく、あくまで古戦場の舞台としての屋島が、視覚的に好ましい相貌も備えた山と捉えられていたことに留意する必要があると思われる。歴史に対する考証、現地の実際の風景に対する関心の高ま

りを背景にして、江戸時代末期の出版物である18には、外部者としての立場から数多の古戦場と視覚的に好ましい現在の風景が重なる「名勝」としての屋島が表現されていたといえる。

最後に、18における屋島周辺の現況を描いた図を、前項で分析した19・20の挿図と比較すると、次のような性格の違いを擧げることができる。それは、19・20における挿図のうち、「八栗屋島源平古戦場」と「檀之浦 皇居跡 次信碑 菊王丸墓 洲崎寺 駒立石 祈石」は、古戦場としての屋島・牟礼一帯を描くことに主眼が置かれているのに対し、18における「高松御城東湊町」「屋島山檀之浦 次信之墓」「八栗五剣山」「屋島山南麓 古高松 喜岡寺 鞍掛松」の4つの挿図は、いずれも(当時における)現在の屋島・牟礼周辺を描くことに力点が置かれていることである。18における挿図は、「高松御城東湊町」を除いて源平合戦関連史跡が描き込まれているが、いずれも屋島もしくは五剣山の山容自体が強調されている。また、「八栗五剣山」では源平合戦関連史跡の点在するなかに煙が立ち上る「塩ハマ」が表現されているが、製塩中の塩田の様子は古戦場としての表現には相容れないものと思われる。これ

は、19の「八栗屋島源平古戦場」、20の「檀之浦 皇居跡 次信碑 菊王丸墓 洲崎寺 駒立石 祈石」において、塩田を示す文字表記がみられず、煙の上がっているような図像もない、いわば塩田が「沈黙」させられた表現とは対照をなしているといえよう。

この違いについて推測を重ねるならば、18は古戦場としての屋島イメージを前提にして現地をまなざし、文字情報は源平合戦の舞台という文脈で記述されるものの、挿図においては山容など地理的に特徴ある屋島現地の現在の風景が特筆されるべき対象となったと考えられる。一方、19・20では、屋島という地域に対する内部者の豊富な知識が前提となり、文字情報では知名度の低いものを含めた場所が源平合戦とのゆかりで説明され、挿図においては、地域の外側にある、「源平合戦の古戦場」としての情報にさらに特化した屋島一帯の表現が望まれた可能性がある。

おわりに

本章では、近世の地誌・名所案内記にみえる表現から屋島の景観描写とイメージを検討してきた。その結果、(1) 源平合戦関連史跡の代表的なものは17世紀後半に出揃っていたこと、(2) 17世紀末以降四国遍路や金毘羅参詣を背景に、合戦の舞台として訪れるべき場所としての屋島が出版された地誌・名所案内記に表現されていたこと、(3) 地域の内側の視点から高松藩に関わりのある儒者を書き手にして成立した名所記・地誌

は、高松藩主の史跡顕彰や漢文・漢詩の世界觀に基づく屋島への評価を共有していたこと、(4) 地域の内側の視点からの地誌編纂は外部の視点からの案内記の記述にも影響を与えていたことが明らかになった。一方、『讃岐国名勝図会』と『金毘羅参詣名所図会』における文字情報・挿図の表現の比較から推測したように、屋島に対する内部／外部者の視点の違いは、前提となる知識が源平合戦及びその情報源である「平家物語」の類の書物であるか、それとも屋島という地域自体であるか、という相違に通じ、地誌・名所案内記の表現の方向性に差異を与えていた。こうした差異が、名所と認定される場所の拡大や、既存の名所に関するイメージの再構成を生じさせながら、自然地形と古戦場が重なり合う名勝としてのイメージを多様に醸成させていったと考えられる。

〈主要参考文献〉

- 稻田道彦 2015 「訳者まえがき」、真念（稻田道彦訳注）『四国遍禮道指南』講談社
香川県編 1941 『香川叢書 第二』香川県
小松勝記 2014 『四國遍禮名所圖會解題考察』、同編
『四國遍禮名所圖會并近代の御影・靈場写真』金剛頂寺
小山泰弘 1989 『地誌・郷土史』、香川県編『香川県史第四卷 通史編 近世II』香川県
松原秀明 1981 「解説」、同編『日本名所風俗図会 14 四国の巻』角川書店

(担当：島本多敬)

7 近世の紀行文・四国遍路案内記 にみる屋島

はじめに

本章では、近世の紀行文や四国遍路案内記に記される屋島、屋島寺・源平合戦の名所を分析し、その特徴をいくつか指摘したい。近世の紀行文をみていくと、主に陸上から屋島を訪れる行程と、海上から眺める行程に大きく2分類できる。陸と海では視点も変化していく。そこでまず陸からの視点をI～III、海からの視点をIVにわける。また陸からの視点は数多く存在するので、I紀行文、II紀行文に関する地誌、III四国遍路の案内記と細分する。いずれも史料を編年して分析することで、屋島を見る視点の変化及び共通性を考えていく。なお近世地誌は、本書第6章にて分析されているので、本章では簡略に比較する。

同様の視点で讃岐において、近世以前の名所・史跡がどのように近世史料に記され、変化していくか分析したるものに、大山(2006)がある。村民の墓地のなかにあった神櫛王墓は、近世の4段階を経て創出されていく過程をあきらかにしている。この神櫛王墓は、後述する佐藤継信の墓・太夫黒の墓という源平合戦の名所にも近接し「王墓」という名で登場する。

なお今回、刊行された史料集を基に調査したため、いずれも近世前期、17世紀の史料が多く、ついで近世後期となり、近世中期の史料が少ない傾向となった。

I 近世の紀行文 陸からの視点

1. 寛永12年「讃岐下り」

近世における初期の紀行文は、寛永12年(1635)頃、生駒家臣の連歌師岩手宗也による「讃岐下り」(CO02)である(香川県教育委員会編 1981)。まず屋島が登場するのは、江戸詰の岩手宗也が大坂から讃岐へ向かう船を探すつぎの場面となる。

長さ六ひろばかりなる小船に、人三人乗たるあり。寸はやはこそ能登守の乗給ひし八嶋の浦舟よと、とらへてしほりければ、何ともいさしらぬひのつくし舟そとよ。薩廣瀬硫黄か島への御用やとあなどりける程に、

讃岐人何とてうそをつき弓の
屋しまの磯ていられおしやるに

船は小船であり、その状況を源平合戦の能登守平教経が、源氏へ戦を仕掛けた際に飛び乗った船にたとえる。教経は佐藤継信を射落とした武将であり、「平家物語」屋島合戦の重要な人物の一人である。ただ乗船した船は、九州筑紫の船であり、そこから「平家物語」の硫黄島へ流された俊寛を、続く和歌は義経の弓流などを想起している。

その後、船が進まないなかで船頭が島の名を説明しながら、やがて屋島に到着する。

船頭殿お顔の色をなをひて、沖にあまたの異名有、沖の小木地の小木ともいふ、をきと云は島の名、其上に舟ははや屋島のま

へとつんといた、(中略) 磯まちかく漕よ
せて、陸に着てたとり行けるか、洲崎の堂
の跡はかなき、次信かしるしの石の苔むし
て、星宿ふり、哀さんとしみと、し
るへせしか、其事となく身にしみて、
梓弓やさきにかゝるつき信か
しるしの石も露にかゝりて

そこで洲崎の堂、佐藤継信の墓へ行き、
継信を哀れみ歌を詠む。続いて佐藤継信と同じく主君の身代わりになり忠義を尽くした中
国漢の武将紀信の故事と比較する内容が続き、
つぎのように源平合戦の名所と和歌が続く。

是ぞいにしへの内裏屋敷の跡なりと教ける
をみれば、蓬浅茅生に道絶て、衛士の焼火
の影もなく、纏々たる松かせは、朝歌夜絃
の声にたたへ、もしもやく烟の斜に立のほ
るは、椒蘭をたけるかとうたかはれ、鯨波
矢さけひの音かとあやしまる。あちきなや
はかなや、姫の一夜のかりの御住みとはい
ひながら、玉体をすへさせ給ひ台の、今
さらあやしの賤の葉はたけと成しことよと、
おもひくるしみて

大内のは島となりぬれば
さすかになはを残しけるかな

まずは内裏屋敷跡、「教けるをみれば」と
あることから案内人の存在がうかがえる。そ
して今見聞している松風や塩焼きの煙から、
安徳天皇の内裏があった当時の衛士の焼火や
朝歌夜絃の音、合戦の闘の声や「矢さけひの
音」などを想起している。そして屋敷跡が、
現在百姓の菜畠になってしまったことを嘆く
一方で、菜と名をかけた歌を詠んでいる。

やかて此辺を惣門の渚と申候。さればにや、
其程のあれ成塙やの陰に朽残ておはします。
見給はましやといひけるほとに、ふりはへ
て求めれば、けにやさもいひつへき朽木の
かふの砂の中の埋木と成て有けるをみて、
朽残る柱はすなの中々に
うつみ門かもなりにけるかな
住景にいさなはれ、覚えす相引といふ所に
いたりぬ。爰を相引と云ことは、弓手より
めてより塙のみち来て、又左右へ相ひきに

ひくに依てなむといふなり。
松風のしらへと浪の夕浦と
いつれことさら相引の浦
猶此行末、ゆけとも秋のはてしなき名所旧
跡の有なれと、かつ後の物たねにも残し給
へ

そして朽木となって砂に埋もれる惣門跡、
潮の満ち引きから名のついた相引の浦を訪れ
歌を詠み、屋島合戦の連歌を完成している。
しかし屋島合戦の名所旧跡はまだ数多くある
ため、後の物种として残すとまとめている。
「讚岐下り」は、「平家物語」を意識した内容
であり、その上で現在と過去を比較しながら、
さらに合戦を思い無常、哀れさを感じている。

2. 寛文7年「小豆島紀行」

寛文7年(1667)、大阪俳壇で活躍した
俳人松山政也の「小豆島紀行」(C005)では、
まず小豆島からみた景色に屋島が登場する
(香川県教育委員会編 1981)。東は淡路、岩屋、
明石、鳴門、「汐の引田、波の白鳥、志渡、
八鳴、壇浦、高松」、西は白峯、金毘羅、屏
風浦、槌の戸と地名が並ぶ。そして「致景筆
にうつし詞にへかたし」「遠き国に其名間
ゆる松島、松窟、又鎌倉、金沢のなかめにも、
をさゝへとるましふ覚ゆ」とある。眺めの
良さを筆舌に尽くしがたい、日本三景などに
もひけをとらないとする。この言葉は、亀山
石清尾八幡に詣でた際にも登場し、「致景亦
世に越たり、矢くり、屋島、宇龍山など前に」
と絶景と褒め、「綾川に錦ひろくるもみちか
な」と一句詠んでいる。

そして「八島、壇浦などと見んとて」高松
を発つ。まずはつぎのような屋島寺の描写で
ある。後述する遍路案内記と同様、高松から
の行程では、前半が屋島寺、後半が源平合戦
の名所という構成となる。

南面山八嶋寺千光院に上る。抑此八島寺
は、孝謙帝天平宝字年中、唐龍興寺芯薦鑑
真和尚來朝時、此八島は仙境なりしに、真
師仙人に逢給て、願くは此處を我に譲り給
へ。伽藍を建て衆生濟度の地となさんと申
されしかば、仙人此旨をゆるし畢。即七堂

伽藍僧坊四十二字、年を経すしてなりぬ。本堂五間四面、本尊千手千眼云云。後には此山を御弟子道得に譲給て、鉢鉢一つあたへ給ふ。此鉢みつから往来の客船に飛室で物をこふ。鉢に物満る時は、飛帰で四十二坊を扶持しけるとなり。されと末の世となりて、法力もうすらきけるにや。或時此鉢獵船に飛至しかば、漁人魚をとりて此鉢に入けるより、飛引叶はすして、寺門僧坊もやうやく破壊しけりとなり。此山昔は八所の鎮守有ける故に八島と云しを、後入此山の屋の棟に似たればとて、屋島と改けるとなり。其後又嵯峨帝御時空海本堂二王門を一夜に建立ありて、自作の本尊を安置し給ひより、脇坊縁に三宇残りて、今も猶在之。爰にも縁起宝物など數多あり。悉見侍れと事多ければ、爰にもらしつ。

開基が鑑真であり、屋島沖を通過する際に、仙人から土地を譲り受け寺院を建立、鉢を使って食糧を集める、千手觀音を本尊、空海が自作の本尊を安置するなど、いずれも「讃岐國屋島千光院縁起」「讃岐志」所取、D022) と同じ内容である。しかし独自の記述もあり、食糧を集める鉢に魚を載せたことで効力が消滅し、その後寺院も衰退したとする。また名の由来を、昔は八所の鎮守があるので「八島」であったが、後に「屋の棟」に似ているので「屋島」と改めたとある。名前の由来が登場する初期の文献ではなかろうか。後半の源平合戦の名所は、「是よりないの為、若僧ひとりを先にたてゝ」と、屋島寺の若僧の案内で巡っていく。すでに名所を巡ることが定例化しており、案内人が存在していたことがわかる。

東の方におりもて行に、洲崎堂の跡、内裏屋敷、奈須与一扇射ける所、維信石塔、同石碑などあり。後小松院御宇至徳元年四月五日、奥州住人佐藤庄司末裔信寶といふ僧、此所に来て此石塔に向て、
痛しや君の命を維信の
印の石も苔衣きて
とよみたりければ、石塔内より返し、
おしむともよも今までとはなからへいし
身を捨てゝこそ名をもつきのふ

此事處の人語しまゝに記付侍る也。石碑は今は国守より建給ふ。彼教經の弓勢、今おもふもおそろしくて、

今聞も胸ひやす人の矢しま哉

屋島寺から東へ降りていき、洲崎堂、内裏屋敷、駒立石、佐藤維信の墓、石碑を巡る。特に佐藤維信の墓では、至徳元年(1384)奥州の佐藤の末裔信寶が石塔を訪ねて歌を詠むと、石塔の中から返歌があったという、土地の住人の語りをそのまま記すとある。この内容は屋島寺所蔵の「源平屋島僧浦合戦縁起」(A059) の最後に登場する話であり、縁起の内容が地域に普及していたといえる。そして寛永20年に実施した高松藩主松平頼重の石碑建立が続く。最後に佐藤維信を射落とした平教經の弓を恐れ、屋島を「弓の矢しま」として句を詠んでいる。その後、この多くの名所の案内について疑問を投げかけている。

終日此島めくりして、愛かしこの限ゝゝ残らす見侍るに、先にしほちの教へし洲崎堂、内裏屋敷、我心にいふかしき所有て、所の古老に委嘱侍りしに云く、内裏屋敷は此島の巽の方山の腰に平にて、かつゝゝ広き所あり。惣門者も此前なり。其柱とて今猶折残りたり。洲崎堂は、武例の前高松の東皆よせての方なり。前に云る所ゝゝ。後の人説を伝來ると見へたり。維信墓所は後に築たる事なれば、いくつにても難なしと云。盛衰記、平家物語、まひなどの文言を見侍るに、此動の語る所然へし。今より後、爰に來て見ん人心を付へし。宇龍山、牟礼、高松は、皆屋島山の南、即向ひの方と知へし。今の高松の城は、此名をうつしたる所もふへし。させる事ならぬを爰に長ゝゝとかける事、我ながら心つきなきやうなれど、古き所ゝを見るに、かはかりの事にても、少心を付さらんは無下の事なれば、かく弁記し侍るなり。

月の発句一手あるべき矢島かな
相引や汐のたゝかひ霧の海
波の時雨いくしほ染て赤は崎

名所を見た後に、いぶかしく思った松山玖也は、土地の古老人詳しく述べる。すると

内裏屋敷や惣門、洲崎堂、いずれも別の場所であり、継信墓などは後世のものなので複数あってもおかしくないという。後の人があざつて伝えたものであり、「源平盛衰記」「平家物語」などを見ると、古老の言葉は正しい。今後、現地に来て名所を巡る際には気をつけるよう注意を促し、一般的に古い名所を見る際の注意すべき点であるとも述べる。

「小豆島紀行」では、すでに当時名所を案内する人がおり、またその案内の内容を調べ確認し間違いを正す旅人がいたことがわかる。特に松山政也は俳人でもあり、句を詠む前提としての名所の場所の重要性を認識していたのかもしれない。

3. 宝暦 12 年「壬午紀行」

加賀山中の俳人桃居翁二柳の「壬午紀行」(C006)は、宝暦 12 年(1762)3 月に屋島を訪れている(香川県教育委員会編 1981)。高松から志度へ向かう途中、友人に屋島まで見送ってもらうが、そのまま夜になり翌日友人に屋島を案内された。ただ屋島山上に登ることもなく、つぎのように街道途中の佐藤継信の墓、太夫黒の馬塚について記すのみである。

高府より志度へ赴く途の傍に、大墓とて小高き処に松すこし村たちたる中に、又佐藤次信の塚あり。その傍に馬塚といふあり。これかの義経より次信に賜りし太夫黒といふ馬を葬りけると也。

つぎに屋島から東へ進み、志度の臨江亭を訪ね高樓に登り、つぎのような景色をみた。

名にあふ房前の浦を眼下に見て、致景物としてたらずといふ事なし。東は小串とかいへる山長く運りて、恰も長蛇の臥かごとく、八栗山は丑子に時ちて、波上に五鈴の影をひたす。屋島は八栗の尾上を垣に見越して、隣り真珠島は手をさしのべても取つへし。

志度から見わたす絶景の一つとして、屋島が八栗山の向こうに見えるとあり、ここから屋島は東部志度からも高所に登ると目立つ山であったことがわかる。

II 地誌にみる屋島

1. 延宝 5 年「玉藻集」

延宝 5 年(1677)に高松藩士小西可春が編纂した「玉藻集」(D002)は、讃岐の名所古跡の和歌を基本に、寺社の由緒、伝説、物産、伝記や家記などを郡別にまとめたものである(香川県編 1939)。「屋島」の項には古代以来の屋島を詠んだ和歌が記されている。

最初に「古今和歌集」の「ほとときす鳴声きけは別れにし、ふるさとさへそ恋しかりける」の歌を紹介する。これは読み人知らずとあるが、「古今集古注」に讃岐に配流された大江忠名が屋島にて詠んだものと引用している。また「郷談春歌」の「やしま坂中に鳴ほとときす声はきけとも目に見えぬ」という古い小説も関連として記す。屋島のほとときすは、この後の文芸作品にも登場する。

統いて屋島城設置、源平合戦の概要、最後に那須与一が扇の的を射た際に、平家方女房の玉虫前が詠んだ歌が記される。「屋島」の後、赤牛崎、惣門ノ渚、相引、洲前ノ堂、初音の鼓と源平合戦関連の名所・説話を立項されている。洲前ノ堂では、六万寺関連の歌の後、「小豆島紀行」にも登場した佐藤継信の墓を訪ねた一門佐藤信空の歌が続く。そして注釈として「屋しま寺縁起二巻」とあり、「源平屋島檀浦合戦縁起」(A059)の出典を記す。その他「鉢之廻門」項では、屋島北嶺に住む仙人空鉢聖人が、飛ぶ鉢を使い食糧を集めていたが、船の魚肉の穢れを受けて海底に沈んだと「小豆島紀行」と同様の内容がある。

「玉藻集」全体の傾向として、歌名所としての屋島を中心に紹介している。屋島寺や源平合戦以外の話も収録し、屋島が仙人の住む仙境空間として認識されていたこともわかる。

2. 18 ~ 19 世紀の地誌

延享 2 年(1745)山田郡木太村の増田休意が、父正宅の書残したものと増補し、弟で高松藩儒菊池武賢が校合した「翁齋夜話」(D007・D008)は、讃岐最初のまとまつた地誌である(平凡社編 1989)。巻 4「三木郡」には、佐藤次信墓からはじまり、大夫黒

塚、同碑銘、射落畠、洲崎寺、立胸石、祈石、大砂子、惣門、源氏峰、瓜生山、土肥、土屋、長刀泉、六万寺、旦僧、巻5「山田郡」には、屋島寺、不食之梨、名号・疊石、二王門、大悲閣、獅子靈巖、経塚、屋島城、内裏屋敷、島蘇仙人、屋島記、佐藤次信碑文、黄牛崎、長崎鼻、磐女崎が項目としてあがる（巻5は後次の可能性あり）。地域で編纂された地誌の特徴として、先述の紀行文より詳しく屋島寺、源平合戦の名所が紹介される。また産物として、屋島浦海参、平家蟹が取り上げられるが、これも地域地誌の特徴といえる。

天保2年（1831）香川郡東池西村出身の儒学者中山城山が編纂した『全讚史』（D018・D019）は「郡郷志」「人物志」「古城志」など分野別の地誌である（平凡社編 1989）。巻10「古冢志」には佐藤継信墓と大夫黒墓、巻11「名勝志」に六万寺、瓜生山、土肥、土屋、淇増、源氏峰か峰、菜切地蔵、惣門、射落畠、大砂子、屋島、血池、名号石、獅子靈巖、忠名屋敷の名所が簡潔に記述される。ただ分野別にまとめていたため、屋島の地域のまとめりはない。忠名屋敷は、「玉藻集」に登場した屋島の歌を詠んだ大江忠名の屋敷であり、新たに登場する名所といえる。

嘉永6年（1853）高松町人に後に藩士となる梶原藍菴・藍水親子が編纂した『讃岐国名勝図会』（D015・D016）は大内・寒川・三木・山田・香川5郡（刊行分）の名所旧跡・寺社・風俗全体を範囲とした絵入地誌である（平凡社編 1989）。巻3「三木郡」には、佐藤次信墓からはじまり、大夫黒墓・源氏峰、菜切石、長刀泉、鎌田光政墓、「鍵信討死之図」（「」は絵、以下同）、宇龍山、惣門跡、射落畠、祈石、立胸石、「義経弓流図」、「八栗屋島源平古戦場」、洲崎寺、「平家蟹全図」、土肥屋敷、肉鬆がある。巻4「山田郡」には、東から鞍掛松、屋島寺、「屋島寺」、「嶺巖眺望」、南泉寺、経塚、名号・不食梨・疊石、瑠璃宝池、獅子靈巖、北峯、鉢の廻門、屋島城跡、「屋島城合戦」、赤牛崎、牛頭天皇社、相引、檀の浦、安徳天皇社、「檀之浦・皇居跡・次信碑・菊王丸墓・洲崎寺・駒立石・祈石」、佐藤次信墓、菊王丸墓がある。

『讃岐国名勝図会』は、これまでの地誌に比べ屋島の史跡・名所の数、内容、画像も含

まれ詳細であり、地域側からの地誌としては完成形といえる。それは土産・産物の記載の増加でも明らかで、巻3の肉鬆は、「明月記」に屋島の内裏から送られた鰯にて醸すものと記載があり、現在でも鳥賊や海老などで作るとあることから産物といえる。そして巻頭には土産として、「陶器屋島西麓、海參屋島浦、鬼面蟹又平家蟹とも云増浦」とあり、新たに陶器が増加している。

弘化3年（1846）大阪の曉鐘成が編纂した『金毘羅參詣名所圖会』（D013）では、巻6に屋島が登場する（平凡社編 1989）。その項目は、相引の潮、屋島寺前札所、弘法大师加持持水、梵字石、不食梨樹、「高松御城東淡町」、疊石、石鍾乳、屋島寺、「梵字石加持持水」、御影堂、积迦堂、千体堂、鐘樓、二王門、本坊、獅子之靈巖、仙人窟、鉢ノ淵、血之池、屋島山、屋島ノ浦、屋島ノ古城、「屋島寺」、佐藤次信之碑、安徳天皇社、屋島内裏之古址、「屋島山、檀之浦、次信之墓」、洲崎ノ堂、惣門之古跡、「屋島惣門之趾」、那須與市宗高祈石、同駒立石、「那須宗高扇を射る」、「八栗五劍山、洲崎寺、祈石、駒立石、安徳帝廟、内裏址」、景清鉢曳之古跡、「景清鉢曳」、大胡小橋太水練高名、「源義経弓流之古跡」、「義経弓流」「盛嗣宗行が鍔を引切る」、黄牛崎、佐藤次信墓、「次信が盡空信が夢中に歌を返す」、義経乗馬太夫黒之墳、「佐藤次信墓、太夫黒馬墳」、瓜生山、鞍懸松、「屋島山南麓、古高松、喜岡寺、鞍懸松」、平家蟹、長刀泉、菜切地蔵、「菜切地蔵」、六万寺之旧跡である。

『金毘羅參詣名所圖会』は、項目、画像とともに近世地誌のなかで最多である。曉鐘成は、大阪で活躍し、京都、摂津、淡路など各地の名所圖会を執筆した人物である。その意味で地域側の視点の地誌ではない。『讃岐国名勝図会』と同じ項目が多いが、「景清鉢曳」「大胡小橋太水練高名」を「平家物語」などから加え、より読者を意識した内容といえる。

III 屋島寺と遍路案内記

1. 寛永15年「空性法親王四国雪場巡回記」

四国遍路の紀行文・案内記のなかで最も

古いのは、寛永15年（1638）伊予太宝寺の権少僧正賢明の「空性法親王四国靈場巡行記」（C003）である。賢明は、大覺寺空性法親王（後陽成天皇弟）に随行した。「空性法親王四国靈場巡行記」は、案内記ではなく紀行文であり、文章も七五調を基本として、札所の寺院の記述は簡略で名所旧跡の記事が多い（越智1981）。屋島寺は記載されていないが、八栗寺への行程につぎのように源平合戦の名所が紹介される。

名も高松の殊勝さは、昔に増しぬ要地とぞと、歩み行く夜は白浪の、寄せ来る渚の頭なる。城を左に屋島寺、昔源平争ひを為す趾なれば、空打曇る折節は、矢石響の声震動し、吾が攀ぢ登る頃も猶ほ、松吹風や磯の波、闇の声かと疑ふも、君の命を繼信が、印しの石の側にて、真言陀羅尼回向をば、那須の与市の駒立石、扇の的に八栗寺（後略）

名所としては、佐藤継信の墓、那須与市の駒立石のみであり、風や波の音が矢石や闇の声に聞こえるなど、同時期の「讃岐下り」と同様の描写といえる。

2. 承応2年「四国遍路日記」

承応2年（1653）「四国遍路日記」（C004）は、本格的に屋島寺と源平合戦の名所を紹介した遍路案内記といえる。肥後國球磨郡生、智積院の僧、学頭もつめた澄禪作であり、内容が豊富で、案内記のなかでも当時の遍路の実態を最もよく伝えるとある（越智1981）。まず屋島寺に関する由緒を記す。

屋島寺 先づ當寺ノ開基鑑真和尚也。和尚來朝ノ時此沖ヲ通リ玉フガ、此南ニ異氣在トテ此島ニ船ヲ着ケ見玉テ、何様寺院ヲ可建立靈地トテ當島北ノ峰ニ寺ヲ立て、則南面山ト号玉フ。是本朝律寺ノ最初也。其後南都ニ赴玉テ參内也。據、當寺ニ鑑真和尚所持ノ衣鉢ヲ留玉フ。此鉢空ニ昇テ沖ヲ漕行船共ニ飛下テ資料ヲ詣、舟人驚テ米穀ヲ入時本山エ還。如此スル事度々ナル故ニ真俗此山ヲ崇敬スル間、次第ニ繁昌シテ

四十二坊迄在ケルニ、或時此鉢貯師ノ舟ニ飛下ル、舟人周章シテ魚類ヲ此鉢ニ入れバ、其時此鉢微塵ニ破テ舟トモニ海底ニ沈ム、今ニ此海ヲ舞崎ト云。此山衰微シテ退転シタリ。其時ノ本堂ノ本尊觀世音像今ニ在リ。其後大師當山ヲ再興シ玉フ時、北ノ峰ハ余り人里遠シテ還テ化益難成トテ、南ノ峰ニ引玉テ嵯峨ノ天皇ノ勅願寺トシ玉フ。山号ハ如元南面山屋島寺千光院ト号。千手觀音ヲ造本堂ニ安置シ玉フ。大門ノ額ヲバ遍照金剛三密行所當率天内管門ト書玉フ。然ニ此額ヲ毎夜龍神上テ窓竈ニ、此額ヲ掛置タラバ末代ニ寺ノ為ニ悪カルベシトテ、當山智ノ池ノ中島ニ埋セ玉フトナリ。余来無退転仏法相続シテ在。

開基が鑑真であり、屋島沖を通過する際に靈地として北嶺に寺院を建立した、鉢を使って食糧を集め、千手觀音を本尊とするなど「讃岐国屋島千光院縁起」と同じ内容である。しかし鉢の不思議による寺の繁盛と結末、大門の額の由来などは独自の内容といえる。後半は八栗寺へ至る道沿いに、源平合戦の名所を記す。

据、東ノ方エ行テ屏風ヲ立タル様成坂在、爰ヨリ下ハ平家ノ城郭也。五町斗下テ壇ノ浦ニ至、爰ニ安徳天皇ノ内裏ノ旧跡在リ。内裏ノ傍ニ一群ノ松ノ中に奥州佐藤次信ノ石塔在、此内裏ハ阿波民部重能ガ力ニテ坂リニ造シ所也。波打ギワニ洲崎ノ堂ノ跡在、佐藤ガ石塔ハ当國主石壇ヲ築石碑ヲ立レタリ、銘細字ニテ不明。是ヨリ八粟エハ海ノ面六七町斗也。爰ヨリ浦丹ニ南ノ方エ行バ相引ト云所ニ至ル。屋島ヲ中ニシテ両方ヨリ潮一度ニサシ、又引時モ一度ニ引故ニ相引ト云也。源平ノ合戦ノ時分迄ハ干潮ノ時モノ馬ノ歩渡リハ不成シガ、近年浅ク成テ潮タニ引ケレバ跡ハ白砂ニテ歩行自由也。是ヲ渡リテムレ高松ニ至ル。此浜ハ源氏ノ陳場ナリ、義経ノ下知ニテ浜面ニ而陳ヲ取、鹿垣ヲ結テ惣門ヲ構ヘ、其中ヨリ走出く合戦タルト也。惣門ノ跡トテ柱一本立テ有、其アタリニ射落ト云所在。是ハ次信ガ能登守度（ママ）経ニ矢ニ当テ落シ所ナリ。又波打ギワニ駒立石トテ二間方斗ノ石

在、是ハ那須与一宗高畠ヲ射シ海中ニ馬ヲヨガセ、此石ノ上ニ駒ヲ立テ扇ヲ射シ所ナリ。昔ハ水ノ底也シガ、今ハ浅成テ干潮ノ時ハアラワニ見也。是ヨリ未申十町斗ニ次信ガ墓所在。此ハ火送ヲシタル所也。此浜ヨリ廿余町上テ八栗寺ニ至ル。

屋島寺から下り、平家の城郭、檀ノ浦、安徳天皇内裏跡、その近くの佐藤継信の石塔、洲崎堂跡が順番に記述される。特に佐藤継信の石塔は、「当国主石壇ヲ築石碑ヲ立レタリ、銘細字ニテ不分明」と、「小豆島紀行」と同様に松平頼重の保全措置を注記する。つぎに相引、源氏の陣場、惣門、駒立石、佐藤継信墓と続く。いずれも源平合戦の際の状況であるが、相引と駒立石は、近年水面が浅くなり干潮時には歩行できたり、石が見えるようになると、当時の状況変化が判明する。「四国遍路日記」は、源平合戦の過去を想起する部分と現実の実態の両方を把握している。

3. 貞享4年『四国遍路道指南』

貞享4年(1687) 大坂の高野聖真念の『四国遍路道指南』(D003)は、携帯を意識して小型本で刊行され、増補版が出るなど後世に影響を与えた遍路案内記である。真念は、20回もの遍路を行い、遍路道標を200箇所も建立した(越智1981)。つぎの『四国遍礼霊場記』への情報提供や、元禄3年(1690)に四国霊場関係の功德話をまとめた『四国遍礼功德記』を刊行するなど、四国遍路と関わる深い人物である。

前半は他の寺院と同様に基礎事項が続く。

八十四番やしま寺 山上、堂はみなみむき。
やまだ郡やしま。

本尊千手 坐三尺、大師御作。
あざさ弓やしまの宮にまうでつゝ
いのりをかけよいさむものふ

寺の場所、堂の向き、住所、本尊、御詠歌「あざさ弓」の簡潔な情報である。後半には源平合戦の名所巡りとなる。

是よりやくりじまで一里有。寺より東坂十

丁くだり、ふもとに佐藤次信のはか有。領主より、姥太四方の切石にて壇きづき、其上に五尺の石塔を建立し、碑の銘あり。古の五輪塔も有。後小松の御宇、崇徳元年四月五日に、奥州より、佐藤氏族のしやもん空信此はかに詣来て回向のまことをつくし、

いたはしや君の命をつぎのふが印の石

は若ころもきて
とよまれければ、そとば動揃して
をしむともよも今迄ハながらへじ
身をすてゝこそ名をバ次信
と、はかの中にこそしけるよし、屋島軍糸んぎに見えたり。それより先帝・女院行幸の内裏の跡有。この所を壇となづけ、浦を壇の浦となづく。又あい引の汐、にしひがより汐ミち、南面山のふもとをめぐり、両うみの中辺にて満合、たがひに引なり。此入うみ三町ばかり渡りて、奈須の与市駒立岩有。又いのり石有。其南脇にすさきの堂、本尊正觀音、大師御作、其南に惣門。次信射をとさるゝ所有、大夫黒といふなん馬のはかも有。或ハさじきの岡、名切水井に瓜生山とて、源氏の本陣所あり。其外旧跡かずゞ有。惣名はむれ村といふ。右の惣門よりやくりへ十八町行て坂。

「四国遍路日記」と同じく、屋島寺から八栗寺まで源平合戦の名所が並ぶ。説明が詳しいのは、やはり佐藤継信の墓で、松平頼重の保全措置や古い五輪塔の記述がある。加えて「屋島軍糸んぎ」にある話として、「小豆島日記」「玉藻集」と同じ佐藤空信(すべて名前が違う)の回向とそれに答えた継信との対話が続く。「屋島軍糸んぎ」は、先述した屋島寺所蔵の「源平屋島檀浦合戦縁起」であり、「玉藻集」に続いて出典を記す。屋島寺の説く源平合戦縁起が根拠となり普及している事例といえる。その後、内裏跡、壇の浦、あい引、那須与市駒立岩、祈石、須崎堂、惣門、大夫黒馬墓、さじきの岡、名切水、瓜生山、源氏の本陣と続く。『四国遍路道指南』では、屋島寺の分量を比較してもわかるように、「其外旧跡かずゞ有」と数多く源平合戦の名所が採録される。

4. 元禄 2 年『四国遍礼靈場記』

元禄 2 年、高野山宝光院の寂本の『四国遍礼靈場記』(D004) は、真念から資料提供を受け書かれたもので、本人は実際に遍路に出てはいない。しかし『邪併佛教論』など多くの著書を持つ学僧であり、伝承や功德話に疑義を呈する文章を載せるなど厳密な編集方針であった（越智 1981）。凡例にも「若幸に縁起ある所はそれによりれ。おほくは口づから伝ふるのみなれば、あやしき事ありといへども、其伝ふるまゝに書侍つ」「寺々の縁起書る其人により、臆度私意に引くものあり」とあり、縁起や口伝についての意見を述べる。

本文はこれまでの案内記と同様に前半は屋島寺の縁起、後半が源平合戦の名所巡りであり、屋島寺境内・屋島山、源平合戦の名所の 2 点の絵が挿入されている。

南面山屋島寺千光院

此寺の靈廟は、孝徳天皇の御宇天平宝字六年十月、大唐楊州の鑑真和尚日本の純淑を開て來朝の時、船中に於て、還に此山の瑞光のたつを見て船をよせ登臨ありしに、一老翁鳩の杖をつき、出現していはく、此山は七仏說法の靈区、天仙遊化の跡なりといひ忽然として形立ちさせぬ、和尚さてこそ神秀の地なれとて、去事をわすれ、假に一堂を營み、所持の普賢菩薩の像を置、法華及華嚴經の普賢行願品を貽し置んとす、時に二聖・二天・十羅羅利女出現して種々の靈異をあらはせり、いつはつともはず、五十七ヶ日をぞ歴てされしととなり。然して風化高く布、招提寺を創て後、仏舍利三粒井に菩提樹の数珠を送れり。それより五十年をへて、我大師此に至り、千手千眼の大悲の像を、一刻三札にて作り玉ひて安置し、千手院と称す。

開基鑑真の話は「讃岐国屋島千光院縁起」とほぼ同様である。しかしそれ以降は、弘法大師の千手觀音像の安置を採用した以外は全く省かれている。縁起の内容も自ら検討した結果を記述していると思われる。後半の源平合戦の名所巡りも簡略である。

洲崎の堂并次信墓

屋島寺より東坂十八町下りて蘿に次信が墓あり。此墓むかしより五輪の石塔あり、これに付俗に伝ふる物語・歌などあり。遠き比、國の太守より、老丈四方に切石にて疊み、其上に長五尺の碑を立られたり。むかし宋公は張良の廟を修し、謝氏は古冢を得て祭れり。先賢の微意、偉人の寥然するもの、なんぞそれしのぶべけんや。迹を撫、人を思、義の隆なる事、君子の歎む所なり。凡此地を壇といひ、海浦ちかきによりて壇の浦といふとかや。其東の渚に駒立岩とて奈須の与市駒を乗えたるとて駒の両足のあとあり。又扇子を射し時祈禱せりとて祈石などいふ石あり。其南の脇に洲崎の堂あり、本尊正觀音大師の御作なり。

これまでと同様に佐藤継信の墓の解説が詳しいが、特に松平頼重の保全措置を中心である。そして中国南朝の宋公による張良廟の補修を例に、君子が先賢を歎むことが重要であるとする。これら漢籍からと思われる知識も、他にはない寂本独自といえる。その後、壇の浦、駒立岩、祈岩、洲崎の堂が続く。これらの名所はいずれも絵のなかにも描かれている。最後に「是は順礼所にはあらずといへども、道すじなるの故にこゝに載侍る」と、源平合戦の名所を記述する理由をあげる。信仰に基づく編集を目指す寂本は、巡礼に關係はないが遍路道沿いにある、世によく知られた源平合戦の名所を省略できず、理由を説明したともいえる。

5. 19 世紀の案内記、「四国遍礼名所図会」『四国偏道指南、増補大成』『方言修行金草鞋』

寛政 12 年 (1800) 阿波国阿南河内屋武兵衛の「四国遍礼名所図会」は、出版を意図したものではない個人の文書とある (D011)。しかし様式はこれまでの遍路案内記と同じであり、後に遍路を行な人々への案内記といえる。まず屋島寺は、境内図があり、由緒は開基鑑真の話のみ、堂宇、御詠歌など、これまでの案内記と同様の記述である。後半に源平合戦の名所が、矢倉谷から檀浦、佐藤継信墓、佐藤継信石碑、内裏屋敷、安徳天皇社、

赤牛崎、大墓（大夫黒墓）、義経鞍掛松、宇龍岡、駒立岩、相引汐、須崎觀音堂の順に記される。いずれも詳しい解説はなく、例えば「佐藤継信石碑」は、「道の左にあり、碑名ハ岡部柳（播カ）齋作る」とあるように、地誌や案内記にみえる簡略な定型文である。

文化12年（1815）佐々井治郎右衛門が刊行した『四国偏礼道指南 増補大成』（D012）は、真享4年『四国遍路道指南』（真念）の増補版である。開基は鑑真、大師作の千手像、御詠歌は記されているが、大幅に簡略化され、佐藤継信の墓、洲崎の堂、源氏の本陣所のみである。携帯用の案内記として、より厳選された内容といえる。

最後に、遍路の案内記というより滑稽本の一つである、文政4年（1821）の十返舎一九『方言修行金草鞋』14編（A080）を紹介する。まず当時大坂から遍路をおこなうには、1番靈山寺のある阿波ではなく、讃岐丸亀に上陸し78番道場寺から回っていたとあり、その経路をとる。主人公千久良坊・鼻毛延高が丸亀着後すぐの会話に、つぎのような平家の亡霊に関するものがある。

モシこゝは往昔平家の一門が、土左衛門になつた辺さ、それだから今でも幽霊が出て、船を見ると引き倒さうとするそうさ、其所以で平家の引例しといふことは、こゝからはじまつたことさうな。ホンニ折々土左衛門が、火の見櫓へひつかゝるには困ると、龍宮の自身番で小叱をいふといふことだが、これはさうでござりませう

源平合戦による平家の幽霊、平家の引き倒し、竜宮の状況などを記す。これまでの紀行文や遍路案内記と違い、滑稽本独特の読者の関心を考慮した内容である。しかしそれらを望む読者層がいたことや、源平合戦に対する民衆意識の一端がかいまみえる。屋島寺に関しては、つぎのように他の案内記とほぼ同様である。

一の宮より仏生山へかけて行く時は、屋島へ三里半、高松御城下へかけて行けば四里なり、千久良坊延高仏生山より、八島坂下口の庵室に、一夜を明す、八十四番八島寺、

南面山千光院、大師の作、せんじゆせんがん大悲の本尊なり、御詠歌、梓弓八島の宮に詣でつゝ祈りをかけて勇む武夫夫より東十町下りて、佐藤継信の墓あり、須崎の觀音、こゝを過ぎて牟礼村なり

屋島寺の堂の向き、本尊、御詠歌の情報である。源平合戦の名所も佐藤継信の墓、洲崎の堂のみである。最後に「道筋に弓は張ども太平の矢島に霞引くばかりなり」と狂歌が詠まれている。弓を張って戦った源平合戦の面影はなく、太平の現在の屋島には霞が引いていると、現在と過去の変遷を表している。この点は、「讃岐下り」「四国遍路日記」と同様の視点である。

IV 近世の紀行文 海からの視点

1. 外国使節の目、朝鮮通信使

近世における外国使節として、瀬戸内海を往来したのは朝鮮通信使である。12回の来日の内、最後の文化度は対馬易聘であったため、瀬戸内海を通過していない。通信使は数多くの紀行文を残しているが、慶長12年（1607）から宝曆14年（1764）の11回のなかで、屋島に触れたのは、元和3年（1617）李景模「扶桑錄」（C001）の1回のみである。8月15日通信使は大坂へ向かう途次、備前国下津井を過ぎたあたりの船から見た景色をつぎのように記している。

下津を過ぐ。下津は、備中の属浦也。暫く帆を落とし水を取りて行く。南のかた、塩田島（塩飽島カ）・大豆島（大槌島カ）・八島を過ぎ、北のかた比比（日比）島・京長老崎（京上鶴島）・児島・岡山島を過ぐ。児島は、乃ち美酒を以て日本に名ある郷にして、岡山は、即ち備前の主将の居る所の地也。

船から見て南に塩田島・大豆島・八島、北に比比島・京長老崎・児島・岡山島を記すが、児島の美酒と岡山藩主の居城の記載があるのみである。当時の主要航路が瀬戸内海の北部沿岸であり、下津井で岡山藩の接待を受

けた通信使には、自然に岡山方面へ関心が向いている。しかしこの島の内「八島」を取り上げていることから、通信使が屋島に関する既知の情報・知識を持っていたと思われる。同行する対馬藩などの日本側の役人からか、または朝鮮側で普及した情報かいずれかが考えられる。須田（2008）によると、下関の安徳天皇を祀る阿弥陀寺、平家滅亡の物語に関して、通信使ほか朝鮮官人は日本知識として共有していたことをあきらかにしている。源平合戦の主戦場の多い瀬戸内海を行なう通信使には、源平合戦の情報は必要な知識であり、屋島もその一部であった可能性がある。また通信使に同行する対馬藩主宗家は、桓武平氏、壇ノ浦合戦で戦死した平重盛を祖としており、他大名に比べて源平合戦への関心が高かったとも考えられる（東2014）。

2. 船の乗客、遠山景晋・忠直・内藤充真院

文化2年（1805）、幕府の使者としてレザノフ来航の処理で長崎へ向かった遠山景晋の「続未曾有記」（C007）も景色の描写である。2月14日備前国牛窓を出航後、「南に讃州、志度の浦、真珠島などは豆小島に遙れつ、八栗ヶ岳、八島の山は遠く見ゆ、源平合戦の所なり」とある。隨筆や日記を数多く残す文人として、短いが源平合戦に触れている。

また阿波国の忠直が、主人木下氏の使いで備中国撫川を訪ねた時の紀行文「撫川の記」（C010）にも、海からの屋島がみられる。文政10年（1827）正月17日に徳島の眉山を発し、讃岐国觀音寺・金毘羅・普通寺などに詣で、21日丸亀から備前国児島下村へ向けて出船、霞の中を進んでいく、そこから見えた景色をつぎのように描写している。

先飯の山のけしき、西上人の、讃岐にはこれをや富士と飯の山朝けの煙たゝぬ日もなしと説し給ひもし哀れ深かりけり、象頭山・獅子山・五岳山、又東の方をミわたせハ、八栗・八嶋など、かのものにミハたる、よとなおもしろく思ふ内、追風さと吹きたりて、またゝく間に下村につきぬれば、名残おしくも口惜しくもおもひつゝ

丸亀に近い飯野山、西に象頭山・獅子山・五岳山、東に八栗・屋島を見て、山々の景色を楽しんでおり、源平合戦に関する記述や和歌はない。

延岡藩主室内藤充真院の「海陸返り咲こと葉の手拍子」（C012）には、元治2年（1865）4月6日延岡から江戸へ帰る際の瀬戸内海で「八島だんの浦を遠くに見」とのみ記す。「平家物語」など古典の教養のある大名の妻であるが、女性の視点なのか源平合戦には触れられていない。

3. 海を行く商人と船頭

佐渡國の廻船商人の西国見聞記「海陸道順達日記」（C008）には、文化10年7月20日大坂から淡路島、小豆島を過ぎて丸亀へ進む様子が記される。そして「八くり八嶋など見へければ、古昔源平のたゝかいの事共、日々取々に語りの『しりけれど』」とある。遠山などとは違い、一般庶民が乗り込む船において、源平合戦を語り合っており、當時、屋島＝源平合戦を連想する共通認識があったといえる。つぎに江戸の人が「やれ見ゆる鷲ハ八くりの八嶋にて、やつとむかしのやわやわのあと」と詠んだ。八栗・屋島の「や」を数多く用いた歌である。

その後、高風に船が揺れ荷物が動くことに対して、船頭が詠んだ歌として、「よく動きき物ハくふなりさべる（噪る）なり、心遣ひや乗合の荷ハ」「高砂の浦を追風に帆をあけて、八嶋の磯にはや着にけり」の2首が記される。1首目は客と荷物を詠んでいるが、2首目は播磨の高砂から追い風に乗り、すばやく屋島へ到着したとある。義経の一ノ谷から屋島への迅速な移動を想起させる内容であり、源平合戦との関連があると考えられる。商人の紀行文においても歌を複数添えており、名所たる屋島の位置づけ、源平合戦を連想する共通認識があったといえる。

「南海瀬戸日記」（「川渡甚太夫一代記」（C011））によると、若狭国の船頭川渡甚太夫は嘉永3年（1850）5月27日屋島の前に船を掛けている。瀬戸内海を船で東へ進むなかで、26日に多度津から四島（与島）に移動するが、そこの浜辺に切石が城のように

積み上げられているのをみて、「八島より別た島か名も四島、あまの塩屋にすぎた石がき」と詠んでいる。八と四と数字にちなんだ歌である。与島のあと大樋・小船島をへて 27 日屋島に至り、源平合戦の「むかしを思いだして」、「ま沙來て打込波のあらけなき、八島の浦の者（物）すぐき音」と合戦の様子を詠み込んでいる。

波の音に注目するのは、初期の紀行文「讃岐下り」、案内記「空性法親王四国靈場巡行記」と同様であり、源平合戦を想起させる契機となっている。また屋島を歌に詠むことは、各階層すべてに共通しており、特に歌の屋島は「八島」が多いといえる。

近世の旅・紀行文の多くを占める陸からの視線では、名所屋島から想起する源平合戦の共通認識として和歌などを詠んでいる。しかし船の旅は、実際に屋島や付近の名所に訪れる事はないので、詳細な内容を記すことにはなかった。

おわりに

以上、近世の紀行文や四国遍路案内記に記される屋島、屋島合戦の名所を分析したが、明らかになった点を以下にまとめたい。

①ほぼすべての紀行文と案内記に、佐藤継信墓・碑が紹介される。これは「平家物語」屋島合戦の重要な場面であり、義経に対して忠義を尽くした継信を称賛する当時の意識があったと思われる。それに関連して、寛永 20 年（1643）という早い時期に、高松初代藩主松平頼重によって顕彰され、墓所整備の保全措置がとられたことも、旅人の目をとらえたと思われる。

②屋島への視点は、屋島寺、源平合戦の各名所、遠く望む屋島の 3 点があり、陸からの視点では、実際に歩いてたどる屋島寺、源平合戦の名所が多く、海からの視点では、遠く望む屋島、景色としての記述となる。ただ海からの視点でも、商人と船頭の場合のように、望む屋島からの連想で源平合戦を想起しており、全体的に屋島イメージは源平合戦と強く結びついている。

③「讃岐下り」「空性法親王四国靈場巡行記」「南海瀬戸日記」にあるように、源平合戦の想起には風や波の音が矢石や闘の声に聞こえるなど契機となっている。また過去の源平合戦の時代と現在の近世の状況について比較する描写も多い。「讃岐下り」の内裏屋敷跡が、現在百姓の菜畠になった、「四国遍路日記」の相引と駒立石は、近年水面が浅くなり干潮時には歩行できたり、石が見えるようになるなどの現状認識である。

④屋島寺の由緒、至徳元年の佐藤継信の靈と末裔空信との対話など、屋島寺の作り上げた縁起「讃岐國屋島千光院縁起」「源平屋島檀浦合戦縁起」の影響が大きい。「玉藻集」や「四国遍路道指南」では、出典として明記される一方で、「小豆島紀行」のように土地の住人の語りとして佐藤継信の靈の話を記す場合もある。屋島寺の縁起の内容が土地の語りへと普及していたといえる。

⑤⑥とも関連するが、源平合戦の各名所を案内人とその内容を考証する旅人がいた。「讃岐下り」では内裏屋敷跡で教えられ、「小豆島紀行」では、屋島寺の僧が案内したが信用せず、土地の古老に尋ね、自ら「平家物語」や「源平盛衰記」で内容を確認していた。

〈主要参考文献〉

- 越智通敏 1981 「解題」、『四国遍路記集』伊予史談
会
大山真充 2006 「近世における神櫛王墓」、『(香川県歴史博物館) 調査研究報告』2
香川県編 1939 「解題」、『香川叢書』3、香川県
香川県教育委員会編 1981 『新編香川叢書』文藝篇、
新編香川叢書刊行企画委員会
須田牧子 2008 「朝鮮通信使と安徳天皇」、川合康編
『平家物語を読む』吉川弘文館
東 昇 2014 「対馬・宗家と安徳天皇—「宗家文庫」の新資料—」交隣舎
平凡社編 1989 「香川県の文献解題」、『香川県の地名』
日本歴史地名大系 38、平凡社

(担当: 東 昇)

8 絵図・地図に描かれた屋島

はじめに

屋島の地理的特徴に、地質・地形条件を基盤とした独特の形状が挙げられる。本章では、地理情報を主題としたメディアである絵図・地図を素材に、このような形状をもつ屋島が歴史的にどのように認識されていたのかを検討したい。

I 分析方法

今回の資料調査で確認し得た近世以降の絵図・地図のうち、屋島の一画のみ描かれているものを除いた 63 点（表 1）について、屋島の図像に限定してその形状・表現のあり方を分析した。時代の内訳は、近世及び近世と推定される資料が 48、近代以降の資料が 15 である。また、図像表現に付記された文字情報についても、必要に応じて適宜検討を加えた。

表 1 の各資料（以下、個別の資料を指定する場合は同表の通し番号を用いる）は概ね年代順に配列しているが、全ての資料に対して厳密な年代推定を行なうことはできなかった。あくまでも目安ではあるが、屋島の図像についての大まかな時期的变化を捉えることは可能であろう。

なお、四国遍路絵図については、岩村武勇編『四国遍路の古地図』（出版、1973 年）に依拠して、法量のデータを記載し図像を分析した。また、今回は、存在が周知されている資料であっても、調査の都合で対象にできなかったものがある点を了解されたい。

II 屋島の図像とその類型

表 1 の絵図・地図資料に描かれた屋島の形状は、台形・楔形、ほぼ実際の地形通りの形（以下、実態形）が一定の数を占め、そのほかの形も若干確認できる（表 2）。また、四国の陸地と屋島がつながって表現されるものも見出せる。そうした図像を「半島状」と呼び、屋島の形状と合わせて用いることとする。以下、それぞれの特徴を確認しておきたい。

1. 台形

平坦な山頂をもつ屋島の山容を、横方向から見た様子を描くものである。2・3・4・5・11・17 は国絵図、6・7・13・15・16 は航路図である。

国絵図のうち 2・3・4・5、航路図のうち 6・7（口絵 4 および図 1）・16 は、全て東から見た屋島を表現している。これらは 13 以外全て頂上に屋島寺を描き、屋島東麓に佐藤継信の墓や駒立岩の図像を描き込むものも複数みられる。6・7 のようにきわめて類似する表現の図もあり、絵図の系譜関係に伴いこうした屋島表現が継承されていったことがうかがえる。ちなみに、文政 6 年（1823）の「海瀬舟行日記全」（九州大学附属図書館蔵、C009）に添えられた屋島のラフスケッチ（図 2）も、航路図の屋島表現と類似しており、同様の航路図を参照した可能性を含め、影響を与えていたことがわかる。

一方、国絵図の 11・17（図 3）、航路図の 13・15 は西から見た屋島を描いている。とくに国絵図の 2 つの図の場合、東からの

表1 地図に描かれた屋島のかたち

ID	資料名	作者・出版社	作成年 出版年	時代	寸法(cm)	所蔵館
1	E004 讃岐国絵図	—	1610— 1615頃	2	未調査	高松市歴史 資料館
2	E002 讃岐国絵図	—	原本 1633	2 (写真の み)	高松市歴史 資料館	
3	E003 讃岐国絵図	—	1633	2	84.5 × 220.0	高松市歴史 資料館
4	E012 讃岐国絵図	—	原本近 世	2 (写真の み)	高松市歴史 資料館	
5	E013 讃岐国絵図	—	原本近 世	2 (写真の み)	高松市歴史 資料館	
6	E001 海瀬舟行図下巻	—	1680	2	28.9 × 18.2	神戸市立中 央図書館
7	E006 海瀬舟路図	—	1704—	3	未調査	高松市歴史 資料館
8	E020 船路之図 (『池田家文庫 総目録』(1970年) 所収)	—	—	5	59.2 × 266.4	岡山大学池 田家文庫
9	E007 日本橋より長崎迄道中 記	—	1739頃	3	54.8 × 1816.2	香川県立ミ ュージアム
10	E005 改正日本輿地路程全図	長久保赤水、浅 野弥兵衛 (刊行)	1779	3	未調査	長久保赤水 顕彰会
11	E009 讃岐絵図	—	—	4 (写真の み)	高松市歴史 資料館	
12	E024 渡海絵図 (瀬戸内海航 路図)	—	—	4	28.9 × 502.9	香川県立ミ ュージアム
13	E021 備前近辺海上浦辺図 (『池田家文庫総目録』 (1970年) 所収)	—	—	5	81.4 × 122.4	岡山大学池 田家文庫
14	E022 [瀬戸内海図]	—	—	5	未調査	九州大学附 属図書館 (九 州文化史)
15	E019 [塩飽近海図] (『池田家 文庫総目録』(1970年) 所収)	—	—	5	59.2 × 266.4	岡山大学池 田家文庫

屋島の形；向き	関連する文字情報	備考
楔形；東	洲崎堂／赤場崎	山容は南嶺に1つ、北嶺に2つの峰。
台形；東	—	屋島寺・東麓の堂宇「洲崎〔カ〕」の図像あり。
台形；東	—	屋島寺・洲崎堂・石垣〔カ〕の図像あり。
台形；東	—	屋島寺の図像あり。
台形；東	—	2・4に類似するが屋島寺の図像なし。
台形；東	佐藤次信／那須与一駒立石／タンノ浦／アカハザキ／アイヒキ／惣門ノナキサ／長サキノハナ／平家ノ首実見血ノ池此山上ニアリ磯ガ十八丁	繼信墓・繼信碑と駒立岩の図像あり。
台形；東	佐藤次信／那須与市駒タテ石／ダンノ浦／アカバサキ／アイヒキ／惣門ノナギサ／次信ノ墓／長サキノハナ／平家ノ首実見血ノ池此山ノ上ニアリ磯ガ十八丁	繼信墓・石碑と駒立岩の図像あり。表現は6に類似。
円形半島状；平面	相引／タンノ浦	—
楔形半島状；西	—	—
円形；平面	—	—
台形；西	惣門	—
楔形半島状；西	—	9と類似。
台形；西	ウロ／タンノウラ／アイヒキ	—
楔形半島状；東	檀ノ浦	山容はほかの山々とほぼ同様。
台形；西	タンノウラ	—

表1 地図に描かれた屋島のかたち（つづき）

ID	資料名	作者・出版社	作成年 出版年	時代	寸法(cm)	所蔵館
16	E023 四国北岸絵図	—	—	5 未調査	98.6 × 119.5	九州大学附属図書館（九州文化史）
17	E025 讃岐国古絵図	—	—	5 78.6 × 119.5	高松市歴史資料館	
18	E016 大阪ヨリ丸亀名勝付讃州金毘羅出船所道中絵図	大坂大和屋弥三郎	原本近世	5 33.0 × 46.1	高松市歴史資料館	
19	E017 大阪ヨリ播磨名所讃州金毘羅迄海陸絵図	大坂道頓堀日本橋北詰東御走宿岸沢屋	原本近世	5 36.2 × 54.4	高松市歴史資料館	
20	E026 四国寺社名所八十八番（岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No.1）	板本育々堂	—	5 35.6 × 47.8	香川県立ミュージアム	
21	E027 四国八十八箇所順拝略図（岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No.2）	—	—	5 38.2 × 53.5	香川県立ミュージアム	
22	E028 象頭山参詣道四国寺社名勝八十八番（岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No.3）	金毘羅小坂美玉堂	—	5 35.6 × 47.8	香川県立ミュージアム	
23	E029 四国偏礼（地図）（岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収 No.4）	—	—	5 38.2 × 53.5	香川県立ミュージアム	
24	E030 四国偏礼（地図）（岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No.5）	大坂書林柏原屋清右衛門・全与市版	—	5 40.6 × 53.4	香川県立ミュージアム	
25	E031 [四国八十八箇所地図]（岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No.6）	—	—	5 35.0 × 50.2	香川県立ミュージアム	
26	E032 四国偏礼絵図（岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No.7）	大坂書林佐々井治郎右衛門刊	—	5 63.4 × 99.0	香川県立ミュージアム	
27	E033 四国八拾八ヶ所道案内記百万遍開元（岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No.8）	板所谷一	—	5 52.9 × 48.9	香川県立ミュージアム	
28	E034 四国寺社名勝八十八番（岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No.9）	板本峯右衛門	—	5 36.0 × 67.0	香川県立ミュージアム	

屋島の形；向き	関連する文字情報	備考
台形；東	那スノ与市駒立石／佐藤次信／次信碑／サス堂／櫻ノ浦／アカハサキ／合引／惣門ノナキサ／ソウ門アトアリ／長サキノ岬	維信墓・維信碑・サス堂・駒立岩の図像あり。
台形；西	レイガン／塩濱／天王／相引／赤ハサキ／櫻のウラ／祈石／駒立石／須サキジ／遠見番所／長崎ノ鼻／コゼガハナ	
(集落+樹木)	—	—
(集落+樹木)	—	18 に類似。
台形；北西	だんの浦	屋島寺の図像あり。
—	八十四やしま寺	—
—	八十四やしまじ／だんの浦	—
(緑色の樹木表現)	八十四やしまじ	—
台形；東	八十四や嶋寺／相引汐はま	—
—	八十四八嶋寺／つぎのぶ	五輪塔の図像あり。
椭円形；北	屋島寺【カ】／アイヒキ【カ】	史蹟や地名記載がみられるが、判読できない。
台形；東	八十四や嶋寺／□□【相引カ】汐はま	24 と類似。
台形；北西	八十四や嶋寺	屋島寺の図像あり。20 と類似。

表1 地図に描かれた屋島のかたち（つづき）

ID	資料名	作者・出版社	作成年 出版年	時代	寸法(cm)	所蔵館
29	E035 丸龜ヨリ象頭山西四国八十八番寺社名勝 (岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No. 10)	板元作壽堂	—	5 47.9	35.8 × 47.9	香川県立ミュージアム
30	E036 南海道四国八十八ヶ所順拝図 (岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No. 11)	—	—	5 47.2	34.5 × 47.2	香川県立ミュージアム
31	E037 四国八十八箇所順拝略図 (岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No. 12)	—	—	5 47.0	33.5 × 47.0	香川県立ミュージアム
32	E038 四国八十八箇所偏礼絵図 (岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No. 13)	—	—	5 52.2	35.3 × 52.2	香川県立ミュージアム
33	E039 四国順拝御土産絵図 (岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No. 14)	—	—	5 48.2	36.4 × 48.2	香川県立ミュージアム
34	E040 四国偏礼〔地図〕 (岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No. 15)	明石寺茶堂	—	5 53.8	42.8 × 53.8	香川県立ミュージアム
35	E041 四国偏礼〔地図〕 (岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No. 16)	虎屋喜代助版	—	5 53.0	40.0 × 53.0	香川県立ミュージアム
36	E042 四国偏礼〔地図〕 (岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No. 17)	—	—	5 53.0	38.0 × 53.0	香川県立ミュージアム
37	E043 四国偏礼〔地図〕 (岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No. 18)	—	—	5 53.9	42.7 × 53.9	香川県立ミュージアム
38	E044 四国偏礼〔地図〕 (岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No. 19)	—	—	5 53.8	42.2 × 53.8	香川県立ミュージアム
39	E045 [四国八十八箇所地図] (岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No. 20)	明石寺茶堂	—	5 43.7	33.4 × 43.7	香川県立ミュージアム
40	E046 [四国八十八箇所地図] (岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No. 21)	四十三番札所〔カ〕	—	5 48.3	36.8 × 48.3	香川県立ミュージアム
41	E047 [四国八十八箇所地図] (岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No. 22)	—	—	5 48.5	37.8 × 48.5	香川県立ミュージアム

屋島の形；向き	関連する文字情報	備考
—	八十四やしまじ／だんの浦	22 と類似。
—	八十四〔カ〕やしま寺	—
—	八十四〔カ〕やしま寺	30 と類似。
(樹木表現)	八十四八嶋寺／相引汐濱	—
台形；西	八十四や嶋寺／相引汐はま	24 と類似。
台形；東	八十四や嶋寺／相引汐はま	24 と類似。
—	八十四や嶋じ	24 と類似。
—	八十四八嶋寺	—
台形；西	八十四や嶋寺／相引汐はま	24 と類似。
台形；西カ	八十四や嶋寺／相引汐はま	八栗山の裾が海岸線として屋島とつながっており、西から屋島・八栗を眺望した様に見える。24 と類似。

表1 地図に描かれた屋島のかたち（つづき）

ID	資料名	作者・出版社	作成年 出版年	時代	寸法(cm)	所蔵館
42	E048 四国八十八箇所順拝略 圖（讃岐金毘羅沽哉堂刊「金毘羅案内記」口絵、 岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No. 23）	讃岐金毘羅沽哉堂刊	1812	4	19.5 × 27.7	香川県立ミュージアム
43	E049 四国偏礼略図（十返舎一九「四国偏路独案内」 挿絵、岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、 No. 24）	十返舎一九	1821	4	18.4 × 12.7	香川県立ミュージアム
44	E011 文政七年高松藩領繪 図（写）	—	—	4	(軸幅) 82.0	高松市歴史資料館
45	E015 讃州屋島山井=八栗山源 平古跡図	馬嶺画	原本近世	4	36.0 × 78.5	高松市歴史資料館
46	E008 [瀬戸内海航路図]	—	1864	4	未調査	九州大学附属図書館（九州文化史）
47	E014 松平讃岐守海岸諒繪図 の内東讃海岸繪図	—	原本近世	4	(写真のみ)	高松市歴史資料館
48	E010 高松藩領繪図	—	—	4	177.5 × 74.4	高松市歴史資料館
49	L006 [山田郡繪図]	—	原本明治	6	(写真のみ)	高松市歴史資料館
50	L010 [讃岐瀬戸内阪出屋島 漁場繪図]	—	—	6	104.0 × 142.0	高松市歴史資料館
51	L013 愛媛県管内漁区全図	愛媛県庶務課編 輯	1881	6	53 × 109	愛媛県立図書館
52	L012 愛媛県管内地図	愛媛県藏版、水口臥龍館銅版	1884	6	52 × 109	愛媛県立図書館
53	L001 香川県管内全図	著作者後藤常太郎、発行者中村芳松	1900	6	39.0 × 55.0	香川県立ミュージアム
54	L002 大日本管轄分地図 香川 県管内地図 改正新市町 村名	著作者後藤常太郎、発行者中村由松・福岡元次郎	1906	6	39.5 × 54.6	香川県立ミュージアム

屋島の形；向き	関連する文字情報	備考
—	八十四やしま寺	—
—	八しま〔カ〕	—
楔形半島状；東	船番所／檀ノ浦／長崎のはな	—
台形；南	星嶋寺／黄牛寄／内裡アト／ツギノブ碑 ／キク王丸墓／北方ヤシマミチ／クラカ ケ松／神櫛王館塚／相引川／弓ナガレ／ 見返り橋／コマタテ石／イノリ石／大砂 子／スサキ堂／惣門／イオチ晶／王墓／ 薄墨墓／佐藤次信墳／長刀泉／ナギリ地 藏／源氏木戸／ウリフノ丘／土居ヤシキ ／源氏峯	鳥瞰図。『讃岐国名勝図会 卷之三』の挿図「八栗屋島 源平古戦場」に類似。
楔形半島状；平面	—	—
実態形	遠見在所／長崎のはな	—
実態形	星嶋寺	「名所旧跡」「古戦場」の凡 例はあるが、源平合戦関連 史蹟の記述なし。
実態形	星嶋寺	48と類似。
楔形半島状；平面	—	山容は他の山々と同じ様 式。
実態形	檀ノ浦／長サキハナ	—
実態形	「古城址及陣屋趾」記号／「県社」記号／「郷 社」記号／長寄	25万3千8百分の1の銅版 地形図。
実態形	矢島寺／長寄	輪郭と地名のみ表現。
実態形	矢島寺／長寄	輪郭と地名のみ表現。53と 同じ。

表1 地図に描かれた屋島のかたち（つづき）

ID	資料名	作者・出版社	作成年 出版年	時代	寸法(cm)	所蔵館
55 L003	大日本管轄分地図 香川県管内地図 改正新市町村名	著作者後藤常太郎、発行者中村由松・福岡元次郎	1908	6	39.1 × 53.8	香川県立ミュージアム
56 L004	香川県全図	著作印刷兼発行者日下伊兵衛、発行所和楽路屋、売捌元又間精華堂	1913	6	39.4 × 54.1	香川県立ミュージアム
57 L005	全日本最新名勝名物地図	大阪毎日新聞社発行	1932	6	26.0 × 108.0	香川県立ミュージアム
58 L008	屋島・五剣山	香川県発行	—	6	27.2 × 39.3	香川県立ミュージアム
59 L009	香川県史跡名勝天然記念物分布図	—	—	6	37.6 × 53.2	香川県立ミュージアム
60 L015	沿線案内	高松琴平電鉄	1934-	7	26.8 × 38.0	高松市歴史資料館
61 L016	備讃瀬戸及び備後灘海路図	—	—	7	75.8 × 108.0	香川県立ミュージアム
62 L011	高松市屋島地区全図	—	—	8	118.5 × 76.5	高松市歴史資料館
63 L017	高松市屋島地区全図	—	—	8	119.0 × 77.0	高松市歴史資料館

注1：「屋島の形状」は、山容表現が無い場合（ ）に示した。

注2：「関連する文字情報」は、通常記される地名は除外した。

屋島の形；向き	関連する文字情報	備考
実態形	矢島寺／長崎	輪郭と地名のみ表現。53と同じ。
実態形	矢島寺／長崎／権ノ浦	輪郭と地名のみ表現。
実態形半島状	「屋島」（日本二十五勝の表記）／屋島寺	古戦場の地図記号あり。八栗山と一体になっている。
実態形	長崎鼻／砲台趾／遊鶴亭／櫓丘／屋島古城趾／談古嶺／屋島寺／獅子靈巖／豊石／不喰梨／加持水／佐藤繼信墓／安徳天皇社／菊王丸ノ墓／赤牛崎／相引川／駒立岩／大砂子／祈岩／洲崎寺／義経弓流し／總門／射落畠／神櫛王墓／太夫黒墓／繼信墓／宇龍ヶ丘／源氏峰／船隠／義経鞍掛松	図中に「源軍ノ進路」「源平合戦当時ノ海岸想像線」あり。
実態形半島状	屋島ケーブル	輪郭と地名のみ表現。
実態形半島状（表）／実態形（裏）	【表】屋島寺／屋島ケーブル／権ノ浦／船隠 【裏】長崎／遊鶴亭／屋島洞穴／千門堂跡／談古嶺／櫓ヶ丘／古城跡／屋島寺／血ノ池／相生松／仁王門／可正桜／行啓記念碑／雪ノ庭／獅子／靈巖／瞰跡亭／不喰梨／葉の松／加持水／屋島ケーブル／八幡宮／屋島神社／鞍掛松／菊王丸墓／佐藤繼信引墓／安徳帝行宮跡／船隠／相引川／駒立岩／祈岩／大砂子／洲崎寺／射落畠／神櫛王墓／佐藤繼信墓／太夫黒墓	屋島ケーブルの路線図あり。
実態形	長崎鼻／壇ノ浦	—
実態形	遊鶴亭／談古嶺／獅子／靈巖／屋島寺／東照宮	5千分1地形図。
実態形	遊鶴亭／談古嶺／獅子／靈巖／屋島寺／東照宮	5千分1地形図。 62と同じ。

表2 屋島図像の形状一覧

	台形	楔形	実態形	円形	楕円形	地形表現無し	小計
島	23	1	13	1	1	—	39
半島状	0	6	4	1	0	—	11
計	23	7	17	2	1	14	64

注1:「地形表現無し」には、屋島寺や集落や樹木のみを示したものが含まれている。

注2:表1の資料60は表面・裏面の地図の両方カウントしたため、資料点数の合計63点と一致しない。

視点の図と比べて低平で、南北方向に伸びた島として表現されている。西からの視点では、佐藤継信の墓などの源平合戦関連史跡が裏側になってしまい、それらを表現するという点で不利なように思われるが、23の場合は文字による注記で史跡を多数示している。

上記以外では、今回取り上げた四国遍路絵図のうち半数近い11点で、台形に描かれた屋島の図像を確認できた。この11点は二つのグループに分けられる。一つは20・28の2点で、「八十四やしまじ」という札所表示の背景として、前者はやや北西の方向から屋島を眺めたように描かれているものである。もう一つはそれ以外の、24をはじめとする9点であり、「八十四屋島寺」と細長い楕円の囲みで記された背後に屋島の山容を描くものである。ただ、その表現の細部は異なっており、例えば、24や27のように山容右肩が下がり北嶺と判断できるもの（東からの屋島）もあれば、33・40のように山の左肩がなだらかに下がり、こちらが北嶺のように見えるもの（西からの屋島）もある。また、41のように屋島の左上（北西）に描かれる五剣山の裾が海岸線のように延長して引かれ、屋島と接続し、西から屋島と奥の五剣山を眺めたように見える図となっているものも見受けられる。これは、24と同系統の四国遍路絵図が、同一の板木を使用しているのではなく、同じ様式を流用して別々に開板し印刷・刊行されたために起ったものと推測される。開板に際し屋島の図像がそれぞれ書き直された結果、同一系統の絵図に異なる視点からの屋島像が混在することになったと考えられる。

なお、今回分析した資料においては、台形の屋島像は全て島として描かれており、ま

た、近世資料にのみそうした表現を確認している。

2. 楔形

北の先端に向かって細くなっていく形状の屋島の図像を楔形とした。これに該当する図は7点である。このうち国絵図の1(図4)は、島としての屋島を楔形に描くものの、山容については北嶺・南嶺間の谷を強調しつつ全体的に西から見た台形として描いている。この図は、景観年代が慶長15年(1610)から元和元年(1615)と推定されている(田中2010・2012)。近世初期の国絵図に屋島を台形に描くものが多い傾向と合致すると思われる。

逆に、楔形に表される屋島のほとんどは、四国の陸地とつながった半島状に描かれていることに注目しておきたい。享保19年(1734)頃の景観を描いていると推定されている9(図5、香川県立ミュージアム 館蔵品データベース「日本橋より長崎迄道中記(江戸から長崎迄街道図)」)と、それに類似した表現の、近世後期の海陸道中図の12(香川県立ミュージアム 館蔵品データベース「渡海絵図(瀬戸内海航路図)」)では、屋島は北西に向かって突堤のような姿をなしている。また、文政7年の絵図を原図とするという44や、近代初期と思われる漁区を図示した50(図6)のように、まっすぐ伸びて楔形をなすものも確認できる。さらに、14(図7)のように、山頂はほかの山々と同様ながら、北西方向に向かって伸びる山裾の長さで屋島を表現する図もみられた。これらは航路図や漁区に関する図のように、海からの視点で描かれるものが多い。屋島を北側から望んだ場

合、南から突き出して伸びる半島のように見えたために、こうした表現がとられた可能性が考えられる。

3. 実態形

楔形に似るが、測量の実施あるいは測量図を参照することにより地形の屈曲がより実態に近く表現され、われわれが近代以降の地図学的国法において「正確」とみなしているような輪郭の屋島像が登場する。これを先に触れた通り「実態形」と呼ぶことにしたい。地形的に正確な屋島の形状は、幕末頃の海岸絵図と思われる 47、幕末から明治初期と推測される 48（図 8）・49 以降、近代地図において確認できる。絵図・地図における屋島の図像に関して、近世は台形が主流であったとするならば、近代は実態形がそれに取って代わったといえる。なお付言すれば、その後台形の屋島は、リーフレットなど、科学的正確性を求められない場面において、モチーフとして多用されることになるものと思われる（本書第 11 章参照）。

香川県と合併していた時代（明治 9 年 [1876]～明治 21 年 [1888]）に、愛媛県藏版として刊行された銅版地形図の 51・52（図 9）、香川県全国の 53・54・55、高松市合併後の屋島地区の地形図 62・63 など、公的機関の関わる地図の多くで実態形が採用されている。戦前に香川県が発行した源平合戦の考証図である 58 では、実態形の屋島とその一帯に、「源軍ノ進路」と源平合戦関連史跡、「屋島古城址」や長崎の鼻の「砲台陸」、遊鶴亭などが付記されている。

実態形においても屋島が半島状に描かれる場合がある。史跡名勝天然記念物分布図の 59（図 10）、高松琴平電鉄による沿線案内である 60 の表面掲載の図は、いずれも広域の地図で、屋島ケーブルを含む路線図が描かれており、屋島が島であることを感じさせない図像となっている。

4. その他の屋島表現

屋島の形状には、上記のほかに円形や楕円形の表現が確認できた。長久保赤水作の日

本図で、安永 8 年（1779）に初版が刊行された 10 では、屋島はやや不整形な円形の島として描かれている。この図は刊行年（版）が同じながら摺が異なり、地形の表現や地名等の情報が補訂されていることが知られているが（馬場 2001）、今回は初版の初摺とされる図のみ確認している。同じく不整形な円形の図像は、半島状に描かれた航路図の 8 でも確認している。

四国遍路絵図の 26 では、南北に長く伸びた楕円形の屋島が描かれている。島の形としては平面ながら、山は南に頂上を向けて描かれている。この山容表現は、特定の場所からの眺めというよりも、むしろ山が存在することを示す記号として表現されているように思われる。

なお、森下（1993）には、鎌田共済会郷土博物館所蔵の国絵図の図像が掲載されており、今回調査出来なかった資料で屋島がどのように表現されているのかを知ることができた。その中には、年代不明ながら不整形な楕円形の屋島を描く国絵図や、元治 2 年（1865）に高松藩から朝廷に提出されたとある、実態形の屋島が描かれた国絵図の存在が確認できる。同様に、御厨（2005）に掲載されている鎌田共済会郷土博物館蔵の「慶長四国図」の写真から、同図に描かれた不整形な楕円形の屋島図像を見ることができた。

ここまで屋島の形状を中心みてきたが、一方で対象とした絵図・地図のなかには、屋島の地形表現がないものもみられた。例えば、金毘羅参詣における航路を鳥瞰図として描いた 18・19 では、隣に描かれる五剣山とは対照的に、屋島は山容が描かれて、樹木と集落の記号の表現のみ示される。また、四国遍路絵図では、樹木と思われる表現のみを屋島付近に描くもの、あるいは屋島寺の表示はあるが屋島は一切描いていないものも複数存在していた。

おわりに

主要な資料を中心に、近世以降の絵図・地図における屋島の図像を検討してきた。その結果、①近世の絵図・地図において、屋島は東からの視点で台形に描かれることが多く、

若干の源平合戦関連史跡も図像として描き込まれていたこと、②形状としては楔形が台形に次ぎ、特に海からの視点で描かれた図に、屋島が楔形半島状に描かれる傾向がみられたこと、③幕末以降、測量（図）の普及とともに、実際の地形とほぼ同様の形状の屋島の図像が台形の図像に取って代わったこと、などが明らかになった。特に①・②は、近世の絵図・地図において、屋島の特徴的な形状が一定程度、パターン化されて認識・表現されていたことを示すものと思われる。

（主要参考文献・Web）

- 岩村武勇編 1973『四国遍路の古地図』出版
田中健二 2010「続 生駒時代・高松城下周辺の地形について」、『香川県立文書館紀要』14

田中健二 2012「生駒時代の国絵図に見る讃岐の姿
—海岸線と国境の峠道を中心に—」、『香川
県立文書館紀要』16

馬場章 2001「地図の書誌学—長久保赤水『改正日
本輿地路程全圖』の場合」、黒田日出男・
M. E. ベリ・杉本史子編『地図と絵図の政
治文化史』東京大学出版会

御厨義道 2005「讃岐国 海に面した溜め池王国讃
岐の姿」、国絵図研究会編『国絵図の世界』
柏書房

森下友子 1993「鎌田共済会郷土博物館所蔵の讃岐
国絵図」、『香川県埋蔵文化財調査センター
研究紀要』2

香川県立ミュージアム 館蔵品データベース
<http://jmapps.ne.jp/kpm/> (2015年12月
26日最終閲覧)

(担当：島本多敬)

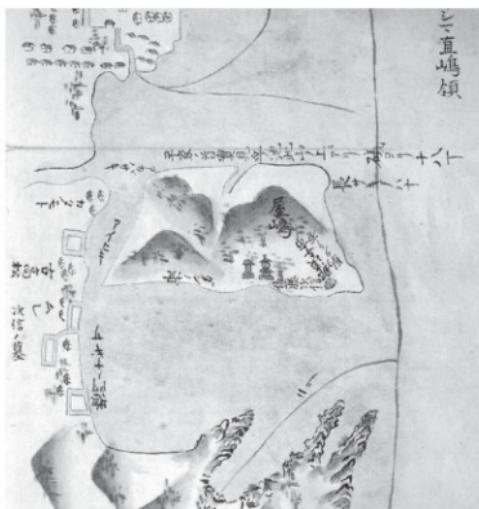


図1 海瀬舟路図

所蔵：高松市歴史資料館

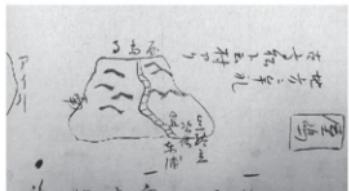


図2 海瀬舟行日記全

所蔵：九州大学附属図書館（九州文化史）



図5 日本橋より長崎造道中記

所蔵：香川県立ミュージアム



図3 讀岐国古絵図

所蔵：高松市歴史資料館

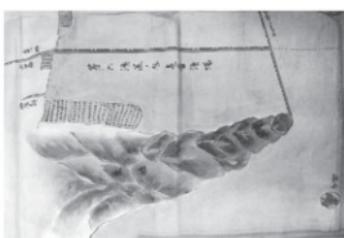


図6 [讀岐瀬戸内 阪出屋島漁場絵図]

所蔵：高松市歴史資料館



図4 讀岐国古絵図

所蔵：高松市歴史資料館



図7 [瀬戸内海図]

所蔵：九州大学附属図書館（九州文化史）

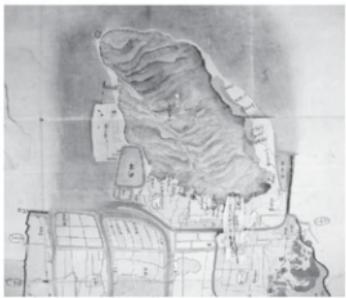


図8 高松藩領地図

所蔵：高松市歴史資料館



図9 愛媛県管内地図

所蔵：愛媛県立図書館



図10 香川県史跡名勝天然記念物分布図

所蔵：香川県立ミュージアム

9 明治前期の屋島、官林と塩田

「愛媛県行政資料」

香川県は、明治9年（1876）8月愛媛県に合併され、同21年12月分離して再置された。そのため明治9～21年の行政文書は愛媛県が保管していた。ほとんどの文書は再置の際に香川県に引き継がれたが、一部愛媛県立図書館に現存する。いずれも部分的な史料であり、全貌がわかるものではないが、そのなかから屋島に関連する史料を紹介し、明治前期の屋島の実態の一端をみていただきたい。

1. 明治9年「県政事務引継書」（M002～M 005）

明治9年香川県が愛媛県に合併される際の事務引継書である。以下4件の文書に屋島が登場する。

1 「旧香川県地理関係之事務引継書類縦込」 42号 山田郡屋島村農松岡唯八同村字壇ノ浦官林立木盜伐之件 壱通

右ハ現品追徵所刑相成、則別紙ノ通り盜伐本預り証書相添え、裁判所ヨリ通知致候ニ付、公ノ入札払下処分ニ可致積リニ有之候
4号 潟元村官有塩田関係書類

○屋島村にあった檀ノ浦官林の立木盜伐に関する書類であるが、本文は存在しない。

2 「演説書」

一民有塩田ノ義ハ、荒地起返損地等無之時ハ貢塩ニ増減無之、右金納相場ノ義、各

郡及塩飽島ニ於テハ、山田郡西潟元村ノ製塩相場ヲ用ヒ、小豆島直島ノ二島ニ於テハ小豆島ノ内草加部村ノ相場相用ヒ、右ニヶ所共該年一月ヨリ十二月迄平均相場取調、其筋エ要議ノ上、收入取斗候、委曲ハ地租収納帳并相場書総込等ニテ御承知有之度候

○香川県の民有塩田の金納相場は、屋島の麓に広がる西潟元村の製塩相場と小豆島の相場の各平均を用いていた。

3 「官林調査提要録」旧香川県第三課 「官林調査手続書」

一屋島山ノ内壇ノ浦五十間浦生当表藤目官林、從前ハ屋島山ノ字無之、現山ハ屋島山ヲ分裂シタル官林ニ付、此字ノ上江屋島山ノ内ノ五字ヲ冠シ候積
附り同山ハ名区ニ付禁伐林ト見認候得共、全山ノ内民林介リ、右官林而已禁伐ノ名ヲ下シ候テモ不都合ニ付禁伐ニハ被据サルノ積

一同山ノ内字西峰官林根据帳ニ有之現地江当り候所、本官林無之出会いノ二副戸長江推間ノ所、藤目官林江被加江有之旨申出判然不致ニ付、藤目官林江相加り候事由被糺申出候様及口達置有之申立次第査定ノ積

○屋島山には檀ノ浦・五十間・浦生・当表・藤目官林があり、名区=名所なので禁伐林としたいが、民有林があるので禁伐林にできないとある。官林と名所の関係が判明する史料である。

表1 明治10年代「指令本書」にみる屋島件名一覧

年 代	文 書 名
明治14年	124号山田郡屋島村海面寄洲埋立地所反別之儀ニ付上申
明治15年	116号山田郡屋島村官林内黒石堀採開坑頭之義ニ付副申
明治16年	147号山田郡屋島村官林全上（下草刈採）伺
	6号山田郡東潟元村屋島神社へ官有社地無代下渡伺
	11号山田郡西潟元村塙田税金額訂正上申
	69号山田郡西潟元村塙田払下伺
明治17年	51号山田郡屋島村官林内黒石堀取年繼伺
	54号山田郡屋島村官林内黒石堀採年繼伺
	94号山田郡屋島村石場総代落葉採取伺
	126号山田郡西潟元村總代下草払下順ニ付伺
	156号山田郡西潟元村官有塙田税金伺
	163号山田郡屋島村字藤目下草払下伺
	6号山田郡西潟元村屋島官林赤土堀採伺
	76号山田郡東潟元村下草払下伺
	127号山田郡屋島村外ニヶ村官林落葉採取伺

4 「地理科収入金仕訳書」旧香川県

金參拾六円五銭四厘 是ハ山田郡西潟元村
屋島村官林土石落葉下草代料、明治七年分
収入ノ趣ヲ以、昨八年再置県ノ期、旧名東
縣ヨリ現金引繼成、直ニ上納可取計ノ答、
然ルニ主任ノ者誤テ八年分代料ノ名義
ニシテ大藏省へ上納致シ、く本省上納方ノ
順序ハ一昨七年分未納ノ姿ニ相成候ヘトモ、
其实七年分ノ収入金ヲ以八年分上納致
シ有之、尤兩年トモ金員ニ増減ハ無之、全
ク前後ノ順序ヲ失シ候ノミ、其後本年ニ
至り八年分代料領書ノ通、該村ヨリ納來候
故、夫是取札ノ末前条ノ次第事実判然極テ
不都合ニハ候ヘトモ、兩年分更ニ納替ノ手
続可相立ノ積リニ候処、今般廃合ニ際シ候
ニ付、此上可然御上申有之度候 (〔〕は削除)

○西潟元村・屋島村の官林の土石落葉下
草代を徴収していた。大蔵省への上納の
手続きについての文書。

2. 明治11・14～17年「指令本書」(M007
～M011)

愛媛県時代の各案件に対して、県が指令
を出した文書を綴っており、綴じられた原文
書は香川県に返却され、愛媛県分の文書と全
体の目次のみ現存する。各年の目次の件名を
表1にまとめた。

○「県政事務引継書」にもあった西潟元
村の官有塙田、官林の落葉採取、下草払
の他、官林内の黒石堀取り、屋島寺や猿
田彦神社の境内樹木伐採、屋島神社への
官有社地下げ渡しに関する伺がある。

<謝辞>

本史料の調査に関しては、袖山俊夫氏にご教示い
ただき大変お世話になった。ここに記して感謝申し
上げたい。

(担当: 東 昇)

10 近代西欧のまなざしからみた 屋島と瀬戸内海

はじめに

本章では、幕末、明治、大正期にかけて来日した西欧人がどのように屋島と瀬戸内海を経験し、その体験を紀行文に記述したのかを整理して分析する。来日した多くの西欧人は船舶を移動手段として、長崎・下関方面から兵庫（神戸）を経て目的地・神奈川（横浜）へと行くルートの一部、あるいはその逆方向のルートをたどって航行する船の上からの視点で瀬戸内海の海域を経験した。

いま、ここで瀬戸内海と記したが、現在、瀬戸内海と定義される広い海域をひとまとまりの海域として認識する視点自体が、日本にはもともとなく、次に紹介する先行研究でも指摘されているように、近代初期に来日した西欧人たちの発見であった。西欧人たちは下関から兵庫（神戸）港あるいは大阪（大阪）港に至るまでの広い海域を、いわゆる the Inland Sea (内海) と認識して、紀行文に記述している。

本章のはじめにお断りしないといけないが、実は、船舶で瀬戸内海を航行する西欧人の屋島についての記述・描写の層は極めて薄くて少ない。いっぽう、近代に来日した西欧人の多くは the Inland Sea = 瀬戸内の海域を船で航行し、その景観について観察し、あらゆる賛辞をもって記述している。そこで本章では、幕末、明治、大正期へと時代を経るごとに変化する来日西欧人の the Inland Sea = 瀬戸内海についての記述を追いつつ、数少ないながら西欧人の捉えた屋島像について紹介する。近代西欧人が抱く屋島のイメージは、屋島が立地する the Inland Sea = 瀬戸内海の

イメージと密接につながっている。このような西欧人の瀬戸内海・屋島へのまなざしが、どのように屋島の名勝的価値の創造に関して、かかわっているのかについて考察して本章の結びとする。

I 先行研究と扱う資料

近代になって来日した西欧人の視点によって捉えられた瀬戸内海像について考察した先行研究として、最も重要なものは西田正憲の『瀬戸内海の発見：意味の風景から視覚の風景へ』（1999）である。西田は、本書の中で「歐米人が見た風景」として1章を書き起こし、「瀬戸内海を賞賛した外国人の紀行文等」の一覧表を掲載しているが、本章で扱う資料もこの一覧と重なっている文献もある（西田 1999：74-75）。

西田は、西欧人たちは、瀬戸内海の海域について正確な地図から得られる情報をもとに、それをひとつのまとまった海域だと認識し、「内海 inland sea」と「多島海 archipelago」という2つの地理的概念で海域を捉えたと分析する。そのうえで、来日した西欧人たちは瀬戸内の自然景の地形・地質・地被を科学的に捉え、光・色彩・空気を捉え、人文景・生活景を捉え、楽園を投影し、それを海上移動する船舶からの動的水平景からなるシークエンス景として捉え、瀬戸内海を豊かな語彙で、絶賛したと説明する。西田は、来日した西欧人の風景の見方として特徴づけられるような視覚で捉える近代の風景觀が、明治後期には日本人にも影響を与え、從來の歌枕や名所旧跡で捉えられた伝統的な意味の風景から視覚で捉えられる自然景と人文

景などについて記述する近代的風景へと日本人の瀬戸内海觀が再編されたと指摘する（西田 1999）。

本章で扱う来日西欧人の紀行文などの資料は、幕末、明治、大正期に来日した西欧人の記録である。幕末、1854年（嘉永7）に徳川幕府は日米和親条約をアメリカと締結し、そして1858年（安政5）にアメリカ・オランダ・ロシア・イギリス・フランスと修好通商条約を締結し、230年にわたる鎖国政策を転換した。日本の開国にともない幕末には、西欧人が徐々に日本を訪れるようになる。

開国後は外交関係者が来日するようになり、明治維新後は近代化を推進するために日本政府に雇われたお雇い外国人など、仕事やビジネスを目的に日本を訪れる西欧人がほとんどであった。1870年代の後半になると、観光目的で来日する西欧人が増加した。かれらは世界一周観光旅行の立ち寄り先の一つに日本を選んだ世界漫遊観光旅行者Globe Trottersであった。かれらの多くは、長崎から神奈川（横浜）へと向かう途中で、または逆のルートで瀬戸内海を船で航行する機会を得て、瀬戸内海の風景を絶賛する。世界漫遊観光旅行者にとっての瀬戸内海での船舶の上の経験は、日本滞在のハイライトでもあった。

さらに、20世紀を迎えると、瀬戸内海を船舶で航行して、高松から上陸して屋島を訪れて記述する西欧人も現れる。海を航行する船上からの視点だけではなく、高松から上陸し、屋島寺を訪れて記述する陸の視点を獲得する西欧人の事例については、本章では、1922年（大正11）に屋島を訪れた英国エドワード皇太子一行の公式記録の紀行文を紹介する。

II 来日西欧人たちによる The Inland Sea の呼称

先行研究でも指摘されているが、現在、日本人が当たり前として使用している瀬戸内海という用語は、明治時代に西欧人が使用していた英語 the Inland Sea の翻訳語として出発した概念であった（西田 1999）。瀬戸とは、文字通りには陸地が迫り急流をなす狭い

海峡部のこと、多くの島々からなる海域である瀬戸内海には多くの瀬戸があり、海であるが、河川のように流れる特有の景観をつくりだしていた。近世の日本人は、灘の連続として、瀬戸内の海域を認識していた。灘とは広い海のことである。

アンペールは、スイスの外交団の一員として幕末の1863年に来日した。かれの著した紀行文では瀬戸内海の海域について、地中海と比較しながら説明している。

地中海が、一方において、ジブラルタル海峡で大西洋と連絡しており、他方において、紅海でインド洋と連絡しているとすれば、日本の内海は、一方、関門海峡または下関でシナ海と連絡し、他方九州と四国との間の豊後水道によって、そしてまた、ニッポン島と四国との間の紀伊水道によって太平洋と連絡しているわけである。（N006）

さらにアンペールは内海について、「日本の内海は、時によって、周防灘または周防の海と書かれていることがある。」と、周防灘に代表させて内海を捉えることもあるとの述べる。さらに下関から大阪まで続く内海を、近世の日本ではいくつかの灘にわけて把握することを、再び地中海に比べながら紹介する。

ヨーロッパの地中海が、数個の海域に分けられているように、日本人も、自分の内海を五つの部分に分け、それぞれの部分を領有する州の名前をついている。すなわち、周防灘、伊予灘、備後灘、アリマ灘（播磨灘）、和泉灘がそれである。（N006）

アンペールが、内海を全体で統一して把握するよりも灘に分けて捉える近世日本の認識を紹介した幕末の1863年（文久3）から、28年後の1891年（明治24）に刊行された英文のガイドブックによる the Inland Sea の定義を次に紹介しよう。

日本に長期滞在している日本研究者チエンバレンとメイソンによって1891年にロンドンのジョン・マレー社と横浜のケリー・アンド・ウォルシュ社から併せて刊行された英文日本ガイドブック *A Handbook for Travellers*

in Japan, 3rd Edition (J001) では、3版にして初めて日本全国がカバーされ、瀬戸内海と四国が Route 50 The Inland Sea and the Chief Towns on or Near its Shores として紹介された。Route 50には、高松は含まれているが、屋島は記されていない。

A Handbook for Travellers in Japan は Inland Sea の呼称についてそれに対応する日本語が存在しないことを指摘している。

Another puzzle to the European visitor, to whom the Inland Sea has become a household word, is the fact that the Japanese themselves have no corresponding name in common use. The term Seto no uchi (lit. 'within the channels') is mere invention of modern chart-makers, intended to translate the English name. [ヨーロッパからの訪問者が疑だと思うのは、the Inland Sea の呼称はヨーロッパ人が使っている言葉で、それに相当する日本語は実のところ存在しない。「瀬戸の内」(文字通りには「海峡の中」)は、ただ現代の海図製作者が発明した語で、英語の用語の翻訳にすぎない] (J001: p. 358)

(〔 〕内は本章担当者による訳。以下同)

いっぽう、ウォルター・ウェストンは、1888年(明治21)に来日したキリスト教英國聖公会の神戸教区の牧師であり、1895年(明治28)まで日本滞在した。かれは登山や造詣が深く日本アルプスの名付け親で有名である。ウェストンは、*A Wayfarer in Unfamiliar Japan*『ウェ斯顿の明治見聞記』知られざる日本を旅して』(N022)では瀬戸内海について1章を費やしてその魅力を語っている。

瀬戸内海の魅力は、そこに住んでいる日本人よりも、西洋人の旅行者を一層惹きつけるようだ。不思議なことに日本の文学に瀬戸内海の魅力を賞美したものが全く見られないばかりでなく、実際に世間の人々はここに名前をつけなかったのだ。日本の地図に現在使われている名称は、西洋人の作家

や地図製作者が名づけた通り、海峡の内側を「瀬戸内」、内陸の海を「内海」として、そのまま日本語に直したものに過ぎない。西の入口にある下関海峡と東の出口にある明石海峡の景観は、当然受けるべき賞賛を受けてきた。一方、全長250マイルに及ぶ瀬戸内海の南北の沿岸の美しい景色の中でも、宮島や須磨のような個々の風景は、貴重な真珠のように高い評価を得ている。(N022: p. 116)

先行研究(西田1999、橋爪2014)も指摘するが、本書の記述はチェンバレンとメイソンによる1891年刊行のマレー社の*A Handbook for Travellers in Japan*, 3rd Edition の記述と重複する。ウェストンは、このハンドブック第3版の情報提供者、執筆者のうちの一人でもある。

先に紹介した *A Handbook for Travellers in Japan*, 3rd Edition には瀬戸内海地方の地図が Western Japan and the Inland Sea と題されてハンドブックに添付されている(図1)。この地図には、1891年時点の最新の鉄道路線や主要な都市名が記載されているが、屋島の位置には地名は記されていない。この地図は1891年に刊行されたのだが、鹿児島県後の最新の県名が記されず、旧国名(四国では、Sanuki, Iyo, Tosa, Awa)が記載されている。The Inland Sea は、多くの灘から構成されていることがこの地図をみると理解できる。地図に記されているのは、海域を西から東へ Suwa Nada (周防灘)、Bungo Nada (豊後灘)、Iyo Nada (伊予灘)、Bingo Nada (備後灘)、Mishima Nada (三島灘)、Harima Nada (播磨灘)、Izumi Nada (和泉灘) である。幕末にアンペールも紹介したように、近世の日本人は、これらの灘の連続としてこの海域を把握していた。*A Handbook for Travellers in Japan* のこの地図を参照すれば 1891 年以降に来日した観光客は、The Inland Sea は東西南の海峡部によって守られ、多くの灘の連続から構成される内海であり、無数の島々がちりばめられたような多島海であることが視覚的にも理解できる。



図1 Western Japan and the Inland Sea と題する瀬戸内海地方の地図
A Handbook for Travellers in Japan, 3rd Edition (1891) (J001) 所収

III 幕末に来日した西欧人の「奥の水路 ‘inner passage’」(Alcock, 1863) としての「いわゆる内海 ‘the so-called Inland Sea’」(Veitch, 1860) と屋島のイメージ

近世の鎖国時代は、長崎出島のオランダ商館長に随行して可能となる江戸参府の途上で、瀬戸内海を航行し、紀行文を著して瀬戸内海の風景を愛でたフィッセルやシーポルトなどの記録がある（N001・N017）。シーポルトは、内海の船の上から望める本州・四国の沿岸や多くの島々にみられる陸地について「温和な島国の気候と千年にわたる努力が、これを野趣のあるふれたロマンチックな庭園に作り変えた。…常緑の葉をもった樹木の多数の種類、ことにスギ、マツなどのすばらしい松柏類は日本の特長ある植物であり、早く花を開く樹木や灌木はこの地方に春常の外観を与えている」（N017:p.367）と植生を観察し、庭園のような瀬戸内海の風景を紹介した。

しかしながら、幕末、幕府に開国をもと

めて外交交渉に訪れた西欧人たには、瀬戸内海は、先に訪れたシーボルトのような人びとの記録から「描写を超えるような美しい光景 the scenery as beautiful beyond description」(N002) だといふ評語は届いていたが、瀬戸内海の航行は容易にはかなわなかった。幕府は、幕末の政治情勢を考慮して、西欧人には外交や軍などの政府関係者にのみ通行許可と水先案内などの手配を行つた。そのため瀬戸内海の航行は条件がそろわないとなかなかかなわず、秘境のような海域などの認識を幕末に日した西欧人は持った

ここでは、そのような条件を満たし 1860 年前後に瀬戸内海を航行した 3 人の英国人——ラザフォード・オールコック、ロバート・フォーチュン、ジョン・グールド・ヴィーチ——の記録をみよう。

オールコックは、初代英國公使であり、1861年（文久元）6月11日に下関を発って、3日後の6月14日の正午に兵庫沖に到着した英國艦リングダヴ号（H.M.S. Ringdove）の航海の経験について、1863年（文久3）に

刊行した『大君の都 Capital of Tycoon』(N004)に記している。ちなみにオールコックは、同紀行文のなかで、このときが初めての瀬戸内海航行ではないと記している。

ロバート・フォーチュンとジョン・グールド・ヴィーチは、両者とも英国の植物専門家でプラント・コレクターである。かれらは、日本開国とともに来日し、英國にて商業的価値のある植物を日本で収集して英國の園芸植物マーケットに流通させるために、初代英國公使オールコックをたよって来日した。オールコックも、植物学には造詣が深く、オールコックの『大君の都』の巻末の日本の植生についての記述はヴィーチの情報提供によったことが明記される。

ロバート・フォーチュンは、1860年（万延元）12月17日に横浜を出港して、12月20日に因島、21日に周防灘へと抜ける航海を、英國人のダンダス船長が操る汽船イングランド号にて行ったことを、1863年に刊行された『幕末日本探訪記：江戸と北京 Yedo and Peking』(N003)に記述している。フォーチュンは、瀬戸内海の航行は、軍や政府関係の船に限り許可制であったことが特に記されており、「ダンダス船長と船客はしばしば耳にしていた内海の絶景をしきりに見たがっていたので」徳川將軍から英國女王陛下への贈物をイングランド号は運搬しているとの理由で特別に瀬戸内海の航行を許可されたことが記される。この汽船イングランド号にはフォーチュンとともにヴィーチも乗船しており、両者の採集した植物で甲板は壯観だとの記述がある。

ヴィーチは、英國の園芸雑誌 *The Gardener's Chronicle and Agricultural Gazette* に1860年から1862年（文久2）にわたって書簡形式の紀行文を連載した。そこには1860年8月22日付けで、長崎から神奈川への行程で瀬戸内海を通過する記述がある。瀬戸内海については「いわゆる内海 the so-called Inland Sea」(N002) と記述され、かれは開国後ヨーロッパの船で航行を許された4番目の船 the Berenice 号に乗船したことを誇らしげに語る。

これら3人の記述に共通するのは、正確な地理的知識と植生の記述に特に注意を払つ

た記述をしていること、さらにビクチャレスクな審美眼によって瀬戸内海が記述されていることである。ビクチャレスクは、19世紀の英國で議論されていた新しい審美眼である。ビクチャレスクとは美 (beautiful) と崇高 (サブライム sublime) の中間に位置するとされる。英國の美学者ウヴェデイル・ブライス Uvedale Price によると、ビクチャレスクとは「荒々しさ、複雑さ、不規則性を持つ小規模な風景で鋭い対照と多様なる色合いに満ちたもの」だと定義される。ビクチャレスクとは、文字通りには「絵画美」であるが、その絵画とは、クロード・ロラン Claude Lorrain が描いたような、神秘的で、聖書や神話などの舞台になりそうな「心たのしい恐怖感」(川崎 1991 : p.83) をさそう的な絵画のことであり、英國ではこのようなビクチャレスクな審美眼を共有する造園法で庭園が新しくつくられていた。

オールコックは「下関一瀬戸内海と兵庫への航海」(N004 : pp.356-372) として、1章をあてており「この内海（一般に内海といわれているが、内海というのはあまり正確な名づけ方ではない）は、長さがおよそ 250 マイルで、大坂湾まで延び、わずかの岩と無数の島が点在している。幅はもっとも広いところで 50 マイルばかりであろう」(N004) と地理的情報について述べる。

さらにその美しさの評判について「これまでにこの内海を通行した少数のヨーロッパ人は、一樣に、景色の素晴らしい美しさを熱狂的にのべていた。The few European who had hitherto taken *this inner passage* had generally given very glowing descriptions of the surpassing beauty of the scenery. (下線筆者)」(N004 : pp.356-357) と語る。英文表現を見ると瀬戸内海を「この奥の水路 *this inner passage*」と日本の奥にある秘境のように捉えている。

オールコックじしんも、ビクチャレスクな視点から、次のように瀬戸内海の美について評価している。

多くの地方の景色はきわめて美しい。たとえ壮大ではないとしても、野性味や美しさをよくたもっている。In many parts, no

doubt, it is exceedingly picturesque, and if never grand, neither is it ever altogether tame, or devoid of beauty. (下線筆者) 一般に、日本の土地の特徴となっているすばらしいゆかさと肥沃さは欠けているが、この点にかんしてさえ、もうこれ以上は望むものがないほどにめぐまれた土地もある。平戸と九州のあいだの水道（平戸瀬戸）は、問題なくひじょうに美しい。(N004 : p. 369)

「運転がしっかりとすれば、蒸気船には本当の危険はないが、一見したところではひじょうに危険なように見えるので、その風景にいっそう興味が加わる」(N004 : p. 369)

とピクチャレスクな視点の特徴のひとつである「心たのしい恐怖感」(川崎 1991) のスリルをオールコックは味わっている。

水道の中央には、ほとんど水面すれすれに裸岩があつて、大きな船がやつと通れるだけの道を開けている。水は早い勢いで泡立ち、満を巻きつつこの岩をすすぐで流れる。沿岸には、間違いない火山であった証拠を見せていく山々がある。山々はそのふもとから頂上までたかくそびえ立ち、さきにかかげたし絵(周防灘)からもわかるように、ときまた完全な円錐形をなしているものがある。(N004 : pp. 369-370)。

フォーチュンも瀬戸内海について、播磨灘で「…このあたりの海の風光は、船が進むに連れて絶えず移り変わる」(N003) とパノラマの風景を記述する。植生や地質の科学的な記述とともに、

…農地としては豊沃でなくても、眺望の主眼は、奇異で空想的な丘や谷間、峨々たる岩石など、それらの人工を加えない野生のままの自然の風景にある。贅美した入江に沿った町や村に相対して、われわれ少人数の一行の人ならず、この美しい「内海」の海岸に日向ぼこでもしながらこの海辺に住み、そし「林間の隠者」となって、その

ような風景の中で余生を送りたいと、口をそろえて言う。(N003)

とピクチャレスクな審美眼により瀬戸内海を記述した。

さらにオールコックは、「兵庫付近 Near Hiogo」というタイトルの挿絵を紀行文『大君の都』に掲載している。この挿絵には、屋島と五剣山とおぼしき山容が描かれ、手前にはピクチャレスクな和船が描かれている。この挿絵について次のようにオールコックは記述する(図2)。

兵庫に近づくと、大変奇妙な山が見えてくる。その山は、1200 フィートほどのたかさで、平たいテーブル状をなしていて、そこから急に四方へ向けて山が低くなっている。When approaching near Hiogo a very singular view presents itself in a hill some twelve hundred feet high, which forms a flat table abruptly ending on all sides. (N004 : 中 p. 370 / (Chapter5) p. 101)

オールコックは屋島とみられる山の特徴を「1,200 フィートほどのたかさで、平たいテーブル状」だとメサ地形を描写しているが、かれは屋島という山の名前の固有名詞は一切語っていない。おそらくオールコックは、屋島という山の名前を知らなかつたのであろう。屋島の地理的位置は、挿絵のタイトルである「兵庫付近」であるとはとてもいえないが、下関方面から兵庫までの長い航海の道程を考えると、たしかに、兵庫方面に向かって航行すると終盤近くにさしかかったときに、南方の四国側の沿岸に、男木島と女木島を手前に屋島と五剣山を望む景色を目の前にみることができる。屋島という山の名前を知らないても、その特徴ある山容と地形はオールコックの目をひきつけて、和船の航行する前景もくわえて画題となり、ピクチャレスクな挿絵として紀行文に添付された。オールコックの『大君の都』(英文版)には、挿絵は G.Pearson によって彫られたと明記されている。



図2 Near Hiogo と題される屋島が描写される挿絵
『大君の都』(N004) 所収

IV 世界漫遊観光旅行者の Inland Sea の経験：1870 年代から 20 世紀初頭

ここで紹介するのは、主として 1870 年代から来日するようになった世界漫遊観光旅行者の Inland Sea の経験である。かれらの鑑賞の視点は、航行する船上からのシークエンス景（動的水平景）に特徴づけられる。以下に Inland Sea の内海と多島海の風景、かれらの地理的知識、ピクチャレスクな視点からの記述を時代順に紹介する。

最もはやく来日した世界漫遊旅行者のうちのひとりが、女性旅行家 Anna D'Aguilar である。彼女は幕末の 1862 年（文久 2）6 月に下関から横浜まで、蒸気船セントルイス号にて瀬戸内海を航行した。彼女は地理的には周防灘から東が内海だと理解している。

We were now in the Suonada, or inland sea, which, in fact, as we continued our sail over its transparent waters,

resembled a "succession of lovely lakes," one opening into the other. (N005: p. 228)

彼女は、穏やかな海を船で航行しながら内海を「すてきな湖の連なり」と捉えている。

ドイツの地理学者リヒトホーフェンは、日本経由で中国旅行に出発する。1868 年（慶応 4）8 月 31 日、神戸を出発し、9 月 1 日瀬戸内海を航行し、2 日に下関に到着する。かれは「内海の航行は素敵」と絶え間なく変化する内海を「深く分岐した入り江や、突端や、岬や、無数の島々…山脈の植物は大抵カルフォルニア海岸地域風の背の低い灌木で、そのから岩がのぞいている」(N009) と記す。屋島とおぼしき地形の記述はないが、四国については以下のように記述している。

目に見えるすべての岩、特に島の麓にあるそれは花崗岩の様に思われる。が、四国には火山とおぼしき圓錐形の山が見え、その二、三のものは 750 米の高さに迄達してい

る。個々の山脈の姿態は絵に書いた様である。側面傾度 60 度のピラミッド型、反った線を持つ歯齒型、花崗岩の圓い圓錐型が沢山ある。四国の奥の方には非常に高い山脈の輪郭が認められるが、それらは 1200 米乃至 1500 米はあるに違ひない。僅かばかりでも平地があるところ、特に渓谷の出口の所には、きまつて村落があり、數々多くの家の家や樹木や寺院などが見られる。土地は臺地状に耕され、米田よりは玉葱畑が多い。(N009)

さらに、内海について、このように広い地域にわたって幸福と繁栄の見られる優美な風景は世界的にもあまりなく「世界で最も魅力のある場所の一つとして高い評判をかち得」(N009) ると評価し、「この状態が今後も長く続かん事を私は祈る」(N009) と結ぶ。

次に紹介するのはオーストリア・ハンガリー帝国の外交官ヒューブナーの紀行文である。かれは、1871 年（明治 4）、世界一周旅行の寄港地として来日し、1871 年 9 月 29 日瀬戸内海を航行する。

ニューヨーク丸は朝の 3 時に（兵庫を）出港し、程なくして瀬戸内海に入った。日の出に私は甲板にいた。両側に円錐形の島々が姿を現わした。南には四国の高い峰々が広がっている…ニューヨーク丸は、時速 10 海里の規定の速度で航行を続けた。名状し難い絶景の故、当然のことながら名高い風景の一つ一つを成すものは、絶えず同じ内容だった。今日は鏡のような海が、代わる代わる湖のようになったり、河のようになったりした。いたるところに無数の休火山があり、大洋の波に似て円くなった岩塊が側面に並んでいた。岩塊には、密生した植物群落が覆っていた。峡谷の側面には難壇式に整地され、段々畠となつており、岩山の尾根はさまざまな樹木で飾られていた。幹の間から、空が見えるので、峰々と比べると樹木は、巨人が林立しているようみえるのだった。とはいえ、曇つて、湿気のある大気のプリズムを通して眺めると、峰々は、遠くにあって、非常に高いようだった。奇妙奇抜な光学的效果というも

ので、これで、日本の絵画の納得のいく奇様さのいくつかの説明がつく。我々に往々にして奇怪に思えるものは、自然の忠実な再現にすぎないので。(N008)

ヒューブナーは、以上のように植生などの科学的な自然観察と芸術の融合したところのピクチャレスクなまなざして瀬戸内海を見ていた。

アメリカ南北戦争で活躍したグラント将軍も瀬戸内海を訪れている。グラント将軍の随行員ヤングが記述した記録によると、一行は 1879 年（明治 12）6 月に長崎に到着し、そこから神戸へ向かうが、コレラ蔓延のために神戸には上陸せずに瀬戸内海を次のように記す。

われわれは五日間ほど、電報やジャーナリストたちにわざわざされることもなく、どこに目を向けても古の絵や絵のように美しい文明に取り囲まれながら、その美景とロマンスで有名な内海を航行したのである。(N010 : p. 58)

マスコミに追われる有名人グラント将軍にとっては、瀬戸内海は癒やしと美しいものに囲まれた隠れ家であった。

次に、客船の乗客ではなく、瀬戸内海に航行する船の乗組員の視点で、瀬戸内海を記述した『ウィル船長回想録』(N023) を紹介する。ジョン・バクスター・ウィルはスコットランド出身で、明治初期の日本やアジア各地で活躍した船乗りであった。かれは、瀬戸内海で働いていた 1872 年（明治 5）ごろの出来事として、外輪船オレゴニア号にデンマーク人のフラム船長のもとで航海士として乗船したときのエピソードを話す。

ある夜、瀬戸内海を進んでいた時のことだ。我々は北側の航路を取ることにしていた。私は丁度、この時当直で甲板にいた。船長は船首部にいて、自分の思うままに操舵の指図をしていた。船が変針点にさしかかっても、船長はそこで直角に針路を転じず、そのまま三原湾に向かって船を直進させていった。そこで私は叫んだ。「航路を

外れたぞ。このままだと、すぐ陸に乗り上げてしまうぞ」船長は夢から覚めたように、飛びあがり「船を止めろ。全速後進！投錨用意！」と叫んだ。しかし私は「その必要なし。今夜は視界良好だ。そして左舷船尾には十分余裕がある。船首が航路の方向をさすまで、舵柄を左舷にとれ。それから航路はそのままに真っ直ぐ進め」とやってしまった。(N023 : pp. 169-170)。

このエピソードは、回想録に記されたものであり、多少の誇張や自慢もあると思われるが、瀬戸内海で活躍した西欧人船乗りの視点から見た瀬戸内海の記述である。

英国人ノリス Knollys, H. による *Sketches of Life in Japan* (N011 : 1887) には、ノリスが長崎から神戸へ向かう途上に経験した瀬戸内海が綴られる。内海の名声について far-famed, land-locked expanse of waters called the Inland Sea と述べて、絶えず変化する自然の美を視覚的に捉えて記述している。ピクチャレスクな和船 the picturesque native boat が静かな水面に点在し、緑の肥沃な耕作されている土地について語る。1880 年代後期には「文明の印である電柱 telegraph poles」が沿岸部に連なって見える光景が觀察されている。

メアリー・フレーザーは、東京に英國公使として赴任する夫とともに 1889 年(明治 22)に来日した。来日直後の 1889 年 4 月長崎から東京までヴェロナ号で航行した。途中で通過した瀬戸内は日本の初印象をつくり、公使夫人としての日本での生活の決意が以下のように記述される。

今はもう瀬戸内にきております。私はすでにこの国的核心にふれたようです。その美しさや遠さの本質そのものをみたようです。あるいはこの国が、自分をこれで判断してほしいと願って示すようなものとすでにむかいついたようなのです。初めのいく日からは靄がたちこめ、波もかなりたかかったのですが、夢の光景がつぎつぎたちあらわれるにつれ、靄は一枚一枚巻き上がって遠ざかりました。一刻一刻の眺めがあまりうつくしいものですから、直前まで見てきた景

色が遠ざかっても、悔やむのを忘れてしまうのです。私はいろいろなものを見てきましたが、松の木に縁取られた日本の山々ほど、ひとつひとつがこの世ならぬ美しさをたたえているものはありません。曲線や突起のある、繊細でしかも大胆な表情。それらは西洋の山にはないものです。頂にはかならず一群の松がなごやかに並び、靄が涙のしづくをたらす暗緑色の小枝や、強い日ざしを受けて輝く金銅色の太枝を張り出しているのです。(N024 : p. 31)

シドモアによる *Jinrikisha Days in Japan*『シドモア日本紀行：明治の人力車ツア』(N012) は、1891 年(明治 24)に刊行された。シドモアの初来日は 1884 年(明治 17)であり、瀬戸内海を 6 回航行したことがあると記す。瀬戸内海を「魅惑的水域 enchanted waters」と述べ、次のように景色を愛である。

夜明けから夕暮れまで陰影が多い景色が広がり、穏やかな海辺を通過していくと、丘や島が次々と配列を変えながら歓迎してくれます。南アラスカの海岸は、よく瀬戸内海に比較されますが、アラスカ水路の狭い海峡、野性的峡谷、山壁は、この理想郷と双子の兄弟にはなれません。陸地に囲まれた瀬戸内海は、長さ 200 マイル [320 キロ] に及ぶ広大な湖となり、島々を豊富に浮かべ不均等な海岸線に守られています。鮮やかな緑に包まれた鋸状の山脈は、夢のような無風状態を乱すに足る野性味を帶びています。青々とした島がグループとなり、水路はどこも広く平らで、人間の営みと開拓達成の印がどの風景の中にもあります。(N012)

1890 年代に来日した世界漫遊観光旅行者の多くは、チェンバレンとメイソンが 1891 年に刊行した英文日本ガイドブック *A Handbook for Travellers in Japan, 3rd Edition* を持参していた。本書では、瀬戸内海の変化に富むピクチャレスクな風景について次のように紹介される。

for the traveller the smoothness

of the water and the continuously varying and picturesque scenery are an unfailing source of pleasure and comfort throughout its entire length. (J001)

1891年当時には、瀬戸内海の定期船としてJapan Mail Steamship Company's Steamerが神戸から下関まで就航していることがハンドブックでは紹介されている。

ベッカースティス一家は、キリスト教英國聖公会の司祭の一家である。一家の娘マリアーが紀行文 *Japan We Saw It* (N013) を著した。著者の兄は1886年（明治19）から日本に牧師として赴任し、父（英國エクセター教区主教）、母、兄とともに1891年に日本旅行を行った。11月に神戸から瀬戸内海を経由して九州へ出かける。日本郵船会社の蒸気船The Kobe Maru に乗船する。船長はイギリス人 Captain Haswell であった。彼女たち一家は、瀬戸内海では美しい景色を愛るために一日中甲板で過ごし、数百の島を通り過ぎ、数分ごとに変化する島の見え方、多数の小舟の様子を楽しんだことが記述される。

We steamed past hundreds of curious, cone-shaped islands, due to volcanic action, some of which were very bare, and others covered with vegetation, and cultivated to the very summit with rice fields. The constant change of our course revealed every few minutes new intersections of these islands and of the mountain ranges of the mainland, and we could often see three or four lines of distance. (N013)

モラエスは、ポルトガル人の外交官・ジャーナリスト・作家で、1899年（明治32）から1929年（昭和4）に日本に滞在し、徳島にて没した。1902年（明治35）から1913年（大正2）までポルトガルの新聞に日本の印象記を執筆した。かれは「瀬戸内海、インランド・シイ、これだけで、充分、日の出の帝国を定義できるだろう」(N025 : p.105)と幻想的な美しい日本の風景が瀬戸

内海の描写に凝縮していると評価し、楽園を投影する。「乗りこんだ船は長崎をあとに下関海峡を縫って航行し、イギリス人がインランド・シイと呼んでいる瀬戸内海一楽園にも似た風景に驚嘆するあまり、歩行する陸地そっくりの幻想をおこすあの比類のない内海一」(N025 : p.102)。多島海のイメージをもって「船が本州、九州、四国の島を縫つて進むとき、海水を浴びている無数の小島が散在するので、少しも陸地を見失わないで、しそうちゅう沿岸のなぎさ近くを航行する」(N025 : p.105)と瀬戸内海を描写する。沿岸の耕作地を庭園のように捉えて次のように描写する。

稲田、野菜園、丹念に耕作した畑が、どこまでも陸地になつてつづいている庭園に似た外観を与えている。そこここに楽しく村落が群がついていて、清潔でつやつやした小さい木造家屋が玩具のようにこみあってゐる。(N025 : p. 106)

ヤングハズバンドは軍人であり、休暇で1891年に日本旅行をして *On Short Leave to Japan* (N014) を1894年（明治27）に著している。かれは下関から神戸へと船で瀬戸内海を航行した。著者が乗船した船の船長から聞いた話として、船長が45回瀬戸内海を航行したうち晴れていたのは2回だけだったというエピソードが語られている。内海で島が多い海をいかに安全に航行するのかといふ水先案内の技術の難しさについて、シンガポールなどの他の海域と比較しながら語られる。瀬戸内海は、ピクチャレスクの特徴のひとつである「心たのしい恐怖感」(川崎1991)に彩られた場所であった。内海は「大きな湖 a huge lake」(N014) のようと記述され、イタリアやスイスの湖水と比較される。

キリスト教英國聖公会の司祭 (Canon of Durham) トリリストラムは、*Rambles in Japan, the Land of Rising Sun* (N016) を著した。本書の序文によると、彼は瀬戸内海を4回航行（2回神戸→下関、1回下関→神戸、1回大阪→四国）した。かれは日本には布教活動の視察のために訪れ広く旅をする。かれは瀬戸内海について美しさと素敵さにおいて匹敵

するものは世界にないとする。海岸風景において世界的に名声のある場所の要素がすべて瀬戸内海に備わっているとして次のように説明する。

Let traveller recall the finest bits of coast scenery he can recollect—the Bay of Naples in spring, Wemyss Bay on a summer's morning, trip round the Isle of Wight, threading the islands of Denmark's Sounds, the luxuriance of the Sumatran coast, the windings of the coral islets of Bermuda—recall whichever of them you please, wait but an hour or two—and you will match it in the Inland sea. (N016)

コジェンスキーは、ボヘミアの教育総監であり、世界一周旅行（1893-1894）の途中で日本を訪問した。1893年（明治26）10月に神戸からエンプレス・オブ・インディア号（カナディアン・カンパニー）に乗船し、瀬戸内海を通り、上海までの船旅を行った。瀬戸内海の航行には17時間かかった。

私たちは英文の地図でジャバニーズ・インランド・シー（Japanese Inland Sea）と呼ばれている海を巡航することになる。日本では瀬戸内海と呼ばれている。この航行は容易ではない。多くの入り江と暗礁と火山島がある。島の間の水路はとても狭く、航行するのは迷路のなかを進むに等しい。船が撃退するような場所もたくさんあったが、あらゆる危険な個所に用意周到に灯台が設置され、最大クラスの船の航行も可能となつた。おかげで、船客は素晴らしい眺めを楽しめる。（N015: p308）

英國人の作家キブリングは長崎から神戸まで、P. and O. Steamerに乗船して瀬戸内海を航行した。From Sea to Sea (N018) は、このときの世界旅行の紀行文である。かれは内海を通過するためには蒸気船で20時間かかる船旅だと記す。かれは内海を「大きな湖a huge lake」(N018) だと捉え、その中を通過する旅であり、あらゆる大きさの多数の

島々が目に入つくると、内海と多島海の風景を描写する。この自然の美しさに満ちた瀬戸内海のルートを通るために、キブリングはクック旅行社に100ルピーの追加料金を支払ったと記述する。どのような空のもとも、紫、アンバー、グレー、緑、黒と多様に移りゆく島々の美しさを見るためには、かれは支払った値段の5倍は価値があったと評価する。甲板には、ツーリストたちがこの景色を眺めるため出てきていて、かれらの感嘆の声が絶えない観察した。

E.M.ダヌンはベルギー公使夫人として14年間日本に滞在し1905年（明治38）に滞在記を刊行した。彼女は尾道から宮島に船で行楽したおりに観察した瀬戸内海の経験を次のように記す。

美しい春の天気に恵まれて、瀬戸内海の魅惑的な景色の中で一日を過した者でなければ、私たちに微笑み語りかけてくる大自然のあくまで落ち着いた安らかさを、本当に実感できないに違いない。こうして過した時間のすばらしさは筆舌につくし難く、決して忘れることができないほどであった。（N019 : p. 366）

お雇い外国人で東京帝国大学の動物学教授モースの瀬戸内海の経験を、滞在記『日本その日その日』(N020) にみてみよう。モースは神戸を出発して長崎まで、瀬戸内海を夜に航行した。瀬戸内海の名声について「ここは世界で最も美しい航路の一とされている」と述べる。また、夜の汽船の航行について、次のように描写する。

夜甲板へ出て見たら、汽船は多数の漁船の傍を通っていた。…（漁夫たちは）貝殻の笛を吹き、燈火が無いので彼等は鉛屏を燃やしたが、それは海面のあちらこちらで気まぐれに輝くのであった。闇は測知し得ず、笛を吹き鳴らすことと、火光を仄めかすこととは、汽船が漁船と並行する迄続けれ、そこで一つ一つ、火は消え、騒ぎがやむ。かくの如くにして前面には、ここかしこに、この沢山の笛の奇妙な騒音と、燃え上がる火があり、後方には音も聞こえねば、火

も見えぬ。まるで、汽船がそれ等を呑み込んで了つたかのごとくであった。(N020)

以上にみたのは、1860 年代から 20 世紀初頭にわたる世界漫遊旅行者の Inland Sea の経験である。かれらは、Inland Sea を内海と多島海の風景として、海峡、河川、湖のなかをすべるように進み、方向転換するたびに多くの島々と沿岸の生活から生み出された耕作地や集落などの風景に見守られながら航行した。海上から観察する沿岸の陸地の人びとの営みについて、耕作地に庭園、村落に菜園、電柱と電線の列に文明などを投影して記述した。瀬戸内海を兵庫（神戸）から下関まで通過するのに、1860 年代には、2 日から 3 日程度かかっていたのに対して 20 世紀初頭には、わずか 17 時間から 20 時間で通過する快適な船旅となった。この頃には、日本でも鉄道網が備わり、大阪から下までの一部は鉄道の旅も選択できるようになっている。英国人作家キブリングが、追加料金を払ってまで、鉄道ではなく瀬戸内海の船旅を選択したことが語られるが、キブリングの時代には、わずか 20 時間で名高い瀬戸内海を通過する船旅のアトラクションを購入したようなものであり、ツーリストは甲板にてて寸を惜しんで感嘆の声をあげながら瀬戸内海の風景を鑑賞した。安全な瀬戸内海航行のために水先案内人の技術は必須であるが、島々の間を次々と縫うように航行するスリルを感じた西欧人もいた。時代が、20 世紀に近づくにつれ、観光のまなざしで、ビックチャレスクな視点を駆使して瀬戸内海を描寫した。この頃には、幕末にあった瀬戸内海の秘境性のイメージはまったく消え去っている。瀬戸内海は、「奥の水路'inner passage'(N004)ではなく表の主要航路となっている。このように瀬戸内海を絶賛した、来日西欧人であったが、かれらは、瀬戸内海を航行する船の上から屋島を認識して記述することはなかった。次に紹介するのは、1922 年（大正 11）に来日した英国人の貴賓エドワード皇太子の屋島訪問である。

V 英国エドワード皇太子の屋島訪問： 1922 年（大正 11）5 月 6 日

"The Prince of Wales' Eastern Book: A Pictorial Record of the Voyages of H.M.S. "Renown" 1921-1922" (N021) は、英國皇太子エドワード一行の御召艦レナウン号による東方歴訪の公式記録の紀行文である。この公式記録の紀行文の語り手は、Sir Percival Phillips とされる。エドワード皇太子一行は、御召艦レナウン号 H.M.S. "Renown" に乗船して 1921 年（大正 10）10 月 26 日に英國ボーツマス港を出港して、ジブラルタル、スペイン、インド、日本へと東方向へ 8 ヶ月間かけて 41,000 マイルにわたって海と陸地の旅をした。かれらはインドで 4 ヶ月、日本で 1 ヶ月すごし、各地を歴訪した。日本を最終目的として、鹿児島を 1922 年 5 月 9 日に出港して帰途につき、1922 年 6 月 20 日にブリマスへ帰港した。

エドワード皇太子一行は、1922 年 5 月 6 日朝に神戸を出港して瀬戸内海を航行した。公式記録の紀行文によると瀬戸内海の船旅はまだ西欧の進歩が届いていない田舎の日本 Rural Japan を観察できる最後の機会だと捉えている。

The voyage through the Inland Sea gave his Royal Highness a last look at rural Japan, and at places yet untouched by Western "progress." (N021)

皇太子一行は、瀬戸内海を航行するために日本の新しい蒸気船 Keifuku Maru を借りきった。Keifuku Maru は下関と釜山のあいだの郵船として建造された客船で、造船所のもとを離れたばかりの新船だと説明される。船には、とくに皇太子と随行員のために特別に造えた船室が用意された。「皇太子の部屋は生花であふれ、興味深い盆栽 curious dwarf trees が飾られ、籠のなかの鳴鳥が囁っていた。通常の客船スタッフの代わりに、英国王室の随行員がお供をした。客船というよりは豪華なプライベート・ヨットのようであった」と船室の様子が描写される。



図3 “The Prince walking into the village of Jashima”

The Prince of Wales' Eastern Book (N021) 所収

瀬戸内海の航海については「驚きの連続であった The Inland Sea yielded one surprise another」(N021)と語られる。随行員の公式記録の紀行文では、瀬戸内海の地形や風景の描写はほとんどされず、どのように日本人の人びとが、皇太子一行を歓迎したのかが詳細に語られる。歓迎の様子は、岸にいる村人が皇太子の乗船している船に向かって、あるいは、地元の漁船が蒸気船に近づける限り近づき、日本と英国の旗をふって皇太子にお辞儀をして挨拶をしたと紀行文に語られる。さらに、どの顔もみな笑顔であったと記される。小学校に通う子どもたち、女性、男性、農民、漁民たちは、何マイルも離れた遠い村からも Keifuku Maru を見に来た。さらに、その歓迎は、高松に当日の午後に上陸してからも、行く先々で続いたと記録される。この歓迎ぶりについて、東京のような都市近郊では通常のことと受け取れるが、高松のような離れた地方 this remote locality では、全く予期せぬことであったと記される。皇太子一行

は、高松では松平卿の接待をうけ、栗林公園と屋島を訪れる。

公式記録の紀行文には、the Central News 社によって撮影された多くの写真が掲載されているが、屋島村での人びとの歓迎の様子は、“The Prince walking into the village of Jashima”と題する写真をみると理解できる(図3)。写真には屋島の山容のシルエットを背景にして、日本と英國の国旗を手に持つて振る人々に歓迎されるエドワード皇太子一行が写されている。写真的撮影場所は、屋島小学校の前辺りの道であろうか。松平氏はこの半日の歓迎のために、道路整備などに合計 10,000 ポンド以上使用したと公式紀行文には記述されている。

Count Matsudaira spent more than £10,000 in preparing for this half-day visit of the Prince, a fifth of which was devoted to building a special road to the top of the hill called Yashima,



図4 “The Prince experiences a ride in a KAGO—an ancient form of conveyance, Takamatsu”

The Prince of Wales' Eastern Book (N021) 所収

near the town. (N021)

1922年当時は、屋島山頂までのケーブルカーやドライブウェイはまだ整備されていなかった。皇太子一行は、栗林公園から屋島の麓までは、車で移動した。その後の3マイルの登山道の道のりは、駕籠に乗り人力によって移動した。

“The Prince experiences a ride in a KAGO—an ancient form of conveyance, Takamatsu”と題する皇太子が駕籠に乗りポーズを取った写真が公式紀行文には掲載されている(図4)。

Then motoring to the foot of Yashima, he encountered another three mile strip of cheering humanity strung along the way. It overflowed into the green rice-fields and even reached the lower branches of roadside trees. (N021)

このようにして皇太子一行は山頂の屋島寺にたどりつき、歴史的興味のつよい場所として屋島を紹介された。屋島の源平合戦における、船隠などのエピソードや源義経の勝利という結果について説明を受けた。

This is a place of great historical interest, the Taira clan having taken refuge here before the battle in which they were finally exterminated by Yoshitsune, the famous general of the Minamoto clan in 1185. A Buddhist temple on the summit contains many relics of the battle, and the priests were waiting to exhibit them to the Prince. (N021)

エドワード皇太子は、おそらく屋島の源平合戦図などの展示物を指し示されながら屋島寺住職から歴史的説明を受けたのであろうが、皇太子じしんは、この合戦物語を芸術と



図5 『英國皇太子殿下啓行記念 屋島山遠景 御召艦レナウン号』(I047)
香川県立ミュージアム蔵

して味わうことができたのだろうか。この公式記録の紀行文からは、明らかにはされない。さらに、この公式紀行文から、欠落しているのは、屋島山頂からの眺望についての記述である。これに限らず、公式記録の本紀行文には、日本の地元の人びとの英国皇太子歓迎の描写を通した人びとの営みに関わるような人文景については豊かに記述されるが、自然景についてはほとんど記述されていない。

屋島寺を訪問した当日の夜、エドワード皇太子一行は松平氏の邸宅に招待されディナーをもてなされた。一行は能と日英の旗のデザインのあわさった衣装をまとった12人のゲイシャの踊りを観劇し、Banzaiのコラスとともに提灯行列と花火の歓迎を受けた。次の朝には、再び瀬戸内海を経て、次の訪問地、宮島へと向かった。

この英国エドワード皇太子の屋島訪問について、日本側の資料として『英國皇太子殿下啓行記念 屋島山遠景 御召艦レナウン号』(I047)と題する記念絵葉書がある(図5)。この絵葉書はユーラシア大陸の西の島国・英國と東の島国・日本が赤く彩色された地図を背景として、中央に2枚の写真が配されている。横長の長方形にカットされた右側の写真の中には海上から見た屋島の山容が描かれており、この写真的左方にある海上に重なるように配置された写真には御召艦レナウン号が写っている。実際には、エドワード皇太子一行が神戸を出港し瀬戸内海を航行し高松まで

乗船したのは、公式紀行文に記されているように日本の蒸気船 Keifuku Maru であった。したがって、御召艦レナウン号は、瀬戸内海を航行していないし、この図像のように屋島山遠景とのコンビネーションで実際に写真を写すことはあり得ない。皇太子一行が瀬戸内海を航行するためには、御召艦レナウン号よりも、コンパクトなプライベート・ヨットのような日本の蒸気船 Keifuku Maru のほうが、都合がよかったのであろう。しかしながら、この「英國皇太子殿下啓行記念」の絵葉書では、エドワード皇太子の東方歴訪の航海の象徴である「御召艦レナウン号」の雄姿と「屋島山遠景」を組み合わせることによって實際にはあり得ない図像を巧みに創りあげた。

エドワード皇太子一行は、引き続き鹿児島まで日本の蒸気船 Keifuku Maru にて航行し、鹿児島で「御召艦レナウン号」に乗り換えて、英國への帰途についた。

この公式記録の紀行文で、印象的なことは、紀行文でも驚きを持って語られ、また、屋島村の "The Prince walking into the village of Jashima" の写真をみても理解できるように、エドワード皇太子を歓迎する地元の日本人たちの歓迎ぶりである。写真をみると、屋島村では、welcomeと記し、両国の国旗で飾る門までつくっていた。エドワード皇太子一行が屋島を訪れた同じ年(1922年)に摂政宮(のちの昭和天皇)も屋島に登った。大正時代を通じて日本の皇族による屋島訪問が多くみられた(本書第3章V参照)。エドワード皇太子を歓迎するときにみられた整然とした熱烈さには、度重なる賓客の來訪を歓迎するために動員され、旗振りなどの身振りをすることに慣れていた地元の人びとの姿がみえる。

おわりに
—屋島・瀬戸内海をめぐる近代西欧のまなざしと名勝的価値の想像／創造に向けて—

1913年(大正2)に、森田惣吉は、屋島についてのガイドブック『屋嶋めぐり』(J006)緒言を「世界海上の一大公園なりと外人の賛美せる瀬戸内海の風景をして一層絶景ならしむるものは屋島なりとす」と書きは

じめている。「外人」=西欧人が、「世界海上の一大公園」と評価する瀬戸内海のうち、もつとも眺望が絶景なのが、屋島であるとしている。森田は、屋島からの展望を「最も良好なる位置と最も適当なる海拔」のなせるわざとほめたたえている。

西欧人は、近世のシーポルトをはじめ、幕末の外交関係者、明治・大正期に来日した世界漫遊観光旅行者たち、さらに、英國エドワード皇太子のような貴賓客は、瀬戸内海を、森田が形容するように「世界海上の一大公園」としてほめたたえたのは間違いない。先に見たように西欧人たちは、正確な地理的知識と地質・植生などの科学的な観察の視点で、瀬戸内海の風景をピクチャレスクな自然庭園のように記述した。しかしながら、西欧人の瀬戸内海の記述は、海上の船からの視点が主流だった。

1922年（大正11）に屋島を訪れた英國エドワード皇太子は、山上にある屋島寺まで登る機会をもって源平合戦の歴史物語について説明を受けたが、絶景だとされる山上からの眺望については公式記録には記述が見当たらない。山上からの絶景を鑑賞する西欧人の記述は、エドマンド・ブランデン(GO40)、ポール・クローデルまで待たねばならない（本書第3章II参照）。

瀬戸内国立公園は、1934年（昭和9）に制定された。同年に日本人Akimoto Shunkichi（秋元俊吉）は、英文の日本観光ガイドブック *The Lure of Japan* (J015) を鉄道省(Boad of Tourist Industry Japanese Government Railways)から刊行した。そこには英語文化圏の西欧人観光客に訴える西欧人のまなざしを意識した日本の魅力が記述されている。瀬戸内海=Inland Seaについては、日本の地中海 It is rightly called the Mediterranean of Japan と紹介している。急速に近代化する日本のなかでも伝統的な日本の生活がみられる場所として瀬戸内海が紹介される。ガイドブックでは四国は瀬戸内海に面していて、風景が美しく国立公園に含まれることが強調されている。そのなかで、とくに屋島については、12世紀の源平古戦場であったという歴史的側面が紹介されている。

The Island of Shikoku may stand quite on its own, but that scenic part, facing the Inland Sea, is included in the Park, especially Yashima where the famous bloody battle was fought between Taira and Minamoto clans in the 12th century. (J015 : p.187)

ただし、興味深いことに、このガイドブックには屋島の地形の特徴や山上からの展望については何も記述されていない。これは、英國エドワード皇太子の紀行文には屋島からの絶景が記述されなかったことと呼応するかのようであるが、疑問が残る。

森田の『屋嶋めぐり』や Akimoto の *The Lure of Japan* には、本章で概観した西欧人のまなざしを意識して、同時に日本人に訴える屋島の普遍的な魅力を創出しようという実践がみえるようだ。これは名勝的価値において評価される自然景観と人文景観の融合の試みと重なるとも考えられないであろうか。

〈主要参考文献〉

- 川崎寿彦 1991 「楽園のイングランド：バラダイスのパラダイム」 河出書房新社
橋 セツ 2009 「19世紀後半に日本を訪れた西欧人の旅行記」、神田孝治編『観光の空間：視点とアプローチ』ナカニシヤ出版
西田正憲 1999 「瀬戸内海の発見：意味の風景から視覚の風景へ」 中央公論新社
橋爪紳也 2014 「瀬戸内海モダニズム周遊」芸術新聞社

(担当：橋セツ)

11 ガイドブック・リーフレットに みる屋島像

はじめに

近世に引き続き、多くの観光客が訪れ、全国的にも著名な観光地として成長した近現代の屋島においては、種々の観光情報がガイドブックやリーフレットの形態で提供された。そして、それらには観光地としての「名勝屋島」の姿がはっきり映し出されている。この章では、これらの屋島に関するガイドブック・リーフレットに掲載された記述や図像をもとに、近現代における屋島像の変化をとらえることとする。なお、観光情報が掲載された紙媒体の刊行物の中でも、冊子の形態をとるもののがガイドブック、一枚の用紙に印刷されたものをリーフレットとして取り扱う。

I ガイドブック・リーフレットの 記述による屋島

この節では、屋島に関する記述があるガイドブック・リーフレットのうち、時代ごとに特徴的なものを例に挙げながら、近現代における屋島像がどのような変化をとげ、人々からどのように認識されていたのかを時代を追ってみていく。

1. 明治・大正期

この時期から、既にいくつかのガイドブック・リーフレット類が出されている。

古いものでは明治31年(1898)出版の『屋島名勝手引草』(J002・J003)というガイドブックがあり、屋島付近一帯の名所が紹介されている。紹介されている名所は屋島から

の眺望に関するものと歴史に関係するものの2種類に大別される。眺望については屋島山上から見た高松市街方面や談古嶺からの景色のスケッチが掲載され、その見事さを伝えている。歴史に関係する名所のうち最も多いのは源平合戦に関係する名所であるが、他にも屋島寺や不凍梨など空海に関するものや可正桜などの高松藩に関係するものも含まれる。

また、当該期のガイドブックとしては、『八栗屋島』(J005)、『屋嶋めぐり』(J006～J010・J021)、『讃岐案内』(J004)も発行されている。この三つのガイドブックでも『屋島名勝手引草』同様、屋島からの眺望や歴史に関わる名所が紹介されていて、特に『讃岐案内』では屋島に関する史料紹介にページを割いている。

この中でも大正2年(1913)に出版された『屋嶋めぐり』(J006)では、表紙に源平古戦場の文字と兜のイラストが(図1)、裏表紙には源氏・平氏の家紋や平家蟹、扇的などが掲載され(図2)、源平合戦の古戦場のイメージが強調されている。また、この『屋嶋めぐり』は屋島登山道やその付近の名所を網羅しているため、眺望や歴史に関する名所だけではなく、特産品や高松市街地についての記述も掲載される。この他には、紹介される名所に仰之碑や東宮殿下御やすみ所などの大正天皇ゆかりの地があり、当時の社会状況をよく反映していると考えられる。

リーフレットとしては、『讃岐名勝案内』(K001)がある。これは表題の通り、讃岐地域の名所を写真で紹介したリーフレットである。表紙は高松城のイラストで、背景に台形状の屋島が描かれる。掲載されている写真是金刀比羅宮、高松築港、栗林公園、屋島、寒



図1 『屋島めぐり』表紙
京都府立大学蔵



図2 『屋島めぐり』裏表紙
京都府立大学蔵

震災である。屋島の写真は印刷がはっきりしないため内容はわからないものの、「源平古戦場屋島」とタイトルが付けられていることから、源平合戦ゆかりの地というイメージが強いことがわかる。またこのリーフレットには金刀比羅宮の拝観券が付属しており、使用期限から明治40年(1907)頃に配布されていたことがわかる(本書第13章参照)。

この時期の資料からは、当時、屋島が眺望と歴史の名所として売り出されていたことが良くわかる。特に眺望に関しては「屋島めぐり」の冒頭に「世界海上の一大公園なりと外人の賛美せる瀬戸内海の風景をして一層絶景ならしむるものは屋島なりとす」とあるように、国外からも一定の評価を得ていたことがうかがえる。また、源平合戦ゆかりの地であるというイメージは広く浸透していたことがその記述や表紙のイラストなどからも伝わってくる。

2. 昭和（戦前）期

昭和初期は全国的に観光が注目されていた時期でもあり、昭和2年(1927)におこなわれた日本新八景の選定は地元の観光業発展を期待し、熱狂的な盛り上がりを見せたとされる(白幡1992)。この時、屋島は八景には選ばれなかったものの、同時に選定された日本二十五勝の一つとして選定されている。その際、屋島は海岸の部として選定された。その後屋島は昭和9年(1934)に国の史蹟天然紀念物及び瀬戸内海国立公園に指定される。その背景には、昭和の初め頃から香川県国立公園協会などによる指定を目指した運動があった。国立公園指定後に発行されたほとんどのリーフレットやガイドブックにおいては、国立公園に関する記述がみられ、中でも屋島は「瀬戸内海国立公園の王座」、「内海第一の勝地」などと謳われ、瀬戸内海国立公園内において、特に際だった存在として売り出



図3 『四国 屋島案内』より高松夜景
高松市歴史資料館蔵

されていた（本書第13章参照）。

また昭和4年（1929）には、屋島ケーブルカーが開通した。その後、平成16年（2004）に廃止されるまでの間、屋島ケーブルカーが屋島山上への交通機関として広く紹介されることになる。そしてこの時期に作られた観光客向けリーフレットに関しては、大阪商船株式会社や屋島登山鉄道など、交通関連企業が製作、配布したもののがいくつか見られる。これらのリーフレットでは自らの交通機関の案内と共に、付近一帯の名所の紹介を載せる形式が多く、比較的広い範囲を扱うことが多い。この中で屋島は金刀比羅宮や栗林公園などと並ぶ著名な観光地の一つとして取り扱われる。

大阪商船株式会社が発行した『讃岐遊覧案内』（K009）では、自社の大坂—高松—多度津航路の定期便を利用した讃岐巡りの日帰り旅行プランを提示している。このプランの中で屋島は中心的な位置を占め、屋島寺や談古嶺、遊鶴亭など屋島山上の名所がプランに組み込まれ、歴史的な情緒や屋島山上からの眺望をその見どころとして提示している。

また、この時期、香川県観光課・香川県観光協会発行の『讃岐案内』（K012）や屋島町役場発行の『観光の屋島』（K007）など、自治体が製作したリーフレットもみられる。『観光の屋島』では屋島の見どころとして、史跡、風光、天然記念物、神社仏閣、産業などを挙げている。風光の項では、談古嶺や獅子の靈巖、遊鶴亭、瞰蹠亭が取り上げられ、特に談古嶺、遊鶴亭、獅子の靈巖を屋島

の三大絶景としている。また談古嶺と瞰蹠亭からの景色は源平合戦と関連付けて説明されている。

同時期のガイドブックとしては、昭和5年（1930）香川県が発行した『讃岐 風光と産業』（J013）がある。本文中では4ページを割いて屋島の概要と談古嶺からの写真、屋島北嶺の写真が掲載される。

この時期のガイドブック・リーフレットの様相をみると、全国的な観光業の盛行の流れにのり、自治体と交通関連の企業が中心となって、屋島を含めた香川県内の観光を盛り上げていこうとする動きがよく表れている。そして、中でも瀬戸内海国立公園の指定が観光地としての屋島の価値を押し上げる契機となっている。また明治・大正期は屋島とその周囲を取り上げたものが多いにくらべ、香川県内や四国全域など、より広い範囲を対象とした観光情報が掲載される。

3. 昭和（戦後）期

戦後、復興と観光の復活を目指す高松市では昭和24年（1949）に観光高松大博覧会を開催する。一方、香川県は従来の観光地の整備を進めると共に、新しい観光地を生み出すため、観光地50景の選定をおこない、その後昭和37年（1962）には県議会で「観光県宣言」を議決するなど、観光施策を進めといった。

この時期のリーフレットを見ていくと、

それまでにない新しい記述がみられるようになる。例えば屋島山上からの風景に新しく夜景が加わる。「四国 屋島案内」(K030)では屋島山から見た高松の夜景の写真が掲載されている(図3)。他にはケーブルカーの乗務員による案内や屋島盆踊大会などのイベントの紹介、屋島の伝説などが新しい見どころの一つとして強調されている。

また、以前から見られる、源平合戦に関する記述にも変化がおこる。これまで、源平合戦に関する情報は、主に歴史的な意味合いで扱われ、屋島近辺の史跡や談古嶺からの景色が引き合いに出されていたが、「四国 屋島案内」では扇の的や弓流など、「平家物語」のエピソードは歴史ではなく、物語の項目で紹介される。その際、引き合いに出されたのは文楽における錆引の歌詞である。

この時期、屋島における交通機関にも大きな変化がみられる。昭和36年(1961)の屋島ドライブウェイの開通である。「瀬戸内海国立公園「屋島」ご案内」(K029)は屋島ドライブウェイの運営会社のリーフレットであり、この会社では屋島山上での売店や食堂を経営したり、屋島の東斜面にオリーブ園を経営したりしていたことがわかる。この屋島ドライブウェイの開通は、屋島観光に自家用の自動車を用いるという新しい観光形態が一般化するきっかけともいえる出来事であった。

この様に、戦後における屋島では、観光客誘致に向け、新たな観光資源開発に力を入れていたことがわかる。特にこの時期は太平洋戦争が終り高度経済成長をむかえ、社会が大きく変わった時代でもあり、それまでの屋島観に加え、新たな価値づけをおこなうとした当時の人々の様子が伝わってくる。

II 地図と図像から見る観光地「屋島」

前節では、主にガイドブック・リーフレットの記述を中心にみてきたが、この節ではガイドブックに用いられる地図と図像から、屋島が人々にどのように認識されていたのかをみていく。

1. 地図

ガイドブック・リーフレットの多くには地図が付属している。特に観光情報の提示を目的とするガイドブック・リーフレットでは、単なる地形だけでなく、主要な観光地や観光ルートの情報を盛り込んだ地図が掲載される。

中でも多用される形式は鳥瞰図である。ガイドブックではあまり見られないが、リーフレットでは鳥瞰図を掲載するものが多く、バリエーションも複数ある。まず、鳥瞰図で描かれる範囲についてみていくと、範囲はガイドブック・リーフレットの内容に左右され、屋島とその周辺のみを描いたものから、香川県全域が入るもの、広いものでは高知県や愛媛県の一部も含まれるような鳥瞰図が用いられる場合もある(図4)。また鳥瞰図の視点は、屋島の南東から描くものや、高松市街地の南方から見たもの、瀬戸内海側から見たものがある。珍しいものだと太平洋側から高知県越しに香川県を描くものもある。

では、これらの鳥瞰図で屋島はどのように描かれるかというと、多くは北嶺と南嶺のそれぞれの山頂部が平坦な山として描かれている。そして山上には屋島寺や遊鶴亭、獅子の靈巖などの観光スポットが描かれる。ここで描かれる屋島は通常、写真などで表現される真横からみた台形のシルエットとは異なる印象になる。また鳥瞰図の作者は不明のものが多いが、作者がわかるものに吉田初三郎作のものが挙げられる(口絵2・図5)。

これらの鳥瞰図の利点としては、立体的に観光地の場所や交通機関の配置が表現されているため、直感的に現地の地理情報を理解することができ、旅先で行動を考える際に有効であると考えられる。また、鳥瞰図では実際の地形を無視して、主要な観光地を大きくデフォルメして描くことが可能であるため、観光地だけをピックアップして紹介することができ、観光地案内用の地図として有効であったと考えられる。

鳥瞰図に似た形式のものには、談古嶺からの風景に源平合戦に関連する史跡等の場所を示した図がある(図6)。これは実際に史跡を見て歩くというよりは、実際の談古嶺からの風景とこの図を照らし合わせて、風景を



図4 『屋島』所収「四国観光案内図」

高松市歴史資料館蔵



図5 『史蹟要覧高松屋島琴平御案内』

京都府立大学蔵



図6 『香川県名所交通屋島史蹟鳥瞰図』

京都府立大学蔵

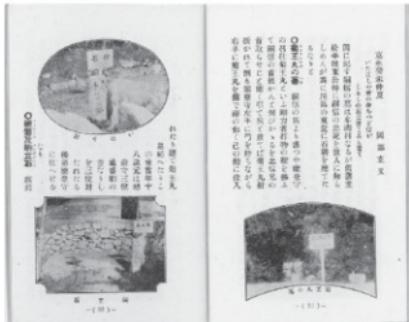


図7 『屋嶋めぐり』(J007) より

京都府立大学蔵

楽しむためのものであると考えられ、鳥瞰図とは異なる使用方法が想定される。

2. 圖像

ガイドブック・リーフレットに掲載された図像からも、当時の「名勝屋島」のどのような点に価値を見出していたのかがわかる。ここでは、絵葉書の構図を中心に、ガイドブック・リーフレットに用いられた図像を分類しながら検討する（なお、分類の詳細は本書第12章を参照されたい）。

まず、表紙に用いられる図像を見していくと、屋島が写される、または描かれるものは全て構図1の西側から見た屋島である。次にガイドブックに掲載される写真を見していくと、最も多くの写真が掲載されていたのが『屋嶋めぐり』である（図7）。ここで掲載されているのは、構図7と8に該当する図像が多い。ガイドブックはページ数が多いこともあり、丁寧に屋島とその周辺の観光地を紹介することが多く、屋島の全景や風景の写真よりも、観光地ごとの個別の写真が多くなる。また、絵葉書用の分類には当てはまらない、屋島合戦の様子を描いた絵や塩田などの屋島周辺の様子、お土産などの写真が掲載される場合も少なくない。

一方、リーフレットに掲載される写真を

みていくと、表紙に用いられる図像はガイドブックと同じく、構図1が圧倒的に多く（図8）、その他は構図2の東からの屋島と構図3の獅子の靈巖からの景色が表紙に用いられる場合がそれぞれ1点のみである。表紙以外に掲載される写真では、構図1～5に該当する風景に関する図像が多くなる。中でも構図5の談古窟から見た源平古戦場はパノラマ写真で掲載されることが多く、その他の構図より目立つ場合が多い。一方、構図8の屋島山上にはない源平史跡の図像は非常に少ない。このような偏りがみられるのは、紙面の限られるリーフレットにおいては、代表的な構図の写真を数点のみ使用する場合が多いのであると考えられる。その意味で、表紙に多用される構図1は代表的な屋島の構図といえるだろう。

リーフレット用の図像で特異なものは『四国 屋島案内』に掲載される写真で、他のリーフレットとは異なり、観光を楽しむ女性の姿を映した写真が多用される。他のガイドブック・リーフレットの写真でも人物が写りこんでいるものはいくつか見られるが、人物がメインで、なおかつ表情まではっきり読み取れるような写真を中心に掲載したものはこの資料のみである。これは楽しそうに観光する姿の写真を掲載することで観光地としての屋島のイメージアップを図ろうとしたものと考え



図8 「讃岐案内」表紙
香川県立ミュージアム蔵



図9 観光を楽しむ女性(『四国 屋島案内』より)
高松市歴史資料館蔵

られる(図9)。

この他に、ガイドブックとリーフレットには共通して源平合戦の図像が用いられ、特に扇の目的を題材にした図像は表紙にも多用されるなど、屋島のイメージを決定づける重要な要素といえる。

まとめ

リーフレットの記述と図像の二つの観点からの検討結果として以下の事柄を指摘することができる。

まず一つ目は、時代と共に移り変わる観光地屋島の姿である。明治・大正期においてはその歴史と眺望を売りにした屋島とその周辺が「名勝屋島」として認識されていたが、その後昭和に入ると、瀬戸内海国立公園の設立や史蹟天然紀念物への指定を通して、より広い四国、または日本というエリアの中でも歴史ある著名な観光地の一つとして屋島が認識されるようになる。そして戦後、社会が大きくなり変化する中で起こった、夜景という新たな眺望や屋島で開かれる様々なイベントなど新たな価値の付加、歴史から物語への源平合戦の意味合いの変化など、時代に合わせて移

り変わっていた「名勝屋島」の姿がはっきりと読み取れる。

次に二つ目は、近現代の観光地屋島を作り上げた当時の人々の営みである。ガイドブック・リーフレットでは、屋島を含む観光プランの提示や、現地の様子を明快に理解させるための鳥瞰図や代表的な構図の使用など、屋島観光をより良いものにしようとする意識が読み取れる。また、自治体発行のガイドブック・リーフレットの存在からは、屋島を地域を挙げて売り出そうとする、地元の人々の意志がみてとれる。

このようにして、時代の変化とそれに応じた様々な人々の営みの中で近現代における屋島像ができ上がっていったのだろう。

〈主要参考文献〉

- 香川県 1988『香川県史 第六巻 近代Ⅱ』香川県
- 香川県 1989『香川県史 第七巻 現代』香川県
- 白幡洋三郎 1992『日本八景の誕生 昭和初期の日本人の風景観』、『環境イメージ論 人間環境の重層的景観』弘文堂

(担当:川崎雄一郎)

12 絵葉書における屋島表現

はじめに

本章では絵葉書の数量的な把握を通じて、屋島の名勝の価値がいかに表現されているかについて考察する。屋島のイメージとして我々が思い浮かべるものは、南嶺と北嶺の二つの台形からなる姿や、手前に松を配し長崎の鼻を強調した姿か、あるいは山上からの風景か、と様々なものがある。絵葉書にはそのような屋島の価値の多様性が表現されているといえるだろう。そこで絵葉書を分析し、そのイメージの特徴について考察することとする。

I 構図の分類について

まずは分類するにあたって、基準となる構図を選定しておきたい。検討対象とする構図は以下の通りである。

構図 1：屋島を西側から東へ向いて撮影（描写）した構図（図 1）

構図 2：屋島を東側から西へ向いて撮影（描写）した構図（口絵 7 および図 2）

構図 3：屋島山上獅子の靈巖から高松市街を撮影（描写）した構図（図 3）

構図 4：屋島山上遊鶴亭から瀬戸内海を撮影（描写）した構図（図 4）

構図 5：屋島山上談古嶺から五剣山・庵治港船隠方面を撮影（描写）した構図（口絵 9 および図 5）

構図 6：屋島を南側から撮影した構図（図 6）

構図 7：その他屋島の展望地点や奇岩、屋島寺を写したもの（図 7）

構図 8：屋島山上にない、源平合戦に関する史跡（口絵 8 および図 8）

構図 1 については屋島の南嶺と北嶺がともに写っているものである。今の高松港の辺り、あるいは高松港よりも西へ移動した地点から撮影されたと考えられる構図である（写真 1）。

構図 2 については、現在の城岬公園付近から撮影されたものである（写真 2）。長崎の鼻が強調され、屋島の北嶺の端のみを写したものである。また、その他のパターンとして庵治港付近から撮影されたものもある（写真 3）。

構図 3 は山上から高松市街を望むものである。ここからの構図では絵葉書を 2 枚分使用したパノラマ写真になっているものもある（写真 4・図 9）。

構図 4 は、屋島の北嶺にある遊鶴亭から北を望んだ風景である（写真 5）。これもパノラマ写真となることがある。また、長崎の鼻から撮影・描寫したものもここに含める。

構図 5 は五剣山・庵治港・小豆島などが写った、あるいは描かれたものである。これは眼下に映る湾も一緒に写される（写真 6）。構図 3、構図 4 と同様にパノラマ写真になることがある。

構図 6 は「屋島富士」と呼ばれるものである。これは屋島を主題として写したものである。また、屋島神社やケーブルカーなどの背景に屋島南嶺が写っている場合もここに含めている（写真 7）。

構図 7 は屋島山上の展望地点や史跡を写



図1 構図1の例
〔屋島ヲ高松港ヨリ望ム〕
高松市歴史資料館蔵



図3 構図3の例
〔譜岐屋島名所〕屋島獅子岩巖より高松港を望む
京都府立大学蔵



図2 構図2の例
〔譜岐屋島名所〕〔源平古戦場〕屋島全景
京都府立大学蔵



図4 構図4の例
譜岐屋島北端遊鶴亭ヨリ瀬戸内海ヲ望ム
高松市歴史資料館蔵



図5 構図5の例
〔譜岐屋島名所〕屋島談古嶺ヨリ〔源平古戦場〕壇之浦五劍山・雪景・源氏峯及志度湾遠望
京都府立大学蔵



図6 構図6の例
(讃岐屋島名所) 屋島富士
京都府立大学蔵



図8 構図8の例
国立公園屋島百景
京都府立大学蔵



図7 構図7の例
(讃岐屋島名所) 獅子岩巖展望台
京都府立大学蔵



図9 (讃岐屋島絶景) 屋島談古嶺々々靈巖ヨリ見タル右ヨリ男木島・
女木島・中央大槌・小槌・左高松方面ヲ望ム
京都府立大学蔵



写真1 西側からみた屋島
(撮影：棟田成紹)



写真2 東側からみた屋島
(撮影：棟田成紹)



写真3 庵治港からみた屋島
(撮影：棟田成紹)



写真4 獅々の巣よりみた景色
(撮影：棟田成紹)



写真5 遊鶴亭よりみた景色
(撮影：棟田成紹)



写真6 談古嶺よりみた景色
(撮影：棟田成紹)



写真7 屋島神社と屋島
(撮影：棟田成紹)



写真8 屋島の展望台（獅々の靈巖）
(撮影：棟田成紹)

したものである（写真8）。屋島寺や血の池、遊鶴亭、談古嶺、獅子の靈巖、疊石、屋島神社などを写したものである。展望地点を写す場合は風景が主題となるのではないため、ここに分類した。

構図8は源平合戦の史跡を写したものである。屋島山上にある血の池等の関連史跡についてはここには含めていない。麓にある佐藤継信の墓や太夫黒の墓、祈り岩や駒立岩などがここに含まれている。

II 分類と考察

以上をふまえて検討に移りたい。調査にあたって収集した絵葉書の中で、構図1～8に当たるまらないものについては対象から除外した。その結果、検討対象とした絵葉書は479点である。当てはまるものを構図1～8に分類したところ以下のようにになった。

構図1：30点

構図2：34点

構図3：54点

構図4：41点

構図5：67点

構図6：26点

構図7：158点

構図8：115点

構図1～8の点数の合計が、検討対象とした絵葉書の点数と対応していないのは、図8のように、1つの絵葉書に複数の写真が掲載される場合があるためである。

構図7の点数が一番多く、158点となっている。構図7に含まれる主なものとしては屋島寺、血の池、獅子の靈巖、談古嶺、遊鶴亭である。獅子の靈巖については展望台を主題としたものも含まれている。この点については、写真や絵の対象となる地点が多いため、総点数としては多くなったと考えられる。また、構図8についても同様で、佐藤継信の墓、太夫黒の墓、弓流、祈り岩、駒立岩など、対象となる地点が多いためである。

また、一番数の少なかった構図6についても、「屋島富士」という表現がみられるところから東西からの視点のみではなく、南から

の視点にも価値が認められていたのだろう。

このような分類結果の中で、注目しておきたいのは構図1～8の中で、数が極端に少ないものが見られなかったことである。これは屋島が、「源平合戦の史跡としての屋島」という点のみに価値が發揮されるものではなくになっていることの表れであり、屋島の地形に対してその価値が見いだされていたことの表れだと考える。つまり、「源平合戦史跡としての屋島」と「風景や威容に価値が見いだされた屋島」が併存しているのである。

III 時期ごとの特徴

次に構図1～8について、その時期ごとの特徴についてみてみたい。

戦前の絵葉書について、絵葉書の年代は宛名面の様式で分類でき、明治33年（1900）から明治40年までを第1期、明治40年から大正7年（1918）までを第2期、大正7年から昭和8年（1933）までを第3期、昭和8年から昭和20年までを第4期と区別できる（松田2012）。

この区分に基づいて、今回収集した絵葉書を第1期～第4期と現代に区分したところ、第3期のものがほとんどとなり、次いで多かったものが第4期のものとなった。その次に多かったのは、戦後のものとなった。

一方、第1期のものはなく、第2期のものも数点確認できる程度であった。ただし、あくまでも今回確認した絵葉書に限られるため、第1期の絵葉書も作成されていた可能性は否定できない。

注目したい点としては、第3期の時点ですでに屋島全景を描いた構図1、構図2が確認されることである。屋島の全景を風景美として捉える風潮は、少なくとも第3期の始まりからすでに存在していたことになる。そして構図1、構図2の絵葉書は第4期や戦後のものにも引き続いて確認できることから、全景の風景美という視点は維持され続けたことがうかがえる。

また、絵葉書の数が第3期に集中している点について、これは昭和2年に屋島登山鉄道株式会社が設立されたこと、昭和7年に屋島の史跡保存や風致の保存を目的として

屋島保勝会ができたことなど、この時期に屋島に関する観光施策がなされていることも関わっていると考えられる。この後、昭和19年3月に瀬戸内海国立公園として国立公園に指定され、同年11月に史蹟天然紀念物に指定されることになる。国立公園や史蹟天然紀念物については第4期に属すが、その前段に積極的な運動が展開されたことがこれらに結実していることは言うまでもない。

IV 組物の検討

屋島に関する絵葉書には、1枚ずつ売られていたのではなく、「屋島二十景」「屋島二十五景」「屋島百景」「屋島百二十五景」といったように、組物として売っていたものがある。

たとえば第4期に刊行された『屋島名勝二十五景』(I018)は25枚の絵葉書からなる。うち、屋島に関する絵葉書は24枚である。構図1が1点、構図3が1点、構図4が3点、構図5が2点、構図6が1点、構図7が4点、構図8が12点である。

第3期に属する『源平古戦場屋島百廿景』(I057)は29枚からなり、そのうち12枚が屋島に関する。なお、これらの絵はがきには、構図8のように複数の図像が載せられている。その図像ごとに構図を確認すると、構図1が2点、構図2が2点、構図3が2点、構図4が3点、構図5が1点、構図6が2点、構図7が7点、構図8が2点である。

「屋島○○景」と題されるもの以外にも組物はある。第3期の『[屋島名所]』(I015)は16枚の絵葉書からなる。構図2が1点、構図3が1点、構図4が1点、構図5が3点、

構図6が1点、構図7が5点、構図8が4点である。

組物の絵葉書の中には、屋島がまったく採用されていないものもある。「屋島寺 宝物絵葉書」(I050)のように、屋島寺の宝物に特化したもの、『瀬戸内海に於ける源平の合戦』(I063)のように「平家物語」の逸話を絵画化したものなどである。

これらのことから考えられることとしては、特定のテーマがない限りは、屋島のイメージは複合的にえがかれるということである。組物の状態で確認できるもののが少ないともあり、断言することはできないが、少なくとも「屋島○○景」と題する組物では、複合的にえがかれているようである。

おわりに

絵葉書の構図を数量的に把握した結果、極端に数の少ない構図があるわけではないことがわかった。このことから、屋島の価値は、特定のものによるものではなく、複合的なものであり、屋島山上からの眺望や源平合戦史跡、そして屋島自体が価値あるものとして扱われていたと考えることができる。また、それらに価値を見出す傾向は、戦後に形成されたものではなく、昭和初期の段階からすでにみられたことが明らかとなった。

〈主要参考文献〉

- 松田法子 2012 『絵葉書の別府』左右社
屋島風土記編纂委員会 2010 『屋島風土記』屋島文化協会

(担当：棟田成紹)

13 屋島点景 —モチーフの「今」はむかし—

Ⅰ 江戸時代の「名勝屋島」点景

屋島は、親しみやすい風景のなかにある。屋島山上、さらにその周りでは常に人々の活発な活動と往来が交差する。それゆえに屋島の卓越した自然の造形と人文的な情景を表現するため、人々は「点景」を添え、様々な媒体で発信する。そしてその繰り返されてきたイメージの積み重ねは、広く受容・共有され、定着してきたのである。

近代という時代のなか、屋島は伝統的な名所から近代的な観光地へと展開していく。本章の目的は、屋島に添えられた自然的・人文的な「点景」を追いかながら、「屋島らしさ」に対する人々の意識と表現の関係を辿ることである。周りの事物との関係性が、その風景的価値を決めることもある。気が付くと副次的な事物が意識の中心として残り、受け止める側の心象によれば、いつのまにか主題たるモチーフとしての存在感を獲得しているという現象もまま起こり得る。

江戸時代末の屋島の風景は、『金毘羅參詣名所図会』と『讃岐国名勝図会』に趣向を凝らした挿図があり、文章とともに当時の認識をつぶさに観ることができる。本書第6・7章で述べられているとおり、『金毘羅參詣名所図会』は弘化4年(1847)、『讃岐国名勝図会』は嘉永7年(1854)とほぼ同時期の刊行である。前者の著者は後に各地の名所図会を手掛ける売れっ子作家となる大坂の曉鐘成、後者の著者は地元高松の碩学、梶原藍菓景惇らと、対照的な経歴をもつ人物の「屋島觀」を比較できる点でも興味深い。

図1～図4は、『金毘羅參詣名所図会』卷

之六から掲出したものである。図1「高松御城東湊町」は、地に高松城とその東に広がる湊町、天に屋島の南面と新橋、その間に帆かけ船が浮かぶ湾という構図である。もちろん現実にはこのような風景を目にすることができないが、二つの視点から見た風景を合成し、月影を添えて風情ある湊を演出している。

図2「屋島山南麓 古高松 喜岡寺 鞍懸松」は、左下にひときわ枝ぶりの立派な鞍掛松、右上に版面を突き破って聳える荒々しい屋島南嶺の山容を強調する。その間隙は左上に高松城と帆かけ船、右下は松林に囲まれる古高松である。鞍掛松の方には三度笠に合羽の旅人が向かう。

図3「屋島山 檜ノ浦 次信之墓」は、下半分に松林に囲まれる樅ノ浦(集落)と継信の墓(石塔)、霞を隔てて上半分が屋島山南面の構図である。継信の石塔の周りに生える松を大きく描き、その間を屋島寺に向かう人がみえる。

図4「八栗五剣山」は、樅ノ浦の浜辺に沿って安徳天皇社、内裏跡、駒立岩、洲崎寺、祈り岩などの旧跡が点在し、塩浜には煙がたなびいている。その間を縫うように、笠を被った人が、屋島寺から次の札所の八栗寺へ向かうようすが描かれる。霞の上は、威風堂々の五剣山である。

同じ順で『讃岐国名勝図会』の挿絵をみてみよう。図5は「高松城海上より眺望」である。たなびく霞と松の中に、石垣に囲まれて聳える立派な天守が描かれる。3重5階の唐造りの構造や、唐破風・千鳥破風のようすなどが実写され、本丸・二の丸・三の丸・北の丸の隅櫓を配して高松城の広大さを表現している。左下に高松藩の「○」旗印の帆が

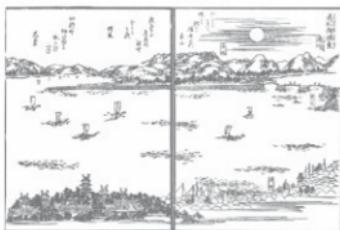


図1 「高松御城東湊町」

出典:『金毘羅参詣名所図会』臨川書店、1998年

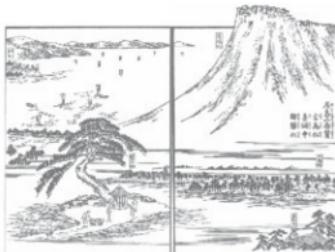


図2 「屋島山南麓 古高松 喜岡寺 鞍懸松」

出典:『金毘羅参詣名所図会』臨川書店、1998年

のぞき、海に面した城の風情を添える。『金毘羅参詣名所図会』が、南の陸から高松城をランドマーク的にシンプルに描くのとは対照的である。

図6は、図5に続く高松城東「其二 湊町川口蛭子社」の風景である。東の隅櫓から入り込む堀と、東浜の脛わいが描かれ、藩船や商用船がひしめきながら往来する活気が伝わってくる。左上の新橋から東向こうは田畠や塩田が広がる郊外である。

図7は、図6から続く新橋を渡った「八丁堤 沖松嶋」の風景である。東浜の町から屋島南嶺を望み、鋭く突き立つ五剣山の峰を遠望する。

そこに近づけば、いよいよ屋島の戦いの古戦場で、物語と伝承の世界が織り広げられる。『金毘羅参詣名所図会』では、見開き頁で那須与一が平家方の掲げる目的を射落とす場面を載せるが、『讃岐国名勝図会』では、図8のように見開き頁を3分割して三つの場面とし、「義経弓流図」を主場面に配置している。

図9は、『讃岐国名勝図会』巻之三にある連続する5葉のうち4葉をつないで復元した「八栗屋島源平古戦場」の大パノラマである。

図9の左半分は、相引川と新川の合流点の東を通る屋島道と、そこから山上の屋島寺へ上る参詣道を描く。杖をもつ遍路と思しき

姿がみえる。その東の麓には「八マン」の社殿があり、両側に植栽で整備された広い参詣道につづいて、相引川に大きな太鼓橋が架かっている。参詣道の傍には、立派な枝ぶりの鞍掛松と小さなお堂がある。

図9の右半分は、屋島神社の参詣道を左に見てさらに進み、相引橋へさしかかる風景である。相引橋の左手は屋島南嶺の急斜面に「内裏跡」「次信碑」「菊王丸墓」、右手には相引川の川岸の「弓流」「須崎寺」、五剣山の麓にかけて「惣門」「佐藤次信墳」「源氏木戸」などの史跡・伝承地が点在する。相引川の河口に架かる「見返橋」から北に海を臨んで、「駒立岩」「折岩」も描かれている。あたかも旅人となつた読者が、「源平合戦絵巻」の世界に迷いこむかのような構成である。

『讃岐国名勝図会』をめくって巻之六では、思いもかけない屋島の風景が目にとびこんでくる。図10の「西方寺山より東方眺望」と題された場面では、高台の松の下でござを敷き、遠くは小豆島、屋島全貌、点々と浮かぶ帆かけ船、そして高松城下の町並みを指さし、弁当を広げてのどかな田園風景を楽しむ男二人がいる。屋島の風景を知り尽くした地元目線ならではの名場面である。



図3 「屋島山 檜ノ浦 次信之墓」
出典：『金毘羅參詣名所圖会』臨川書店、1998年

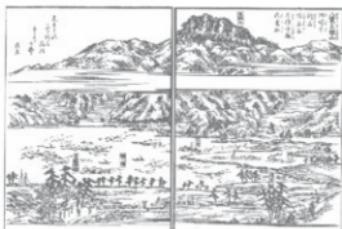


図4 「八栗五觀山」
出典：『金毘羅參詣名所圖会』臨川書店、1998年

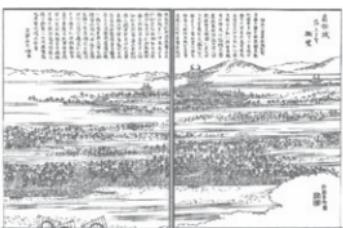


図5 「高松城海上より眺望」
出典：『讃岐国名勝圖会 前編』臨川書店、1999年

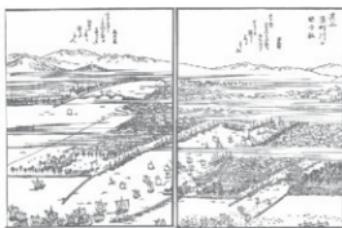


図6 「其二 渕町川口蛭子社」
出典：『讃岐国名勝圖会 前編』臨川書店、1999年

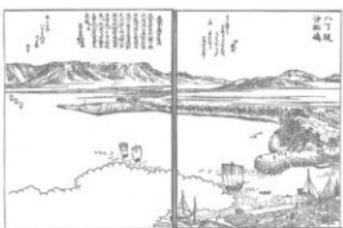


図7 「八丁堤 沖松崎」
出典：『讃岐国名勝圖会 前編』臨川書店、1999年

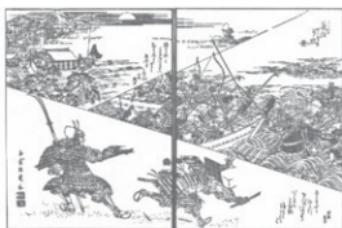


図8 「義経弓流図」
出典：『讃岐国名勝圖会 前編』臨川書店、1999年

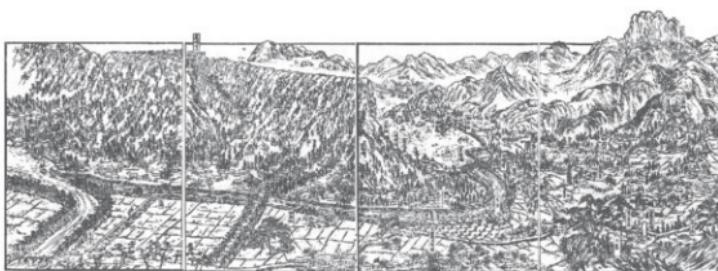


図9 「八栗屋島源平古戦場」

出典：『讃岐国名勝図会 前編』臨川書店、1999年



図 10 「西方寺山より東方眺望」

出典：『讃岐国名勝図会 前編』臨川書店、1999 年

II 新しい発信媒体と屋島イメージ

明治に入ると、『金毘羅參詣名所図会』や『讃岐国名勝図会』が描いた風景は、写真や新しい印刷技術により、絵葉書やリーフレットという媒体で盛んに発信されるようになる。いずれも簡潔で印象的な内容にするため、さまざまな工夫が凝らされる。ここでは、その顔となって発信された「袋」や「表紙」のデザインに着目してみよう。

図 11・図 12 は、戦前・戦後の絵葉書の「袋」を並べたものである。戦前のものは屋島を西の方向からみて、長崎の鼻を入れた特徴あるシルエットで表現するものが多い。それに組み合わせるのは、松と船、高松城、それに源平合戦を象徴する弓、兜、平氏の家紋（蝶）、源氏の家紋（淮童胎）である。図 11 ①（口絵 5）の『国立公園屋島の絶勝』(I025) の袋裏には、屋島のシルエットと「屋島保勝会、

屋島遊覧記念」のスタンプがある。

高松城は、明治初期から改変が進み、城郭建物は老朽化を理由にほとんどが取り壊され、明治 17 年（1884）には天守もなくなった。ここに描かれる城郭風の建物は、わずかに残った月見櫓や良櫓をデザインして、古城のイメージを挿入している。

戦になると、過去のモチーフだけにとらわれないデザインが導入される。図 12 ③『やしま』(I073) は、高松観光協会が発行したもので、台形の屋島と寝そべる若い女性の組み合わせである。そこに須須与一の扇的の立てるという奇抜さで、さすがに源平合戦は根強い。図 12 ⑤『瀬戸内海国立公園屋島パーク』(I079) は、絵葉書がカラー写真の時代となったころのもので、東南方向から塩田の名残りがみえる屋島をとらえている。

図 13～図 16 はリーフレットの表紙を並べたものである。絵葉書と同様、屋島のシルエットに松、船、高松城、源平合戦のモチー

が組み合わされる。

図 13 ①『讃岐名勝案内』(K001) は、金毘羅宮拝観券(明治 40 年 4 月 1 日～5 月 21 日)と、「津ヨリ高松ヲ経テ琴平行海陸時間略表」、「讃岐物産」が添えられ、裏に型取フレームで、金刀比羅宮・高松築港・栗林公園・源平古戦場屋島・寒霞渓の写真が印刷されている。

図 13 ②(K008) は、昭和 2 年(1927)発行の森田惣吉編『屋島案内』である。森田惣吉は、大正 2 年(1913)に『屋島めぐり』と題する小冊子を編集・執筆した人物で、笹竜胆、蝶、波千鳥、平家蟹を組み合わせるこのリーフレットは、その『屋島めぐり』の裏表紙と共に通す。

図 13 ③『国立公園屋島讃岐遊覧案内』(口絵 6) は、屋島の血ノ池茶屋本店森與八が発行したものである。西からみた屋島のシルエットとともに、那須与一と平氏方の崩的という名場面が大きく描かれる。裏面にあるカラーの大パノラマ図「源平古戦場讃岐名所図会」の欄外には、「屋島山上遊覧道順」として、「1 屋島寺 2 血ノ池(屋島寺の境内にあり) 3 霊巖 4 談古嶺」と添えられている。

図 14 ①『観光の屋島』(K007) は、屋島町役場発行で、表に図 12 ①の絵葉書袋とほぼ同じ「屋島保勝会・屋島遊覧記念」のスタンプが押されている。字体は異なるものの、上半分の屋島のシルエット、下半分のカモメが舞う海は同じ図柄で、中央に「昭和 14.10.29」の日付がある。派手さはないが、屋島の地勢、史跡の屋島、風光の屋島、天然記念物の屋島、神社仏閣、製塩場と梶原岳山、交通、屋島の土産品といった項目がしっかりと記され、地誌的な内容が網羅されている点で貴重である。なお屋島町は昭和 15 年に高松市と合併した。

図 14 ②『屋島遊覧電車御案内』(K013) は、四国水力電気株式会社発行で、志度までの駅名と沿線の名所を案内しているので、表紙のイラストに五剣山が入っている。極彩色の地図には、観光地だけではなく、高松市の市街地や公共施設などがくわしく盛り込まれているので、資料としてもおもしろい。

図 15 ① (K003) は、昭和 5 年に刊行さ

れた吉田初三郎鳥瞰図(口絵 2)の表紙「義経弓流の図」である。初三郎はこの「絵に添えて一筆」で、「余の屋島を描く既に三回、而も悉く創業期の作に属す」と述懐している。

図 15 ② (K014) も初三郎の鳥瞰図(本書第 11 章図 5)の表紙で、那須与一を中心として、蝶の切り抜きに屋島と高松城、メクリは青海波と松を散りばめ、鳥瞰図には「大正広重 初三郎画」と添える。発行人は高松市玉藻町の頼富庄蔵である。

図 15 ③『讃岐遊覧御案内』(K016) は、図 15 ②と同じ頼富庄蔵の発行である。高松城、船、カモメといったお決まりのモチーフを組み合わせている。時期は屋島ケーブル開設後で、メクリに栗林公園を覗かせる凝った構図である。南を上にした屋島と金比羅宮を結ぶ沿線の極彩色の鳥瞰図があるのも珍しい。

図 15 ④『屋島』(K025) は、那須与一を手前に大きく描き、背景の屋島は東からみたシルエットである。年代はわからないが、地図の横書きタイトルが左から右となっているので、戦後間もないころのものであろう。

図 16 ①『観光さぬき』(K017) は、高松市桟橋町の大川自動車株式会社が発行したバスによる観光案内である。枝ぶりの良い松の間に望遠レンズで屋島を見るようなデザインである。

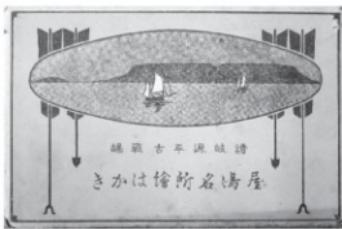
図 16 ②の『国際観光都市高松』(K032) は、高松市役所觀光課・高松觀光協会・高松市設觀光案内所が発行したものである。木々の間から屋島のシルエットを望み、手前にビルや建物が並ぶ現代的な都市像を描いたもので、左端に高松城を入れる。

高松市は昭和 5 年(1930)、全国に先駆けて「勝地紹介係」を設置し、昭和 11 年にこれを「觀光課」とした。「高松觀光協会」はそれに合わせ、觀光課と連携して觀光事業の拡大を図るために設立されたものである。

図 16 ③『屋島』(K025) は、高松市屋島中町の屋島登山鉄道が発行した、オールカラーの豪華版である。このころにはカラー写真や合成技術の進歩で、まるでイラストを描くような写真が登場する。屋島を背景にガイドがにこやかに案内するのは、屋島東側の写真と、赤旗・白旗の武者や馬が波しぶきをあげる源平合戦である。



①『国立公園島屋の絶勝』(I025)
高松市歴史資料館蔵



②『屋島名所繪はかき』(I006)
高松市歴史資料館蔵



③『源平古戦場屋島繪端書』(I067)
高松市歴史資料館蔵

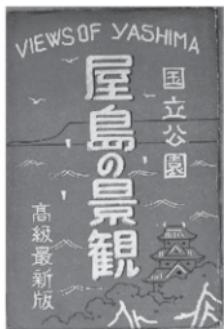


④『讃岐源平古戦場 屋島名所繪葉書』(I008)
高松市歴史資料館蔵



⑤『讃岐名勝屋島』(I042)
高松市歴史資料館蔵

図 11 絵葉書の表袋 (1)



① 『国立公園屋島の景観』(I027)
高松市歴史資料館蔵



② 『高松名勝絵はかき』(I030)
香川県立ミュージアム蔵



③ 『やしま』(I073)
高松市歴史資料館蔵



④ 『國立公園屋島名勝』(I024)
高松市歴史資料館蔵



⑤ 『瀬戸内海國立公園 屋島パーク』(I079)
高松市歴史資料館蔵

図12 絵葉書の表袋 (2)



① 「讃岐名勝案内」(K001) 高松市歴史資料館蔵



② 「屋島案内」(K008) 京都府立大学蔵



③ 「国立公園屋島讃岐遊覧案内」
(K021)
高松市歴史資料館蔵

図 13 リーフレットの表紙 (1)



① 「観光の屋島」(K007) 部分 香川県立ミュージアム蔵



② 「屋島遊覧電車案内」(K013) 部分 香川県立ミュージアム蔵

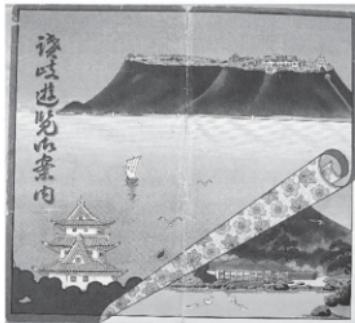
図14 リーフレットの表紙（2）



①『香川県名所交通屋島史跡鳥瞰図』(K003)
京都府立大学蔵



②『史蹟要覧高松屋島琴平御案内』(K014)
京都府立大学蔵

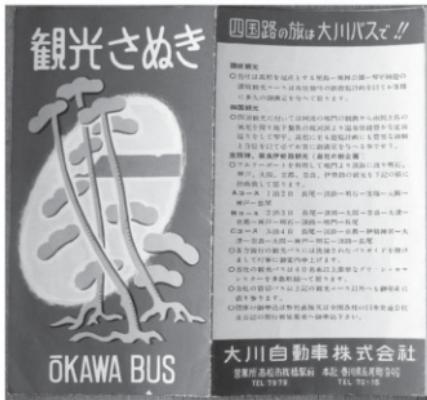


③『譜岐遊覧御案内』(K016)
香川県立ミュージアム蔵



④『屋島』(K025)
高松市歴史資料館蔵

図 15 リーフレットの表紙 (3)



① 『観光さぬき』(K017)

瀬戸内海歴史民俗資料館蔵



② 「国際観光都市高松」(KO32)

瀬戸内海歴史民俗資料館蔵



③ 「屋島」(K025)

高松市歴史資料館蔵



④ 『瀬戸内海国立公園屋島ご案内』(K029)

高松市歴史資料館蔵

図 16 リーフレットの表紙 (4)

図 16 ④『瀬戸内海国立公園屋島ご案内』(K029) は、昭和 36 年に開通した屋島ドライブウェイ株式会社が発行したものである。内側に印刷した島瞰図は、戦後に高松市が制作した屋島山上屏風の構図である。

III 変わる時代、重なる名勝

高松の政治・経済・文化の基盤であった高松藩は、明治維新的なかで朝敵とされ、城は開城し、明治 17 年（1884）には天守を取り壊された。このような新しい時代のなかで、名勝屋島の保勝を囲り、国立公園指定へ向けた新たな活動が展開していく。モダンな趣向を凝らし、美しくデザインされた絵葉書の袋やリーフレットの表紙からは、その時代の雰囲気と、新しい時代を切り拓こうとする人々の熱気が伝わってくる。

明治 30 年代には屋島保勝会の活動が始まっていたようで、この時期の設立は全国的にも十指に入る早さである。当時の関係者が風致保護や外国人観光客の誘致など、先見性をもって臨んだといわれている。この屋島保勝会は、昭和 14 年（1939）ごろまで活動していたことが、スタンプのある絵葉書やリーフレットの存在から確認できる。

大正 8 年（1919）の史蹟名勝天然紀念物保存法が施行されたころになると、香川県が屋島の公園計画を策定し、高松築港の改修や新桟橋の建設なども行われた（図 17）。大正から昭和初期にかけて、日本各地で産業振興や観光客誘致を目的にした博覧会が開催されるようになり、高松では昭和 3 年、高松港第 3 期工事の竣工と高松市庁舎の落成を記念して、高松市が主催する「全国産業博覧会」が開催された（図 18）。会場となったのは高松城跡。これを契機に屋島を中心とする観光振興に弾みがついた。翌年、「瀬戸内海国立公園期成同盟会」が結成され、熱烈な運動がおこなわれた。そして紆余曲折を経て、昭和 9 年に国立公園第 1 号となり、屋島は史蹟及び天然紀念物として文化財の指定も受けた。

この間の事情は、森裕一（本名森広一）の『観光回顧三十年』（森 1968）にくわしい。森は全国産業博覧会宣伝部主任、高松市観光課長、高松観光協会常任理事などを歴任した人物である。図 19 は高松観光協会が発行した昭和 12 年創刊の雑誌『観光の高松』（発行者森広一）である。創刊号を飾ったのは、栗林公園の松、高松城、そして屋島とその周辺の島々である。

こののち戦局は厳しくなり、ついに昭和



図 17 「大正 11 年桟橋起工式飾船」(I003)

瀬戸内海歴史民俗資料館蔵



図 18 昭和 3 年「全国産業博覧会」

ポスター (O006)

高松市歴史資料館蔵



図 20 昭和 24 年「觀光高松大博覽會」

ポスター (O010)

瀬戸内海歴史民俗資料館蔵



図 19 高松観光協会『觀光の高松』(J018)

瀬戸内海歴史民俗資料館蔵

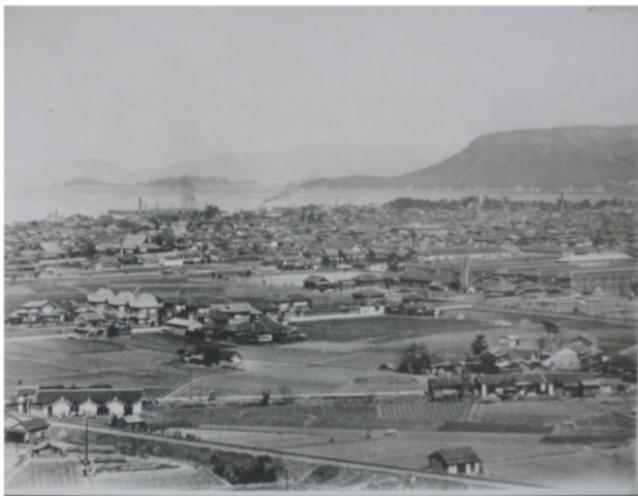


図 21 都市化が進む高松
「高松市遠景」(I081) 個人蔵

20年7月6日、高松市街は空襲により焦土と化した。戦後間もない昭和24年には「観光高松大博覧会」が開催された。戦災をうけた高松城跡は使えなかったようで、会場は中央グランドと栗林公園となっている。ポスターのモチーフは、昭和3年開催の博覧会と同じ、屋島をパックにした那須与一である(図20)。このあと発行されるリーフレットも、しばらくは屋島のシルエットと松、高松城との組み合わせが引き継がれる。

これら伝統的な松や船のモチーフが消えていくのは、1960年代の高度経済成長期になってからである。都市開発、海岸の埋立てなどで(図21)、人々の記憶からかつての風景が徐々に遠のいていくのを、モチーフの変化から感じることができる。

写真1は朝日に浮かび上がる屋島と五剣山である。不思議な形をした山容は、何もな

くてもそれだけで美しく神秘的である。屋島は『金毘羅參詣名所図会』や『讃岐國名勝圖会』に丹念に描かれているように、一見シンプルな形にみえながら、実は方向によって多彩な表情が現れる。西面は高松城と湊の活気、南面は屋島寺を仰ぐ靈氣があり、そして東面の直線的な嶺・陥しい山肌と五剣山に囲まれた深い入り江は、時を超えて日常から隔絶した伝承と物語の舞台となる。

「今」はむかしとなったにもかかわらず、伝承や物語にたたずむ旅人や遍路、松のまにまに帆かけ船が行き交う青い海と空、そして瀬戸内海と溶け込んだ高松城と湊町の賑わいの残影を、人はその場に立って追想することができる。時代や社会の大きな変化のなかにあっても、「今」この時の新しい「屋島らしさ」を再発見することができるのである。



写真1 海からみた屋島と五剣山
(撮影:百瀬ちどり)

〈主要参考文献〉

白幡洋三郎編 1999『新・瀬戸内海シリーズ2 瀬戸内海の文化と環境』社団法人瀬戸内海環境保全協会

田井静明 2014「香川県の保勝会の国立公園指定運動と瀬戸内観光の特徴」、香川県立東山魁夷せとうち美術館『瀬戸内海国立公園指定80周年記念事業 美しき日本瀬戸内の風景』

高松市 2014『史跡・高松城跡』高松市

高松市歴史資料館 1993『高松市歴史資料館常設展示図録』高松市歴史資料館

高松市歴史資料館 2014『史跡・天然記念物屋島指定80周年記念企画展 屋島一シンボリックな大地に刻まれた歴史』高松市歴史資料館

橋爪紳也 2014『瀬戸内海モダニズム周遊』芸術新聞社

森裕志 1968『観光回顧三十年 観光一筋の道標』森観光事業研究所

屋島風土記編纂委員会編 2010『屋島風土記』屋島文化協会

(担当:百瀬ちどり)

14 屋島合戦跡の石造物

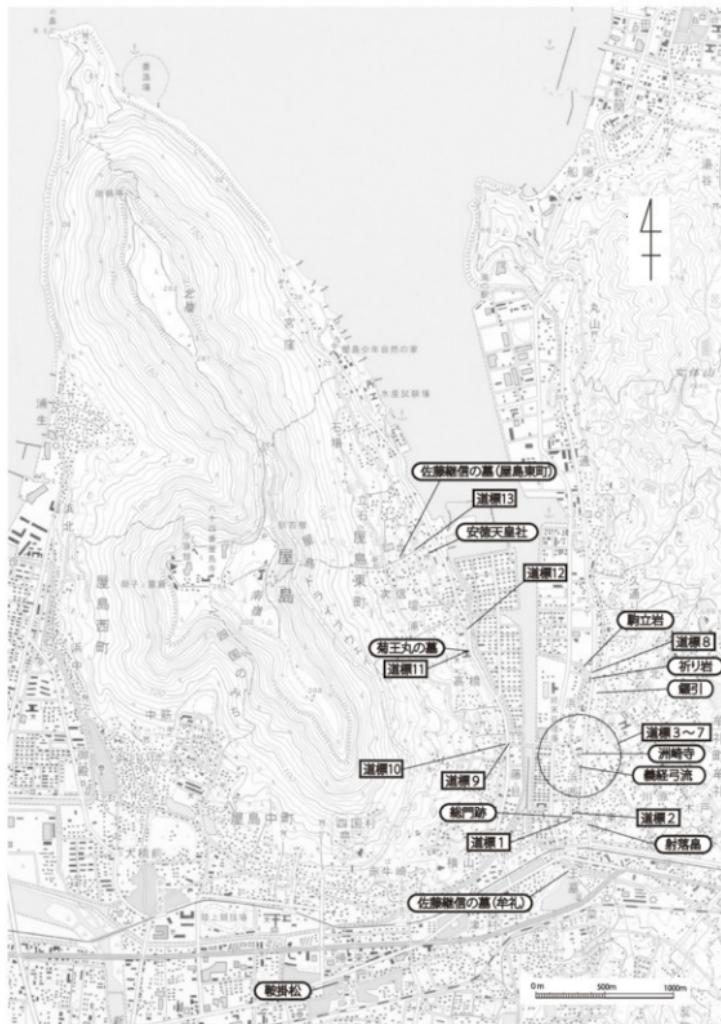
元暦2年（1185）2月におこったいわゆる屋島合戦については、文芸作品を通じて、その後、人口に広く膾炙するところとなった。それは、史実そのものというよりも、源義経や那須每一、佐藤維信といった者たちの誇張されたエピソードに焦点があてられた物語であり、だからこそ、人々の中にさまざまな想いを想起させるものとなつた。そして、それは現地に赴いてみようという想いにつながつたり、またその地を記念しようという行為にもつながつていつたのである。そこに現れた屋島は、過去のイメージと密接に結びついたものであり、「名所」の成り立ちを典型的に示すものであつた。

ここでは、2015年8・9月の4日間に実施した屋島合戦跡地の現地調査にもとづき、現地に建立された石造物について報告する。それは、現地に置かれた石造物が名所の形成や維持に大きな役割を果たしていると考えられるからである。実際、江戸時代の資料のなかには、合戦跡に立っている石造物について言及するものもあり、当地を訪れた人々の印象に刻まれたことが分かる。

調査の関係上、今回は石造物に刻まれた碑文の翻刻に主眼を置くことにし、石造物本体の大きさや材質については割愛することにした。また、碑文のない石造物については、今回、調査対象外としている。なお、写真は調査者たちの撮影である。



調査風景



調査地一覧

鞍掛松

概要

所在地は高松市高松町。寿永4年（1185）に平家追討の命を受けた源義経は阿波国勝浦（徳島県小松島市）から大坂峠を越えて讃岐に入った。現在の鞍掛松の地は、その際に義経が松に鞍をかけて休息したといわれている。なお、この鞍掛松前の広場の中央には「鞍掛松地蔵尊」という地蔵堂がある。（担当：稲穂将士）

配置と碑文



千代かけて
今にのこれる
鞍掛の松
「木田郡誌より」
二〇〇三年三月建立



石造物① 石造物②

① [正面]
明治廿三年
三月
心洗
東湯元
順主横平



石造物③

② [正面]
三ツ池
日下 []



石造物④

③ [正面]
義経鞍掛松
[背面]
香川県国立公園協会

④ [正面]
勇将の
その名と共に

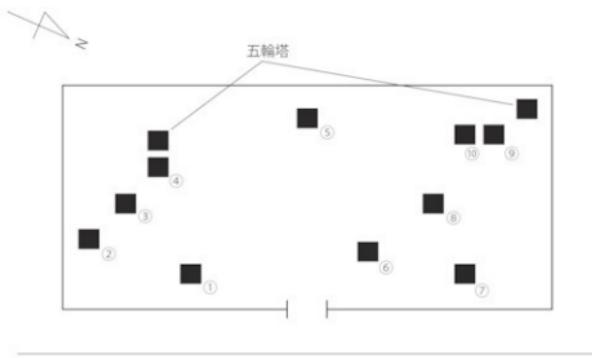
佐藤継信の墓（牟礼）

概要

所在地は牟礼町牟礼。源平合戦の際に、義経の身代わりとなり戦死した佐藤継信の墓である。寛永20年（1643）に初代高松藩主である松平頼重が新しく標石を建てた。その後、昭和6年（1931）5月に継信三十世の孫である佐藤信古がこの墓地に大改修を加えた。この時に燈籠一対などが立てられている。

また、墓域内の右奥に太夫黒の墓がある。太夫黒は義経が後白河法皇から賜った馬であり、太夫黒が倒れたのちに、ここに埋めたといわれている。（担当：井上真美）

配置と碑文



①
〔正面〕 燈籠一対
　　嗣信三十世孫
　　佐藤信古建
　　昭和九年五月
〔左側面〕 木村嘉市刻



石造物①



石造物②

②
〔正面〕 泰燈
〔右側面〕 本縣小豆郡豊吉
　　工事設計請負木村嘉一
〔背面〕 昭和六年五月建

從四位勲四等香川縣知事林董撰并書

③
〔正面上部〕 佐藤継信墓道碑
〔正面〕 佐藤継信墓道碑

神櫛廟之下墳古樹者為佐藤三郎繼信君墓地在讚州三木郡卒禮里大夫黑之家隣馬行人過謁墓皆」為流淚世傳以為南海墳碑按史治承四年八月源二位賴朝起兵伊豆尋入下總庶弟五位義經時在陸奥依」藤原秀衡乃潛出平泉館赴而應之秀衡遣君與弟四郎君諱忠信追面從之君兄弟秀衡外族也遂俱事五位興」兼田盛政光政並稱四天王屋島之役平教經勁弓長箭連擬五位麾下騎士口屏當焉教經射斃十餘人君暨光」政亦中其矢四郎君扶君歸營五位監而視之加首於膝間所欲言君日至自出陸奧委身於公今日代公而死則」垂名于竹帛亦可謂榮矣但憾不賜公珍誠世譽耳言畢而絕年二十八實文治元年二月也五位痛惜不能措講」志度寺僧覺阿厚葬君暨光政於卒禮林中飾所愛駿馬大夫黑以為驛秀衡所嘗驅也董以明治二十一年十二」月知事香川縣事越三月繪于家廟始行香君墓石高五尺有奇題曰佐藤嗣信之墓寬永二十年五月高松城主」謹岐守松平賴重公所重修云屋島八栗二山之間海陸數里源平二氏當所相攻戰而二氏興亡之機一繫于此」役則平氏頤貴為其主徇難者亦多矣而七百載之千古墳冢々其人不可復辨焉君乃源氏一臣隸耳而名與」兆域永不相隨俾後人敬之如生餘愛猶及所贈之馬表其死所以傳胡然乎我竊知其所由來矣五位之逃京師」匿吉野山也山僧攻之事急將自盡四郎君曰臣兄繼信代公而死今日臣亦當代公而死五位不許固請而聽乃」易甲而攢射戰禦敵以脫五位時文治元年十一月也明年入京師潛索五位所在九月糟谷有季以兵圍其舍四」郎君與從士二人俱力鬪而死年二十六君之父諱元治為信夫莊司文治五年七月二位擊陸奥藤原秀衡以其」舍五位也在司君與叔父河邊高經暨伊賀良目重高拒伊達郡石那阪為藤原為宗所襲而敗遂親信十八人冒陣而沒且夫源氏世家宣力王室積攻克之勞固非一日也而一旦與平氏構難父子相繼慘死廟鬼殆將不血」食天報施之倒若是其慘也則人心之憤之亦有甚焉當是之時五位自任興復之責西臘平氏於擅浦俾二位得」坐成其志然而有功不錄訴冤不諒遂誅夷子衣川古今皆深為五位傷焉呂尚父有言曰愛其人者兼其屋之鳥」況君則五位之所最親愛而闔門前後皆為五位効節之烈乎哉是其義之感人心獨所以深且遠也耳先是邑人」相謀將勒石墓側以詳君之事至是囑董撰之記蓋以董係君之裔也抑平氏家亦世承將卒之任與源氏並護王」室而至于清盛勃興至太政大臣乃擅張威福脅持上下者二十餘年以私榮於一門神人所厭棄抔土未乾而子」孫殄夷覆滅之跡人莫肯弔者可不哀哉烏虜人臣而欲負其君者苟有監於君墓則亦將知所懼」

明治二十二年三月

〔背面〕 柴野新八
發 岡坂政五郎
起 山田徳三郎
人 谷本亮太
小西郞作次
石工 和泉百造



石造物③



石造物④



石造物⑤

④

〔正面〕佐藤次信墓

〔背面〕寛永癸未仲夏 上浣建之

⑤

〔正面上部〕佐藤氏念祖碑

〔正面〕佐藤氏念祖碑 正二位勲一等公爵 德川家達篆額

皇朝国体尊嚴人民忠義自古勳王死節者不可勝數然天運循環治有淑否道有順晦故王化衰而霸政興霸政廢而皇權復王霸興衰之間往々有昏迷失操守者惟豪傑卓異之士始變秉宜移忠所事而存先王遺風乎千載之下以及皇權之後使世有所感奮興起焉加佐藤氏衛尉豈非其人邪宜哉天之降靈永祚其胤以有今日也君諱嗣信其系出自領守府將軍藤原秀郷秀郷裔基治以佐藤氏焉為陸奥信夫莊司娶其族清綱女於押領使秀衡為從姑生二子長即君也莊司智略通兵法君與弟忠信皆驍勇善騎射源義經至陸奥倚秀衡在司聞而見之深相結納迨其赴援于兄賴朝軍意欲偕行以疾辭薦二氏代已臨發誠曰汝委質郎君之死靡也僕對曰謹奉教義經亦信任之其在京師與故將兼田政家子盛政光政並奏為兵衛尉稱四天王屋島之役敵將平教經請與義經挑戰義經欲聽之教經素以善射聞君諱曰教經偏裨耳非大將敵也且彼巧詐恐有變臣請代而行乃佯稱義經馳進矢中其胸而墜教經從者欲謀之忠信而仆之扶負歸營義經泫然枕首于膝問所欲言時君氣息幾絕聞其聲張目曰臣奉父命事君今代君而死復何憾所憾者未見君亡敵耳終不起美後鳥羽帝元曆二年二月十九日年二十八後二年忠信亦為義經死難于京師義經連喪兄弟悼惜不已其避賴朝而再至陸奥也首訪佐藤氏弔慰家人為修冥福于平泉中尊寺又築塚于其香火院祭之今飯阪医王寺碑即是兄弟妻亦孝貞善事舅姑義經之來姑追思二子不禁遂寢疾二婦胥謀佯為維裝擐甲執蘿刀夜見姑曰願安之二兒凱旋在此姑大喜疾稍愈今磐城齋川甲胄像即は賴朝之平奥羽莊司年七十輔秀衡子泰衡奮戰而死賴朝欲夷其族然以州人欽尚佐藤氏恐民心不服特命君遣孤孤祐信承祖仍食旧邑其後軃徙者再至九世正信後龜山帝天授中徙出羽中山城子正利応永中兵乱失邑卒匿于農居住内餅山正利十一世孫彦十郎移宮曾根里

其地家富而望隆光格帝時有益信者為君二十七世孫好学能和歌陰有勳王志曾孫信古明治朝遷為衆議院議員今為貴族院議員益信又有外從清河正明世與佐藤氏為昏媾幼而從益信恒聽君屋島戰狀以自局孝明帝時以敵愾著死于國事識者以為有所承也頃者信古以譜乘來東京告曰遠祖墓地遐路阻久曠掃展走將往而修之敢以銘請鳴呼予讚人也曩屢過君墓下見阡道荒蕪不治心竊哀之今者接其子孫繼存訖為故國望微其請固將錄而伝之按譜秉君為義經死傾慮尽力以身代難不唯止于一時遇合感激意氣寔奉父命然也是其忠孝智勇操之卓決非尋常武夫所企及惜乎史伝闕而不載雖載亦失事實世寡和者於是摭焉而敍述之且為溯沿前後徵其源流所由如此君墓本在屋島東南武例林中乃義経所葬也但年久傾壞又僻離人跡罕至正保中高松藩主松平英公為移今址建石表之信古既修道阡賈榜民家塙垣置墓可謂念祖聿修其庶幾者也歟乃系之以銘曰

山岳可崩 河海可填 惟道不变 忠孝万年 無謂時異 無謂事遷 秉彝好德 乃見斯賢 屋山之麓 讀海之浜 鶴々佳城 久而益堅 誰修之者 自汝裔孫 銘以告世 忠孝万年

昭和六年五月 譜岐 牧野 謙撰
羽前 宮島大八書
三十世孫 信古謹建

⑥

[正面] 佐藤兵衛尉嗣信之墓
[背面] 昭和六年七月 三十世孫佐藤信古謹建
[左侧面] 木村嘉市刻



石造物⑥

⑦

[正面] 燈籠一對
嗣信三十世孫
佐藤信古建
昭和九年五月
[左侧面] 木村嘉市刻

石造物⑦

⑧

[正面] 鎌田兵衛尉塚碑
源廷尉義經有四臣曰鎌田盛政光政曰佐藤嗣信忠信皆各兄弟也以勇武聞廷尉竝奏為兵衛尉稱四天王元暦之役從攻平氏于屋島光政與嗣信同日戰死廷尉悼惜俱厚禮葬諸武例林中後正保中高松藩改葬嗣信表之光政則墳壘泯然至今無恤鳴呼均是忠也為其主死而後世顯晦之殊如是何歟今茲佐藤氏裔信古修其祖墓阡間而悲惋欲索而表之搜訪累月不獲也會見有二石塔竝立阡上相距十餘弓其一有墓後其一少屏而左有老松其大蔽牛當前不見就而諦視則其形相同皆為五層崇五尺許圓稱之蒼苔蒙被大抵為數百年外物信古以為形色之同吾所索者無乃是耶疑以傳疑待于後人不亦可乎於是請予文以問世蓋兩墓改葬時亦俱移之第嗣信代廷尉死後世喧稱光政史載有缺人或不知是其所以致顯晦之殊也耳予既哀光政之不幸又喜信古之高誼也乃為叙其梗概俾刻于石以待後之君子考覈而定之

昭和六年五月
譜岐 牧野 謙撰
譜岐 入谷 晟書
羽前 佐藤信古建

木村嘉市刻

⑨

〔正面〕大夫黒馬埋處
〔背面〕寛永癸未仲夏上院建之

⑩

〔正面〕大夫黒供養之碑
〔背面〕
謹書千厩長藤野光男
出生地岩手県千厩町
昭和六十三年十月十九日建立 千厩農協墓參田
石材千厩産加工佐々木章



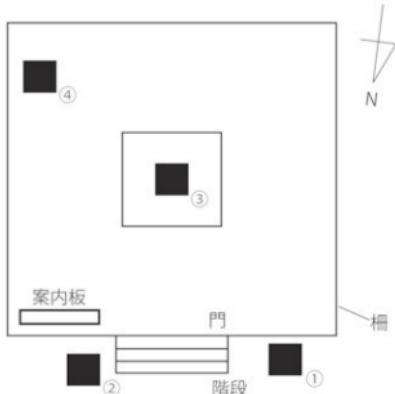
石造物⑨（右）・石造物⑩（左）

射落畠

概要

所在地は高松市牟礼町牟礼浜西。寿永4年（1185）2月19日に源氏の武将である佐藤維信が源義経の身代わりとなり、平家の武将平教経に射落とされ、戦死したとされる場所。昭和6年（1931）におこなわれた維信墓の大修築と共に「射落畠碑」と、「遠祖君乗馬薄墨碑」が建立された。（担当：福穂将士）

配置と碑文



①

〔正面〕 佐藤維信顕彰碑

この地は源義経の四天王の一人佐藤維信戦死の場所である。維信は鎮守府將軍藤原秀郷の後裔にして藤原秀衡に従う。維信は若くして智略兵法に通じ、豪勇の名を知られる。源義経陸奥に来て秀衡の批（ママ）護をうけ後頼朝挙兵を援けるため都に上るに際し、父の命により維信・忠信の兄弟もこれに従う。連戦して平家を追い屋島壇ノ浦にいたり、敵將平教経の挑戦をうけ、義経の身代わりとして戦死。時に年二十八才。

維信は、みちのくいで湯の里飯坂大鳥城の出身であり、源平八〇〇年祭と当クラブ結成二十周年を記念してこの碑を建立するものである。

昭和六十年四月十八日

（ライオンズクラブ団体章）福島飯坂ライオンズクラブ

②

〔正面〕

牟礼町指定文化財〔史跡〕

源平屋島合戦古戦場

〔右側面〕

（牟礼町章）牟礼町

〔左側面〕

〈歴史をめくる／散歩道〉（牟礼町章）牟礼町

③

[表面]

（佐藤兵衛尉／嗣信戦死処）射落畠碑

[左側面]

木村嘉市刻

[背面]

射落畠碑

是為遠祖兵衛尉君戰死處其死也元曆之役代源延尉戰中矢落馬事詳國史其處也本瀬海後世墾為田園俗謂之射落畠今茲信古修祖塋因購焉而建表又繞以蓮池為界池凡一百二十五坪謹紀弗誤也

昭和六年五月

三十世孫羽前佐藤信古謹撰

④

[正面]

遠祖君乘馬薄墨碑

曩訪遠祖君戰跡之時鑿地獲馬骨而其齒八俱存焉驗之大抵六七百年者物按家乘遠祖君所常騎名薄墨宇治一谷屋島諸役皆從之遂與君拌命當時戰中未及收瘞蓋即是也嗚呼馬之死也古有弊帷裹尸之恤此在通常尚然矣況其與人一心成大功者哉又況其從我祖宗而同死生者哉予安得不惻然乃為改葬而表之云

昭和六年五月

羽前 佐藤信古撰

木村嘉市彌



石造物①



石造物②



石造物③



石造物④

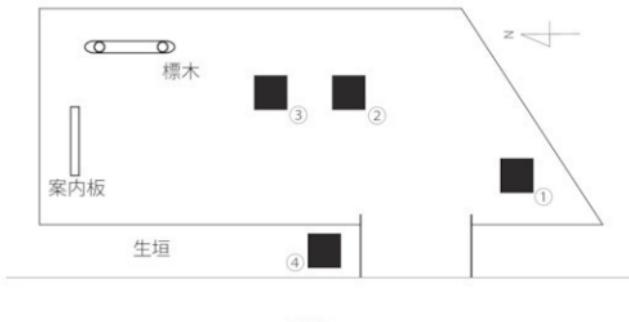
総門跡

概説

所在地は高松市牟礼町牟礼。寿永2年（1183）9月、平氏が門を構えて、海辺の防衛に備えた、その遺構である。

当時この付近は海浜であったようであり、門を作り源氏軍に対する防衛地点としたようである。現地案内板によると、史跡内の標木は高松藩主松平頼重の建てたものである。（担当：棟田成紹）

配置と碑文



道路

①総門碑

〔表〕

源平合戦総門碑

源平合戦総門碑記

是為 安徳天皇六萬寺行宮北柵門遺跡里人相傳稱曰總門因又名其里也按壽永二年九月平氏奉 天皇于讃岐以牟禮六萬寺為 行宮（據六萬／寺縁起）文治元年二月二十日源義経來襲 行宮縱火於牟禮高松平氏大驚舉族輶舟于總門渚而避既而知源軍寡單返棹迫門海宮交射日暝交綏義経（雨冠に負）平軍夜襲篝于門者徹明平軍謀夜襲不果明日平軍奪門而上不利乃奉 御船于志度遂還西海云（據源平／盛衰記）予替門舊瀬海濱可知也而今厯存遺構于田里雜犬之間滄桑之變可驚也乃恐歴年益久口碑亦泯史蹟竟至無可徵焉故里人之乞記也不辭而識之又表出村畔地名係戰蹟者并訖諸來者云

安徳天皇六萬寺行宮遺蹟 東南 十三町

佐藤嗣信墓及名馬大夫驥家 正南 二 町

那須宗高射鷹御祈石及駒立石 距門 正北 五 町

雨龍岡 源義経陣趾 東南 四 町

洲崎 洲崎堂今稱洲崎寺 正北 二 町

明治三十有六年龍集癸卯三月初一日

陸軍大將從二位勳一等功二級伯爵野津道貫 題額

高松 欣堂小史黒木安雄撰并書

〔裏〕

明治卅六年三月着手
明治卅八年三月竣工
牟礼保勝會建之
義捐土地者坪井太吉
石工和泉喜代次

②

〔表〕

夏草や
ここにもひとつ
觸體
不如帰庵不如帰

〔裏〕

蕉風会々員建之
山田柳隣
岡阪里松
大高春峰
中村梨軒
間島翠流
岡内寄方
井上羽谷
淺田可笑
林 冠岳
楳塙相潮
坪井美城波
伏見口風
岡阪里郎
伏見柳里

明治四十二年三月

③

〔表〕
お遍路の
行きつつ
髪を
束ねけり
五峰

〔裏〕

句碑建之
昭和四十三年一月吉日
原石寄附者 漆原栄三郎
 三好利三郎
発起人 坪井一枚
 齋木孝子

中尾とみえ
世話人

夏目麦良
 國方いち
 稲垣黄雨
 藤井白汀
 東石秋草
 坪井金子
 井上美子
 牟礼閑週句会
 紫苑發行所
 屋島發行所

④

〔正面〕

牟礼町指定文化財〔史跡〕

源平屋島合戦古戦場

〔右側面〕

(牟礼町章) 牟礼町

〔左側面〕

(歴史をめぐる／散歩道) (牟礼町章) 牟
 礼町



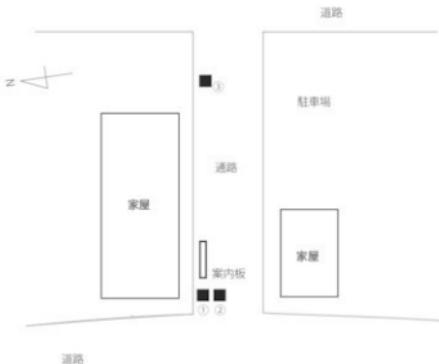
総門跡全体

義経弓流

概要

所在地は牟礼町牟礼。義経弓流とは「平家物語」で描かれる屋島合戦において挿入される逸話である。源義経が海上で戦ううちに、弓を落としてしまう。義経はこれを平家方にとられまいと落とした弓を鞭で突き寄せて引き揚げたという。平家方に拾われることで、「義経の弓は弱い弓」と笑い物になるのを恐れたとされる。(担当:川口成人)

配置と碑文



- ①
〔正面〕
義経弓流シ
〔左侧面〕
香川県国立公園協会

- ②
〔正面〕
牟礼町指定文化財〔史跡〕
源平屋島合戦古戦場
〔右侧面〕
牟礼町
〔左侧面〕

- 〈歴史をめぐる／散歩道〉(牟礼町章)
牟礼町
③
〔正面〕

- 源平合戦史跡
石造物① (左)・石造物② (右)

- 折り岩 五〇〇米
駒立岩 五〇〇米
〔左側面〕
源平合戦史跡
義経弓流し跡 四〇米
〔後面〕
源平屋島合戦八〇〇年祭
準備実行委員会
昭和五十六年三月建立



洲崎寺

概要

洲崎寺は高松市牟礼に位置する高野山真言宗の寺院である。大同年間に空海により創建されたとされる。源平合戦や長宗我部氏の侵攻などの戦火を受けるも、元禄12年（1699）に再建され現在に至る。源平合戦の際、焼け落ちた本堂の扉に佐藤維信の遺体を乗せて運んだという伝承が残り、維信の菩提寺とされる。境内には「四国遍路の父」と呼ばれる江戸時代の僧、真念の墓がある。讃岐三十三観音霊場第二番である。

現地の状況

寺域は堀で囲まれ、南側に出入り口が2箇所ある。東側の出入り口から境内に入ると左手に石造菩薩坐像、右手に寺の概要についての説明板が設置されている。説明板の裏には大型の五輪塔がある。また出入り口前には「歴史をめぐる散歩道 源平屋島合戦古戦場」の石柱があり、写し絵ラリーのチェックポイントになっている。

境内の東側に大型の建築物を含む多数の建築物が配置され、前方には屋島の戦いをイメージした庭がある。庭の向かいに堀には源平合戦屋島・櫛ノ浦の戦いの解説やエピソードを紹介した説明板が設置される。説明板は西から「源平合戦屋島・櫛ノ浦の戦い」、「合戦のあらまし」、「源平屋島合戦絵図」、「佐藤維信の討死」、「那須与一扇の的」、「景清の鎧引き」、「義経の弓流し」。

境内の西側には本堂など小型の建築物が配置される。境内の北西隅は堀によって区画され、内部は墓地になっている。本堂の前方には一組の石燈籠が設置され、右前方には香川の保存木であるイチヨウが生えている。イチヨウの近くに保存木であることを示す石柱も設置されている。本堂西側の堂の前方は石燈籠が3基、石柱が1組設置される。石燈籠は碑文から寛文5年～12年（1665-1672）に建てられたものであることが分かる。石柱には「鳴鳳在樹 白駒食場」と彫られている。また本堂の南側には鐘楼がある。鐘楼の南西には道標があり下半部が埋まっているものの、八栗の文字が読み取れる。

境内西側の堀に沿って北から南へ、真念墓、石造地蔵菩薩立像、石造僧形坐像が並ぶ。真念の墓には説明板が設置されており、墓石を囲む玉垣には真念の業績と四国八十八霊場の全てが刻まれている。石造地蔵菩薩立像は碑文から建立が寛政9年（1797）であることが分かる。前方には小型の銅製の地蔵菩薩立像がある。

寺域を囲む堀の南西の角は一段内側に凹んでおり堀の外側に、開明小学校跡石碑と洲崎堂と書かれた石柱、小堂が配置されている。小堂には石仏が安置される。また小堂の前には庵治・牟礼二十四輩霊場の第十八番であることを示す石碑や彌陀如来と彫られた石碑がある。

（担当：川崎雄一郎）

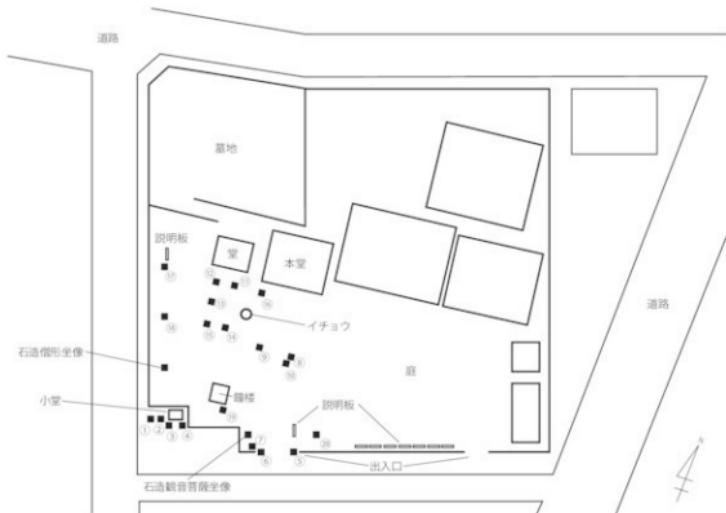


石造物①



石造物②

配置と碑文



①開明小学校跡
[正面] 開明小学校跡
[背面] 村制百周年記念 卍礼町
平成二年四月吉日建之

②洲崎堂石碑
[正面] 源平合戦古跡 洲崎堂
[右側面] 弘法大師御下
本尊觀世音大士
納経所
[背面] 哉
天保六未星 仲春吉良日
紫野千代助建立之

③庵治・牟礼二十四輩靈場石碑
※小堂の右前方に設置される。
[正面] 輩 第十八番

④彌陀如來石碑
[正面] 彌陀如來
[背面] 高野山真言宗洲崎寺
高野山真言宗管長大僧正龍
瑞書

⑤門柱(東)
[正面] 高野山真言宗洲崎寺
[背面] 高野山真言宗管長大僧正龍
瑞書



石造物③

石造物④



石造物⑨



石造物⑩



石造物⑪



石造物⑫



石造物⑬

⑥門柱（西）

〔背面〕 昭和四十年春日建之現住俊
慧代
施工者牟礼町久通り
有限會社伏見石材工業所
代表者伏見新吉

⑦廟裏石銘板

〔正面〕 昭和五十九年八月吉日
寄贈 山田松繁
山田 明
山田 要

⑧本堂前石燈籠（1）

〔正面〕 常夜燈
〔左侧面〕 六月吉祥日
〔右侧面〕 文化五戊辰
〔背面〕 具一切功德
慈照觀衆生

⑨本堂前石燈籠（2）

〔正面〕 常夜燈
〔左侧面〕 六月吉祥日
〔右侧面〕 文化五戊辰
〔背面〕 福聚海無量
是故應頂禮

⑩本堂前石燈籠前石碑

〔正面〕 平成二年吉日
西国第五番
天野義元

⑪西側堂前石燈籠（1）

〔正面〕 奉燈
〔左侧面〕 九月吉良日
〔右侧面〕 寛政九巳年

⑫西側堂前石燈籠（2）

〔正面〕 奉燈
〔左侧面〕 寛政十二年申歳
〔右侧面〕 九月吉良日

⑬西側堂前石燈籠（3）

〔正面〕 奉燈
〔左侧面〕 十月吉良日
〔右侧面〕 寛政五丑年

〔背面〕 現主
中村武雄

- ⑪西侧堂前石柱（1）
〔正面〕 鳴鳳在樹
〔背面〕 十月吉日謹立 南濱古濱氏
子中



石造物⑪



石造物⑫

- ⑫西侧堂前石柱（2）
〔正面〕 白駒食場
〔背面〕 昭和八癸酉年

- ⑬香川の保存木石柱
〔正面〕 香川の保存木 香川県
〔右側面〕 洲崎寺のイチゴウ
〔背面〕 第十九号 昭和五十三年指
定

- ⑭真念墓
〔正面〕 大口師眞念□□□



石造物⑭

- ⑮石造地蔵菩薩立像基礎
〔正面〕 寛政九己歳十二吉日
〔左側面〕 山田善藏

- ⑯鐘樓南道標
〔正面〕 八栗口
是ヨリ十八口

- ⑰五輪塔
〔正面〕 (梵字6字) 奉修加持土砂秘
法為法界整靈追資
〔左側面〕 (梵字4字) 六大無(得)常
(瑜) 四種曼(荼)(后)
〔右側面〕 (梵字5字) 三密加持速疾願
重々帝(網)(后)(即)身
〔背面〕 (梵字13字) 施主敬白
※()内は異体字



石造物⑰

鎌引

概説

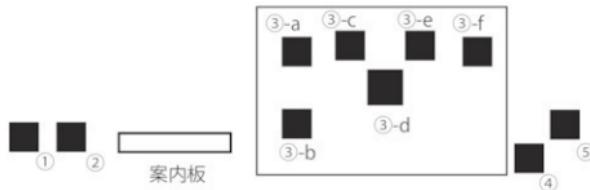
牟礼町牟礼に所在し、駒立岩から南東方向へ徒歩で約150m離れた県道36号東側に、伝承について示した一画が位置する。この場所に高松市教育委員会が設置した案内板には、太刀を折られ敗走する源氏方の美尾屋十郎の兜を、平家方の悪七郎兵衛景清が熊手で引っ掛け、兜の鎧を引きちぎったとされる鎌引伝承の解説が記されている。

同地には向かって左(北)から、石製の標柱(①)、灯籠を模した石造物(②)、案内板を挟んで祠(③)が並び、その右(南)側には、石積みの祠の基礎に立て掛けられた石柱(④)とその横に直立する別の石柱(⑤)が確認できた。④を除き、これらのものはいずれも西面し県道側を向いている。

祠は、内側向かって左側壁面の記載から、平成17年(2005)の再建と知られる。祠の左側支柱の銘にある通り、内部には18世紀の年代をもつ地蔵が祀られている。また、同じく祀られている觀音は、西国三十三所の遷し靈場の信仰対象となっている。祠を管理している住民によれば、地蔵は県道拡張に際し、祈り岩の東に向い周辺にあったものを集めて祀ったものである。

献花や清掃などの手入れがされている様子が確認でき、この場所が現在も信仰に関わる場所とされていることがわかる。(担当:島本多敬)

配置と碑文



県道36号



全体写真

- ① 石柱
 [正面 (西)]
 卯礼町指定文化財〔史跡〕
 源平屋島合戦古戦場
- [左側面]
 〈歴史をめくる／散歩道〉(卯礼町章) 卯
 礼町
- [右側面]
 (卯礼町章) 卯礼町
- ③ 祠
 [正面 (西) 右側支柱]
 第六番(庵礼西国三十三観音十一面千
 手千眼觀自在菩薩)
- [正面左側支柱]
 右地蔵菩薩 明和三丙戌九月二十四日
 左地蔵菩薩 享保十四酉正月廿四日
 右やぐり道
- [祠内側左壁面]
 平成十七年五月吉日
 再建 谷本英雄
- d観音板碑
 [正面 (西)]
 千手観音 (千手観音像) 屋嶋寺 [右か
 ら横書き]
- [正面台座部]
 谷本フサ
- f地蔵板碑
 [正面 (西)]
 明和三丙戌年
 九月二十四日
- ④ 石板
 [表]
 平成二年吉日
 西国第六番
 [裏] ハサマ 矢野
- ⑤ 石柱
 [正面 (西)]
 〈庵治／西国〉 六番札所 施主谷本家

a地蔵板碑
 [正面 (西)]
 享保十四酉正月廿四日
 やぐり
 右 へんろ道

c板碑
 [正面 (西)]
 []
 [] 童子



石造物③ - a



石造物③ - c



祠 (③)



石造物③ - d



石造物③ - f

祈り岩

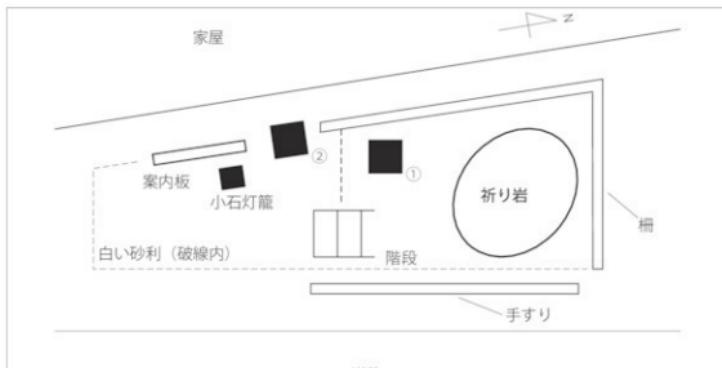
概要

駒立岩から与一橋まで引き返し、東に進むと祈り岩に到着した。

源平屋島合戦八百年祭準備実行委員会が設置している案内板によれば、源平合戦の時、那須与一が扇の的を射る際、この岩のところで「南無八幡大菩薩、わけても私の生まれた國の神明日光権現、宇都宮那須大明神、願わくばあの扇の真中を射させ給え」と祈ったと伝えられたことから、祈り岩と呼ばれているといふ。また、「いのり岩」の字は、松平頼重の家臣である箕輪野六の書であると伝えられているといふ。

祈り岩は、道路より數十センチほど下にあり、階段で降りることができる。階段を降りてすぐ左横には「いの里岩」と刻まれた石造物があり、正面に祈り岩がある。祈り岩の上には、お賽銭がいくらく供えてあった。階段を降りた場所は、柵で囲まれており、人が1人入れるようなへん小さな空間で、祈り岩の前には白い砂利が敷き詰められていた。住宅の敷地内と見間違うような目立たない場所にあるため、注意しないと見落としてしまうだろう。(担当:山崎祐紀子)

配置と碑文



①

〔正面〕 いの里岩

②

〔正面〕

牟礼町指定文化財〔史跡〕

源平屋島合戦古戦場

〔右側面〕

(牟礼町章) 牟礼町

〔左側面〕

〈歴史をめぐる／散歩道〉(牟礼町章) 牟

礼町



祈り岩全景

駒立岩

概要

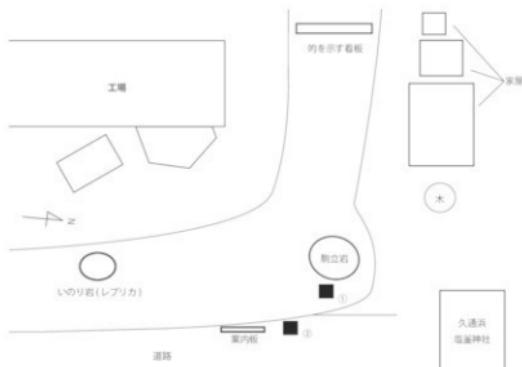
与一公園から北に進み、与一橋を超えたところにある案内板に従い、さらに 50 メートルほど進むと、駒立岩に到着した。途中に、レプリカのいのり岩があった。

高松市教育委員会が設置している案内板によれば、源平合戦の時、那須与一が祈り岩で神明に祈願を終え、海中にはいったこの岩まで駒を進め、波に揺れ動く船の扇的の矢を射落としたことから駒立岩といわれているという。扇的の矢は水門の方向であり、潮が満らると岩は水中に沈んでしまうとあった。

我々が調査に訪れた際は、潮が引いていたため、階段から駒立岩に降りることができた。駒立岩のすぐ隣には、「古ま立石」と刻まれた石造物があった。また、扇的の矢があつたとされる水門の方向には、小舟の上に扇を的にして立つ平氏の姿が描かれた看板が設置されていた。

そのほか、駒立岩の北東には、久通浜塩釜神社という鳥居と社殿からなる小さな神社があるが、関連は不明である。(担当:山崎祐紀子)

配置と碑文



①

〔正面〕古ま立岩

②

〔正面〕牟礼町指定文化財〔史跡〕

源平屋島合戦古戦場

〔右側面〕(牟礼町章)牟礼町

〔左側面〕(歴史をめぐる／散歩道)

(牟礼町章)牟礼町



駒立岩全景

菊王丸の墓

概要

所在地は屋島東町、屋島東小学校の北東角に隣接する一画にある。同所に設置された案内板によれば、菊王丸は佐藤継信の首を討ち取ろうとして、継信の弟忠信に弓で射抜かれて死に、平教経によってこの地に埋葬されたとされている。

一画には、史跡「義経弓流し」と同形式の「菊王丸墓」と記された石柱が建ち、道標や墓石、手水鉢等が集積している。(担当: 上中理帆・島本多歌)

配置と碑文



①

〔正面〕 寛政六寅十一月二十四日
□□二十□

⑤

〔正面〕 菊王丸墓
〔背面〕 香川縣國立公園協會

②

〔正面〕 □歳西正月廿四日
[]

⑩

〔正面〕 薬師如 []
〔右侧面〕 益田□

④

〔正面〕 (梵字) 平家一族内律禪尼災
〔左侧面〕 山口甚太郎 建之
鈴木ユキ
〔右侧面〕 治承四年五月十四日

⑪

〔正面〕 右やくり
三十丁



菊王丸の墓全景



石造物⑪

安徳天皇社

概要

所在地は高松市屋島東町。寿永2年（1183）に平宗盛が安徳天皇を奉じて一の谷から屋島に来た際に、行宮とした場所である、とされるところに建立された神社である。神社のすぐそばに屋島、東に八栗の山が見える。

現在は神社の境内に地域の自治会や遊具などが設置されており、地域に密着した神社になっている。また、源平合戦に関する慰霊碑もある。（担当：棟田成紹）

配置と碑文



藤岡久助長男

藤岡平八

①

〔正面〕昭和五十七年三月二十五日
浩宮徳仁親王殿下御成所

〔裏面〕記念碑建立協賛者名

渥美正博 藤岡一郎 浅井 隆
磯瀬泰男 藤岡昭一 多島敏博
岩村勝夫 藤岡正善 德住敬二
大吉 力 藤岡保夫 中村弥市
木村和夫 藤岡正則 薩川 渡
久米秀俊 溝川克彦 矢野丁代
桑田輝雄 宮宇地季忠 萩下 茂
高橋健一 宮本兼一
多島良夫 山田定弘
谷本真治 山田周一
谷本正美 村井清徳

①

〔正面〕支那事変記念
壇ノ浦養豚組合

⑤

〔正面〕大正五年八月七日
賀陽宮殿下御成所

②

〔正面〕迴還老體
〔裏面〕木田郡屋島山上獅子塚巖
元屋島村仲石場
尾原音吉三男
尾原文造

③

〔正面〕率賓帰王
〔裏面〕大正十三年立善 木田郡木太村字
新開
元屋島村仲石場



石造物②（右）・③（左）

⑥

[正面] 水
 [右側面] 明治廿四年
 正月立之
 石場
 施主藤虎次郎

⑦

星島山上 獅子之靈巖
 尾原文進 昭和二年一月

⑧

世話人
 松本徳造
 本村
 藤岡巳之藏

⑨

[正面] 天照皇大神
 [右奥面] 墓安媛命
 [左奥面] 倉稻紀命
 [右手前] 太己貴命
 [左手前] 少祓名命
 [右奥面台座部分]
 石工アジ
 小田口口
 [判読不能箇所多数]

⑩

[正面] 御神燈
 [背面] 文化十酉十二月吉日
 [台座部正面] 嘉平
 保作
 熊藏
 [台座右側面] 権二郎
 舉三兵衛
 金蔵
 [左側面] 七藏
 幸藏
 長崎
 保治郎

⑪

[判読不能]

⑫

[正面] イヨ温泉郡一河原町 渡口太平
 [右側面] 明治廿九年九月

⑬

[墓石正面] 妙法 光親公
 [墓石左側面]
 元曆元年七月十五日
 昭和五十四年七月十五日
 奉修築屋島壇之浦
 初代先祖光親公之墓
 大場家三十代本家当主清

次男登
 三男裕
 幸子

大場家三十代分家当主恒則
 洋子
 恵美
 発順主 分家二十九代重則
 フサノ

[左石柱正面]
 大場光親公墓
 [左石柱裏面]
 二十九代の孫 大場三郎
 昭和二十五年十月修築畢

⑭

[鳥居右柱] 墓之浦 松本良象
 大坂 西垣外ツヤエ
 世話人 木村林五郎
 [鳥居左柱] 昭和十三年拾月建之

⑮

[正面] 百度石
 [右側面] 昭和九年十月立之
 施主藤岡喜三郎



石造物⑯



石造物⑰

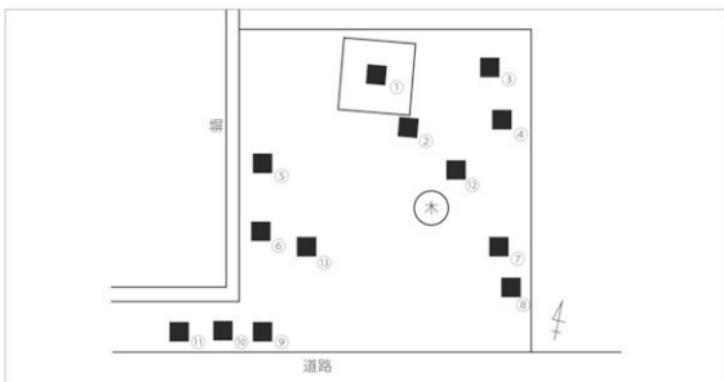
佐藤継信の墓（屋島東町）

概要

所在地は高松市屋島東町。源平合戦で、義経の身代わりとなり戦死した佐藤継信を称えた碑である。寛永時代に太松藩主松平頼重が屋島寺と八栗寺を結ぶ遍路道の傍らに建立した。

継信の碑の周囲には太平洋戦争で戦死した軍人の墓や地蔵があり、忠義の象徴である継信の顕彰地に「英靈」を祀ろうとした様子がうかがえる。（担当：上中理帆）

配置と碑文



①

〔正面〕 継年壬午之夏我君受封讃州の為維城助確乎其忠貞眞可所觀焉一日講武之暇泛蘭槳飛彩鷗與歌越唱消搖屋島偶覽佐藤次信戰死跡茲乃命下吏刊貞石」建新碑表義旌貞於乎君之用意也深矣哉至矣哉次信決死于元暦之昔而御」恩于寛永之今口其幸矣哉万命余作碑銘遂書如左曾若渠系譜誕辰載曆日月」事蹟操行奮記所載前史所傳歷焉章章焉胡譽餘言」於皇次信分于濱危之場醜思致死分百世誰曰不剛遇鑑當錯兮顯千口」之雄口識定口壯兮誠依教養有常尤可稱者兮維夫在將之良建碑刊石」遺烈山高水長寛永癸未仲夏上浣涉於高松之城下

未

〔背面〕 石大工 井川大坂仕打出植左衛門

※背後に五輪塔あり。

②

〔正面〕 佐藤継信墓

〔背面〕 香川縣國立公園協會

③

〔正面〕 黽八等

故陸軍歩兵上等兵 鍋坂虎夫墓



石造物①・②

功七級

〔背面〕父 鍋坂又五郎 建之

母 オク

〔左側面〕昭和十二年夏支那事変起ルヤ安南」部隊ニ屬シテ異族ニ上陸（カ）九月五日宝「山城附近ノ戰ニ壯烈ナル戰死ヲ遂グ」法名釋忠純信士 享年二十三才

④

〔正面〕 徒六位

故海軍少佐 熱五等 木村軍平之墓

功五級

〔背面〕三月吉日 父 政成

母 タネ 建之

〔右側面〕昭和二十年八月十七日

智海院軍功慧平居士畫

行年二十七才

〔左側面〕昭和十七年三月二日神戸高等商船学校を卒業三月二十五日海軍予備機関少尉に任せられ五月「二十九日充員召集をうけ六月十五日正八位に叙せらる七月十日扶桑乗組全十八年一月十五日」さんとす丸に乗組四月一日第三十一警備附となる四月十五日興徳丸乗組九月五日デング熱」の疑により第百三海軍病院に入院九月十八日退院十一月一日海軍中尉に任せらる全十九年二」月一日徒七位に叙せらる九月十日第三十一特別根據附に補せらる十月五日海軍大尉に任」ぜらる十二月一日第三南遣壮隊參謀長の命をうけ服務正七位に叙せらる全二十年八月十七日」比島方面で悪性マラリヤの為戦没海軍少佐に任せらる徒六位に叙せられ功五級金鷲勲章を賜い熱五等雙光旭日章を受けらる

⑤

〔正面〕故 陸軍 熱七等

小原小五郎之墓

伍長 旭日章

〔背面〕昭和四十四年三月吉日

小原マツ 建之

〔左側面〕（梵字）南岳院忠純理達居士

昭和二十年七月二十四日比島マニラ」方面にて戰死十

行年三十才

⑥

〔正面〕故海軍 上等兵曹

鍋坂正重之墓

熱八等

〔右側面〕本覺院釋正諦信士

〔背面〕昭和二十六年二月 父 春吉

母 イト 建之

〔左側面〕昭和十二年一月佐世保海兵团ニ入团全年六月出雲ニ乗組フ命ゼラレ砲術員トシテ勤務」中海軍砲術検定ニ三等本兵ノ身ヲ以て艦隊隨一ノ成績ヲ取メ表彰セラル同七月支那事」変勃發スルヤ上海特別陸戰隊員トシテ活躍以來海南島攻略戰ニ或ハ海上作戰ニ當ニ第」一線部隊ニ屬シ偉功ヲ樹ツ其ノ功ニ依リ昭和十五年熱八等白色桐葉章ヲ授

與セラル昭」和十七年潛水學校ニ入校同年五月潛水艦イ一〇号ニ乗組大東亜戰ニ參
加赫タル武勲ヲ樹テ昭和十九年七月二日南洋群島方面海城ニ於テ艦ト運命ヲ共
ニセリ行年廿九才

⑦

〔正面〕

木村傳次郎君碑 野田基資題

我第五師團歩兵第十二聯隊豫備陸軍軍歩兵上等兵木村傳次郎君歿於廣島陸軍病院
君吾贊屋島山下之人明治二十二年十二月齡適於徵兵入丸」亀歩兵第十二聯隊兵營格勤服役
武技大進二十五年十月帰休二十七年征清」之軍起君以豫備兵從軍戰於朝鮮牙山遂進平壤而罹
病於開州之道九月入仁川兵站病院十月歸廣島陸軍病院治方備至而終不起實其十七日矣官賜
贈爵之君父曰大西彦次郎年十四為木村半平所子養為人況實溫厚能勤於事夙得」鄉曲之譽及訃
至鄉人嘆惜不措相謀卜地於檀浦佐藤信之碑側典君遺物而」祭之縣丞郡長學校教員遠近老幼
會者如雲二十八年三月官賜恤典其父半平」半平感泣曰吾生幸遭逢隆治之聖代大平草木鈞俗
清明之雨露壽日西征之」役我國威赫赫宜於八宏吾子從軍死有餘榮況乎 天恩之至大優渥何
以報」之將使吾子孫永以弗謾而知其所當務焉乃就其祭地埋君之遺物建碑其上而」索余文以余
在教職不辭而記之

明治三十一年二月

香川縣尋常中學校教諭 植田 竹次郎撰

池田 穀種書

和泉 宗松鑄

⑧

〔正面〕 雄忠勇 陸軍歩

兵一等卒 大高晴治之碑

〔背面〕 君姓大高舊高松之藩士父曰潤一郎母曰勢晴治者其四」男也適齡合格入歩兵第十二聯
隊第十二中隊明治卅七年八來自日露之役起應呼命香港出帆雙項之以戰為治」轉戰
於先釜山大孤山等地東鶴冠山及盤龍山之以戰」最為激隊為敵九員傷善通寺於病院
棄石無功道逝焉嗚」呼哀哉雖然全卅八年一月六日依戰役之功賜于功七級」□□□章
年金百圓及勳八等白色桐葉章並効突厥世君亦」正可瞑也法諡曰智德院忠節晴勇居士實
享年二十有四」銘曰「嗚呼勇士斃而後已」金鳴之章効亦偉矣 明治四十年五月建
之 久保常存撰并書

⑨

〔正面〕 南無阿弥陀佛

〔背面〕 亡父久吉三男卯太郎

明治卅九年三月吉日

實母キヌ 建之

〔右側面〕 陸軍□藤岡卯太郎畫

〔左側面〕 明治卅七八年戰役之際卅八年七月廿一日補充召集」ニ應ジ輜重兵第十一大隊補充
隊ニ編入全卅日第廿一」補助輸卒隊へ轉入全年八月五日多度津湊乘船全」九日大
連上陸十九日金家屯着全年十月三日脚氣」病ニ襲ワレ鐵嶺兵站病院ニ入院全月十四
日死去ス

⑩

〔正面〕 藤岡清君碑

〔背面〕 君者大正七年十二月一日入丸亀聯隊為秋季演習」出發屯營出張岡山廣島両縣下自十一月十日亘十一月十四日參加兵庫縣及大阪府下之特別大演習翌十一月二十一日歸營同年十一月二十七日累進一等卒上」等兵大正九年一月一日被命伍長勤務同年一月二十六日罹一等症病歿於丸亀衛戌病院享年二十三

法諡曰眞良信士

大正十三年一月

宮宇地五峰書

父善太郎建之

⑪

〔正面〕 故陸軍歩兵木村喜三郎墓

〔右側面〕 陸軍歩兵在現役征清平壤先「丹臺中戰鬪右腕脰部受銃創野戰病」院入後凱旋褒賞以休暇歸鄉癒病歿「明治丙申十月二十有八日歿從友安」歩兵第十二聯隊長有贈賞云

〔左側面〕 法名釋聞證信士

⑫

〔正面〕 寄附者

壇之浦

木村忠三

昭和八年

四月吉日

⑬ 案碑文なし



石造物⑦



石造物⑧

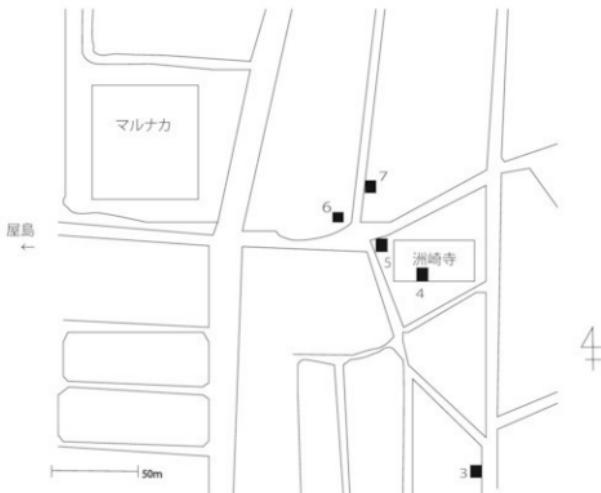
道標

概要

屋島の周辺には、遍路道沿いに多くの道標が残されている。このような道標は17世紀末以降から昭和にかけて建立され続けてきたが、戦後になるとその建立は激減した。また、道路の拡幅や建物の建築により所在が不明となったものもある。ここでは、調査範囲において確認できた道標（道路沿いに建っているもの）を紹介する。社寺境内に移転したものについては、個別の項目を参照していただきたい。（担当：上中理帆）

配置と碑文

※道標1・2、および8～13の場所については、本章冒頭の調査地一覧を参照していただきたい。
ここでは道標3～7の場所を示す。



道標 1

〔正面〕源平合戦史跡

義経弓流し跡 三〇〇米

洲崎寺 四〇〇米

〔左側面〕源平屋島合戦八〇〇年祭

準備実行委員会

昭和五六年三月建立

〔右側面〕源平合戦史跡

射落畠 八〇米



道標 1



道標 2-a (左)・b (右)

道標 2-a
〔正面〕(上部)
是ヨリ

八栗 十八丁
本堂へ

〔正面〕(下部)
發起人

高松市西通町高橋寛藏
高松市二番町村川織三郎
〔右側面〕昭和二年三月十七日

道標 2-b

〔正面〕右やぐり道

〔右側面〕余悟内亥ノ年男
世話人 私口世津女
七十九才

〔左側面〕明治五壬申年
九月建之



道標 3

道標 3
〔正面〕源平合戦史跡

義経弓流し跡 四〇米

〔左側面〕源平屋島合戦八〇〇年祭
準備実行委員会
昭和五十六年三月建立

〔右側面〕源平合戦史跡
祈り岩 五〇〇米
駒立岩 五〇〇米

道標 4

道標 4

〔正面〕八栗口

是ヨリ十八口

※一部が地面に埋まつており解読不能



道標 5

道標 5
〔正面〕八栗寺

壹百四十三度

周防国大島口

施主中務 []

〔右側面〕屋島寺

為藤井氏 []

大阪東區 []

施主藤井 []

〔背面〕明治廿八年五月

※正面と右側面の一部は地面に埋まつて
おり解読不能

道標 6

〔正面〕 八栗道十八〔　　〕
〔右側面〕 是ヨリ三丁南
佐藤次信墓
〔左側面〕 明治五年 石工泉〔　　〕
壬申四月吉辰



道標 6

道標 7

〔正面〕 おくのいん
八十五番 麾治觀世音六十丁
木田郡奥鹿村字鹿〔　　〕
世話人高瀬茂〔　　〕
※一部が地面に埋まつていて解読不能



道標 7

道標 8

〔正面〕 船隠し 二・八糸
源平合戦史跡
祈り岩・景清の鏡引 すぐそこ
〔右側面〕 源平屋島合戦八百年祭準備実行
委員会
昭和五十七年三月吉日
〔左側面〕 源平合戦史跡
駒立岩 八〇米



道標 8

〔背面〕 源平屋島合戦八〇〇年祭

準備実行委員会
昭和五十五年三月建之

〔右側面〕 源平合戦史跡

洲崎寺三〇〇米
祈り岩七〇〇米

道標 10

〔正面〕 八十四番屋島寺七・六 Km
〔背面〕 昭和六十年六月吉日建立
香川県
〔左側面〕 四国のみち
〔右側面〕 八十五番八栗寺二七 Km

道標 11

〔正面〕 (梵字) 右やぐり



道標 10



道標 12-a (右)・b (左)



道標 11



道標 13

三十丁

道標 12-a

〔正面〕 源平合戦跡
安徳天皇社 四〇〇米
佐藤継信の墓 六〇〇米
〔背面〕 源平屋島合戦八〇〇年祭
準備実行委員会
昭和五十五年三月建立

道標 12-b

〔右側面〕 □□益田吾 []
〔左側面〕 へんろ道

道標 13

〔正面〕 八栗寺

神戸市元町 二丁目 施主 烟藤吉

全市福原町 吉田熊太郎

〔右側面〕 屋島寺

壹百四十九度目為供養

周防国大島郡椋野村

施主中務茂兵衛義教

〔左側面〕 明治二十九年四月吉日

※下部が地面に埋まっていて解読不能

資料編1 歴史資料一覧

今回の屋島の名勝的価値の調査において収集した歴史資料をジャンル別に分けて掲げておきたい。紙幅の都合もあり、報告書の本文ではすべての資料に言及することができなかった。よって、各資料における屋島の記載内容については、本一覧内に簡潔に記すことにした。また、報告書の各章のなかで資料が引用される場合、本資料編のなかで付したIDを記載している。

本資料編によって、屋島像を形成するのに寄与したと思われる資料が、中世以来、きわめて豊富に作成されてきたことが理解されるだろう。また多様な資料に登場していること自体が、屋島の名勝的価値の多面性を物語る一つの要素となる。

収集に当たっては、文献収集（資料編2）の過程で得られた情報から資料にあたったほか、高松市歴史資料館、香川県立ミュージアムをはじめとする香川県内の資料館・図書館、および瀬戸内海沿岸の府県ならびに主要都市の施設を中心に、資料調査をおこなった。また近代資料については香川県立図書館や国立国会図書館のデジタルアーカイブなども利用した。

ジャンルについては、次のように分類した。資料によっては複合的な特徴を持つものもあるが、そのような資料はいずれか一方のみに掲載した。

A : 前近代文芸	B : 前近代絵画
C : 近世紀行文・日記	D : 近世地誌・名所案内記
E : 近世地図	F : 近世行政
G : 近現代文芸	H : 近現代絵画
I : 写真・絵葉書	J : ガイドブック
K : リーフレット	L : 近現代地図
M : 調査・学術	N : 来日紀行文
O : その他	

掲載する情報は次の点である。

ID : 本調査で収集した資料に対して付した番号。

資料名 : 基本的に所蔵館の名称に従ったが、通称名などを利用した場合もある。

作者・出版社 : 作成に関わる人物や板元名。

時代 : 次のように記号で示した。

1 : 中世、2 : 近世前期、3 : 近世中期、4 : 近世後期、

5 : 近世全般、6 : 近代、7 : 現代

寸法 (形状) : 現物についての情報を得られなかった場合は「未調査」とした。

コメント : 資料の性格や屋島に関する情報について調査員が記載した。

所蔵館 : 複数存在する資料についても、一つの館で代表させた。

なお、本一覧はあくまでも屋島の名勝的価値に関する調査の中で確認できたものであり、たとえば、屋島の史跡や天然記念物としての価値、またその他の文化・社会・自然的な側面といった点をとらえるものではない。また、網羅的な悉皆調査によるものではないため、重要な資料などについても、まだ見落としがある可能性がある。その意味で、未完の一覧であることをご容赦・ご了解いただければ幸いである。

(調査員：稲穂将士・井上真美・上杉和央・川口成人・川崎雄一郎・島本多敬・橋セツ・東昇・宮下道・棟田成紹・百瀬ちどり・山崎祐紀子)

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法	cm	コメント	所蔵館
A001	屋島寺議	性純編(伝)	1021年3月9日	1	未調査		麗真による屋島寺の創建、空海による寺の変更など、屋島寺の歴史の成り立ちを伝える。ほかに、それが以降の変遷の文字の記載あり。	京都府立大学 附属図書館
A002	吉記(『日本史史料叢刊3新訂吉記』所収)	藤原師房	1166～1198	1	未調査		屋島寺の創建や屋島寺のまつわる伝承あり。	京都府立大学 附属図書館
A003	玉葉(『玉葉』所収)	九条麻実	1164～1293	1	未調査		寿永2年(1183)11月4日条に平家が屋島に所在する記事あり。	京都府立大学 附属図書館
A004	吾妻記(『新訂増補国史大系—吾妻鏡』所収)	—	後期	4日条に屋島合戦記事あり。	1	未調査	元豐元年(1184)9月19日条・元豐2年(1185)2月16日条・18日条・19日条・22日条・3月8日条に、屋島合戦記事あり。	京都府立大学 附属図書館
A005	諏岐千光寺編頌文(『諏岐食遺』所収 文古文書編補遺2巻所収 補835)	勅進聖人蓮阿弥	1223	1	未調査		国指定重要文化財の屋島寺の梵鐘の鉸文。貞応2年(1223)銘鑄。大永4年(1554)追刻。	京都府立大学 附属図書館
A006	延慶本平家物語(『長門延—慶本平家物語』所収)	—	1309～1419～1420書写	1	未調査		読み本系「平家物語」。	京都府立大学 附属図書館
A007	寛一本平家物語(『日本古典—文学大系—平家物語』所収)	—	1371書写	1	未調査		語り本系「平家物語」。	京都府立大学 附属図書館
A008	長門本平家物語(『長門本平—家物語』所収)	—	室町時代	1	未調査		読み本系「平家物語」。	京都府立大学 附属図書館
A009	四部合戰状本平家物語(『訓—説四部合戰状本平家物語』所収)	—	1323～1324以前、1446奥書	1	未調査		読み本系「平家物語」。	京都府立大学 附属図書館
A010	尾代本平家物語(『尾代本平—家物語』所収)	—	室町時代	1	未調査		語り本系「平家物語」。	京都府立大学 附属図書館

A：前近代文芸（2）

ID	資料名	作者・出版社	出版年・ (形態)	時代・ (形態)	コレメント	所蔵館
A011	源平盛衰記（『中世の文学』— 源平盛衰記』所収）	—	—	南北朝時 代後期	1 未調査	読み本系「平家物語」。
A012	『高野春秋編年録』（日野　懷英 西寛定『新校 高野春秋編 年録』増訂版）（所収）	—	1658～ 1704	南北朝時 代	1 未調査	高野山の編年史。元暦2年（1185）3月15日条に屋島 を出発した平維宗が、京都府立大学 附属図書館
A013	太平記（『日本古典文学大系 一 太平記』所収）	—	—	南北朝時 代	1 未調査	文和4年（1355）の記事に、黒須与一子孫の那須五郎が、 母より祖先の「一ゆかりの品物を送られる場面あり」。
A014	屋島原断簡（武久堅『合戦 一 譚伝承の系譜』屋島軍の 場合—『平家物語成立過程 考』所収）	—	—	南北朝時 代カ	1 未調査	「嗣信義期」・「那須与一」を含む。
A015	西大寺末寺帳（松尾周次『破 底と勧進の中世史』所収）	—	1391	—	1 未調査	明徳2年（1391）の西大寺末寺帳。「屋島賢守」とい う記述あり。
A016	看闇日記（『因書寮叢刊 看 闇成親王 闇日記』所収）	看 貞成親王	1416～ 1448	—	1 未調査	嘉吉元年（1411）4月15日条に屋島合戦の餘寒に關する 記述あり。
A017	兵庫北門入船渝張（林屋長 『三郎編 『兵庫北門入船渝張』 所収）	—	1445～ 1446	—	1 未調査	文安2年（1445）に兵庫北門を通して船の船籍・領 の釐り積荷としてみえる。
A018	紀伊原勤進業日記（『群書 類聚 第19編 織部 鹿部 管経部 食飲 部』所収）	伊勢宗恪	1548書写	—	1 未調査	寛正5年（1464）4月4日条に能「八鶴」の上演記事あり。京都府立大学 附属図書館
A019	親元日記（『増補続史料大成』鰐川親元 所収）	—	1465～ 1487	—	1 未調査	寛正6年（1465）2月28日に「やしま」、文明15年（1483） 3月12日に「浜侍」の上演記事あり。
A020	藤原軒日録（『増補續史料大 成 藤原軒日録』所収）	季瓈真榮ら	1435～ 1493	—	1 未調査	寛正6年（1465）9月25日条に「クマノキリ」（熊手切） の上演記録あり。
A021	飯尾七助成記（『群書類聚 従 第22編 武家部』所収）	神山數進	1466	—	1 未調査	文正元年（1466）に「景清」の上演記録あり。

A : 前近代文芸 (3)

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法	cm	コメント	所蔵館
A022	大乗院寺社譜事記『増補続尊等史科大成』大乗院寺社譜事記所収)	著者不明	1150～1508	1	未調査	延祐3年(1491)9月晦日条に「八島合戦三巻」の繪	京都府立大学附属図書館	
A023	斐菟日錄(辻瀬之助編)『斐菟日錄』所収)	斐菟日錄	1487～1561	1	未調査	明応7年(1498)2月29日条に「奥州佐藤兄弟」の上	京都府立大学附属図書館	
A024	実隆公記(萬葉経三編)『実隆公記』所収)	三条西実隆	1474～1536	1	未調査	文亀3年(1503)9月19日条に「八島判官」の上演記録あり。永正6年(1509)閏8月12日条に、「平家物語」八島合戦詞を語したことある。	京都府立大学附属図書館	
A025	祇園会山舞事(済内好芳)『中原本: 松田頼亮世京都の都市と宗教』所収)	書写: 松田頼亮	1507成立	1	未調査	応仁・文明の折以前の祇園祭の山舞の中に、「なすの手一山」がみえる。	京都府立大学附属図書館	
A026	栗田口筋案記『群書類從 勇忠第19輯 管弦部 腕輪部 飲食部』所収)	書写	1505	1	未調査	永正2年(1505)4月16日条に「八島」の上演記録あり。	京都府立大学附属図書館	
A027	梅花舞民謡(由木武雄)『梅 花無尽歌』所収)	梅花無尽歌	1485～1502	1	未調査	「取弓判官書画賛二十韻」と題した画舞が収録され、屋島合戦のエピソードとして弓流、雜信の戰死、崩の的などが詠まれている。	京都府立大学附属図書館	
A028	津川美良談儀(惟勢朝次)『能 金春福鳳養源流考』所収)	津川美良	1512～1513	1	未調査	永正11年(1514)1月条に「八島」の上演記事あり。	京都府立大学附属図書館	
A029	二本記(『大日本古記録』二 鷦尾隆康水記)所収)	鷦尾隆康	1504～1533	1	未調査	永正16年(1519)1月26日条に能「八島」の上演記事あり。	京都府立大学附属図書館	
A030	中臣祐金記(惟勢朝次)『能 中臣祐金養源流考』所収)	中臣祐金	1536～1584	1	未調査	天文5年(1536)2月14日条に能「八島」の上演記事あり。	京都府立大学附属図書館	
A031	賴俊日記(『増補続史料大成』鰐川親俊所収)	鰐川親俊	1538～1532	1	未調査	天文8年(1539)11月13日条に能「八島」の上演記事あり。	京都府立大学附属図書館	
A032	証如上人日記(『石山本願寺証如日記』所収)	証如	1536～1554	1	未調査	天文9年(1540年)1月15日などに能「八島」の上演記事あり。	京都府立大学附属図書館	
A033	多聞院日記(『増補続史料大 多聞院英俊ら成』所収)	多聞院英俊ら	1478～1618	1	未調査	天文10年(1541)11月28日条などに「八島」の上演記事あり。	京都府立大学附属図書館	

A：前近代文芸（4）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・寸法・cm (形態)	コレメント	所蔵館
A034	言櫻柳記（『言櫻柳記』所収）	山科言櫻	1527～ 1576	1 未調査	天文14年(1545)3月21日条に「八幡」の上演記事あり。	京都府立大学 附属図書館
A035	中臣裕暉日記（惟勢朝次『能 中臣裕暉 美源流考』所収）	中臣裕暉	1544～ 1575	1 未調査	天文18年(1549)2月13日条に「八幡」の上演記録あり。	京都府立大学 附属図書館
A036	三好筑前守義長朝臣亭江跡 成之記（『群書類從 第22 輪 武家部』所収）	—	戦国時代	1 未調査	永禄4年(1561)3月30日条に「八幡」の上演記録あり。	京都府立大学 附属図書館
A037	さぬきの道者 甲日記（田 岡田大夫 中忠二・藤井洋一著 社所藏水錄八年：さぬきの 道者一円日記）（写本） について、「香川大学教育学部 研究報告第1箭97号」所収)	田岡田大夫	1565	1 未調査	永禄8年(1565)に讚岐を訪れた伊勢柳町による初鹿料 の演取を記録。かたの本(馬元・西かたもと(馬元)に ついての記録あり。方木では屋島寺が權那寺としてみえ る。	京都府立大学 附属図書館
A038	安土日記（惟勢朝次『能楽 源流考』所収）	太田牛一	桃山時代	1 未調査	永禄11(1568)10月11日条に「八幡」の上演記録あり。	京都府立大学 附属図書館
A039	能之留帳（『下關少進集』所 下關仲孝 4巻）	—	1588～ 1615	1 未調査	天正16年(1588)2月25日条などに「八幡」の上演記 録あり。	京都府立総合 資料館
A040	駒井日記（藤田恒春編校訂 駒井重勝 『駒井日記』所収）	駒井重勝	1593～ 1595	1 未調査	文禄3年4月20日条に「八幡」の上演記録あり。	京都府立大学 附属図書館
A041	佐藤龍信・忠信之眞由祐著 源義信 （『京都淨土宗寺院文書』所 収「淨福寺文書12号」）	源義信	1532カ	1 未調査	佐藤龍信・忠信の眞の由祐著。天文元年(1532)とある が、改元月日以前であり、年号については疑問が残る。	京都府立大学 附属図書館
A042	策彦和尚詩集（『続群書類從 策彦周良 部』所収）	策彦周良	戦国時代	1 未調査	「八島戰場」と題し、佐藤龍信の歿死を詠んだ漢詩が4句 詠される。	京都府立大学 附属図書館
A043	月施鈴記（『源部妙造・美 濃部重克・弓削鈴記』所 収「淨龍記」）	一色直朝	1573～ 1603頃	1 未調査	石燈真要是佐藤龍信の墓を訪れて、龍信と歌を交わした が、改元月日以前である。「八島合戰之餘」の賛を収録。	京都府立大学 附属図書館
A044	私心記（『石山本願寺日記』 所収）	実徳	1532～ 1561	1 未調査	永禄2年(1559)3月4日条に、「曲舞之本八島一番」 が咏まれており、舞の本として使われていたことを示す。	京都府立大学 附属図書館

A : 前近代文芸 (5)

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法	cm	コメント	所蔵館
A045	傳承集〔『疎群書類』第13編 水滸消息部〕所収	朝下 文筆部	戦国時代	1	未調査	「局面執刀判官」と題した漢詩を取録する。	京都府立大学 附属図書館	
A046	八島（尾島）（『日本古典文世阿弥学大系 篇曲集』所収）	室町時代	1	未調査	尾島を舞台とし「脚信最期」「那須与一」「弓流」を題材とした能。	京都府立大学 附属図書館		
A047	景清（『日本古典集成 詞曲 集』所収）	1466以前	1	未調査	尾島合戦、景清の狼狽を題材とした能。	京都府立大学 附属図書館		
A048	熊手判官（『未刊詞曲集 続 金剛大夫』所収）	1465か	1	未調査	「八島判官」「弓流」「熊手切」とも、尾島を舞台とし、「脚信最期」「弓流」を題材とした能。	京都府立大学 附属図書館		
A049	折侍（『日本古典全書 詞曲 集』所収）	室町時代	1	未調査	尾島合戦、佐藤継信の最期を題材とした能。	京都府立大学 附属図書館		
A050	綱信（『番外詞曲 総』所収）	室町時代	1	未調査	「脚信最期」を題材とした能。	京都府立大学 附属図書館		
A051	延年那須与一（『未刊詞曲集 2』所収）	1470以前	1	未調査	「那須与一」を題材とした能。	京都府立大学 附属図書館		
A052	源氏尾島に下る『申葉疏義』琴元能（『源氏所収』）	室町時代	1	未調査	徵急曲。	京都府立大学 附属図書館		
A053	那須与一（『新日本古典文学 大系 疮言記』所収）	室町時代	1	未調査	「那須与一」を題材とした狂言。	京都府立大学 附属図書館		
A054	八島（尾島軍）（『新日本古典文学 大系 婦の本』所収）	室町時代	1	未調査	「脚信最期」を題材とした幸若舞曲。	京都府立大学 附属図書館		
A055	那須与一（『新日本古典文学 大系 疮の本』所収）	室町時代	1	未調査	「那須与一」を題材とした幸若舞曲。	京都府立大学 附属図書館		
A056	岡山（『新日本古典文学大系 婦の本』所収）	未詳	1	未調査	「脚信最期」を題材とした幸若舞曲。	京都府立大学 附属図書館		
A057	天狗の内裏（『日本古典文学 大系 脚伽草子』所収）	室町時代	1	未調査	「脚信最期」の内容を含む御伽草子。	京都府立大学 附属図書館		
A058	義経記（『日本古典文学大系 義経記』所収）	室町時代	1	未調査	義経の生涯を描いた物語。	京都府立大学 附属図書館		

A：前近代文芸（6）

ID	資料名	作者・出版社	出版年	作成年・ (形態)	時代・ (形態)	所蔵館
A059	源平屋島懐古戦錄起	—	江戸時代 前期	2 二巻	源平盛衰記の内容を基本とした合戦錄起。	屋島寺
A060	屋島寺龍藏勅集帳（『香川唇 龍藏序第11』所収）	—	1611年 10 3月	2 未調査	羅真による屋島寺の創建から空海による堂宇の建立、その後の伽藍の崩落の様子を伝える。	高松市中央図書館
A061	松雲本平家物語（『大東急記』— 念文庫叢林叢本平家物語卷 十一（翻刻））『陵阜大学教 育学部研究報告人文学科』 47-1 所収）	—	1612書写	2 未調査	異種本文取り合せ本系「平家物語」、奥義に八島を題材とした漢詩を載せる。	京都府立大学附属図書館
A062	翰林五瓢集（『大日本仏教全 書 善翰林五原集』所収）	—	1623	2 未調査	天皇龍氏の漢詩として「源九郎落弓圖」が収録されている。	京都府立大学附属図書館
A063	麓臚集（『新編 香川叢書 文 藝編』所収）	松平頼重	1642	2 未調査	「講岐国龜山八景之覽」に「屋島秋月」の和歌、寛永19年（1662）、高宗初代譜主松平頼重による。	高松市中央図書館
A064	屋島寺（『未刊語曲集7』所 取）	—	江戸時代 前期	2 未調査	佐藤雅信の墓を舞台に、その墓碑が語られる能。	京都府立大学附属図書館
A065	やしま（『古淨瑠璃正木集1』六字南無右衛門 所収）	—	1659	2 未調査	義経が登場する淨瑠璃。	京都府立大学附属図書館
A066	下り八幡（『古淨瑠璃正木集 10』所収）	—	江戸時代 前期	2 未調査	義経が登場する淨瑠璃。	京都府立大学附属図書館
A067	源平兵者繪（『土佐淨瑠璃正 士生少掾』 本集11所収）	—	江戸時代 前期	2 未調査	—の谷・屋島合戦を扱った淨瑠璃。	京都府立図書館
A068	登八幡（『土佐淨瑠璃正木集 3』所収）	士生少掾	江戸時代 前期	2 未調査	屋島合戦を扱った淨瑠璃。	京都府立図書館
A069	津戸三郎（門出八島）（『近 松全集1』所収）	近松門左衛門	1689	2 未調査	「副信最期」を題材とする淨瑠璃。	京都府立大学附属図書館
A070	剽雖八島（『定本西鶴全集 14』所収）	井原西鶴	1685	2 未調査	「静信最期」を題材とする淨瑠璃。	京都府立大学附属図書館

A : 前近代文芸 (7)

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法	cm	コメント	所蔵館
A071	尼公物語（八幡合戰）『御一 留淨端鑑集』所収)	—	桃山時代 ～江戸時代 代前期	2	未調査	〔翻信真則〕を題材とした淨端體。	近代デジタル ライブラリー	
A072	四国偏邊功過記（『西國遍路 真念 記集』伊予史談会双葉所収）	—	1689年12月	2	未調査	西國遍路における靈廟談、功過談。	愛媛県立図書館	
A073	義経子本草（『新日本古典文 学大系』竹田出雲・三好松 著、並木宗輔 編『淨端鑑集』所収）	竹田出雲・三好松 著、並木宗輔	1745	3	未調査	義経の登場する淨端體。	京都府立大学 附属図書館	
A074	那須与一西海硯（『豊竹齋淨 端鑑集2』所収）	並木宗助・並木丈 輔	1734	3	未調査	「那須与一」を題材とした淨端體。	京都府立大学 附属図書館	
A075	姫葉清八幡日記	若竹笛柳・黒誠 主・中邑阿尾	1764	3	未調査	景清の登場する淨端體。	—	
A076	境浦把軍記（『日本古典文学 全集』淨端鑑集所収）	文耕堂・長谷川 千閑	1732	3	未調査	「經引」を題材とした淨端體。	京都府立大学 附属図書館	
A077	世界圖目（『狂言作者資料集 1』所収）	—	1791以前	3	未調査	狂言作者の手控え本。「原刊官義経」「佐藤三郎次 信」と署名、「宗高」ら、屋島合戰に關係した人物が役 名として載せられている。	京都府立大学 総合資料館	
A078	山家鳥虫歌	天中原長常南山 編	1772	3	未調査	屋島を謳う俳諺が2つあり。近世民謡集。	京都府立大学	
A079	屋島櫻浦游平合戰之錄起	—	—	3	26.7 × 21.5	屋島の合戰における那須与一が崩を射ち落とす場面の記述あり。	高松市歴史資料館	
A080	方言修行金算軒第十四編精 詞（『十返舎一九全集』3所 収）	—	1821	4	未調査	屋島寺參詣、解説、八島の和歌・狂歌あり。	京都府立大学	
A081	林谷詩抄（『新編 香川叢書 文藝編』所収）	細川林谷	1848	4	未調査	七言律詩「舟中望鹿島」、嘉永元年序あり。作者の細川 林谷は勘定の生まれであり、篆刻家・漢詩人であつた。	高松市中央図書館	

A：前近代文芸（8）

ID	資料名	作者・出版社	出版年	作成年・出版年	時代・寸法・cm (形態)	コメント	所蔵館
A082	扶桑名所名物集 萩岐山上下 選者松園傳明 画工一益齋芳地、春友常藏版	—	1859	4	未調査	「江戸の绘園傳明が画を挿入し、香川県立文書館ながら鐵波の名所にちなんた狂歌を集めたもの。女体山の間に舟が浮いて櫻ノ浦が描かれる。塙田開発前に架かっていた橋や浜東・浜東のようすがわかる。」	香川県立文書館
A083	源平屋島櫻合戰錄起	内原政八（花押）	—	4	27.5 × 19.8	A079 とほぼ同内容。屋島の合戦における墨須手が頬を射ち落とす場面と生藤龍信に関する記述あり。	高松市歴史資料館
A084	松山藩『御船歌』(写) (『松山市史 2』所収)	—	—	5	未調査	「八嶋」は源平合戦の様子を描写。宝曇頃か。慶応3年のもの。	愛媛県立図書館 (個人)
A085	浅野家文書1 (八嶋軍物語 全)	—	—	5	未調査	屋島の合戦についての記述があり、屋島そのもののについ、香川県立文書館の記述はない。ページを示したためか、62から75まで、簡易でアラビア数字の通し番号が振られている。通し番号68から、龍信の最期が描かれている。	香川県立文書館
A086	浅野家文書1 (八嶋軍物語)	—	—	5	未調査	屋島の合戦についての記述があり、屋島そのもののについ、香川県立文書館の記述はない。ページを示したためか、76から101まで、簡易でアラビア数字の通し番号が振られている。通し番号83から、龍信の最期が描かれている。	香川県立文書館
A087	京極家御船歌 (『新編 香川叢書 又藝編』所収)	—	—	5	未調査	「八嶋」は源平合戦の様子を描写、「かくい備」は「八嶋の外も静かにして船に附びる死貝」とあり。	香川県立文書館
A088	六代君物語 (『資料紹介・解説』— 別『六代君物語』(『筆記と語り物』24所収))	不明	2 カ	—	—	屋島での平家一門の生活が内容に含まれる御伽草子。	京都府立大学附属図書館
A089	常光学文書30 (塙田開発)	—	1789頃	3 カ	未調査	P.40 ~屋島合戦の様子が描かれる。墨須手が頬をうちおとす。	香川県立文書館
A090	屋島合戦実記	—	—	5 カ	未調査	屋島の合戦における墨須手が頬を打ち落とす場面の記述あり。	高松市歴史資料館
A091	西浦田義やしまだんのうら (早川孝太郎『花祭』所収)	—	—	—	—	「静引最期」(静引)を含む民俗芸能。	京都府立大学附属図書館

B：前近代絵画（1）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法 cm	コメント	所蔵館
B001	安徳天皇縁起絵図	伝土佐光信筆	宝町時代	1 八幅（もと と襷）	安徳天皇の生歿を8枚に収めたながらの1枚。屋島の内裏 赤間神宮 を大きく描く。山の表現はなし。		
B002	浮家物語図	—	桃山時代	2 二曲一隻	「浮家物語」以外の場面もある。 扇面12枚。		大倉集古館
B003	継信・忠信物語絵巻	—	桃山時代	2 二巻	幸若舞の「八島」に基づいた絵巻物。		大和文化館
B004	源平合戦図屏風	—	桃山～江戸	2 二曲一隻	繪信の画面が大きく描かれる。		個人蔵
B005	一の谷・屋島合戦図屏風	—	慶長後半 ～元和	2 六曲一双	一の谷合戦図は豊臣精本によく似る。屋島合戦図屏風と しては最も古い形を残すとする。屋島の山谷は表現さ れてはいる。伊藤(2014)分類 [1]		天真寺
B006	高松城下図屏風	—	—	1640年代	2 八曲一隻	高松城下を描く。絵図的要素も豊富な要素として入れ込 まれた可能性がある。	
B007	屋島合戦図	—	—	17世紀	2 一幅	他の合戦図屏風とは大きく異なる。屋島や五劍山の描写 から、現地者が描いたことが明らか。譜文の繪 師によるものと表されている。屋島守隊役と対。また 源平屋島懐古戦跡との関連が記されている。	屋島寺
B008	那須与一扇射図絵馬	—	—	1663	2 …点	「扇の射」を描いた奉納絵馬。	白山神社
B009	やしま	—	—	1670	2 二冊	「屋島」をもとにした版木。	石水博物館
B010	義経図（牟礼高松図）	狩野探幽	江戸時代 前期	2 一幅	義経のエピソードに取材。馬に乗る義経と背後に一本の 松のみ。山の表現はない。義経は左向き。		茨城県立歴史 館
B011	義経弓流し図	狩野探幽	江戸時代 前期	2 一幅	義経弓流を描く。		香川県立ミユ ージアム
B012	佐藤惟信戰死の図	土生光起筆	江戸時代 前期	2 六曲一双	惟信の最期を描く。		屋島寺
B013	源平合戦図屏風	伝土佐光起筆	江戸時代 前期	2 六曲一双	構図は天真寺本と同じ系統。伊藤(2014)分類 [3]		今治市河野美術館

B：前近代絵画（2）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法 cm (形態)	コメント	所蔵館
B014	一の谷・屋島合戦図屏風	狩野興信筆	江戸時代 前期	2 六曲一双	右隻一の谷合戦。左隻屋島合戦。屋島の山容は表現され 岩山は描かれない。第六頭上には休息する源氏軍の場面と個人識 字和島伊達文化保存会		
B015	一の谷・屋島合戦図屏風	狩野基景筆	江戸時代 前期	2 六曲一双	岩山は描かれない。第六頭上には休息する源氏軍の場面と個人識 第三、四頭上には屋島前を攻める場面と思われる。陸と海 はおよそ上下で分隔。伊藤 (2014) 分類 [6]。		
B016	狩野常信筆礼高松図	狩野常信	江戸時代 前期	2 一幅	舟礼高松図。背景にマツと海がある。義経は左向き。	高松市歴史資料館	
B017	義経画像	狩野常信	江戸時代 前期	2 一幅	大夫黒に跨る義経。	石川県立美術館	
B018	源平合戦図屏風	狩野氏信筆	江戸時代 前期	2 六曲一双	右隻に激盛戦期、左隻に弱の者が取り上げられる。	滋賀県立琵琶湖文化館	
B019	一の谷・屋島合戦図屏風	海北友雪	江戸時代 前期	2 六曲一双	右隻一の谷合戦。左隻屋島合戦。フリア美術館本系統に 含まれる。伊藤 (2014) 分類の [1] になるか。	富士美術館	
B020	源義経移し図	狩野探信	江戸時代 前期	2 一幅	弓流を描く。	馬の博物館	
B021	源平合戦図屏風	一の谷・伝狩野吉信筆 屋島合戦圖	江戸時代 前期	2 六曲一双	右隻一の谷合戦。左隻屋島合戦。画面の左上が陸地、右 下が海。伊藤 (2014) 分類 [8]。	神戸市立博物館	
B022	源平合戦図屏風	伝狩野元信筆	江戸時代 前期	2 六曲一双	右隻一の谷合戦。左隻屋島合戦。フリア美術館本系統に似 る内容を持つ。伊藤 (2014) 分類の [1] となるか。	九雲本陣記念財团	
B023	直実牧盛・膳須与一嗣の的 図屏風	伝狩野元信	江戸時代 前期	2 八曲一双	場面を大きく描く。左隻に那須与一。	個人蔵	
B024	一の谷・屋島合戦図屏風	伝狩野元信	江戸時代 前期	2 六曲一双	右隻一の谷、左隻屋島。各場面を金雲で区切って描く。 赤間神宮 全体として左上=陸(屋島) / 右下=海の構図だが、[1] の表現は乏しい。伊藤 (2014) 分類 [8]。		

B：前近代絵画（3）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法 cm	コメント	所蔵館
B025	一の谷・屋島合戦図屏風	—	江戸時代 前期	2 六曲一双	右隻一の谷合戰 左隻屋島合戰。通例の構図とは大きく異なり、左は中央にかけて海があり、その他之上、右・下・左は陸地が取り囲む。東を上にした構図と言える。場面としては右から左に展開する。	ケルン東洋美術館	
B026	三家物語図屏風	—	江戸時代 前期	2 六曲一双	橋合戦の隻と屋島合戦の隻。屋島合戦は那須与一の脇のサンフランシスコ・アジア美術館	サンフランシスコ・アジア美術館	
B027	一の谷・屋島合戦図屏風	—	江戸時代 前期	2 六曲一双	右隻一の谷合戰。左隻屋島合戰。左下の当山が第五頭に中央。奥に山容があり、右側に陸地が狭く（松林）。表現し、第六頭下には在来。勝浦上陸が第六頭上に描かれる。第五頭上の館は第五頭下に岩山があるの全體に場面が金雲や松、山で区切られる。伊藤（2014）分類 101	ジエノバ東洋美術館	
B028	屋島合戦図	—	江戸時代 前期	2 六曲一隻	屋島東岸の打が広く描かれる一方で船は描かれない（山 フリア美術館の上の箇所がどこにあるのか）。第六頭下に岩山があるのが特徴。敵船最期と朝の場面を松で象徴的に区切る。伊藤（2014）分類 111	フリア美術館	
B029	一の谷・屋島合戦図屏風	—	江戸時代 前期	2 六曲一双	天賀寺本と同系統。土佐派。伊藤（2014）分類 111	メトロボリタニア美術館	
B030	一の谷・屋島合戦図屏風	—	江戸時代 前期	2 六曲一双	大阪城え、浅瀬渡りに始まり、内裏、繼信、崩的、錦レンテン民族引、弓流とはほぼすべてが描かれる。岩山あり。伊藤（2014）学博物館分類 110	リレンテン民族博物館	
B031	一の谷・屋島合戦図屏風	—	江戸時代 前期	2 六曲一双	右隻一の谷、左隻屋島。フリア美術館本と似るが、第六水青文庫		
B032	八島物語繪巻	—	江戸時代 前期	2 一巻	扇若舞の「八島」に基づいた絵巻物。	屋島寺	
B033	屋島寺縁起繪	—	江戸時代 前期	2 一幅	屋島寺の縁起を表したもの。屋島合戦図と対になる。	屋島寺	

B：前近代絵画（4）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・寸法・cm (形態)	コメント	所蔵館
B034	奈良繪本 源平盛衰記	—	江戸時代 前期	2 五十冊	「源平盛衰記」の繪本。「弓流し」を含む。	海の見える社 美術館 個人蔵
B035	一の谷・屋島合戦図屏風	—	江戸時代 前期	2 六曲一双	大きさは下3分の1が海、上が陸地で全体としてクローズアップして描かれている。日本屏風集成5(115/116)。伊藤(2014)分類【8】に相当か。	香川県立ミュージアム
B036	源平合戦図屏風	—	江戸時代 前期	2 二曲一双	本作品に屋島合戦の内容は含まれない。	香川県立ミュージアム
B037	源平合戦図屏風	—	江戸時代 前期	2 六曲一双	フリア美術館などに類似する。伊藤(2014)分類【4】。	香川県立ミュージアム
B038	源平合戦図屏風	—	江戸時代 前期	2 六曲一双	各画面が金賞などで比較的の明瞭に分かれる。伊藤(2014)分類【10】。	香川県立ミュージアム
B039	源平合戦図屏風	—	江戸時代 前期	2 六曲一双	右隻一の谷、左隻屋島合戦。勝浦上陸(第六節上)、高松民家條上(第六節下)、源氏の休息(第四節上)など方特徴的。第二頭が走り、陸地の構合が多い。およそ北を上とした構図となっている。伊藤(2014)分類【5】。	高松市歴史資料館
B040	奈良繪本 八島	—	江戸時代 前期	2 二冊	幸若舞の「八島」を題材とした奈良繪本。	高松市歴史資料館
B041	一の谷屋島合戦図屏風	—	江戸時代 前期	2 六曲一双	フリア美術館本と似るが、区切りの長い本数などが違う。伊藤(2014)分類【4】。	埼玉県立歴史と民俗の博物館
B042	源平合戦図屏風	—	江戸時代 前期	2 六曲一双	左隻・一の谷合戦、右隻・屋島合戦。景清、前の的、維山製立博物館	伊藤(2014)分類【4】。
B043	大坂夏の陣・屋島合戦図屏風	—	江戸時代 前期	2 六曲一双	大坂夏の陣と屋島合戦では海岸付近の攻防がクローズアップされている。山谷はまったく表現されず。	出光美術館
B044	大坂夏の陣・屋島合戦図屏風	—	江戸時代 前期	2 六曲一双	大坂夏の陣と屋島合戦では海岸付近の攻防がクローズアップされている。山谷はまったく表現されず。	出光美術館

B：前近代絵画（5）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法 cm	コメント	所蔵館
B045	源平合戦図屏風 鳥島合戦 図	—	江戸時代 前期	2 六曲一双	右隻に縫引の様子、左隻に崩的の様子を描いた部分図。	神戸市立博物館	
B046	—の谷・星島合戦図屏風	—	江戸時代 前期	2 六曲一双	天眞寺本系の上るに画面右側(2～3扇分)が海、左側(3扇分)が陸地だが、左下の岩山があるなど、異なる特徴を持つ。	賢額寺	
B047	浮家物語図屏風	—	江戸時代 前期	2 六曲一双	左隻・龍溪等、景清麗引図。	仙台市立博物館	
B048	—の谷・星島合戦図屏風	—	江戸時代 前期	2 六曲一双	天眞寺本とよく似る。人物に付箋がつけられる。伊藤 大英博物館	伊藤 大英博物館	
B049	星島・境の浦合戦図屏風	—	江戸時代 前期	2 六曲一双	左隻・星島合戦。左隻原ノ浦合戦。星島合戦は、右上に大坂城があり、その後、右から左に副信と右が逆の構図として興味深い。	東京国立博物館	
B050	浮家物語図屏風	—	江戸時代 前期	2 六曲一双	左隻・星島合戦。左隻原ノ浦合戦。高松市歴史資料館本と馬の博物館本と類似した表現だが、刀張が第四扇にあり、海陸の割り当てが異なる。伊藤 (2014) 分類 [15]。	馬の博物館	
B051	星島合戦図屏風	—	江戸時代 前期	2 六曲一双	弓流と縫引に焦点を当てたもの。第六扇上に水田表現。馬の博物館	馬の博物館	
B052	義経図屏風	—	江戸時代 前期	2 六曲一双	義経記に依拠して作られた名場面集。那須与一の場面がある。	馬の博物館	
B053	—の谷・星島合戦図屏風	—	江戸時代 前期	2 六曲一双	右隻の谷、左隻原島。フリア美術館本と似るが、第六扇上の水田等の表現、区切りの松の本数などが違う。伊藤 (寄託)	伊藤 (寄託)	
B054	浮家物語図鑑巻	—	江戸時代 前期	2 三十六巻	「平家物語」の巻巻。	林原美術館	
B055	五社高松図 講	利村	江戸時代 中期	3 一枚	圖に年札高松図の意匠が採用されている。	永青文庫	

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・寸法・cm (形態)	B: 前近代絵画 (6)	所蔵館
B056	那須与一扇の前図	初代狩野休園筆	江戸時代 中期	3 一幅	宝永6年(1709)作 海に入つて矢を射る与一、船とひらひらと舞う扇(舟)が描かれる。	高松市歴史資料館
B057	牟礼高松園	土生光祐筆	江戸時代 中期	3 一幅	海岸像と松とどう地に太夫黒に乗つた義経が遠方を見ている様子が描かれる。義経は左向き。	高松市歴史資料館
B058	義経弓流の図	野野典信	江戸時代 中期	3 一幅	弓流の図。	高松市歴史資料館
B059	那須与一外扇図屏風	野野與信筆	江戸時代 中期	3 二曲一隻	左側下に那須与一、右扇の上に船と扇が描かれる。背景 個人蔵	
B060	那須与一 扇の角	鳥居清漣	江戸時代 中期	3 一幅	扇の角の場面を描く。	東京国立博物館
B061	平家蛤列面貼交障風	—	江戸時代 中期	3 六曲一双	「平家物語」12巻の内容と扉頂巻の内容を三十冊の絵巻として描いたもの。挿絵のなかに「弓流し」も含む。	シアトル・ゼンココレクショ
B062	島津家本 平家物語	—	江戸時代 中期	3 三十冊	「平家物語」12巻の内容と扉頂巻の内容を三十三冊の絵巻として描いたもの。挿絵のなかに「弓流し」も含む。	
B063	源平合戦図屏風	—	江戸時代 中期	3 二曲一双	二曲一双で各隻の左扇は一の谷合戦が、右扇には屋島合戦が繰り広げられる。上部に山が描かれるが、背景として描かれるのみである。	高松市歴史資料館
B064	弓流し図扇面	—	江戸時代 中期	3 一幅	扇面。真ん中に弓を绘う義経、左に源氏、右に平氏といふ構図。	高松市歴史資料館
B065	源平合戦図屏風	—	江戸時代 中期	3 六曲一双	大英博物館本と同じ系統に属する。伊藤(2014)にはないが、[12]に該当する。	高松市歴史資料館
B066	—の谷・屋島合戦図屏風	—	江戸時代 中期	3 八曲一双	右隻一の谷合戦。左隻屋島合戦。横に長い構図。大坂越城別院、善光寺、浅瀬渡り、内裏表上、羅信、扇の前、鏡引、弓流あ、他等	伊藤(2014) 分類[12]。

B：前近代絵画（7）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法 cm	コメント	所蔵館
B067	源平合戦の図	—	江戸時代 中期	3 一ノ編(鉛)	「源平盛衰記」の各場面を描いた押絵貼り屏風の各場面 屋島合戦では弓流しと鎧信最期。	信濃長谷谷	神戸女子大学図書館
B068	能狂言絵巻	—	江戸時代 中期	3 一巻	能・狂言の曲目を図絵化したもの。「八島」が含まれる。	神戸女子大学	神戸女子大学図書館
B069	奈良繪本 平家物語	—	江戸時代 中期	3 一二巻	「平家物語」12巻と各巻2冊に書字。「鎧信最期」や「崩」等の如きが描かれる。	奈良県立歴史博物館	奈良県立歴史博物館
B070	奈良繪巻 やしま	—	江戸時代 中期	3 二四冊	幸若舞の「八島」に基いた绘巻物。	大阪青山山歴史文学博物館	大阪青山山歴史文学博物館
B071	源平合戦図屏風	—	江戸時代 中期	3 六曲一双	一の谷、鳳島、壇の浦が描かれる。墨須舟・や嗣信、鏡 長野県立歴史	伊藤 (2014) 分類 [1.3]	長野県立歴史
B072	源氏二十二傳	勝川春英	1815～1819	4 一枚	義経を中心に、佐藤継信ら22人の忠臣を描く。	伊藤 (2014) 分類 [1.3]	高松市歴史資料館
B073	山水園・七色詩	谷文晁	江戸時代 後期	4 一幅	山水画、高松城下側（西方寺付近）からとらえられた構図としては初めての作品に位置づけられる。質は菊池五山。	高松市歴史資料館	高松市歴史資料館
B074	日本名山図会	谷文晁	江戸時代 後期	4 3冊	日本名山図譜（1804）の改版。真景園による日本中の名山の彙集。屋島と五劍山が載る。	京都府立大学	京都府立大学
B075	八島大合戦	歌川国芳	1805～1842	4 三枚続	「八島大合戦」というタイトルだが、内容は壇の浦合戦である。	高松市歴史資料館	高松市歴史資料館
B076	源平八島大合戦	歌川国芳	1805～1842	4 三枚続	「源平八島大合戦」というタイトルだが、内容は壇の浦合戦である。	神戸市立博物館	神戸市立博物館
B077	美術八鏡 八幡夕照	歌川国芳	1843～1847	4 三枚続	墨須舟の扇の扇的の場面。両面手前が陸地、奥が海で、手前が島だと分かる。マツツが一本画面左から上にかかる。	高松市歴史資料館	高松市歴史資料館
B078	八島大合戦図	歌川国芳	1847～1852	4 三枚続	「八島大合戦図」というタイトルだが、内容は壇の浦合戦である。	高松市歴史資料館	高松市歴史資料館

B：前近代絵画（8）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・寸法	時代・寸法	コメント
B079	義経弓流之図	歌川国芳筆	1847～ 1852	4 36.7× 74.4	4 36.7× 74.4	弓流の場面を中心には描かれていない。全体に海が描かれ、高松市歴史資料館両軍が入り乱れている。石の背後に山が描かれるが、方角は不明。
B080	源平大合戦	歌川国芳	1856	4 三枚続	4 三枚続	弓流の場面を中心には描かれていない。全体に海が描かれ、高松市歴史資料館右の背後に山が描かれるが、方角は不明。
B081	讃州屋鳩派平大合戦之図	歌川芳虎	1847～ 1852	4 三枚続	4 三枚続	手前に陸地、奥に海という構図。陸地は屋島に相当。マ山島合戦だけでなく、壇の捕合戦の内容も描かれている。
B082	源平八幡櫻浦大合戦遠矢之 図	歌川芳虎	江戸時代 後期	4 三枚続	4 三枚続	合戦の主人公たちが一颶の船に乗って紹介される。
B083	源義経軍礼高松の陣に軍配 の図	三代歌川豊国 (国 貞)	1843～ 1847	4 37.2× 75.5	4 37.2× 75.5	源氏には源氏がいる。陸には源氏がいる。
B084	源義経軍礼高松の陣に軍配 の図	歌川国貞	江戸時代 後期	4 一枚	4 一枚	尾島・壇の浦を一図に取める。幸徳高松の陣を構える義経が描かれる。
B085	源平合戦囲屏風	狩野一信筆	1853	4 六曲一双	4 右隻一の谷、左隻・尾島。場面を大きく取り扱う。織信、板橋区立美術館の的、認引。山が描かれるが、尾島の山容ではない。	
B086	八幡櫻浦前海底之図	歌川芳虎	1858	4 三枚続	4 三枚続	安政5年 (1858) 改印。「八幡櫻浦前海底之図」とあるが、高松市歴史資料館壇の捕合戦の状況である。
B087	八幡櫻浦前海底之図	歌川芳員	1862	4 三枚続	文久2年 (1862) 改印。海上での戦い。八幡櫻など、高松市歴史資料館壇の捕合戦が描かれる。	
B088	義経八島之名譽	月岡芳年	1866	4 三枚続	4 三枚続	弓流の場面。右には源氏、左には平氏の構図。右奥には山島となるが、山容は異なる。奥、奥(画面上面)は開けており、海が描いている印象を受ける。
B089	源平八幡大合戦	落合芳幾	江戸時代 後期	4 三枚続	4 三枚続	弓流の場面を中心にある。両軍の勢いを表現することに高松市歴史資料館主眼。画面はすべて海。
B090	源平合戦囲屏風	守峰	江戸時代 後期	4 六曲一双	4 六曲一双	画面の左が陸地、右下が海の構図。脇のがクローズ・ワールドミューージアムアップされている。伊藤 (2014) 分類 18。

B : 前近代絵画 (9)

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法 cm	コメント	所蔵館
B091	義経公軍卒高松之図	清原貞暉	江戸時代 後期	4 一幅	義経のエピソードに取材した図。後ろに松と海が描かかれ る。義経は右向き。	香川県立美 術館	
B092	那須守一図	浮田一應筆	江戸時代 後期	4 一幅	掛け軸。画面下に手、上に舞う扇（赤）が描かれる。	高松市歴史資 料館	
B093	奉札高松園	口山	江戸時代 後期	4 一幅	奉札高松園。背景に松と海がある。義経は左向き。	高松市歴史資 料館	
B094	奉札高松園	森泉歌	江戸時代 後期	4 一幅	奉札高松園。背景に松と海がある。義経は左向き。	高松市歴史資 料館	
B095	奉札高松園	田安齊正筆	江戸時代 後期	4 一幅	義経のエピソードに取材した図。後ろに松が描かれる。	徳川記念財团	
B096	源平合戦図屏風	—	江戸時代 後期	4 六曲一双 右隻	源平合戦。左隻是島合戦。押繪貼りのため、各囲 ウイーン国立 工芸美術館 の画面は連続しない。縫引、難倍長期、弓流、扇の形が などが確認される。	高松市歴史資 料館	
B097	源平合戦図屏風	—	江戸時代 後期	4 六曲一双 右隻	右隻に一の谷合戦、左隻に是島合戦と源ノ浦合戦を描く。	高松市歴史資 料館	
B098	源平合戦図扇面貼交屏風	—	江戸時代 後期	4 二曲一双	12枚の扇面が貼られた屏風。是島合戦は難倍長期の場 面がある。	高松市歴史資 料館	
B099	弓流し図屏風	—	江戸時代 後期	4 八曲一双	弓流しの場面のみを一隻に大きく描いたもの。周辺は金 雲で覆われ、背景は描かれない。	高松市歴史資 料館	
B100	源平合戦図屏風	—	江戸時代 後期	4 六曲一双	構図はケルン東洋美術館本に似ており、左上から中央に かけて海があり、その周囲の上・右・下・左を陸地が固 む東を上とした構図となっている。ただし、内容はケル ン東洋美術館本とは大きく違う。ただしこれはケル ンの元典ではない。難倍長期、扇の形、系譜関係は認めにく い。難倍長期、扇の形、縫引。是島の山容についての表 現はない。	高松市歴史資 料館	
B101	源平盛衰記絵巻	—	江戸時代 後期	4 三巻	「源平盛衰記」をもとにした巻。	香宮歴史博物 館	
B102	宇治川先陣図・弓流図屏風	—	江戸時代 後期	4 六曲一双	根本油瓶筆。宇治川先陣、弓流の場面。	渡辺美術館	

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・寸法・cm (形態)	B : 前近代絵画 (10)
B103	一の谷・屋島・壇ノ浦合戦 — 図解風	—	江戸時代 後期	4 六曲一隻 右隻一の谷・左隻屋島・壇ノ浦合戦。画面構成に物語性 置松寺 所蔵館	コメント
B104	源平合戦図屏風	—	江戸時代 後期	4 六曲一隻 右隻：壇合戦と一の谷合戦。左隻：屋島合戦と壇の浦合戦。和歌山県立博物館	
B105	八島合戦金屏風	—	江戸時代	5 六曲一隻 壇の浦合戦は右下に描かれる。 左隻：八島合戦と似る。伊藤(2014) 分類【4】。『日江』 —	
B106	源平合戦図屏風	—	江戸時代	5 六曲一隻 『日本書古事記』81 (2002) にあり。未見。	
B107	一の谷・屋島合戦図解風	—	江戸時代	5 六曲一隻 『安清』印。左隻：一の谷合戦、右隻：屋島合戦。伊藤(2014) 分類【10】。	ベルン歴史博物館
B108	源平合戦図屏風	—	江戸時代	5 六曲一隻 『安清』印。左隻：一の谷合戦、右隻：屋島合戦。伊藤(2014) 分類【10】。	
B109	浮家物語図屏風	—	江戸時代	5 六曲一隻 左隻：壇島合戦。画面左が陸地(ただし、個人蔵 記念館)、右が海上という構図。屋島の山容は描かれていない。	
B110	扇面色紙貼交物語図解風	—	江戸時代	5 六曲一隻 「浮家物語」以外にも含む貼交図屏風。屋島合戦開闢では個人蔵 繙絆最初、弓流、鎧引。	
B111	浮家物語図屏風	—	江戸時代	5 六曲一隻 左隻のみ。屋島合戦を描く。富士美術館本、埼玉県立歴個人蔵	
B112	能鑑百齣	—	江戸時代	5 二十冊 能楽を演じる舞台を図示した冊子。百番の中に「八幡」個人蔵	
B113	源平合戦図画帖	—	江戸時代	5 一冊 源平合戦に関する図画帖。全12図。	高松市歴史資料館
B114	源平合戦図屏風	—	江戸時代	5 六曲一隻 繙絆の場面が描かれる(二刷版)。	高松市歴史資料館

ID	資料名	作者・出版社	出版年	作成年・ 江戸時代	時代	寸法 (形態)	cm	コメント	B : 前近代絵画 (11)
B115	星島合戦図屏風	—	—	—	江戸時代	5	八曲一隻	未見。伊藤 (2014) 分類 [9]。	埼玉県立歴史と民俗の博物館
B116	源平合戦図屏風	—	—	江戸時代	5	八曲一隻	—	一つの谷・星島の両合戦の隻と壇ノ浦合戦の隻。—の谷・星島が左側となる。伊藤 (2014) 分類 [9]。	出光美術館
B117	—の谷・星島合戦図解説	—	—	江戸時代	5	六曲一隻	右隻	一つの谷合戦。左隻星島合戦。左上に砲臺に火ををつける様子、左下に岩山あり。全体として場面ごとに描き分けられれている。	松岡美術館
B118	鷹越図屏風	—	—	江戸時代	5	六曲一隻	—	左隻に「那須守」、「能登殿最期」、「八幡殿ひ」	松坂市
B119	源平合戦図屏風	—	—	江戸時代	5	六曲一隻	右隻に鷹越。左隻に「那須守」、「能登殿最期」、「八幡殿ひ」	神奈川県立歴史博物館	
B120	源平合戦図屏風	—	—	江戸時代	5	六曲一隻	右隻に一の谷合戦、左隻に星島合戦と壇の済合戦を配置する。伊藤 (2014) 分類 [11]。	大阪市立美術館	
200	—	—	—	江戸時代	5	六曲一隻	平安物語の各場面集といった構成。一間に一場面が描かれる。星島合戦闘争では那須守一が取り上げられる。	長榮寺	
B121	—の谷・星島合戦図解説	—	—	江戸時代	5	六曲一隻	教説最期・難波最期のみ。	長野県立歴史館	
B122	源平合戦図屏風	—	—	江戸時代	5	八曲一隻	宇治川へ壇ノ浦ノ浦まで、那須守一や難波信、弓流が描かれる。	伊藤 (2014) 分類 [13]。	
B123	星島合戦図屏風	—	—	江戸時代	5	六曲一隻	北方文化博物館本と以る。伊藤 (2014) 分類 [17]。	徳川美術館	
B124	源平合戦図屏風	—	—	江戸時代	5	六曲一隻	平安物語の各場面集。12の場面、左藤胤信・那須守一・義経弓流・星島改軍の場面が採用される。	兵庫県立歴史博物館	
B125	源平合戦図屏風	—	—	江戸時代	5	六曲一隻	構図はフリア美術館本などと同じだが、八幡殿ひなどの北方文化博物館	高松市歴史資料館	
B126	弓流し図	—	—	江戸時代	5	一枚	弓流の図。	山種美術館	
B127	源平合戦図屏風	—	—	江戸時代	5	六曲一隻	未見。	東京国立博物館	
B128	—の谷・星島・壇ノ浦合戦 図屏風	—	—	江戸時代	5	六曲一隻	未見。	—	

C：近世紀行文・日記（1）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法	cm	コメント	所蔵館
C001	扶桑錄（牛窓町歴史資料編）海行總載	（形他）	1617	2	未調査	8月 15 日分下津井を出発し、南に坂島（塩飽島カ）・大島（大根島カ）・八島（星島カ）と記述。		岡山県記録資料館
C002	講岐下り（『四国道の記』）岩手宗也 〔新編香川叢書 文藝編〕 所収)		1635	2	未調査	屋島の和歌、「洲崎の家の跡はかなき 次信かしるしの石」高松市中央図書館 の記述あり。寛永12年頃のもので、作者は元主馬家臣。		高松市中央図書館
C003	26代法親王四国遍路巡行記 伊予史談 賢明、伊予史談 〔賢明〕〔四国遍路記集〕伊予史談 所収)		1638	2	未調査	屋島寺から八栗寺への行程、駒立石などの記述、大覚寺 空性法親王に隨行した太宝寺權少僧正賢明作。		愛媛県立図書館
C004	四国遍路日記（澄禪）〔西國遍路記集〕伊予史談会 収 〔西國遍路記集〕伊予史談会 収 〔文藝編〕所収)		1653	2	未調査	屋島寺、安徳天皇ノ内裏跡、佐藤次信ノ石塔、洲崎ノ堂 郡生まれて、新義真言宗本山都智院の僧である。		愛媛県立図書館
C005	小豆島紀行〔新編 香川叢書 松山秋也 〔文藝編〕所収〕		1667	2	未調査	屋島寺へ参詣、佐藤次信ノ塔等の記述が詳細である。 ける所、佐藤次信ノ塔等の記述が詳細である。		高松市中央図書館
C006	壬午紀行〔新編 香川叢書 桃居翁二柳 〔文藝編〕所収〕		1762	3	未調査	人の見送りに屋島付近まで行く。「佐藤次信の孫、黒原」高松市中央図書館 などの記述あり。作者の俳人桃居翁二柳は加賀山中出身。		高松市中央図書館
C007	絶末會有記（『近世紀行集』遠山景晋 所収）		1805	4	未調査	文化2年（1805）2月14日生懃出航、屋島、源平の記述あり。		京都府立大学
C008	海陸道順達日記〔『海陸道順 達日記：佐渡過船商人の西 国見聞記』所収〕	—	1813	4	未調査	文化10年（1813）7月20日屋島付近を通過の時、八島 の歌を詠む。佐渡過船商人の西国見聞記。		京都府立大学
C009	海陸舟行日記全 —		1823	4	未調査	屋島を東から描く。図には「屋島山 与一駒立 次信 東浦」九州大学附属 とあり、血の池、屋島寺、遠見番所、總門の港、佐藤維信などの解説あり、貞文7年（1667）遷見殿関係か。 信義期などの解説あり、貞文7年（1667）遷見殿関係か。 文化史		九州大学附属図書館

C：近世紀行文・日記（2）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法 cm	コメント	所蔵館
C010	黒川の記	忠直	1827 (形他)	4 24	謹啓から備前への船から見た景色(東の方を)ミわせハ、 八栗・八幡など、かのものがもしにさへわたる。文政10 年(1827)阿波國の忠直が、主人木下氏の使で備中國撫 川を訪ねた時の記行		岡山県立図書
C011	川瀬太夫一代記『川瀬正一 太夫一代記』所収)	—	1850	4	未調査	喜永 3年 (1850) 5月 27 日 鳥島に船を掛ける。鳥島の 歌 2首詠む。若狭生の船頭日記「南海願豆日記」355頁。	京都府立大学
C012	海陸通り喰こと裏の手拍子 〔内藤光鏡院道中記〕所収)	内藤光鏡院	1865	4	未調査	元治2年(1865)4月6日「八島だんの浦を遠くに見、 姫町藩主室内藤光鏡院が姫町から江戸へ帰舟したときの 紀行文。	京都府立大学
C013	新增日本道中行程記大成 —	—	—	5	未調査	小判型に島島を描く。表記は八島。他に明和3年本あり。 九州大学附属 図書館(九州 文化史)	九州 文化史

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・寸法・形態	D：近世地誌・名所案内記（1）コメント
D001	諱州歷覽志〔香川縣史第15 江村宗祇 卷資料編 勅文〕所収)		1653	2 木調査	讃岐国内の名所誌。江村宗祇は江村専務の子で京都の高松市中央図書館 人。青山幸成によると、寛永17年(1640)年生駒氏改易時の高松城取てした跡の見分に基づく。 屋島（山形似駿故名之。或号南面山）とあり。麗真堂字建立、空海の十一面觀音奉納、血池、「宇智持山岡二軸口説古事。有源平交兵記不足見矣。」と記述。安徳帝行宮。佐藤謙信纂。權ノ油。相引灘。宇童ガ園。高松ノ里之記述あり。
D002	玉藻集〔香川叢書 卷三〕小西可作 所収)		1677	2 木調査	讃岐の名所古跡を詠んだ和歌を集め、社寺の由緯・旧跡・高松市中央図書館 伝説・物語等を記し、さらに偉人の伝記・家記・戦記・書館 を加えて七巻本としたもの。本資料は延宝5年(1677) 成立の七巻本。 承久三年土門院土佐配流時に「讃岐の屋しま」を見て「安徳天皇の御事」を思い出すとの記事。度唐前合戦での屋島の平氏攻撃。「屋嶋」の項で「大江ノ忠名」が讃岐配流時に缺んだ和歌の考証。屋島城址。屋島、合戦、海邊々トシテ巖石聳雲、無左右源氏ノ軍兵可渡様ナシ」と記述する。 名木として楓(楓)掛恋、名石として鶴子の巣巣、宝石・ 宝池、那須与一駆立石・向折り石を立頂、僕に聞いて馬塚(太夫塚の跡)を取り上げる。名底に駒脚辨を挙げる。偉人ににおいて解無太夫について記述。寺院において南面山屋崎寺千手(光)院の項目あり、麗真・空海の伝承に觸れる。源平合戦時に源氏方へ移った「讃岐国御家人」について記述。

D：近世地誌・名所案内記（2）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・形態	寸法・cm	コメント	所蔵館
D003	四國遍路道指南（眞念）『四 真念 国遍路記集』伊予史議会又 書 所収		1687	2	未調査	真念作、高野聖。八十四番札所屋島寺への行程、屋島寺、愛媛県立図書 館蔵（空巻次信含む）、内裏跡、壇の浦、あひ引、館 奈須の与由駒立岩、ささきの堂、惣門、大太黒馬の墓 の記述あり。	高松市中央図書館
D004	四國遍礼靈場記（辰本）『四 国本 国遍路記集』伊予史議会又 書 所収		1689	2	未調査	屋島寺、淡信篤、廣の浦、野立岩、折岩、洲崎の堂の 記述あり。辰本は山城国屋草の人。	愛媛県立図書 館
D005	讃岐国大日記（『香川叢書 卷二』所収）	友安盛員	1651～	2	未調査	上代から慶安4年（1651）までの讃岐国の編年史。作 者友安盛員は高松石削屋八幡宮の祀官。日本書紀より 引用の屋島城築地記事。羅真の千光院建立記事。貞元 2年（977）官使屋島登山記事。寿永2年（1183）安徳 天皇鳥羽行宮記事。源平合戰の源況院（源経の武功、 維伝承、継引、母一伝承、義経伝云に触れる）。寛永 20年（1643）5月忠平頼重佐藤維新（信長碑建立記事、維 新傳文を掲出する）。正保4年（1647）賴重による生 駒時代の相引川堤防破堤の記事（「古來之名跡ヲ記す」）。	高松市中央図書 館
D006	讃岐府志上・下（『香川叢書 卷二』所収）	七条宗貞	—	—	未調査	讃岐国の地誌。延宝、天和頃に高松藩備臣七条宗貞に より著される。上の「讃吉園」の項目で、天智天皇期に の屋島城築城に言及。山川附地池の部に「屋嶋」の項目、 「簡ヨコト教」。高松平易ニシテ、面望之如屋。故ニ 名屋嶋。海潮湖四ニ極り、危筆則極テリ」とあり。屋真 伝承、安徳天皇内裏、源平合戰、佐藤嗣信斬の傳と覧 水の高松津碑建立、万治4年（1661）の千体仏建立 等について記述。郷社所蔵堂の部に「維信堂」の項目、 高松藩主松平頼重の建碑記事。下の「仏觀の前」「屋嶋寺」 の項目、羅寔宇宇建立、弘仁元年（810）空海による整 備、天智天皇御廟建立による「神宇」、建立・四天王像奉納、 安和年中の清原孝尊祈願の記事あり。	高松市中央図書 館

D：近世地誌・名所案内記（3）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・形態	cm	コメント	所蔵館
D007	金剛夜話卷之四	菊池武質	1745	3	未調査	巻之四デジタルライブラリー NO.33-42。 佐藤次信纂／太夫黒鶴／太夫黒鶴路／至徳元年信空齋 參の記事／次信開譲者の記事／射霧昌／酒崎半／立 駒石／折石／大砂子（＝駢引）／惣門／源氏ヶ峰／瓜 生山。	香川県立図書 館（香川県立 図書館デジタ ルライブラリ ー）
D008	金剛夜話卷之四、五	菊池武質	1745	3	未調査	巻之四、五デジタルライブラリー NO.111-122。『急驅夜 話』巻之四・巻之五の模写本。巻之四の記載はd007 と同じ。但し立駒石・折石の記述箇所は異なる。 巻之五の記載。 島鳥寺：「山野版屋故得名要先時山南有 交坂」／不食之梨・阿吽二子・南無阿弥陀佛名號／二 王門／二天門／體樹／大悲閣／獅子雲巖／圓島城／靈 真屋島寺建立の伝承／圓島寺塔頭と英公寺を寄進の記 事／「圓島記」（奥村景記）／佐藤次郎神社／元貞2年 官使圓島春山の伝承／宝永7年靈見便樹／浦来訪の記 事／享保2年造営次代院見の記事／「圓島懷古二首」 （桂山萬丁）／黄牛嶺／點島浦海名品の記載／平家蟹 ／長崎鼻／曾女嶋／「遊覽女崎三首」（深井與組）	香川県立図書 館（香川県立 図書館デジタ ルライブラリ ー）
D009	金剛羅參節海陸記	今村美嘉謡書、大	1778	3	未調査	「讃州之名所八葉屋編等見物乃望あらば大阪にて乗船之 簡船宿相付して讃州高松へ船をつけさせ道筋所々見物 してすぐに金剛羅へ参詣すべし」とあり。 市兵衛・柏原屋与 左衛門・堺屋忠兵 衛	西尾市岩瀬文 庫（国文学研 究資料部マイ クロ／デジタ ル資料より）

D：近世地誌・名所案内記（4）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・形態	寸法・cm	コメント	所蔵館
D010	諸説岐国大日記 『香川叢書 伝矢野理助難集』 卷二〔所蔵者印八郎所蔵〕	香川叢書 伝矢野理助難集	1721～	3	未調査	承応2年(1653)から享保6年(1721)までの諸説国 の編年史。作者は高松藩士矢野理助難と弟伊八郎と 伝えられる(『香川叢書 卷二』)。	高松市中央図書館
D011	四國遍礼名所団会 『四國遍礼 内墨武兵衛作・ 種名所圖會并近代の御影・鑿場写真』所収	内墨武兵衛	1800	4	未調査	阿波国阿南町内墨武兵衛作。 屋島寺への行程、屋島寺、矢倉谷、權満、佐藤雄信、館 佐藤次信石碑、内裏屋敷、安徳天皇社、赤牛崎、大堀、 義経繩掛松、宇龍岡、鴨立石、相引汐、剣崎音首の 記述あり。	愛媛県立図書館
D012	四国遍礼道指南 増補大成 有介(眞念)、佐々 井治助(右衛門刊)	有介(眞念)、佐々 井治助(右衛門刊)	1815	4	16	屋島寺、佐藤雄信の墓、剣崎の堂(観音)、瓜生山(源 氏の本陣所)の記述あり。	香川県立図書館
D013	金毘羅參詣の道中の名所、および諸峰的主要な名所を 記述。既編成は大阪の著作家。屋島に關する記載が豊富。館 「備平塗良記」の引用が多い。	金毘羅參詣の道中の名所、および諸峰的主要な名所を 記述。既編成は大阪の著作家。屋島に關する記載が豊富。館 「備平塗良記」の引用が多い。	1847	4	未調査	金毘羅參詣の道中の名所、および諸峰的主要な名所を 記述。既編成は大阪の著作家。屋島に關する記載が豊富。館 「備平塗良記」の引用が多い。	香川県立文書館
D014	諸説国名勝園会志之四下 山田郡	尾原藍葉・藍水	1854	4	26.1 × 19.2	D016『諸説国名勝園会卷之四 山田郡』の後編版で、 上下巻に分かれ。内容は同じ。	高松市歴史資料館

D：近世地誌・名所案内記（5）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・寸法 cm (形態)	コメント	所蔵館
D015	讃岐国名勝圖会卷之三 木郡	尾原藍葉・藍水	1854	4 巻之三は三木郡。屋島・八栗一帯は源平合戦と長宗我部氏講義侵攻に関する記事が中心。	高松市歴史資料館	
D016	讃岐国名勝圖会卷之四 田郡	桝原藍葉・藍水	1854	4 巻之四是山田郡。土産の項目に「梅參（屋島酒）」「鬼面蟹（又平家蟹とも云櫛角）」あり。 巻之五は屋島北側の記述で、横戸内海の島々・本州への眺めについて記す。「瀬戸越狭切」(鷹子の靈巖から2人の人物が高松城下町を含む西側の海を望む)、「權之浦 皇居跡 次信碑 菊王丸墓 溝崎寺 駒立石 祈石」(守礼側から屋島東麓を望む)、手前に駒立石・祈石・御崎寺、奥に菊王丸墓・皇居跡・次信碑と屋島山容を描く)などの挿絵あり。	高松市歴史資料館	
D017	続々讃岐國大日記〔香川襄 中山城山 著〕 〔香川襄 卷二〕所収		1837～	4 未調査	享保元年（1716）から天保8年（1837）までの讃岐国 の編年史。	高松市中央図書館
D018	標註測点全圖史卷之九・十 中山城山	原著1828、 活字本 1890	4 未調査	文政11年（1828）成立の中山城山『全圖史』の活字本。 九巻・十巻の合冊。 卷之十シラバリノ83は名山志「屋島山」。 「瀬戸争削之所」。 「遠見甚多。古伝曰。有仙人曰馬蘇〔原 ルライブラリ ー〕」 之記述あり。	香川県立図書館 (香川県立 図書館デジタル アーカイブ)	

D：近世地誌・名所案内記（6）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・形態	寸法・cm	コメント	所蔵館
I0119	標注調点全圖史卷之十一・十二	中山城山	原著1828、4 活字本 1890	文政11年 未調査	11×11 十一巻・十二巻の合冊。十・十一巻は名勝志上、十二巻は 名勝志下。 瓜生山／土肥／十屋／津曾／源氏が跡／葉切地城／惣 門／斜落島／大砂子／脇島（「山の形。屋宇の如し。因 て号す。」）馬島城築城、安徳帝内裏の記事、「古跡多し。」 血池／名号石・阿吽石／獅子塗岩／忠名屋跡／鮮牛 崎／編掛松／鞍掛松／祈石／狗立石／相引／権浦の海 鼠が記述される。	香川県立図書 館（香川県立 図書館デジタ ルライブラリ ー）	
I0220	讀破名所略記 完	—	—	—	5	未調査	屋島寺の頂に、鑑真堂建建立、供体聖人伝承、安徳帝 内裏（惣門）、脇島合戦（應信院死、駒立石／佐承）、節 難詩詠嘆（頼重健立の碑銘文含む）についての記述あり。
I0221	讀破志 卷之三	梶原歎渠	—	5	未調査	梶原歎渠（1762-1834）は高松の豪商。 巻之三は三木郡、陵墓の部に「左藤次信雲」。維信伝承 と合戦の動向は「源平盛衰記」を引用。「行宮」では、「源 平盛衰記」のほか史書を用いて考证。	高松市立図書 館
I0222	讀破志 卷之四 〔大日本輿 地通志〕所収	梶原歎渠	—	5	未調査	梶原の部に屋島寺（「讀破国屋島千光院縁起」の引用含 む）之記述あり。 文苑の部。鶴汀生山義樹三郎左衛門「屋島像古」、藝吳 平景博「屋島像古」、佐藤次信傳文、宝鏡記本文、源 義公「屋島像古」、高尾養「屋山像古」、「登屋島」、中 村文輔「屋島像古」、勝野●「草かるむりに間に」[叢跋 所見]がある。	高松市立図書 館

E：近世地図（1）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・寸法 cm (形態)	コメント	所蔵館
E001	海嶺舟行図下巻	—	1680	2 28.9 × 18.2	台形の島、石碑や樹木、駄立石を描く、「佐藤次信、神戸市立中央那須与一駄立石、タンノ浦、アカハサキ、アイヒキ、岡墓館（貴重惡門ノナキサ・長サキノ岬、平家ノ首実見洗此山上ニナリ磯占十八工」。衣斐蓋子作、写図、彩色、アーカイブス）	高松市歴史資料館
E002	讃岐国絵図	—	原本 1633、1936 模写	2 未調査	屋島が縦に描かれており、完全に独立した島のように描かれている。山に木は描かれていらないが、南岸側に屋島寺が描かれている。左下には「鎌田共済会取集資料科現在 鎌田共済会郷土博物館」が所蔵している。	高松市歴史資料館
E003	讃岐国絵図	—	—	2 84.5 × 220.0	E002と同じカ。島の南面部に屋島寺が、北部に点線で描かれている（鷲島城の石垣か）。屋島の東側に「洲崎堂」とあり。木は描かれていらない。	高松市歴史資料館
E004	讃岐国絵図	—	—	2 未調査	屋島が縦に描かれており、完全に独立した島のように描かれている。山に木は描かれていらないが、南岸側に屋島寺が描かれ、東側の籠には洲崎堂が描かれている。	高松市歴史資料館
E005	改正日本奥地路全図	—	1775	3 未調査	屋島を小判型に描く。「△八シマ」と記述あり。彩色。	九州大学附属図書館（九州文化史）
E006	海嶺舟路図	—	1704 ~	3 未調査	5分冊の航路図。 1：海嶺舟路圖上之卷 壱」(浜津國大坂～肥前国平尾)。2：「海嶺舟路圖上之卷 壴」(肥前国河内浦～佐賀)。3：「海嶺舟路圖中之卷 全」(豊前国瀬崎～寛後国小俠)。4：「海嶺舟路圖下之卷 呂」(淡路國岩屋崎～伊予国串浦)。5：「海嶺舟路圖下之卷 律」(伊予国伊方～脇本)。 3に屋島の描画。北端と南端を区別し山地様に描くが、北端は峰が2つあるよう表現されている。 与一伝承、雜言草、血の池の序文首裏陰伝承を注記。	高松市歴史資料館

E:近世地図 (2)

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法 cm (形態)	コメント	所蔵館
E007	日本橋より長崎迄中記	—	—	江戸から長崎に至る船路を描いた画巻。享保19年(1734) 頃の景観を表すと推定される。	3 54.8 × 1816.2	屋島は西北方向に突き出す岬のよう表現され、「八島」と地名が記されている。	香川県立ミュージアム(前橋市データベース)
E008	〔漁〕内海航路図	—	1864	4 未調査	屋島の形のみ陸続きに描く。「元治元年(1864) 6月 深浦一郎右衛門作。大正15年(1926) 姫原町蒲田家所蔵。」	屋島の北端と南端の高低差が描かれており、完全な台形ではない。屋島は川だけで区切られている。(半島のよう)木が描かれている。	九州大学附属図書館(九州文化史)
E009	讃岐絵図	—	—	4 未調査	屋島の北端と南端の高低差が描かれており、完全な台形ではない。屋島は川だけで区切られている。(半島のよう)木が描かれている。	屋島寺への登山ルートが描かれている。塩田や村の石高などが詳細に描かれている。他の山とは違い、山の形が俯瞰的な視点で描かれている。「名所旧跡」「古戰場」などの記述の凡例があるものの、源平合戦関係の古戰場や名所旧跡の記述はない。	高松市歴史資料館
E010	高松藩領絵図	—	—	4 177.5 × 74.4	屋島は川だけ区切られている。屋島寺への登山ルートが描かれている。塩田や村の石高などが詳細に描かれている。他の山とは違い、山の形が俯瞰的な視点で描かれている。「名所旧跡」「古戰場」などの記述の凡例があるものの、源平合戦関係の古戰場や名所旧跡の記述はない。	屋島寺は川だけ区切られている。「長崎のはなし」船番所「壇ノ浦」、山田郡の石高などの記述あり。屋島寺は描かれていない。半島のよう描写。その他赤線で郡境、黄線で道、一里塚などが描かれている。	高松市歴史資料館
E011	文政七年高松藩領絵図 (写)	—	—	4 (袖幅) 82.0	屋島は川だけ区切られている。「長崎のはなし」船番所「壇ノ浦」、山田郡の石高などの記述あり。屋島寺は描かれていない。半島のよう描写。その他赤線で郡境、黄線で道、一里塚などが描かれている。	屋島寺のようないしもののが描かれている。台形で、側面は斜面になつていて、山の中腹あたりは緑色に塗られているが、山頂の方は色が渝んでいない。石高が記載されているなど、E014より詳細な記述。	高松市歴史資料館
E012	讃岐国絵図	—	原本近世、5 1925模写	未調査	屋島寺のようないしもののが描かれている。台形で、側面は斜面になつていて、山の中腹あたりは緑色に塗られているが、山頂の方は色が渝んでいない。	屋島寺のようないしもののが描かれている。山の下側から立した島になつていて、山の中腹あたりは緑色に塗られているが、山頂の方は色が渝んでいない。	高松市歴史資料館
E013	讃岐国絵図	—	原本近世、5 1938模写	未調査	台形で、独立した島になつていて、山の下側から立した島になつていて、山の中腹あたりは緑色に塗られているが、山頂の方は色が渝んでいない。	山の下側から立した島になつていて、山の中腹あたりは緑色に塗られているが、山頂の方は色が渝んでいない。	高松市歴史資料館

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法 cm (形態)	コメント	所蔵館
E014	松平謙岐守海岸繪図の— 内東畫海岸繪圖	原本近世、5 1938 模写	未調査	塩田と山のみが描かれている。「遠見在所」「長崎 のはな」とあり、南端の頂上が平面のように描か れている。尾張が濃い緑で塗られ、中腹にか けて色が薄くなっている。	36.0 × 78.5	高松市歴史資料館	高松市歴史資料館
E015	讃州屋島山井=八栗山源平馬鹿画 古跡園	昭和復刻 5	未調査	屋島を陸側「高松城下側？」から鳥瞰して描いて いる。台形状の形で描かれている。屋島寺への参 詣ルートなど、川や道などが詳細に描かれている。 北端が見切れて、「内裏アト」「タギノブ」「菊 王丸口(慈華)」「クラカケ松」「相引橋」「弓ナガレ」 など、屋島の合戦の古跡を紹介している。そのた めに北側側は必要でないため、描かれていないと 考えられる。	33.0 × 46.1	高松市歴史資料館	高松市歴史資料館
E016	大阪ヨリ丸龜名勝付讃州 金毘羅出船所道中会図	大阪大和屋弥三郎	昭和復刻 5	36.2 × 54.4	E017 「大阪ヨリ播磨名所讃州金毘羅迄海陸絵図」 とほぼ同じ。右下に「讃州金毘羅出船所舟ニ御宿 仕候(京都伏見早船/諸方のり合船) 毎日出申 候」とあり。	高松市歴史資料館	高松市歴史資料館
E017	大阪ヨリ播磨名所讃州金 毘羅迄海陸絵図	大阪道勤堀日本 橋北詰東御走宿 岸波屋	昭和復刻 5	33.0 × 46.1	絵図の左端に「やしま」とある。平面に木と建物 (屋島寺)が描かれており、屋島は台形として描 かれていない。屋島の上に「諸岐富士」、左側に「舉 頭山金毘羅」、右側に「五けん山」が描かれており、 これらの地形は山として描かれている。右下に「大 阪道勤堀日本橋北詰東 御定宿岸沢屋弥吉」とあ り。	高松市歴史資料館	高松市歴史資料館
E018	中国四国名所旧跡図 『愛 媛県歴史文化博物館資料 目録第17集 絵画資料目 録』 所収	西丈	—	5	未調査	八島寺獅々之窟岸図、八島獅々カンク見図(高松 城下・塩田・海上に浮かぶ船を描く、右上に和歌)、化博物館 八島山ろ見図(高松城、江島の図)、大和国田原本 (奈良県田原本町)の仏像館西丈が中國・四國地方 の名所旧跡を描いたもの、彩色。	愛媛県歴史文 化博物館

E : 近世地図 (4)

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法 cm (形態)	コメント	所蔵館
E019	「塙飽近海図」(『池田家文庫總目録』(1970年)所収)	—	—	5	59.2 × 266.4	八島、タンノウラの地名あり。島に描く。彩色。	岡山大学池田家文庫(デジタル岡山)
E020	船路之図(『池田家文庫總目録』(1970年)所収)	—	—	5	59.2 × 266.4	矢嶋、相引の地名あり。陸続きに描く。	岡山大学池田家文庫(デジタル岡山)
E021	備前近切海上浦辺図(『池田家文庫總目録』(1970年)所収)	—	—	5	81.4 × 122.4	八島、ウロ、タテウラ、アイヒキの地名あり。島に描く。	岡山大学池田家文庫(デジタル岡山)
E022	(瀬戸内海図)	—	—	5	未調査	陸続き、海からみた山影を描く。「八島、壇ノ浦」、彩色。	九州大学附属図書館(九州文化史)
E023	四国北岸繪図	—	—	5	未調査	台形の島、石碑や樹木、駒立石を描く。「那スヌノ与一駒立石・佐藤次信・次信碑・サス堂、壇ノ浦・アメハサキ・合引・物門ノナキサ・ソウ門アトアリ・長サキノ岬」と記述される。	九州大学附属図書館(九州文化史)
E024	讃岐国松平領海岸沿線図 〔歴史収藏資料目録 十八 俗資料館 讃岐国松平護守領内諸家文書目録(三)〕所収)	瀬戸内海歴史民 —	—	5	屋島東手(18×79) 屋島長崎之鼻(107×118)	高松藩の海岸を描いた地図。	高松市中央図書館
E025	讃岐国古繪図	—	—	5	78.6 × 119.5	相引川が大きく描かれており、島のようになつている。北端と南端だけなく、中央が盛り上がりつて3つの山から成っているように見え、中央部分に「レイガシ」とあり(「獅子の靈巖」のこと)。南側には「堀瀬」とあり。北端に「遠見番所」(長崎ノ鼻)「コセガノ村」とあり。	高松市歴史資料館

E：近世地図（5）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法 cm (形態)	コメント	所蔵館
E026	四国寺社名所八十八番(岩 板本青々堂 村武勇編『四国遍路の古 地図』所収、No. 1)	—	—	5 35.6 × 47.8	西北から見た台形状の屋島。頂上に建物(屋島寺 の方)。	香川県立ミニ ージアム	香川県立ミニ ージアム
E027	四国八十九箇所遍路圖 〔岩村武勇編『四国遍路の古 地図』所収、No. 2〕	—	—	5 38.2 × 53.5	屋島図像なく「八十四やしまじ」と記載。 岸に「だんの浦」と表記。	香川県立ミニ ージアム	香川県立ミニ ージアム
E028	象頭山參詣道四国寺社名 勝八十八番(岩村武勇編 〔四国遍路の古地図〕所収、 No. 3)	金毘羅小坂美玉	—	5 35.6 × 47.8	屋島図像なく「八十四やしまじ」と記載。東の海 岸に「だんの浦」と表記。	香川県立ミニ ージアム	香川県立ミニ ージアム
E029	四国偏丸〔地図〕(岩村武 勇編『四国遍路の古地図』 所収 No. 4)	—	—	5 38.2 × 53.5	「八十四やしまじ」と記載。山地と思しき緑色表現 があるが不明。	香川県立ミニ ージアム	香川県立ミニ ージアム
E030	四国偏丸〔地図〕(岩村武 勇編『四国遍路の古地図』 所収、No. 5)	大阪書林柏原屋 市版	—	5 40.6 × 53.4	台形の屋島(東海上から見た形)。「八十四や鳴寺」と記載。	香川県立ミニ ージアム	香川県立ミニ ージアム
E031	四国八十八箇所地図(岩 村武勇編『四国遍路の古 地図』所収、No. 6)	—	—	5 35.0 × 50.2	屋島図像なく「八十四八幡寺」と記載。「つぎのぶ」香川県立ミニ と記された五輪塔の表現あり。	香川県立ミニ ージアム	香川県立ミニ ージアム
E032	四国偏丸〔地図〕(岩村武 勇編『四国遍路の古地図』 所収、No. 7)	大阪書林佐々井 治郎右衛門刊	—	5 63.4 × 99.0	南北に長い台形の島としての屋島。樹木の表現 あり。史跡の存在や地名は画像が粗く判読できな い。	香川県立ミニ ージアム	香川県立ミニ ージアム
E033	四国八十八ヶ所道案内記 百万遍開元(岩村武勇編 〔四国遍路の古地図〕所収、 No. 8)	板所谷—	—	5 52.9 × 48.9	屋島は頂部がやや尖った扁平な山地として表現。 「八十四や鳴寺」と記載。	香川県立ミニ ージアム	香川県立ミニ ージアム
E034	四国寺社名勝八十八番(岩 村武勇編『四国遍路の古 地図』所収、No. 9)	板本峯右衛門	—	5 36.0 × 67.0	台形の屋島(北西海上から見た形)。「八十四や 鳴寺」と記載。E030 の類似。	香川県立ミニ ージアム	香川県立ミニ ージアム

E : 近世地図 (6)

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法 cm (形態)	コメント	所蔵館
E035	丸龟ヨリ象頭山四国 八十八番寺社名勝 (岩村 武勇編)『四国遍路の古地 図』所収、No. 10)	板元作壽堂	—	5	35.8 × 47.9	屋島図像なく「八十四やしまじ」と記載。東の海 岸に「だんの浦」と表記。E028 の類板か。 香川県立ミニ ージアム	香川県立ミニ ージアム
E036	南海道四国八十八ヶ所順 拜図 (岩村武勇編)『四 国遍路の古地図』所収、 No. 11)	—	—	5	34.5 × 47.2	屋島図像なく「八十四 (タ) やしま寺」と記載。 香川県立ミニ ージアム	香川県立ミニ ージアム
E037	四国八十八箇所順拜図 (岩村武勇編)『四国遍路の 古地図』所収、No. 12)	—	—	5	33.5 × 47.0	屋島図像なく「八十四 やしま寺」と記載。E036 の類板か。 香川県立ミニ ージアム	香川県立ミニ ージアム
E038	四国八十八箇所順礼拝図 (岩村武勇編)『四国遍路の 古地図』所収、No. 13)	—	—	5	35.3 × 52.2	樹木の生えた丘陵のような屋島表現。「八十四八幡 寺」と記載。 香川県立ミニ ージアム	香川県立ミニ ージアム
E039	四国順拜御子童絵図 (岩 村武勇編)『四国遍路の古 地図』所収、No. 14)	—	—	5	36.4 × 48.2	屋島は頂部がやや尖った扁平な山地として表現。 「八十四や鳴寺」と記載。E033 の類板か。 香川県立ミニ ージアム	香川県立ミニ ージアム
E040	四国順礼「地図」(岩村武 勇編)『四国遍路の古地図』 所収、No. 15)	明石寺茶堂	—	5	42.8 × 53.8	屋島は頂部がやや尖った扁平な山地として表現。 「八十四や鳴寺」と記載。E033・E039 の類板か。 香川県立ミニ ージアム	香川県立ミニ ージアム
E041	四国順礼「地図」(岩村武 勇編)『四国遍路の古地図』 所収、No. 16)	庵屋萬代助版	—	5	40.0 × 53.0	屋島は扁平な岩山状に描かれる。「八十四や鳴寺」 と記載。E033・E039・E040 の類板か。 香川県立ミニ ージアム	香川県立ミニ ージアム
E042	四国順礼「地図」(岩村武 勇編)『四国遍路の古地図』 所収、No. 17)	—	—	5	38.0 × 53.0	屋島は扁平な丘陵として描かれる。「八十四や鳴寺」 と記載。E033・E039・E040・E041 の類板か。 香川県立ミニ ージアム	香川県立ミニ ージアム

E : 近世地図 (7)

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法 cm (形態)	コメント	所蔵館
E043	四国偏丸〔地図〕(岩村武一 勇輔編『四国遍路の古地図』 所収、No. 18)	—	—	5	42.7 × 53.9	屋島は台状の丘陵として描かれる。「八十四や鷲寺」香川県立ミニ と記載。E035・E040・E041・E042 の類板が。—ジアム	香川県立ミニ —ジアム
E044	四国偏丸〔地図〕(岩村武一 勇輔編『四国遍路の古地図』 所収、No. 19)	—	—	5	42.2 × 53.8	屋島図像なく「八十四や鷲じ」と記載。E030 の類 板が。—ジアム	香川県立ミニ —ジアム
E045	四国八十八箇所地図(岩 村武勇編『四国遍路の古 地図』所収、No.20)	明石寺茶堂	—	5	33.4 × 43.7	屋島図像なく「八十四八鷲寺」と記載。	香川県立ミニ —ジアム
E046	四国八十八箇所地図(岩 村武勇編『四国遍路の古 地図』所収、No. 21)	四十三番札所か —	—	5	36.8 × 48.3	屋島は扁平な丘陵として表現される。「八十四や 鷲寺」と記載。E033・E039・E040・E041・E042・ E043 の類板が。	香川県立ミニ —ジアム
E047	四国八十八箇所地図(岩 村武勇編『四国遍路の古 地図』所収、No. 22)	—	—	5	37.8 × 48.5	屋島は台状の丘陵として描かれる。八栗山の麓が 海岸線として屋島につながっているため、東に向 かって屋島・八栗を展望した際の様子にも見え る。「八十四や鷲寺」と記載。E033・E039・E040・ E041・E042・E043・E046 の類板が。	香川県立ミニ —ジアム
E048	四国八十八箇所順洋路図 〔諸岐金毘羅詫戦 金堂刊 金毘羅内記〕口絵、岩村 武勇編『四国遍路の古地 図』所収、No. 23)	詫戸金毘羅詫戦	1812	4	19.5 × 27.7	屋島図像なく「八十四 やしま寺」と記載。	香川県立ミニ —ジアム
E049	四国偏丸路図(返舎 一九「四国偏路独案内」 海賊、岩村武勇編『四 国遍路の古地図』所収、 No. 24)	十返舎一九	1821	4	18.4 × 12.7	遍路ルートの要略図。屋島図像なく「八しま (せ)」香川県立ミニ と記載。	香川県立ミニ —ジアム

F : 近世行政

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法 cm (形態)	コメント	所蔵館	
F001	生駒一正等賀安堵判物『新 屋島寺編香川叢書 史料編2』所収		1601	2	未調査	「屋島寺文書」生駒貴安守—正から屋島寺。寺領25石。高松市中央図書館		
F002	論義興行寺院地狀〔『新編 香川叢書 史料編2』所収〕		1611	2	未調査	「普通寺文書」弘慈寺・誕生院が屋島寺等に施付。	高松市中央図書館	
F003	生駒高徳船札〔『新編 香川叢書 史料編2』所収〕		1627	2	未調査	「屋島寺文書」寛永4年(1627) 寺田右近から屋島寺。屋島山伐採禁止。左側門免役。寺田右近から屋島寺。屋島山伐採禁止。	高松市中央図書館	
F004	請取申請令米之事〔『新編 香川叢書 史料編2』所収〕		—	1667	2	未調査	「生駒家宝簡集抄」矢島御職米。	高松市中央図書館
F005	生駒一正寄進狀〔『新編 香川叢書 史料編2』所収〕		—	2	未調査	「屋島寺文書」3月4日、讃岐 正から佐藤藤原。屋島 寺堂の建立に際しての寄進。	高松市中央図書館	
F006	高屋某書狀〔『新編 香川叢書 史料編2』所収〕		—	2	未調査	「屋島寺文書」11月13日、高屋捕から屋島寺宛。屋島 寺領荒記分敷免。	高松市中央図書館	
F007	多度津公御領分寺社豫起〔『新編 香川叢書 史料編1』所収〕		—	5	未調査	文治元年(1185)10月去年の事として義経が、八幡より西海へ渡るとき神前に於いて願文を書くという記述。	高松市中央図書館	
F008	御領分中宮由来・同寺々由 来〔『新編 香川叢書 史料編1』所収〕		—	5	未調査	片本氏官八幡に種ノ浦の記述。海藏院、屋島寺の由 緒と末寺の記述。	高松市中央図書館	
F009	寺社記〔『新編 香川叢書 史料編1』所収〕		—	5	未調査	屋島寺の寺領などの記述。	高松市中央図書館	
F010	英公日曆		—	5	未調査	全六冊からなる。讃岐高松藩が松平頼重の日常生活を記録した日帳をもとに、江戸時代後期に整理編集したものの、香川県立図書館		

G：近現代文芸（1）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・寸法・cm (形態)	コメント	所蔵館
G001	講談名勝地誌	廣井鏡音、高松宮 脇仲次郎	1899	6 未調査	體別記述。山田龍の部「屋島山」の項目には、「其形屋風光の噴潤と、歷史上の故蹟とを並有する所以て、講州に遊ぶ者必らず登覽を為し、日本勝区のとして世人の熟知せることろなり」と記す。	高松市中央図書館
G002	講談史要 完	黒木安雄著、宮脇開益堂	1900	6 22.5 × 15.2	日本書紀の記事を引用した屋島城の記述。「寿永の役」香川県立ミニ项目的に上げる屋島合戦の記述。那須守一の記述 一ページアム	高松市中央図書館
G003	講談風景論及讀跋人性論	長尾篤城、讀跋	1902	6 未調査	講談長尾篠城著「讀跋風景論」に「東に新平古戰場あれば…」とあり。「安徳天皇と屋島」を日本三景と对比。「讀跋」を以て日本の公園なりと評せん』、「屋島と八栗、不平にも其源平の古戰場たると、空海上人開基の靈跡たるとにより、端りしての名天下に現はざるものには余の尤に遺憾とせらる。世の所謂名勝古蹟なるもの一たび其境を過ぎば断た声譽の大に驚かずんばあらず、然るに我八島と八栗に於て其美を異にするなり」、「屋島山上風景最も絶佳なる所、日々獅子雲流、日く善古廟」と、獅子の靈蹟の靈蹟について「三編の連業」「阿讚の山脈」「白峯山と紫雲山」「玉藻山」「人燐倒密たる高松市街附近の光景」眼に余る大海岸…大小の島嶼…黒煙吐く蒸氣船、白帆挙ぐ北前船、木の葉	高松市中央図書館

G：近現代文芸（2）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・寸法・cm (形態)	コメント	所蔵館
G004	讃岐名勝集	矢原理平	1907	6 未調査	都毎に名所・伝承を記述。 三木郡の頁に纂表文を含む佐藤謙信の記事あり。 山田鷹の部に「八島山傳古」の項目あり。「八島山者 謂之靈区也」とし、天智天皇による屋島城の事績を踏 まえ、「天然アメ金城御臣鷹臣體百万地兵可謂神鷹之地 理也、因以元日中平氏事安德帝於茲建禁殿王階之廟 謂八島御所」と記す。	高松市中央図書館
G005	屋島と壇の浦	前原隊作、文成社	1911	6 未調査	写真に屋島及屋島神社・逆瀬の事」に、「屋島は高 松の北にある菱状形の半島にして、長径五十有程」と あり。 「史蹟めぐり三 屋島」の章に屋島の形状を「屋根形、 カマボコ形、とにかく儀の好い島だ、美しい山谷風影、 向かって右の端に施壁が見える。岩層に生えてる榛松 の風致は絶妙のやう」と記述。「要するに、屋島台は 史蹟として觀るべきものが極だ。求むるならば旗亭可 憐の難望と、歴古誰から五劍山、壇の浦を見瞭した ところである。歴古誰から五劍山、壇の浦を見瞭した ところである。史蹟でなくて風景だ」「形がいい～ば ……女性らしい屋島と、男性らしい五劍と」。	高松市中央図書館
G006	讃岐郡史	福家惣衛	1923	6 未調査	P.83～86に屋島合戦の記述。奥付に「昭和三十一年 八月 高松市図書館著写」とあり。	高松市中央図書館

G：近現代文芸（3）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・寸法・cm (形態)	コメント
G007	花袋行脚：史蹟名勝	田山花袋	1924	6 19 「大里から屋島～」『屋島と白鳥陵』に源平合戦の史跡 紀行。	国立国会図書館 館内デジタルライブラリ —
G008	讃岐通史	—	1926	6 19.2 × 13.0 「第三章 屋島及び城山の氣魄」に屋島城、「第十二章 源平の二氏」に屋島合戦の考察あり。「引用書」を末 尾に記載している。「讃岐歴史地図」の折込図がある。	香川県立ミュ ージアム
G009	八幡内十ノ二	廿四世郷土二絃	1926	6 22.5 × 16.9 芸能の曲について。 图像資料なし。	高松市歴史資料 館
G010	海の国立公園点描	野口文治編、萬松 瀬戸内海国立公園 新聞社	1933	6 未調査 萬松濱と北瀬・南瀬を鳥瞰。「瀬戸のベニス」の見出 しのもともと萬松音頭の愛称があり、国立公園指定を前 に、周揚した気分がうかがえる。	高松市中央図 書館
G011	讃岐文芸読本	香川県女子師範学校 校博士研究会	1933	6 未調査 屋島に関する能、狂言、舞、狂歌、淨瑠璃、押説、川 柳が集められる。	香川大学図書 館
G012	現代展望郷土史	池澤百合	1934	6 未調査 現代頃原木田町に、1934年の屋島町の町勢、屋島登 山道、名勝旧蹟を記述。	香川大学図書 館
G013	讃岐郷土読本	讃岐郷土研究会	1934	6 未調査 屋島に関する文芸作品・新聞・記録、鶴翼行路（香川 ／朝の海、吉田鉢二郎（戦前の小説家）、「煙れる田園」 新潮社、1933）／讃岐の天然記念物調査報告／「屋島の月」、藤井高尚（江 戸後期の国学者、「松原文後集」）／与謝野晶子・与謝 野寛和歌／山莊雄記、森原井風水／圓田謙悟、近松門 左衛門（戦前天皇甘露雨）／向行二人墨眼透禪、グレン・ ショウ（大阪頃天露雨、グレン・W・ショウ、1886米 国生、1916年に来日。山口高等商業学校などで英語 教師、日本文学の翻訳紹介）／尾上栄舟和歌／お国自 傳、椎名六郎（1932年8月15日朝日グラフ、昭和時 代の図書館学者、1943年香川県立図書館長）	香川大学図書 館

G：近現代文芸（4）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法: cm (形態)	コメント	所蔵館
G014	講談名勝俳句	圓國民報社	1934	6	未調査	写真あり。東から手前に鹿治の港、奥に屋島北嶺を配 置。海の国立公園に入ることもない、四国民報社が二十景を 選定し「俳句と共に永遠に頸飾したい目的」で俳人の 句を選び選集とする(選者村尾公羽氏)。巻末に「祝 発刊 屋島保勝會」とあり。	高松市中央図書館
G015	屋島史 第3集	岡田唯吉、坂出	1941	6	未調査	写真に「屋島ノ南嶺黄ヶ崎」あり。 「瀬戸内海における備讃瀬崎の要地として交通上軍事 上等に最も多く利用せられた為、古今の史蹟に富んで 居る」山上は、瀬戸内海東半の眺望佳绝で從日本三 景の1たる屋島に比して景が懽る雄大で所謂大島と もいふべき處で、且つ箕山形が甚だ奇しく、美しい所 から。	高松市中央図書館
G016	香西家文書 1 (鶴鳴櫻浦合 飛塚氏)	—	1888 横字	6	未調査	6034 屋島のかみに収録されている「屋鳴櫻浦合戰錄 記全」とほぼ同一。「屋鳴之城を見渡セハ鳴御 館り廣海」。重複手一が頭を軒括く場面、緋倉最期の場面、 義経う流しの場面口(「勇」カ)々として散在實に無。	香川県立文書館
G017	東海紀行	正岡子規	1883	6	未調査	子規が上京する船の中から、屋島を眺め漢詩を詠む。	国立国会図書館デジタルコレクション
G018	讃州府志	増田休輔述、尾原竹軒增補	1915	6	未調査	『動植物誌』の増補訂版、可小桜、仰之碑、説古論、屋 島燒など増補。香川新聞社。	香川大学図書館
G019	講談伝説風土記 1	荒井とみ三	1952	7	未調査	率社村、六万寺、・・・、193-211頁／鹿治村、平家の 船隠し、押詔思ひより、218-221頁。	香川大学図書館

G：近現代文芸（5）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・寸法(cm) (形態)	コメント	所蔵館
G020	龍岐の歴史	堀川碧星、琴平町 松本書房	1953	7 未調査	イラスト入りで屋島を紹介。原平合戦、扇の歴史の記述あり。イラストは西側から見た屋島で手前には帆船が描かれる。	高松市中央図書館
G021	高松藩祖松平頼重伝	松平公益会	1964	7 未調査	学術・技術・趣味、角山八景の読み下し。446-447頁。	香川大学図書館
G022	高松藩祖松平頼重伝	松平公益会	1964	7 未調査	附録年表、佐藤次信の碑、屋島相引川の堤防。612-615頁。	香川大学図書館
G023	高松藩祖松平頼重伝	松平公益会	1964	7 未調査	神仏の崇敬、屋島寺。314頁。	香川大学図書館
G024	高松藩祖松平頼重伝	松平公益会	1964	7 未調査	藩政、相引川の復旧、寛永10年(1633)高松付近地図。188-193頁。	香川大学図書館
G025	高松藩祖松平頼重伝	松平公益会	1964	7 未調査	過去とその後、屋島神社へ合祀。529-530頁	香川大学図書館
G026	講談の史話民話	福物家徹、高松 上田書店	1968	7 未調査	「阿波に伝わる屋島の季題」の伝承を紹介する。この伝承は、かつて屋島住み、源平の合戦を見たとされる老翁の話である。	高松市中央図書館
G027	古高松郷土誌	委員会編	1977	7 未調査	屋島合戦の記録(『六万寺記』『讀聞講日』)「牛家造屋島」高松市中央図書館	高松市中央図書館
G028	栄光ある軒元進 -屋島の塩田・蘿生の記録-	高松市屋島土地地区 画整理組合	1980	7 未調査	「屋島城跡の調査も進む」、「觀光屋島をPRする源平まつり」の写真が挿入されている。	高松市中央図書館
G029	栗林郷土誌	栗林郷土誌編集委 員会	1996	7 未調査	源平合戦にゆかりの矢止松神社。	高松市中央図書館
G030	平家物語	水上勉・鶴原正昭、 学習研究社	1998	7 未調査	平家物語の現代訳説と、合戦図屏風などの絵画の解説、香川県立図書館	高松市中央図書館
					平家物語に関する現地のガイドなどがある。現在の解説、平家物語に関する現地のガイドなどがある。現在の解説、	
					屋島の写真と共に、アセスの方法などの記述もある。	

G：近現代文芸（6）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・寸法・cm (形態)	コメント	所蔵館
G031	秋風過路、四日路の与謝野 菊池寛記念館編	与謝野寛・晶子	2007	7 30	与謝野寛・晶子の屋島鶴連歌、昭和6年。(1931) 10月 香川大学図書館 29日屋島來訪時。	
G032	源平盛衰記念本をよむ 源 源 石川透・星瑞穂、二勞井書店	氏と平安合戦の物語	2013	7 未調査	種詮のなかに、屋島での合戦を描いた絵もあり。うち「鳥の的」を題材にした絵あり。	香川県立図書館
G033	源平合戦とその時代	香川県歴史博物館	—	7 未調査	「屋島合戦」にいたる源平兩軍の戦略」にて源平合戦を題材とした絵画資料を多数する記述あり。源平合戦を題材とした絵画資料を多数掲載。「弓流し」を題材にした絵画有り。屋島所蔵の「屋島合戦図」に東側から見た南嶺が描かれる。	高松市中央図書館
G034	讀鏡觀光俳句集	讀鏡觀光俳句委員会、四国民芸社	1950	7 未調査	讃岐の諸地域を謳んだ俳句集。屋島の頂のことばらにイラスト、近畿にマツ、遠東に東側からみた屋島北嶺。 俳句の文言、觀鏡イメージについてには「(頬)霧」「(春)霞」「(雲)霧」「月の屋島のほぼらなる」「(頬)霧」「(春)霞」「月の雨」「(月)山」「(屋島)山」「落葉」「(茶園)田に由来」「(屋島)山」「落葉」「(茶園)霧」「茶園」などの花用語が多い。源平合戦関連では、「茶園」「(雲)霧」+虫類表現、「古歌」「(歌)あり」などの表現、形状に関する表現としては「鳥ねたる屋島の尾根のくぼむ上」「(月)の上の屋島二峰」などの表現。	高松市中央図書館
G035	屋島のあゆみ	大石一匁編、高松 大石一匁	1980	7 未調査	「屋島櫻浦合戦像起解説」全文。「屋島櫻浦合戦記全」全文。「屋島櫻浦合戦像起解説」全文。「屋島」の項。屋島の源流に、「屋島は初め、八尋島（平安時代）といつてはいたが後に八島となり、さらに山宮が尾根の形をしていることから屋島となつた」との説を説げる。地質学に基づく形状の説明。「屋島と桜の源」の項。「屋根の形をした姫岩台地」「背の源平合戦の史跡で全国に知られ、海上にのみても薩上からみても形のめずらしい山として觀光客の目を楽しませせる。屋島合戦の跡繩は事実を中心記す。屋島の項目あり。	高松市中央図書館

G：近現代文芸（7）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・寸法・cm (形態)	コメント
6036	古戦跡を訪ねて	秋山忠、高松歴史文化財保存協会	1982	7 未調査	「峰山から屋島を望む」と題した、南西からの屋島全景写真。 項目名、「屋島砲跡へ備讃漁戸をくらむ古代の頃歴式山城」。地形学、考古学的記述を交えた復原考证。 古戦場としてよく知られている。しかし、そのひと昔前にもう一つの歴史があつたことを知る人は少ない。 「屋島は、その名のとおり、古びた内海に浮かんだ圓錐形の島であった」。「多くの人は平家の人たちが舞台となつた源平の古戦場の方に心ひかれらるしい。天智朝の昔は、もう遠い歴史の後方へ押しやられてしまったのだろうか」。
6037	新版 香川の歴史ものがたり 「香川の歴史ものがたり」刊行委員会、日本標準化会	1988	7 未調査	目次に、西から見た屋島北端（南端の一部含む）と佐藤郷信の墓の写真。講談団の平易な絵入り史。高松市中央図書館の項目を「戦いにあけくれる講談団」と題し、扉に源平合戦団の写真を掲載する。 「屋島のたかひ」では源兼与一伝承を大きく取り上げ、騎射の場面の挿絵に屋島と思しき島影を描く。(ただし形状は不明瞭)。同項目末尾に範門跡・いのり岩の写真を掲げる。	
6038	さぬきの民謡 研究会	島田雅行、四国民謡研究会	1990	7 未調査	114～145頁に「物語・南嶺の古戦場」(1)、116～118頁に「赤の夢の賦」(2)、119頁に「源平音頭」(3)、120～121頁に「源平がし」(4)香川県観光協会、高松市観光協会推せんと説く。(5)122～123頁「源平がし唄」(6)124～125頁に「新屋島音頭」(7)とされる。(8)124～125頁に「源流抄」と写真入りの振り付けを掲載。(1)は淡占唄や「弓流し」の文言をもつて古戦場が唄われる。(2)は平氏敗戦の悲景を主題とする。(3)は

G : 近現代文芸 (8)

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法 cm (形態)	コメント	所蔵館
G039	さぬき古寺を訪ねて	四国新聞社編、高松 四国新聞社	1960～	7	未調査	源平合戦開闘の人物・エビソードを踏まえた恋模様の歌。(4)は戀信の最後に「那須与一騎討・景清の隠引・弓流の各伝承を嘆詞に織り込む(弓一伝承)」(5)は「(4)の一部改編版(隠引・弓流を削ぐ)。(6)は弓一騎討伝承・屋島寺の罷・食わずの梨・人栗丸刻山・弓流し伝承になぞらえた恋模様の歌。	高松市中央図書館
G040	屋島を訪ねて (A First Visit to Yashima)	エドマンド・ブランデン	1949	7	英文: 25.5× 19.6 和訳: 11.5× 19.6	新聞の「1コマナー」。屋島寺を取り上げる、「腹の下には詠曲「屋島」に謳われた忠助權〔マヤ〕ノ浦が原開する」とし、屋島の一首を引用。 現代の文体である上、「さる三十二年から解体、三年間かけて大修理」とあり、昭和35年(1960)以降と推定される。PBFでは文章が一部欠損、ただしこれは資料の状態に由来するか。 休憩所らしきイラストを除き図像なし。獅子の靈巖からの風景描写か。	高松市歴史資料館
G041	屋島の浮遊浪枕	—	—	7	24.0× 16.8	龜本の頬か。屋島そのものに関する記述はなし。瀬ノ浦の合戦に関する記述。	高松市歴史資料館
G042	高松藩物語達留	—	—	7	未調査	『香川県史資料編第九卷 近世資料1』所収。松平頼忠治世下の史跡保護の施が掲載される。	高松市中央図書館
G043	讃岐景勝詩歌	—	—	5	未調査	『香川県史資料編 第十五卷 茶文』所収。松平頼重・岡部昌資・三千吉地蔵・中村三義の屋島に関する詩歌が掲載される。	高松市中央図書館

H：近現代絵画（1）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・寸法 cm (形態)	コメント	所蔵館
H001	第百十四銀行盜賊之図	三井洋生	1887 4月	6 未調査	明治 14年に設立された国立百十四銀行の後ろに星島が描かれてる。	高松市歴史資料館
H002	源平矢場大合戦之図	月岡芳年	1889	6 三枚続	「源平矢場大合戦之図」というタイトルだが、内容は「源の南合戦」とした圖か。	神戸市立博物館
H003	八幡壇ノ源合戦諸八幡飛	月岡芳年	明治時代	6 三枚続	八幡飛びをメインとした圖か。	高松市歴史資料館
H004	惠七兵衛景清 三保谷四郎 楊齋延一 国俊 鏡曳の図	橋本固延	1893	6 三枚続	手前の陸地に鏡曳の場面が描かれる。マツが一本、奥に山があり、その向こうに山が表現されるが、五剣山等の山容ではない。	神戸市立博物館
H005	星島之役	橋本固延	1898	6 三枚続	羅信最期の場面が大きく述べられる。	高松市歴史資料館
H006	羅陰謀岐名所	宮脇忠次郎	1901	6 28.2 × 19.4	讃岐の名所の羅陰が全 12 枚セットになつてある。袋の表には板山と玉藻塚以外は以下の 11 枚。 【羅陰名所】星島・五剣山・八重寺・羅子雲巻(う)・メイノの巻(う)・星島と題され、星島寺の本堂が描かれる。本堂前には参拝客が多数描かれ、滞在している人も描かれる。右上には明柿で五剣山と八重寺が描かれる。左下にも別件で羅子雲巻と興宣台が描かれる。	京都府立大学
H007	羅陰謀岐名所	—	1901	6 未調査	香川県の名所 12箇所を描いた羅陰。星島寺と五剣山を組み合せた 1 箇がある。	香川県立瀬戸内海歴史民俗資料館
H008	那須与一	中村岳陵	1906	6 一幅	扇の的へ向かって進む那須与一を描く。	個人蔵
H009	平景清	中村岳陵	1906	6 一幅	景清を描く。	個人蔵
H010	源平八幡大激戦之図	国臣	明治時代	6 三枚続	「源平八幡大激戦之図」とあるが、源の諸合戦の状況(八幡陥城式)である。	高松市歴史資料館
H011	星島合戦繪帖	町田丹陵	明治時代	6 一帖	星島合戦を主題とした勧誘。扇の的、鏡引、弓流、羅信最期、星島遠景などが取扱われる。	高松市平家歴史資料館

H：近現代絵画（2）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・寸法 cm (形態)	コメント	所蔵館
H012	源平盛衰記（玉虫前と手一） 桜本周延筆	明治時代	6 23.6	35.8 × 全3点 長番：与一左奥、玉虫前が手前右に描かれ、屋島 は描かれていない。	屋島に闘進するのは以下の1点。 長番：与一左奥、玉虫前が手前右に描かれ、屋島 は描かれていない。	高松市歴史資料館
H013	平家物語図解風	—	明治時代	6 六曲一双	幡合戦の隻と屋島・壇ノ浦合戦の隻。扇の 幡合戦・一谷合戦の隻と屋島・壇ノ浦合戦の隻。 扇のものが描かれている。	サンフランシスコ・アジア美術館
H014	源平合戦図鑑巻	—	明治時代	6 —巻	源平合戦のエピソードを描く。「扇の的」ほか11の場 面が含まれている。	高松市歴史資料館
H015	屋島合戦の図	村田丹陵筆	近代	6 一幅	左(平家方源氏の急襲に驚き走戦の準備の図)、右 (源氏の軍勢執堂々屋島へ進攻の図)。	屋島寺
H016	元暦元年三月屋島壇浦源平合戦図	—	—	6 118.8 × 77.5	もとは屋島寺所蔵の宝物の一つ「右図ハ佐家ノ軍 三シテ当寺宝物ノ稱一ナリ癸ニ勝等シ印刷シテ左凡 柄ヲ掲ケテ其標題ヲ指ス委ハ縁起(古事ニ鶴アリ ニアリ)」とある。且例には臉に登場する人物や旧跡の 解説がある。屋島は台形に描かれており、南端と屋島 寺のみが描かれている。	高松市歴史資料館
H017	那須与市扇の的	—	—	6 一幅	扇のの繩に立てるのは平家の女房玉虫の前、屋島寺 日の丸の扇を射るは源氏方の弓の名手那須與市宗高。	屋島寺
H018	図説日本の古典9 平家物語 永積安明、集英社: 1979	7	未調査	—	「源平合戦図屏風」平安物語 合戦図屏風。屋島自体と分かれる描写なし。	香川県立図書館
H019	〔讃岐国会〕	—	—	7 39.5 × 66.6	全てイラスト。近景に高松城、市街、遠景に屋島、五 竈山の背後に橋の浦、塙田のある浦と射る那須与一ジアム 一、屋島寺のカットが描かれる。	香川県立ミュージアム

| : 写真・絵葉書 (1)

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・寸法 cm (形態)	コメント	所蔵館
1001	讃岐名勝真景	編輯兼発行者安 藤貞吉	1898	6 39.5 × 48.2	明治 31 年 (1898) 4 月 12 日発行の風景写真集（一香川県立ミニ 枚もの）鷲子の雲龍から眺望写真「高松市全景」ユーリシアム の写真右奥（北東方向）に屋島が写る。	香川県立ミニ 資料館
1002	〔絵葉書〕御大典奉祝屋島 山上五重塔 建設記念 屋島宝物繪葉書	岡部光太郎	1915	6 9.2 × 15.5	2 枚 (説明書きあり) 表紙裏面に「御即位大禮記 念塔建設會々則」とあり。 1: 上佐光信「源平屋島合戦之図」右上に屋島のよ うな台形の記述あり。	高松市歴史 資料館
1003	新代橋写真帳	苦闘品	1922	6 未調査	大正 11 年から始まつた高松築港工事を記録した写 真帳。それそれにこの工事に關係したと思われる 人物についてベン書きの説明があり、資料性が高 い。	香川県立歴 史資料館
1004	源平古戰場講岐屋島名所 全景	前川清太郎	1925	6 未調査	冊子になつた繪はがき。屋島内の名所。	香川県立園 芸館
1005	全國産業博覧会繪葉書 全景	—	1928	6 未調査	博覧会場の後ろに屋島が描かれる。	高松市歴史 資料館
1006	講岐源平古戰場 屋島名所 繪はがき	—	1918 ~ 1929	6 9.2 × 14.2	8 枚。 袋には屋島全景のイラストあり。 絵葉書自体は屋島内の名所中心で、屋島全景のも のではない。	高松市歴史 資料館
1007	〔絵葉書〕屋島	—	1918 ~ 1929	6 9.0 × 13.8 (ミニラ マ) 8.9 × 28.5	8 枚。絵葉書 2 枚が繋がつたものが 4 点ある。 技番 1 は屋島全景が写つており、「Sanuki Yashima Meisho. 講岐屋島名所 東面セル屋島ノ勝景」と タイトルがつけられている。	高松市歴史 資料館

| : 写真・絵葉書 (2)

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・寸法: cm (形態)	コメント	所蔵館
1008	【絵葉書】講岐原平古戰場 屋島名所繪葉書	—	1918 ~ 1929	6 14.1	9.3 × 8枚。袋には高松城と屋島のイラストが描かれて いる。音色あり。屋島内の名所を中心。 枝番5は屋島全景で「Guide of Yashima the Battle Field of Gionji and HEIKE」(講岐源平 古戰場 屋島山の跡)というタイトルがつけられ ている。	高松市歴史 資料館
1009	【絵葉書】源平古戰場説明 入 講岐屋島名所全景	—	1918 ~ 1933	6 9.0	14.5 × 13枚 (内1枚熊本宮)。表紙は弁慶が長刀で井 戸を掘ったが其の風景。平安物語などで登場する シーンの写真。源平合戦のなかでの叙述が 大半で、風景を中心とするものは枝番13の長崎の 森のみ見受けられる。	高松市歴史 資料館
1010	【講岐屋島名所はがき】	—	1918 ~ 1933	6 14.0	9.0 × 12枚。 屋島内の名所の写真。屋島全景を捉えたものはない。 い。	高松市歴史 資料館
1011	陸軍特別大演習記念絵は がき	—	1922 ~	6 9.1	14.1 × 「屋島山遠景 大本營接賓閣」と印刷がある。帆船、香川県立ミ 灯台の島、屋島を組み合わせた構図。屋島は北端 ュージアム と南端が写る。接賓閣が陸軍特別大演習の大本營 となつたのは大正11年 (1922)のことである。	高松市歴史 資料館
1012	【絵葉書】(講岐高松) 屋 島公園	—	1922 カ	6 14.0	9.0 × 9枚。 屋島から見える風景の写真と、高松港および屋島 東 (施治カ) 側からの屋島全景の写真。枝番5と 9が屋島全景をとらえたもので、5は施治側から 撮影されたとみられる。船、釣り人、風景を眺め る人物が映り込んでいる。右上に「屋島登山紀念 11.11.21 義古嶺」というスタンプが押されている。 このスタンプの上部に屋島の舟形が表現さ れています。下部には翼龍で登頂する様子が描かれ ている。下部には高松港から撮影されたもので、 他の絵はがきに比べ屋島の南端近い部分まで写り	高松市歴史 資料館

| : 写真・絵葉書 (3)

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・寸法 cm (形態)	コメント	所蔵館
1013	〔絵葉書〕讃岐 高松 屋 小倉屋發行 島公園 七景	—	1923 カ —	6 9.0	14.1 × 6 枚。屋島内の名勝中心、屋島全景の絵葉書なし。 年代はスタンプにより推定。	高松市歴史 資料館
1014	〔絵葉書〕屋島	—	1927 カ —	6 13.8	9.0 × 12 枚。3種混在か。屋島内の名所中心で、屋島全 景の絵葉書なし。 年代はスタンプにより推定。	高松市歴史 資料館
1015	〔絵葉書〕〔屋島名所〕	—	1929～ 1933	6 14.0	9.2 × 16 枚。屋島内の名所中心。「屋島古戦場 平家蟹」で、平家蟹と風景 が共存。 枝番 12 が屋島全景で、屋島の手前には松、船、岩 が写っている。 年代はスタンプにより推定。	高松市歴史 資料館
1016	〔絵葉書〕讃岐屋島名所	—	1930 カ —	6 14.0	9.0 × 8 枚。屋島内の名所の写真。 枝番 8 は屋島寺境内に雪積した時の写真。 年代はスタンプにより推定。	高松市歴史 資料館
1017	〔屋鳴記念はがき〕	—	1930 カ —	6 13.9	8.8 × 8 枚。 高松港からの屋島全景とケーブルカー、屋島山上 からの風景の写真。枝番 1 が高松港から見た屋島 全景。屋鳴ヲ高松義ヨリ望ム屋鳴ハ昔ハひら鳴ト 云ヒ 中古ニハ八鳴ト傳フ山容ハ屋根ニ似タルヲ以 テ屋鳴ト書く」というキャプションが左上にある。 遠景を撮影したものが 8 枚中 6 枚が多い。	高松市歴史 資料館

| : 写真・絵葉書 (4)

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・寸法 cm (形態)	コメント	所蔵館
1018	「絵葉書」屋島名勝二十五景	—	1933 ~ 1934	6 (絵葉書) 8.7 × 13.5 (モノマ) 8.7 × 27.3	25枚。屋島内の名勝中心。 枝番3は高松港より見た景。品全景で、「高松港ヨリ見タル屋島ノ绝景ナリ屋島山ハ古御石富士岩ヨリ成ルル熔岩臺地テ其」形ガ屋ノ字ニ似テ居ルカラ其ノ名ガアル中央ノ稱キ所ハ櫓ヶ丘ト称シ天智天皇ノ御代ノ古城跡ガアル」と書かれてい。枝番26は談古論今からの眺望で、絵葉書2枚が繋がつたものである。	高松市歴史 資料館
1019	「絵葉書」屋島名勝二十五景	—	1933 ~ 1934	6 (絵葉書) 8.7 × 13.5 (モノマ) 8.7 × 27.3	24枚。1018と同一。	高松市歴史 資料館
1020	「絵葉書」讃岐屋島山上ヨリ	—	1933 ~ 1945	6 9.0 × 14.0	10枚。屋島山上からの写真。着色あり。枝番2が屋島を南側から撮影したもので、「THE VIEW OF YASHIMA讚岐屋島山南面ケーブルカー」とタイトルがつけられている。海でなく、陸地が屋島の前面にある構図である。	高松市歴史 資料館
1021	国立公園屋島の勝景	—	1934 ~	6 未調査	表紙に西側から北端を眺め、近景にヨットを配置したスケッチ風のイラストを掲げる。「(屋島名勝) 高松市の遠景」と題した、屋島西綫部を含む西方の眺望の写真あり。	香川県立図書館
1022	国立公園屋島名勝	—	1934 ~	6 未調査	表紙に聖のイラストをあしらう。「講談社」屋島神子の靈廟より高松港を望む」と題した、屋島西詠部を含む西方の眺望の写真あり。	香川県立図書館

| : 写真・絵葉書 (5)

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・寸法 cm (形態)	コメント	所蔵館
1023	屋島の風光	—	1934 ~	6 未調査	表紙に「瀬戸内海国立公園」「史蹟名勝 風光の屋島」写真と説明の絵はがき」と記載。東から眺め書簡た屋島北端のイラストが描かれる。 諭古館から女性2人が五剣山側を眺める写真あり。 その展望について、望むことが出来る史蹟の名前を挙げつつ、「山麓櫻の浦より吹き上げてくる松風は遠い昔の陣跡、太鼓、法螺の音、果てはワーッという闘の声とも響く、正に一幅の絵巻物である」と表現する。 裏面に「屋島山上一帯の観光順路」として、ケーブル駅より山上の主要史蹟をめぐる簡単なルート図を添える。	香川県立図書館
1024	〔絵葉書〕国立公園 屋島	—	1934 ~ 1944	6 (絵葉書)	11枚。うち1枚が3枚繋がりのペノラマ。 2色刷り 屋島内の名所中心、技番3は屋島全景。「屋島は海上公園としての極戸内海の景勝を一望に眺めるには最好的の展望地なり海拔二百五十五メートルにして山容自ら屋根の姿をなし山上脚下の風景又雄大なり」というキャプションがついている。施設から写したものと思われ、屋島の手前側には松と岩が写っている。 技番10は鳥瞰図で、屋島山頂が平たいことがはっきりとわかるように描かれている。	高松市歴史資料館

| : 写真・絵葉書 (6)

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・寸法: cm (形態)	コメント	所蔵館
1025	【絵葉書】国立公園 屋島 の絶勝	—	1934～1945	6 42.1	8.8×2枚 (v)どちらも3枚繋がりのハノーラマ。 屋島山上から撮影した写真。東側と西側の風景。 袋に台形の屋島がはつきりと描かれる。「飛沫飛壁」 に溶け潮音空平の戦跡」とタイトル の上に銘打たれている。袋の裏側には「屋島保勝 会 岩島遊覽記念」と書かれたハンコが押されて おり、屋島の形を模している。中の絵葉書きは屋島 山上からの風景。	高松市歴史 資料館
1026	【絵葉書】国立公園 屋島 の印象	—	1934～1945	6 14.0	9.0×7枚。 屋島から見える風景の写真と、屋島東側からの屋 島遠景の写真。	高松市歴史 資料館
1027	【絵葉書】国立公園 屋島 の景観	—	1934～1945	6 14.0	8.8×7枚。袋に高松城と屋島のイラスト、絵はがきは2 色刷り。 屋島内の名所中心、枚番5は屋島全景で、屋島の 手前には松と岩が写っている。	高松市歴史 資料館 書籍
1028	観光の屋島	—	1942頃	6	未調査 素紙は、屋島の展望台から瀬戸内海を眺める図、「瀬戸内海北嶺が描か れ、北嶺の北嶺が描かれる。 記念」と記す円形のスタンプ風イラストにはへ イケガニを近景に、西側からみた屋島北嶺が描か れる。 絵はがき本体には、「瀬戸内海北嶺の風景」と題した写真。 キヤブショウ仁に「相模の梅白砂松林に映えて点々 たる島影、たる翠松、映々たる岩礁石——こゝ 瀬戸内海の風景は天下の絶勝の美を一望に納め ることが出来る」とあり。 「三越 (この部分押印) 昭和17年10月16日 ¥ 240」と裏面に記載。購入年月日か。	香川県立図 書館

| : 写真・絵葉書 (7)

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・寸法 cm (形態)	コメント	所蔵館
1029	[屋島公園絵葉書]	—	大正末～昭和初期	6 9.1×14.2	《瀬戸内海国立公園》指定前に発行された8枚組の香川県立ミニ絵葉書。写真下に「屋島公園」[park]と印刷され、ユージアム屋島の風景をさまざまな角度から写している。「屋島戰場跡」として相引川高橋が含まれる。それぞれに「讃岐源平古戰場屋島 登山記念」のスタンプがあり。	香川県立ミニ絵葉書
1030	高松名勝絵葉書	—	—	— 不明	1: (讚岐高松) 屋島公園 長鼻ヶ崎の勝景 2: (讚岐高松) 屋島公園 高松港より見たる屋島の全景 3: (讚岐高松) 屋島公園 屋島諸古瀬より瀬戸内海の勝景 4: (讚岐高松) 屋島公園 屋島山上より高松市を望む 5: (讚岐高松) 屋島公園 屋島古戰場跡 6: (讚岐高松) 屋島公園 屋島の全景 7: (讚岐高松) 屋島公園 より八栗五角山を望む 8: (讚岐高松) 屋島公園 屋島寺	高松市中央図書館
1031	国立公園屋島百二十五景	—	—	6 14.9×10.0	1: 岩木公園、高松、琴平、多度津、觀音寺、寒露溪と記載されており、帆船と屋島が描かれている。 2: 屋島五重塔、「屋島寺境内雪の庭」、「屋島山頂碑」、屋島山山頂古瀬より小豆島方面を望む、「瀬戸内海展望台より鬼ヶ島及男木島を望む」、「屋島長崎の鼻」、「屋島登山道疊石」、「屋島北端遊憩亭の大観」、「屋島山上南端古瀬展望台」 3: 「屋島全景」	京都府立大学

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・寸法 cm (形態)	コメント	写真・絵葉書 (8)	所蔵館
1032	屋島名所絵葉書	—	—	6 10.2 × 15.4	屋島を背景に、波上の旗にタイトルあり。屋島に開運する餘は記され、下記の通り。	4: 「源平古戦場 墓の浦全景」 5: 「獅子の靈巖より櫛戸のべニス高松市街を望むい、瀬戸内海の夕照」、「屋島獅子の靈巖」、「獅子の靈巖の美麗」 6: 「平家船體」、「相引川義経弓流」、「施治の海岸」、「玉取姫の伝説地忠度浦」、「義経懸掛松」 7: 「屋島ケーブル全景」、「屋島ケーブルカー」、「屋島ケーブル南端駅」	京都府立大学
1033	讃岐屋島名所	—	—	6 14.8 × 9.9	1: 「相引川義経弓流」、2: 「八島神社」、3: 「屋島寺」、4: 「源崎寺、幕閣跡跡」(等閑寺)、5: 「御崎寺、大典記念塔」、6: 「可正院」、7: 「仰之碑、大典記念塔」、8: 「詔請寶池(一名血の池)」、9: 「嘗の浦と平家蟹」、10: 「北端(遊竪亭)」、11: 「今上天皇陛下御登臨記念碑、屋島寺古跡」、12: 「磐石と登山龍」、13: 「屋島寺(雪庭)」、14: 「屋島獅子靈巖展望台」、15: 「獅子靈巖」、16: 「屋島(屋島富士)」、17: 「源平合戰紀念碑」、18: 「屋島寺御坂門、屋島寺(四五門)」、19: 「屋島談古舎より五劍山を望む」	1: 「源平古戦場 墓の浦全景」 4: 「屋島と五劍山」、5: 「御崎寺、幕閣跡跡」(等閑寺)、6: 「可正院」、7: 「仰之碑、大典記念塔」、8: 「詔請寶池(一名血の池)」、9: 「嘗の浦と平家蟹」、10: 「北端(遊竪亭)」、11: 「今上天皇陛下御登臨記念碑、屋島寺古跡」、12: 「磐石と登山龍」、13: 「屋島寺(雪庭)」、14: 「屋島獅子靈巖展望台」、15: 「獅子靈巖」、16: 「屋島(屋島富士)」、17: 「源平合戰紀念碑」、18: 「屋島寺御坂門、屋島寺(四五門)」、19: 「屋島談古舎より五劍山を望む」	京都府立大学

| : 写真・絵葉書 (9)

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・寸法 cm (形態)	コメント	所蔵館	
1034	源平古戰場屋島名勝	屋島寺事務所	—	6 14.4 × 9.8	屋島に関連する繪はがきは以下の通り。 1:〔屋島登山ゲイブルカード入口〕 2:〔講岐屋島名所〕獅子の塗鰐 3:〔講岐屋島名所〕歴古前展望台より源平古戰場 舟隨を望む 4:〔講岐屋島名所〕屋島古戰場平家蟹 5:〔講岐屋島名所〕長崎鼻地図 6:〔講岐屋島名所〕源平古戰場 屋島全景 7:〔講岐屋島名所〕相びき川義経弓流 8:〔講岐屋島名所〕屋島サ本堂(仰之碑) 9:〔講岐屋島名所〕屋島獅子塗鰐より高松港を望む 10:〔講岐屋島名所〕獅子塗鰐展望台 11:〔講岐屋島名所〕瑞陽賞池(一名血の池) 12:〔講岐屋島名所〕屋島寺雪の園 13:〔講岐屋島名所〕屋島淡古漁ヨリ源平古戰場 境之前五劍山・雪景・源氏峰及志慶遠望その1 14:〔講岐屋島名所〕屋島淡古漁ヨリ源平古戰場 境之前五劍山・雪景・源氏峰及志慶遠望その2	京都府立大学	
1035	「繪はがき」(講岐) 屋島	—	—	6 14.2 × 9.2	1:〔講岐〕屋島寺宝物源氏白旗井屋鶴懷古之詩那須 寺宝物源氏白旗井屋鶴懷古之詩那須芝山資明苦吟 古之詩那須与古資流之裔 那須芝山資明苦吟ほか4点(仮)	須与市資流之裔那須芝山資明苦吟 2:〔講岐〕屋島寺所藏(平家陣營之圖) 村田丹陵 の筆其二 3:〔講岐〕屋島寺宝物(徳川家康公遺物源頼重公 苦吟) 4:〔講岐〕屋島寺(梵鑑) 5:〔講岐〕屋島寺宝物(源氏勝白)	京都府立大学
1036	「繪はがき」遊仙亭眺望は	絵画研究会	—	6 9.9 × 15.3	屋島に関連する繪はがきは以下の通り。 1:遊仙亭眺望、2:簾草の杜・屋島神社、3:〔獅子の塗鰐の展望、4:〔相引川〕を渡りて五劍山(?)、	京都府立大学	

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・寸法 cm (形態)	コメント	1 : 写真・絵葉書 (10)
1037	讃岐屋島風景	屋島寺発行	—	6 9.5 × 15.0	全 10 枚。封筒に高松港側から見た屋島のイラスト。京都府立大 海には帆船が 7隻浮かんでいるのが見える。 1:〔讃岐屋島名所〕屋島寺本堂 (印之碑)、2:〔讃 岐屋島名所〕屋島寺雪の庭)、3:〔讃岐高松港ヨリ 屋島全景ヲ望ム〕、4:〔〔讃岐屋島名所〕瑠璃寶池 (一名血の池)〕、5:〔〔讃岐屋島風景〕談古戯屋望 合ヨリ源平古戰場舟隱ヲ望ム〕、6:〔鷲崎・北嶺遊鶴 亭ヨリ源戸内海 左ヨリ大島・小島・大蛇・福木嶋・ 及小豆島遠望〕、7:〔〔讃岐屋島名所〕屋島南端ヨ リ〔源平古戰跡〕相川及高松村方面ヲ望ム〕、8: 〔〔讃岐屋島名所〕獅子之堂縮〕、9:〔〔讃岐屋島絶景 屋島談古錄獅子堂縮ヨリ見タル右ヨリ男木島・女 木島・中央大嶋・小舟左高松方面ヲ望ム〕、10:〔讃 岐屋島名所〕屋島談古縮ヨリ〔源平古戰場〕獲之 浦五劍山・雪景・源氏峯及源度満望〕(2枚を合 わせて 1枚とする)。	5: [高松岸壁より屋島を望む、6: [登山ケーブル カー]、7: [四国八十四番の屋島寺]
1038	源平古戰場廻戸内海屋島 風景	—	—	6 14.6 × 9.7	封筒には高松港側から見た屋島北嶺の一部のイラ スト、その左横にタイトルあり。遠くに帆船が 2 隻浮かぶ。 1:〔源戸内海風景〕、2:〔〔讃岐屋島公園獅子ノ塗壁 ヨリ大蛇・小蛇広島県ヲ望ム〕、3:〔〔讃岐屋島公園 獅子ノ塗壁ヨリ男木・女木島岡山県ヲ望ム〕、4:〔〔讃 岐屋島公園獅子ノ塗壁ヨリ高松・琴平ノ範張ヲ望 ム〕、5:〔〔讃岐屋島ヨリ五劍山及源ノ浦源平古戰場 ヲ望ム〕、6:〔〔讃岐屋島ヨリ五劍山及源ノ浦源平古 戰場ヲ望ム〕	京都府立大 学

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・寸法 cm (形態)	コメント	写真・絵葉書 (11) 所蔵館
1039	讃岐屋島名所	—	—	6 未調査	封筒あり。イラストは手前に松並木、奥に海上の京都府立大学複数の島々。 1:〔讃岐屋島名所〕淡古瀬ヨリ〔源平古戦場〕壇之浦五劍山源氏土塁及志度崎遠望、2:〔讃岐屋島名所〕屋島北端瀬鰐亭ヨリ望ム(前) 鳥治鷲(源平古戦場)舟櫓、3:〔(讃岐屋島名所)屋島北端 豊鶴亭ヨリ瀬戸内海(左ヨリ)〕女木島・男木島・豊島アヲハタ、4:〔(讃岐屋島名所)屋島ト五劍山、屋島ヨリ高松方面ヲ望ム〕	京都府立大学
1040	国立公園屋島の絶勝 絵画研究会工芸 社印刷	—	—	6 9.7× 14.9	封筒になつており、裏面に「国立公園屋島遊覧記念」京都府立大学のスタンプがある。 1:〔屋島遠望〕 2:〔屋島山下遊憩亭〕 3:〔屋島山上より西側バノラマ〕 4:〔屋島山上より東側バノラマ〕	京都府立大学
1041	讃岐源平古戦場屋島二十 景絵葉書	—	—	6 9.1× 15.2	1:「源平古戦場屋島登山記念並鸞龍」、2:「源平古戦場屋島山上の池」、3:「屋島山上豊石」、4:「屋島寺本堂」、5:「屋島芋芋庭」、6:「屋島山上仰之碑」、7:「屋島山上御大典記念五重石塔」、8:「源平古戦場屋島山上の池」、9:「源平古戦場屋島山上獅子之盡巻」、10:「屋島山上談古論より庵治藩興望」、11:「屋島山上談古論より五劍山源氏方峰を望む」、12:「屋島山上獅子之盡巻より内海を望む」、13:「源平古戦場 東照宮前より屋島南峰絆望を望む」、14:「源平古戦場屋島壇の浦	京都府立大学

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・寸法(cm) (形態)	コメント	1:写真・絵葉書 (12)
1042	讃岐名勝屋島高松栗林公 園琴平六十景	—	—	6 14.6 × 9.6 b.	屋島北端と海に浮かぶ弓、カモメが2羽のイラス 屋島に閉連する陰はがきは以下の通り。 1:〔屋島寺宝物・平古家カニ〕、2:〔屋島談古端展望 谷より船隱しを望む〕、3:〔屋島長崎〕；屋島長 崎鼻と漸戸内海風景。〔屋島北端山麓に、4:〔屋 島ケーブルカー〕下り進行中の鋼索、5:船隱し〕、 6:〔小豆島から見た屋島〕、7:〔講岐屋島全景〕、8: 〔屋島神社〕、9:〔屋島獅子堂より高龜望む〕、 10:〔獅子堂〕、11:〔屋島獅子堂展望台〕、12:〔瑞 應池（一名血の池）、13:〔屋島寺〕、14:〔延引 と那須与一〕（鏡引と那須与一の陰が葉書き紙上半 分ずつあり）、15:〔屋島山上ヨリ見タル御戸内海 ノタ陽〕、16:〔講岐屋島談古端より五劍山を望む〕	京都府立大 学
1043	国立公園屋島百三十景	—	—	6 14.5 × 10.4	表紙のイラストは高松市側から見た屋島が描かれ、京都府立大 学 新平合戦の文字が入る。裏面に絵画研究会のマー クがプリントされている。 屋島に関係する陰はがきは以下の通り。 1:〔名所古跡と風光美！屋島の印象 百三十景〕〔並 縫字〕、2:〔古所古跡と風光美！屋島の印象（百三十 景）〕〔屋島全景と獅子の雪巣〕、3:〔名所古跡と風	京都府立大 学

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・寸法・cm (形態)	コメント	1:写真・絵葉書 (13)
----	-----	--------	---------	------------------	------	---------------

1044	屋島風景	—	—	6 10.0 × 14.5 島ノ東洋	1: ([講談社) (源平古戦場) 施治海岸ヨリ見タル屋島ノ東洋	京都府立大学
				9 : 10.0 × 29.0	2: ([講談社) (源平古戦場) 屋島守	
					3: ([講談社) (源平古戦場) 境ノ浦ノ一望	(其の 1)
					4: ([講談社) (源平古戦場) 境ノ浦ノ一望	(其の 2)
					5: ([講談社) (源平古戦場) 屋島談古論	
					6: ([講談社) (源平古戦場) 屋島北端	
					7: ([講談社) (源平古戦場) 屋島驛前ノ東照宮馬場	
					8: ([講談社) (源平古戦場) 鰐子ノ雲巒屋笠臺	
					9: ([講談社) (源平古戦場) 境の浦五剣山全景 (其の 1) (其の 2)	

| : 写真・絵葉書 (14)

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・寸法: cm (形態)	コメント	所蔵館
1045	横枝屋島名所	—	—	6 14.7 × 9.8	袋には、扇の柄を狙う那須与一が描かれる。その京都府立大學背景には屋島が描かれ。与一は屋島の東側に向かって弓引いて、屋島側にある扇の柄に向かって弓引いている。全ての絵はがきの表側には、「講岐屋島古戦場血ノ池・登山記念」と「講岐屋島古戰場血池登山記念」のスタンプがそれぞれ押される。スタンプの日付は4. 6. 21で昭和4年のものと思われる。	京都府立大学
1046	〔絵葉書〕	—	—	6 9.0 × 14.3	「講岐屋島(源平古戦場)」と印刷がある。軸先を大抵にトリミングした帆船と、屋島の組み合わせ。遠景の山容は小豆島か。	香川県立ミニシアム
1047	英國太子殿下行啓記念	—	—	6 18.0 × 10.3	「屋島山遠景、御召艦レナウン号」、「奥林公園 松平伯別邸櫻雲閣」他の写真が調製される。レナウン号はスコットランドで建造。1921～1922年にかけてエドワード皇太子の巡行に使われ、オーストラリア・アメリカ・日本など訪れた。	香川県立ミニシアム
1048	〔絵葉書〕	—	—	6 14.3 × 9.0	「講岐屋島(源平古戦場)」の印刷がある。	香川県立ミニシアム
1049	〔絵葉書〕	—	—	6 14.2 × 9.2	1075と同一枚葉書。「講岐屋島(源平古戦場)」。彩色が施されている。香川県立ミニシアム	香川県立ミニシアム

| : 写真・絵葉書 (15)

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・寸法 cm (形態)	コメント	所蔵館
1050	屋島寺 宝物繪葉書	屋島寺発行	—	6 14.0 × 9.0	屋島寺発行。村田月陵画「源平合戦之図」、土佐光香川県立ミニ信画「源平屋島合戦之図」、土佐光起画「佐藤兼信戦死之図」含む寺宝の絵はがき。「源平屋島合戦之図」では屋島と思しき、半島が描かれる。	香川県立ミニュージアム
1051	繪本源平盛衰記 全	—	—	6 19.0 × 13.5	「義経風解瀛洲四国」の場面、「大将義経暴風を凌で屋島につたふ」の挿絵。「屋島合戦」の場面、「那須与一扇の目的を射る」の挿絵。「源平遠矢」の場面、「安徳帝を始め平野多く入水」の挿絵。いづれも屋島そのものは描かれていない。	香川県立ミニュージアム
1052	高松名勝繪はがき	讃岐岡内千金丹 本鋪	—	6 14.1 × 9.0	「高松市街全景」の画面奥に微かに屋島全景が見える。「源平古戰場屋島の前金界」の絵はがきあり。	香川県立ミニュージアム
1053	屋嶋の景勝	—	—	6 14.0 × 9.0	正式名称「瀬戸内海の眺望絕佳 屋島の景勝」。袋裏面に「笠巣茶屋」のスタンプ。淡古滸から古戦場船體及び瀬戸内の島々。屋島山上から高松市街、金刀比羅宮、長崎の櫓。庵治から眺望する屋島。屋島北翁遊覧亭からの瀬戸内海眺望。山上の笠巣展望台より男木島・女木島眺望。見開きの鳥瞰図「瀬戸内海源平古戰場全景」付属、裏面に「[7.5.30]笠巣茶屋」のスタンプがあり。スタンプの一つに帆船と屋島をモチーフにしたものあり。	香川県立ミニュージアム
1054	庵治絵葉書	—	—	6 14.2 × 9.0	表紙に屋島遠景のイラストがデザインされる。香川県立ミニュージアム「源平古戰場船體」の場所から屋島が遠景として写る。庵治は権ノ浦ノ浦を挟んで「屋島長崎の鼻」と向合う。遠景ながら距離が近いので、台形の屋島の山容に迫力がある。	香川県立ミニュージアム

| : 写真・絵葉書 (16)

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・寸法: cm (形態)	コメント	所蔵館
1055	【高松港より屋島望遠絵葉書 書】	—	—	6 14.0 × 9.0	右下に「百景／100VIEWS」と記載。帆船2隻と遠景に籠んだ屋島。 帆船のクローズアップと屋島の遠景の構図をとる。	香川県立ミニエーゼリアム
1056	【絵葉書】屋島 鬼ヶ島 要 林公園他	—	—	6 14.0 × 9.1	1: 屋島の形をコラージュした施戸内海国立公園の鳥瞰図。 6: 「高松市と屋島」高松市全景と屋島遠景の写真。 6: 「前略」源平の昔を想起する屋島半島が大きく書き出されてゐる」と説明あり。	高松市歴史資料館
1057	【絵葉書】源平古戦場 屋 島百廿景 古亭	諱岐屋島山上 談	—	6 9.0 × 14.0	29枚。屋島の名所だけなく金刀比羅宮など他所の写真もある。主に屋島寺など屋島の史蹟や、屋島からみた風景の写真が多い。 1: 封筒。裏面に源古前の印と玉虫の印があり。談古の印は那須与一の印を射るシーランが描かれており、背景には屋島が谷形で描かれている。	高松市歴史資料館
1058	【絵葉書】屋島宝物詮葉書 —	—	—	6 9.2 × 14.0	10枚。内4枚は源平合戦図。 1: 裏面に印あり。内側に「後小松天皇宸筆・源氏 白旗及ヒ勝日・平景清守本尊千手觀音・後醍醐天 皇宸筆・平重盛奉納鎧龍・其外數点ヲ収ム」とあり。 6: 土佐光信「源平屋島合戦之図」右上に屋島のよ うな台形の描写あり。実際の位置関係とは逆では ないか。 7: 土佐光信「佐藤健信戰死之図」	高松市歴史資料館
1059	【絵葉書】栗林公園 屋島 —	—	—	6 9.1 × 14.0	5枚 (4枚は栗林公園)。屋島に閣する1枚は「屋 島 東宮殿下御之碑」のみ。	高松市歴史資料館
1060	【絵葉書】諱岐名所 —	高松開郡製	—	6 9.0 × 14.2	屋島に関するものは「志度幾の浦より源平古戦場 五剣山及び屋島山を望ム」のみ。五剣山の裏手に 屋島が見えている構図。	高松市歴史資料館

| : 写真・絵葉書 (17)

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・寸法 cm (形態)	コメント	所蔵館
1061	【絵葉書】高松側部製	高松側部製	—	6 9.1×14.1	24点。「源平古戰場」に関するものが中心。 「那須与一」や「佐藤次信算」「安徳神社」など。 屋島全景もあり。	高松市歴史 資料館
1062	【絵葉書】国立公園屋島百景	—	1934～	6 カ 9.1×14.2	源平合戦陣陣、平家蟹、折り岩、駒立石など、高松市歴史 源平合戦にまつわるもののが一枚に収められている。 6：平家船隠、相引川義経弓流、義経抜松など、 源平合戦にまつわる場所が一枚に収められている。	高松市歴史 資料館
1063	【絵葉書】瀬戸内海に於ける源平の合戦	長谷川小信	—	6 カ 9.1×14.1	絵鑑 平教経 1：[佐々木盛嗣、藤戸先陣] 2：[那須与市朝を射る] 3：[眾清のしころ曳き] 4：[義経、弓を流す] 5：[義経の八艘飛] 6：[平教経、最後] 7：[安徳帝御最後] 8：[瀬戸内海の最後]	高松市歴史 資料館
1064	屋島関係絵はがき (〔歴史 古事記 十三 松浦 俗資料館 正一文庫目録〕所収)	高松 壱	—	6 カ 未調査	162：屋島寺の内野治 8 屋島南端上平面図 屋島、168：屋島史跡各勝地図、187：屋島 (案内 書など 19枚)、190：屋島絵はがき 2	高松市中央 図書館
1065	【絵葉書】講談名勝 屋島 高松 粟林公園 琴平六十景	講談社	—	6 カ 8.8×13.6	53枚。ケーブルカーあり。昭和4年以降。 枝垂1(袋)は屋島(台形)をバックに海に弓が 浮かんでいる様で、義経弓流を表現していると思 われる。 枝番9は施治から見た屋島。枝番10は高松港から 見た屋島全景。 屋島・講談の名所を網羅。	高松市歴史 資料館

1：写真・絵葉書 (18)

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・寸法 cm (形態)	コメント	所蔵館
1066	「絵葉書」(讃岐) 源平古戦場 東照宮前ヨリ屋島 南峰経家ヲ望ム	—	—	6 カ 9.1 × 14.2	1枚。「古戦場・屋島寺登山紀念」のスタンプあり、高松市歴史 資料館 東照宮前より屋島南端。	高松市歴史 資料館
1067	「絵葉書」源平古戦場屋島 岩佐コロタイプ	岩佐製版 絵端書	—	6 カ 9.0 × 14.1	B.0671-1からB.0671-12袋一套。 枝番 1 ([諂岐) 源平古戦場 屋島山淡古嶺展望台) 枝番 2 ([諂岐) 源平古戦場 屋島山獅子之塚峠) 枝番 3 ([諂岐) 源平古戦場 屋島山壇石) 枝番 4 ([諂岐) 源平古戦場 屋島壇之浦原氏總門) 枝番 5 ([諂岐) 源平古戦場 獅子之塚峠展望台) 枝番 6 ([諂岐) 源平古戦場 屋島寺雪庭) 枝番 7 ([諂岐) 源平古戦場 屋島) 枝番 8 ([諂岐) 源平古戦場 屋島寺御成門) 枝番 9 ([諂岐) 源平古戦場 屋島) 枝番 10 ([諂岐) 源平古戦場 屋島南峰屋島神社) 枝番 11 ([諂岐) 源平古戦場 相引川) 枝番 12 ([諂岐) 源平古戦場 墓之浦五剣山)	高松市歴史 資料館
1068	「絵葉書」(讃岐屋島名所) 安徳天皇社	—	—	6 カ 9.0 × 14.0	1枚。左側に安徳天皇社が写り、その前には煙が みえる。右後方には海が広がっている。	高松市歴史 資料館
1069	「絵葉書」讃岐、栗林公 園南庭 南湖全景 屋島 源平史蹟 總門の跡	—	—	6 カ 9.2 × 14.0	「屋島源平史蹟で名高い総門の跡」。背景に五剣山 がみえる。	高松市歴史 資料館
1070	「絵葉書」特選 讃岐景勝 香川新報社発行	—	—	6 カ 13.9 × 9.0	5枚組。讃岐名勝中心。屋島に連する絵はがき は以下の1枚。 枝番 2 ([特選) 魔治村から眺たる午後の讃岐屋島) 魔治村から午後に撮影した屋島。海には帆船が 浮かんでいる。	高松市歴史 資料館

| : 写真・絵葉書 (19)

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・寸法 cm (形態)	コメント	所蔵館
1071	【絵葉書】名勝集当選 講談社五景五勝	香川新報社発行	—	6 カ 13.9 × 8.9	10 枚組。諭段名勝中心。 枝番 10 謹候五勝 石尾記八幡山から屋島を望む。 は石尾尾八幡宮から撮影した屋島。	高松市歴史 資料館
1072	【絵葉書】源平古戰場屋島 絵葉書 (講談社) 源平古戰場 屋島淡古論展示台	岩佐コロタイプ	—	6 カ 未調査	B.0671-1からB.0671-12 裏一括。	高松市歴史 資料館
1073	【絵葉書】やしま	高松観光協会	1950～ 2004	9.0 × 14.0	8 枚。屋島から見る風景の写真と、屋島東側か、 淡古論展望台で景色を眺める人々が写る。 日の丸の帽子、観光客である女性のイラストが 大きく描かれている。屋島は、北端と南端に分か れているのが判別できるように描かれている。絵 はがきはすべて彩色した絵はがきとみられ、枚番 3が屋島全景を施治闇から写したものである。	高松市歴史 資料館
1074	【絵葉書】史蹟の屋島 Views of Yashima 講 古論 (瀬戸内海国立公 園)	TEROKU OSAKA	—	7 × 10.6 × 28.5 2・3・4： 10.7 × 14.3 5・6・7： 10.6 × 14.3	7 枚組。一枚の封筒有り。 年代と推定。屋島に関する記述は宛名面にあり。 1：談古論。 (—) と (二) の 2 枚を接続している。 2：屋島観光バス。 3：屋島ドライブウェー。 4：屋島寺。 5：屋島ケーブル。 6：並鶴亭。 7：獅子塗籠。	高松市歴史 資料館
1075	(写真) 石滑尾山 (福井山) — より見た高松市街	—	—	7	未調査	所蔵機関により昭和 30 年代と推定されている。 プリント写真 4 枚を繋ぎ合せた高松市街のパノ ラマ写真。2～3 枚目にかけて、遠景に屋島。
1076	【絵葉書】	—	—	7 14.8 × 10.1	「四国の旅」屋島壇ノ浦 (香川県) 淡古論から東方、五剣山と櫛ノ浦を望む。カラー 絵葉書であるため、極ノ浦と塩田が美しい。	香川県立ミ ュージアム

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・寸法: cm (形態)	コメント	所蔵館
1077	〔絵葉書〕讃岐の風光 寒	—	—	7 9.0	13枚(もと16枚組)。カバー付き。 屋島全景の絵葉書な。袋表面「讃岐の風光」と いうタイトな背景が鷲(源平合戦の旗頭与一の 旗か)で、裏面の「さぬき遊覧図」の屋島(陸奥き) の箇所に史跡・名勝・天然記念物と古戦場の地図 記号あり。	高松市歴史 資料館
1078	〔絵葉書〕屋島名勝	—	—	7 カ 8.5×5.0 (ミニラ マ) 8.7 ×27.3	着色カラー。屋島からみだる眺望が中心。 獅子の登場字から見た眺望。 3: 高松市街の図。 4: 屋島長崎の骨。 5: 屋島寺。 6: 屋島全景。 7: 屋島ケーブルカー。	高松市歴史 資料館
1079	〔絵葉書〕瀬戸内海国立公園 屋島ハイアーチ	—	—	7 カ 13.8× 8.9(葉 書の内 1枚) 8.9 ×27.7 (封筒)	袋は空からみた屋島の全景。「最新決定版」以下 4点にはそれぞれ裏面に説明があり。 1: [国立公園 屋島ケーブルカー] 2: [高松市街の全景] 3: [国立公園 四国八十八霊屋島寺] 4: [国立公園 屋島獅子の巣より鬼が島を眺む] 5: [豪古墳 権之浦] 19.2× 15.5	高松市歴史 資料館
1080	〔絵葉書〕讃岐巡り十六景 鬼ヶ島風景 向いは屋島 鬼ヶ島の洞窟	—	—	7 カ 8.8× 13.8	現存は5枚。屋島に關連する絵はがきは以下の通 り。 技番2「鬼ヶ島風景 向いは屋島 鬼ヶ島の洞窟」 は鬼が島の風景の左奥に屋島。 技番5「屋島 説古論 獅子の巣より展望」は 説古論より權ノ浦を望む。	高松市歴史 資料館

| : 写真・絵葉書 (21)

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・形態	寸法 cm	コメント	所蔵館
1081	【高松市遠景】	—	—	7.7×11.0	7.7×11.0	区画整理前の高松市街から屋島を望む。工場の煙 架から立ち上る煙がみえる。高松港の向こうに、 屋島北端、矢岳島、小豆島の山並みが、折り重な るようにならんで置かれている。	香川県立ミニ ージアム
1082	【屋島寺本堂】	—	—	6.8×8.8	6.8×8.8	參詣者で賑わう屋島寺の本堂前。右端に懸のよう なものが写っている。	香川県立ミニ ージアム

J : ガイドブック (1)

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法: cm (形態)	コメント	所蔵館
J001	A Handbook for Travellers Chamberlain, in Japan, 3rd Edition	B.H. and Mason, W.B. (英), John Murray, London and Kelly & Walsh, Yokohama	1891	6 未調査	日本研究者チャーチル・バーンとメイソンによるマレー半島の 英文日本ガイドブック。3版にして初めて西日本内海と 西日本内海が日本語で書かれた。屋島を含む近畿の紹介される。(p.358)		
J002	屋島名勝手引草 全	編纂人屋島保勝会 代表者中村事、香 川新報社印刷部	1898	6 19.8 × 12.8	獅子の巖岩、淡古瀬からの眺望の図あり（どちらにも、京都府立大学 軒並が多数ある）。屋島寺、古城跡、獅子の巖橋、淡 古瀬のほか、駒立岩など駿平台間にわたりる事蹟を中心 に紹介。題引、弓流しの遺跡についてでは「現今其所詳 らかならず」としながらも、駿平盛衰記を引用。 香川県立図書館 K2931/11/2、高松市中央図書館 T2931/ ヤシもこれに同じ。		
J003	屋島名勝手引草 全	編集 中村事／跋 文 山田尚★（梅 村の二男）	1898	6 19.8 × 12.6	獅子の巖橋、淡古瀬からみた風景のイラスト有り。 名所案内記。		高松市歴史資料館
J004	講談案内	香川県内務部第四課	1902	6 21.7 × 14.5	第八回開西洋黙連合共進会の開設に鑑し、本県現在の 情勢を紹介するため編纂。郡別の名所記述に「屋島山」一シアム あり。屋島の由来、源平合戦に関する記述有り。屋島 に関する史料紹介有り。		香川県立図書館
J005	八栗屋島	真鍋俊明	1903	6 未調査	屋島の各名所についての解説あり。形状について、「其 状屋宇に似たり故に」との記述。		
J006	屋嶋めぐり	池畠惣吉編、宮鶴 開益堂	1913	6 15.3 × 9.5	池畠惣吉と森田物吉は同一人物か。J006とはほぼ同内容。 「高松及高松名産一覧」と「屋島及高松市ノ主ナル旅館」 の一覧と写真2点が追加有り。		京都府立大学

J : ガイドブック (2)

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・寸法 cm (形態)	コメント	所蔵館
J007	屋島めぐり	森田惣吉編、宮脇開益堂	1913	6 14.9 × 9.5	表紙は屋島前景と兎で、「GUIDE OF YASHIMA THE BATTLE FIELD OF GENJI AND HEIRE」とあり。裏表紙には森氏の質問改（金色）・平家の家紋（赤）・平家蟹、海に沈む鷺が描かれている。緒言「世界海上の一大公園なりと外人を賞美せらる神戸内海の風景をして一層美麗ならしむるものは屋島なり」とす。屋島の風光と地理的趣味と歴史的事実を紹介。蟹寺・錦子の鑑像・源平合戦にまつわる佐藤継信墓・義経弓流し・折岩及鷗立岩のはほか、高松市・高松港・高松城・高松市街の写真が載っている。	京都府立大学
J008	屋島めぐり	森田惣吉編	1915	6 15.2 × 9.3	森田惣吉編、大正2年3月発行、大正4年4月10日訂正再版発行。大正6年3月正版と冒頭部分の構成が異なる。本文の内容に関しては若干の修正がみられる。表紙に西から見た屋島全景のイラスト。「名勝と旧跡との別なく時代の前後に關せず」整山行程順に記載。末尾に屋島・高松市街の旅館の広告。	香川県立ミニアム
J009	源平古戰場 屋島めぐり	森田惣吉編	1917	6 15.0 × 10.0	森田惣吉編、大正2年3月発行、大正6年4月20日訂正3版発行。大正4年版と比べ、冒頭のページ構成が異なる。本文に関しては若干の修正が見られる。表紙に西から見た屋島全景のイラスト。「名勝と旧跡との別なく時代の前後に關せず」整山行程順に記載。緒言に「屋島の名の由來を『青御馳島』にして其形似字に似たるを以て此の名を得たり」と記述。本文中に「屋島山」「屋島山と五剣山」と題された写真があり。また淡古幽か、ら撮影された写真もあり。本文中に「五剣山が『風影亭』にして武人の出陣に於けるが如し」と形容されるのに対し、屋島は「山容優美にして婦人の坐室に生するが如く」と形容される。源平合戦、またはその関連施設に関する記述あり。	香川県立ミニアム

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・寸法: cm (形態)	コメント	所蔵館
J : ガイドブック (3)						
J010	屋島めぐり	著作兼発行者 森宮龍閣堂	1921	6 14.8 × 9.2	表紙に記と屋島のイラスト。 2 頁目の「屋島山」の写真に屋島と、ヨンドが写って いる。緒言には「地質概ね火山岩にして山石重疊して 奇觀を呈す全く青松を以て包まね火山岩に敵下の風景實に 雄大にして壯觀たり」とあり、それ以下には瀬戸内海 に関する著作を出した人物や宮内省の人物の屋島詳(屋 島の風景を施せるもの)を掲げている。その後に、「屋 島は勝地として名高きのみあらず誇永の音源平氏の 運命を跡へる他なれば當時を追憶し悲史も史蹟の 探るべきもの解からざれば人の感觸を動かすこと最も切 なり…」と述べられ、源平合戦とのかかわりも強調さ れている。これ以後のページでは、各スポットごとの 案内となっている。	高松市歴史資料館
J011	最新屋島 附・栗林公園 神龜山 金刀比羅宮	岡田唯吉、高松宮龍閣堂	1924	6 未調査	表紙に西側から見た屋島北端(南端の一部含む)のイ ラストあり。 目次: 「屋島山の成因」「瀬戸内海に於ける屋島の位置」 「屋島の古事」「源平屋島砦」「源平砦及其它の史蹟名 勝」 「瀬戸内海に於ける船頭諸海城の要地として交通上軍事上 等に最も多く利用せられ」備つて各時代に渡つての歷 史が最も多く演ぜられた為古今の史蹟に富んで居る 「山上は瀬戸内海東洋の眺望絕佳で坂日本三景の一たる 松島に比して景氣頗る勝大で所謂大松島ともいふべき 處」。	高松市中央図書館
J012	古今講談名勝図会	根原龍水、桜原猪之松補訂	1930	6 未調査	表紙に西側から見た屋島北端(南端の一部含む)のイ ラスト、島神社、屋島の史蹟(安徳天皇社・菊王丸墓など)、屋 島寺等の他、諏古瀬、屋島登山鉄道など近代の記述も あり	香川大学図書
J013	講談 風光と産業	香川県	1930	6 未調査	表紙に西側から見た屋島北端(南端の一部含む)のイ ラスト、近景に松と埴籠を描く。 香川県交通局編 瀬古瀬から瀬戸内海方面眺望の写真にキャプション、	高松市中央図書館

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・寸法 cm (形態)	コメント
J014	讀跋	桑島安太郎	1932	6 未調査	<p>表紙に星島の図像あり。香川県内の史跡名称。産業な どの解説が書かれている。星島に関する記述では、「世界海上 の一大公園なりと外人の貢美せる瀬戸内海の風光を、 一層絶景ならむる展望台の星島は、又海水の音、 瀬平二氏が白旗、赤旗をひるがえしつゝ、運命を贈し て飛べる地として、当時を追憶し悲壮史蹟を探る事の 多い所である。風光史蹟兼備の地として、然も交 通便利なること天下に其の比を見ないのである。」とあ り。</p>
J015	The Lure of Japan	Akimoto Shunkichi (秋元 俊吉)、Board of Tourist Industry Japanese Government Railways	1934	6 未調査	<p>瀬戸内海国立公園が制定された昭和9年(1934)に刊 行された、西欧人のまなざしを意識したうえで、西 欧人旅行者に日本の魅力を伝えるために日本側から 発信した英文の日本ガイドブック。作者はAkimoto Shunkichi 秋元俊吉(刊行元は日本旅客鉄道 Tourist Industry Japanese Government Railways)。 Inland Seaについては、日本の地中海 It is rightly called the Mediterranean of Japan and 紹介。急速に 近代化する日本のなかでも伝統的な日本の生活がみら れる場所として瀬戸内海が紹介される。ガイドブック では四国は瀬戸内海に面している、風景が美しく國立 公園に含まれることが強調されている。そのなかで、 とくに星島については、12世紀の源平古戦場であつた という歴史的側面が紹介されている。ただし、星島の 地形の特徴は最も記述されていない。</p>

J : ガイドブック (5)

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・寸法: cm (形態)	コメント	所蔵館
J016	最新版高松市街地図附講義 名所案内	発行高松百貨店書 籍部	1935	6 18.5 × 8.3	高松市街地の一万余分の一の地図と講義名所案内が折り込まれる。地図中に屋島は描かれないが、講義名所案内の「付近の名所講義」の一項目として屋島が紹介されている。本文中では、「源平の古馳場」として有名であり、「天下の驰勝として今や屋島の名は海外に讃されてゐる」と記述される。また屋島山上から眺を高く評価している。周辺の名所の写真も多枚載され、表紙には西側から撮影した屋島と高松城と松のイラストが描かれる。	京都府立大学
J017	四国案内	社団法人ジャパン・ツーリスト・ビューロー ジャパン・ツーリスト・ビューロー(日本 旅行協会)発行	1935	6 18.3 × 11.7	社団法人ジャパン・ツーリスト・ビューロー(日本旅 行協会)が監修し、株式会社海沿公關所監修図、雅子の畫、瀧井らの瞭 望写真掲載。本文中に屋島の項目があり、詳細詳細な 記述有り。	香川県立ミニ 一シアム
J018	観光の高松創刊号	高松観光協会	1937	6 未調査	高松観光協会が年に1回発行した観光案内書。国立公 園指定直後の動きがわかる。昭和14年までの3冊が確 認される。	香川県立瀬戸 内海歴史民俗 資料館
J019	史蹟名称天然記念物四国編	広島鉄道局発行	1938	6 19.0 × 13.0	広島鉄道局発行「高松市より屋島を望む」香川県立ミニ と題した攝影写真あり。高松石錆の史蹟及び天然記 念物として、屋島の解説・交通・通貨を記す。解説文 のリストは西側から見た屋島と帆船。「四国における 史蹟名勝天然記念物分布図」あり。裏表紙に「国民精 神運動員」(昭和十三年四月版)と記載。	香川県立ミニ 一シアム
J020	総合郷土研究香川県	香川県防衛学校・ 女子防衛学校	1939	6 未調査	「文化」の「安徳天皇」に源平合戦の記述。	香川大学図書 館
J021	屋島めぐり	著作兼発行 森田 惣吉	(A) 1915 / (B) 1935	6 15.0 × 9.3	技番 A は C010(高松市歴史資料館 00825)と同じ。 技番 B は表紙に「大屋島」とあり、中表紙に国立公園 の表記有り。技番 B は鳥瞰図ほか地図が光沢。また技番 B は、A と 同じデザインの表紙ながら「大屋島」と印刷打たれてお	高松市歴史資料館

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・寸法 cm (形態)	コメント
J : ガイドブック (6)					
J022	屋島合戦物語及日跡案内	岡田唯吉著	—	6 21.5 × 15.0	佐藤耕信戦死・扇的・しき引きの挿絵あり。 高松市歴史資料館
J023	屋島閣係パンフレット (『歴 叡戸内外歴史民俗 史収蔵資料目録 十七 草薙 資料館 金四郎文庫』所収)	—	6 カ	未調査	96-97 屋島閣係 21 件 高松市中央図書館
J024	観光香川	香川県	1962	7	未調査 県の写真集。施設からみた屋島の写真が載る。 香川県立瀬戸内海歴史民俗資料館
J025	香川県の国立公園と県立公園	香川県土木部計画課 観光課	1950 カ	7	未調査 写真「女木島海濱と屋島台」「屋島台より境の浦、五剣 高松市中央図書館と屋島台」の写真は、1027と同一写真。 女木島 海濱と屋島台
J026	観光のさぬき	—	1956 カ	7	未調査 写真をまとめて解説を付したもの。姫島の廻船販賣所、香川県立ミユーフレームにして、屋島北側を写す。諏訪の名所再版を望んだカットには、境ノ浦の塩田が写る。
J027	民間信仰 『新編 香川叢書 民俗編』所収	—	—	7	未調査 漢字、血先地 漢字、血先地 漢字、血先地 漢字、血先地

J : ガイドブック (7)

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法 (形態)	コメント	所蔵館
J028	香川 さぬき	—	1949	7	17.2 × 18.4	表紙に屋島と思しきイラストあり。序に「挿入写真は香川県立ミニ日本交通公社、四国鉄道局等の提供によるもの」とあり。 「自然と風光」の項目に屋島の記述あり。「さぬきの土産物」に屋島せんべいが挙げられている。	香川県立ミニ日本交通公社、四国鉄道局等の提供によるもの」とあり。 「自然と風光」の項目に屋島の記述あり。「さぬきの土産物」に屋島せんべいが挙げられている。
J029	香川の観光ガイド	—	1965 年	7	25.2 × 16.8	本文中に昭和 39 年度(昭和 40 年開通)の記事あり。 東海道新幹線(昭和 40 年開通)の記事あり。 高松タクシー組合の観光コースに屋島が含まれている。 高松市街の概観写真は南から北東を望み、遠景に屋島が写る。山地西側とみられる道路からぞ地を眼下に望む写真が添えられた屋島は「觀光香川の代表的觀光地」と評される。カラー写真なので、海の青とのコントラストが美しい。	本文中に昭和 39 年度(昭和 40 年開通)の記事あり。 東海道新幹線(昭和 40 年開通)の記事あり。 高松タクシー組合の観光コースに屋島が含まれている。 高松市街の概観写真は南から北東を望み、遠景に屋島が写る。山地西側とみられる道路からぞ地を眼下に望む写真が添えられた屋島は「觀光香川の代表的觀光地」と評される。カラー写真なので、海の青とのコントラストが美しい。

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・寸法 cm (形態)	コメント	K : リーフレット (1)
K001	「リーフレット」講談社屋島の歴史 —	著者兼発行者 森 田豊吉	1907	6 8.6 × 37.3	表紙に玉藻城と屋島のイラスト。「源平古戦場屋島」というタイトルのつけられた写真に金比羅宮の舟観券付。	高松市歴史資料館
K002	「リーフレット」屋島案内	著者兼発行者 森 1927	6 18.5 × 70.3	表紙裏に屋島山の写真と平安蟹が描かれる。那須与一の高松市歴史資料館	屋島の地図。地図の左隣には、「屋島の大瀧」とタイトルのつけられた説明書きがあり。	絵画あり。
K003	香川県名所交通屋島史蹟鳥居初三郎、木村 1930	吉田初三郎、木村 著 初版 香川県名所案内	6 19.0 × 11.8	吉田初三郎の手による、「源平古戦場屋島の瀧を中心とする香川県名所案内」が折りこまれる。「瀧内内瀧の一隅に屹立する一千尺の大ビラディングの屋上庭園といふことが出来る。屋島寺、獅子の塗壁、諺古瀧、並鶴亭などを紹介。表紙は義経が流しの図。	屋島の地図。	吉田初三郎の手による、「源平古戦場屋島の瀧を中心とする香川県名所案内」が折りこまれる。「瀧内内瀧の一隅に屹立する一千尺の大ビラディングの屋上庭園といふことが出来る。屋島寺、獅子の塗壁、諺古瀧、並鶴亭などを紹介。表紙は義経が流しの図。
K004	源平古戦場 屋島瀧の浦を中心とする香川県立ミニチュア公園案内	著者権所有者吉 心とせる香川県名所案内	1930 6	17.6 × 73.6	昭和5年2月1日発行。表面は吉田初三郎の鳥瞰図。屋島瀧を中心とした鳥瞰図と名所案内。島浦瀧と名所案内。島浦瀧を描いた。屋島瀧と源平合戦の記載される。諺古瀧、長崎の鼻、獅子の塗壁の写真あり。	香川県立ミニチュア公園案内
K005	講談社屋島案内	大阪商船発行	1934 6	17.6 × 65.1	昭和6年10月大阪商船発行。「駄路」「電車」「鐵道」「ケーブル」路線を描いた。鳥瞰図と名所案内。島浦瀧では屋島はなだらかな丘陵のよう描かれる。裏面の名所案内の項目として源島の解説がなされる。屋島は源平合戦の一項目として紹介され、合戦の経緯の記述有り。下段の古戦場として紹介されと屋島山上からの景観が含まれる。	香川県立ミニチュア公園案内
K006	讀書あんない	大阪商船発行	1936 6	26.2 × 37.9	昭和11年3月大阪商船発行。当時、大阪多摩津船頭と香川県立ミニチュア公園の二つが高松に新設し、神戸松島閣が6時開館という記述あり。瀧内内瀧内の項目の中に屋島あり。源平の合戦に関する記述有り。「屋島遠望」と題された、船上から撮った写真が掲載される。	香川県立ミニチュア公園

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法: cm (形態)	コメント	K: リーフレット (2)
K007	観光の屋島	屋島町役場発行	～1939	6	18.1 × 61.7	屋島町役場発行 表紙に「屋島保勝会／昭和14.10.29 香川県立ミニ ／屋島遊覽記念」スタンプ押印。表紙イラストは西側から見た屋 島の地勢や自然環境を 説明。各所や十種物、交通手段を紹介する。 写真は、屋島全張・山上から瀬戸内海を望む遊覧船・ 誠古館から瀬戸内海を望む遊覧船・夕暮れ時の屋島・ 屋・獅子の塗装・山上から高松遠望の各種。屋島の歴史 を裏面に記載。	所蔵館
K008	屋島案内	森田惣吉編 著者 森田惣吉 発行者森田惣 吉	1925年発行 行、1927 年訂正発行	6 9.3	19.0 × 35.5	屋島の觀光案内のリーフレット。表紙と裏表紙には源氏 と平氏の家紋、海上に浮かぶ屋島、屋家蟹と西側から見た屋 島北端が描かれる。表紙裏には郡田丹陵による「須須 市」の風景写真が掲載される。本文には屋島守護名勝地 図と屋島山上御詫地圖が掲載。本文中では「屋島の大懶」 「屋島の略史」「登山者のしをり」として屋島の概要・歴史、 観光スポット及び交通案内についての記述がなされる。	京都府立大学
K009	讃岐遊覧案内	大阪筋鉄株式會 社	1929～	6	18.5 × 35.5	表紙の大坂・神戸—高松—多度津航路イラスト中央に屋 島記載。屋島は簡平な台形状で表現される。内容の「讃 岐遊覧」には一日コースの案内（多度津一界）栗林公 園—屋島、内容の半分程度を屋島案内に割く。文中で は屋島山頂からの景色を折替、また施平合戰連のスポット を紹介する。下段に高松市と屋島の写真、及び屋島 山頂からの風景写真有り。裏面に南西の方角からの屋島 を含む鳥瞰図。データー欄が描かれる。	香川県立ミニ 一・ジアム
K010	「リーフレット」屋嶋ケーブ ルカー御案内	屋島登山扶道株 式会社	1929～ 1944	6 22.2	15.5 × 37.1 ×	屋島の山上が足りなくなつておりそこには屋島守や源古強、高松市歴史資 料イガンなどの觀光池がそれぞれ簡単な縁と文字で描か、料簡 されている。「高松 滝田清美堂石印」とあり、2色刷で ある。	香川県立ミニ 一・ジアム
K011	讃岐めぐり	—	1934～	6	52.2	「大屋島の風光」との項目として、瀬戸内海国立公園の 眺望を中心には解説。指定史蹟天然記念物、国立公園として 山自体が天然記念物であると記載。また「古戰場として 有名」と記載。裏面に瀬戸内海国立公園を中心についた	香川県立ミニ 一・ジアム

K : リーフレット (3)

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・寸法 cm (形態)	コメント
K012	講談案内	香川県観光課・香川県観光協会	1934～	6 38.0	香川県観光課によるパンフレット。表紙に香川県立ミニチュアードは高松市側から見た海岸線のシルエットが描かれ、中央奥に屋島、湾内に帆船が配置される。瀬戸内海国立公園の解説を矢張りに、屋島を含む各所の解説。屋島の写真是歌古舡から北東方向への眺望。解説文中では、屋島ケーブル、源平合戦の跡跡、屋島寺が紹介される。また屋島を瀬戸内海国立公園の主要と記述する。 した部分図を掲載。
K013	屋島遊覧 電車跡案内	四国水力電気株式会社発行	1939～ 1942	6 5.3	四国水力電気株式会社発行。表紙に屋島遠景のイラスト、香川県立ミニチュアードは高松城と松林が描かれる。電車沿線の駅と名所を挙げて屋島あり。屋島内の各所が記載される。運賃表あり。
K014	史蹟要覧高松屋島琴平御案内	吉田初三郎、大内行、高松市玉藻町 朝富庄誠	—	6 10.7	吉田初三郎による屋島の風景が描かれており、屋島は吉田初三郎による高松屋島琴平名所巡禮と題された繪地図において屋島は台形状の半島として描かれている。本文中には屋島に関する記述があり、屋島の古跡場であること、また屋島からの眺望について強調される。
K015	(タマモホテル) リーフレット 地図介係	タマモホテル勝 朝富庄藏発行	—	6 35.2	表紙に屋島全景イラスト。内側に淡古嶺から眺めた屋島の写真あり。「南嶺崖壁上の猿古嶺から獲るの標を隔てゝ五劍山を望めば、これぞ母水の古嶺平隣を創つて戰へる古嶺巒巒物の如く併敵され附近の安徳院祠を始め難信、菊王丸の墓等の遺蹟、殊に那須与市「ママ」が譽を受した駒立岩折岩はそぞろ往時を偲ばしめるかの如くであります」表側の地図では西側から俯瞰した讃岐地方の図が描かれる。
K016	讃岐遊覧案内	—	—	6 65.1	表紙に屋島平面図の一角に「讃岐名勝」を列挙。「名山屋島」香川県立ミニチュアードは高松港と西側から撮影した「屋島遠望」の写真あり。「沿線の主要名所」の一項目として屋島。「南嶺崖壁上の猿古嶺から獲るの標を隔てゝ五劍山を望めば、これぞ母水の古嶺平隣を創つて戰へる古嶺巒巒物の如く併敵され附近の安徳院祠を始め難信、菊王丸の墓等の遺蹟、殊に那須与市「ママ」が譽を受した駒立岩折岩はそぞろ往時を

K : リーフレット (4)

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法 cm	コメント	所蔵館
K017	観光さぬき	—	—	6	未調査	大川自動車が発行した案内リーフレット。	香川県立瀬戸内歴史民俗資料館
K018	屋島史蹟名勝地図	福家惣衛考	—	6	27.0 × 38.8	屋島周辺の全景と、屋島山頂の園が描かれていている。「鞍ヶ谷御跡」、「台場跡」、「扇信館」、「安徳社」、「萬王丸墓」などとあり。標高の記述有り。屋島ケーブルの記載もあり。斯平合戰の向軍の進路や退路が示されている。裏面に福家惣衛考が著した「[1. 結論]」、「[2. 考古学的見地]」、「[3. 平島トナリ]」、「[4. 平島トナリハ半島トナリ]」とあり。	高松市歴史資料館
K019	四月号関西交通遊覽案内絵図	—	—	6	39.8 × 53.4	表紙は「屋島ヨリ鬼ヶ島ヲ望ム」という題の絵を裏表紙は「雨風さみ中にライアウトされている。タマモホテルや「雨風さみ」の説明を闇かされれば屋島見物の極端半減」というた い文句の箇所が並ぶ。	高松市歴史資料館
K020	【パンフレット】瀬戸内海図	大阪前船株式会社	—	6	18.6 × 12.4	表紙は、どこかの山上からの眺望の絵であるが、場所は不明(等なれば山にあらため、屋島カ)。屋島の歴史や屋島から眺むる眺望についての解説有り。運営表はアーカセスについての記載あり。	高松市歴史資料館
K021	【リーフレット】国立公園屋島	—	1929～1944	6	19.0 × 75.6	表紙はイラストで、弓を構える那須守一の背景に屋島が描かれており。鳥瞰図で描かれたガーラーの「瀬平古戦場坂名所」と国会においては、山上が平らで、北側と南側にわけて書かれている。「屋島山上遊覽道圖」では、「屋島寺2重の池(屋島寺の境内にあり)3重城4番古演」とある。表紙には「瀬平古戦場遺跡記念」スタンプがあり。鳥瞰図の裏側には「史蹟屋島」とタイトルのついた史蹟案内。「屋島は…往時…八島”と併し居たり八島の形状屋根に似たる處より屋島と音の傳へ現今に及べり…屋島遊は…即ち印象深きものは全山豪傑の松樹を以て千變萬化雄大且つ其壯麗女美實に天下絶勝の一語に盡	高松市歴史資料館

K : リーフレット (5)

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・寸法 cm (形態)	コメント
K022	瀬戸内海国立公園と瀬戸路	—	1934 ~	6 カ 35.9	国立公園指定後、「高松御宇高船路進船跡内高屋敷港」香川県立図書 館が発行した観光リーフレット。表はカラーランドша図で、裏はカーブ島断面図で、 瀬戸内海国立公園の全体を鳥瞰する。屋島の「御舟」と「高船」の歌詞が描かれて、 「歴古」・「歴古港」と「高船堂」の歌詞がイントや軌跡が描かれて、屋島も風景の要素として描か れる。裏面には、写真入りで觀光地の見どころを紹介。
K023	【リーフレット】屋島	—	1949 頃	7 54.7	表紙は弓を構える那須与一と、扇を飛ばした船の背景に屋 島が半分くらい、「瀬戸内海国立公園諸所名勝の背景」に おいては、山川が平たく、屋島寺、血の池、レイガンな どが繪と文字で描かれている。裏面には「屋島の風光」、 「史蹟」や「源平屋島の合戦」、「講度の外観」などの説 明と写真で、「連絡船より屋島を望む」「講度亭より北を 望む」「源古浦より瀬戸の前と五劍山を望む」「獅子の奮敵 より高松市を望む」等の記述が分かれてなされている。 ついで瀬戸についての記述が記載される。
K024	国立公園屋島 講度名所史	—	1950 頃	7 未調査	表紙は「義経流しの図」、「觀光都市高松港全景」(淡 古浦より瀬戸古戰場の浦全景) の写真。島断面図は南東 方向から俯瞰された屋島とその周辺、瀬戸内海島嶼や港 を描く。「史蹟屋島」と題した名所案内には、風景美 と源平合戦が記載される。
K025	【リーフレット】屋島	—	1958 ~ 1988	7 37.8	表紙は觀光案内の女性の背景に屋島、「四国觀光案内図」高松市歴史資 料館において屋島は北側と南側の山上がそれぞれ美しい形で描 かれたり、ところどころにピンクの花のよろこびのものが 描かれている。屋島寺と屋島山上駅が餘と文字で、遊園 亭が余のみで描かれている。裏は「四国觀光案内図」「屋 島源平合戦記」など。
K026	バカンスは夢の四国へ	高松バス	戦後(瀬戸) 大橋架橋 前	7 未調査	高松バスが発行した四国一廻の案内フレット。バス香川県立瀬戸 ガードと觀光客の後に屋島が写る表紙。

K : リーフレット (6)

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法・cm	コメント	所蔵館
K027	新観光地図 四国 電車・屋島ケーブル	—	—	—	42.6 × 61.0	屋島の壮大観光団が掲載される。裏面日本交通公社発行 (昭和29年) の四国全図。交通公社のハンブルグトライアム く旅館や四国豪華めぐりの案内が入っている。屋島はア メリカ映画の西部劇ではおなじみ」のメサ地形の説明の のち、眺望、板状筋理と鷹子巣苔を記述し、古戦場につ いて触れる。「電車とケーブルで30分」と交通の利便性 を記す。	香川県立図書 一シーム
K028	「リーフレット」屋島 登山 —	—	—	7	9.1 × 25.9	表紙は屋島ケーブルの写真。 表紙は屋島の図像なし。「古今では屋島が地理的・歴史的にも、 学校教育の生きた教材と伝云われれ…」、「美しい姫島が愛の 想い出にも、皆様方の屋島觀光コースをご活用ください」	高松市歴史資料 科館
K029	「リーフレット」瀬戸内海 屋島ドライブウ ー	—	—	7	19.6 × 26.6	表紙に屋島ドライブウェイのイラスト。「瀬戸内海随一 の眺望と、史跡的な源平古戦場……屋島」の見出し。 もと、屋島の鳥瞰図が描かれてある。平らな山上に、屋 島寺・談古舎・獅子の塗飾などがある。そのほか、「那 須与一騎立岩」と「的場」、「佐藤權能死」「弓流し」 が武将のイラストで描かれている。	高松市歴史資料 科館
K030	「リーフレット」四国 屋島 —	—	—	7	42.9 × 30.3	表紙は四国における屋島を強調（人々が屋島を目指す） ラスト)。「源平合戦屋島ノ裏の巻」と題された図には、 萬松から屋島の間に源の的。屋島全景の写真なし。	高松市歴史資料 科館
K031	「リーフレット」屋島・栗林 高松琴平電鉄 公園・琴平定期観光バス	—	—	7	19.0 × 26.4	高松琴平電鉄発行。 屋島の図像なし。	高松市歴史資料 科館
K032	国際観光都市高松 高松市役所	—	—	7	未調査	高松市を中心とした観光地を案内するリーフレット。高 層ビル群の向こうに屋島を描く、珍しい表紙。	香川県立瀬戸 内海歴史民俗 資料館

L：近現代地図（1）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・寸法・cm (形態)	コメント	所蔵館
L001	香川県管内全図	著作者後藤常太 間、発行者中村 芳松	1900	6 39.0 × 55.0	地図裏面に郡毎の地誌的記述あり、木田郡の項目に屋島 香川県立ミニ の原平合巻かよりの名所に関する記載あり。「元勝中平 ージアム 氏隣りたる有名なる屋島あり」との記述あり。	香川県立ミニ ム
L002	大日本管轄分地図 香川県管 内地図 改正新市町村名	著作者後藤常太 館、発行者中村 由松・福岡元次 郎	1906	6 39.5 × 54.6	明治 39 年版。 郡の項目に日置として、源平合巻かよりの屋島各名所記 述あり。屋島は「天下の大勝區にして、歴史上吾人の 上邦人の感嘆深からしむる處なり」との記述有り。 39 年版から文言変更無し)。	香川県立ミニ ム
L003	大日本管轄分地図 香川県管 内地図 改正新市町村名	著作者後藤常太 館、発行者中村 由松・福岡元次 郎	1908	6 39.1 × 53.8	明治 41 年版。 郡の項目に日置として、源平合巻かよりの屋島各名所記 述あり。屋島は「天下の大勝區にして、歴史上吾人の 感嘆深からしむる處なり」との記述有り。(同名図明治 39 年版から文言変更無し)。	香川県立ミニ ム
L004	香川県全図	著作者兼毫行	1913	6 39.4 × 54.1	大正 2 年 7 月 25 日発行、大阪で刊行された香川県の地図。 表面の「香川縣地誌」のうち山岳の項目に屋島の記述有り。 「源平の戦場として名高い」と記載。木田郡の項目にも 屋島の各名所が記載される。	香川県立ミニ ム
L005	全日本最新名勝名物地図	大阪毎日新聞社 発行	1932	6 26.0 × 108.0	大阪毎日新聞社発行。日本二十二五勝の一つとして掲載。香川県立ミニ ム 古戦場のマーク有り。裏面の全日本名物案内に記載ある。 か。	香川県立ミニ ム
L006	〔山田郡繪図〕	—	—	未調査 1937 模写	E010 「富松篠山園(山田郡)」とは同じ同じであるが、両像が不鮮 明ため、判読不能。	高松市歴史資 料館
L007	屋島村塩田之図	原本明治、 昭和模写	—	未調査 原本明治、 昭和模写	塩田の広さなどの詳細についての記述有り。屋島山は描 かれてない、「一此付塩田へ北方海に接(ママ)三面 ハ皆ナ川ナリ(此ノ川を相引ト置く西方ハ皆ナ山)此 ノ山へ御腹嶋山ナリ」然シテ山ノ巨利ハセ丁瓦五丁ナ リ」とあり。	高松市歴史資 料館

L : 近現代地図 (2)

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・寸法: cm (形態)	コメント	L : 近現代地図 (2)	所蔵館
L008	屋島・五剣山	香川県発行	—	6 27.2 × 39.3	香川県発行。屋島の歴史として、屋島城築造、屋島守閣、屋島県立ミニ 墓、源平合戦、秀吉西國征伐、文久三年源合戦について、シアム で記す。「源平馬鹿合戦半表」「両軍特士の生争」など記 載あり。園中に、「源軍ノ進路」「源平合戦當時ノ海岸想 像像を表現。		香川県立ミニ シアム
L009	香川県史跡名勝天然記念物 分布図	—	—	6 37.6 × 53.2	史跡名勝天然記念物のうち著名なものを記載し、「奥民 をして勇士を理解せし」め、「県内口筋の人士に対して は案内書たらしめんとする」園。屋島の項目には宕岩台 地・天智賀天皇廟古墳・源平戦所・山上の風光明媚さに ついて記述。		香川県立ミニ シアム
L010	「讃岐漁戸内坂出屋島漁場 地図」	—	—	6 104.0 × 142.0	平島のような構成の方をしていろいろ、塙田のようなものや、高松市歴史資 料館		高松市歴史資 料館
L011	高松市屋島地区全図	—	—	6 118.5 × 76.5	5千分の1の縮尺の地図。萬古瀬、舞子瀬灘などの記載 もあり。現在の都市計画図のような地図。		高松市歴史資 料館
L012	愛媛県管内図	愛媛県図版、水	1884	6 52 × 109	25万3千8百分の1の鉛版地形図。屋島山、長崎の鼻 の記述。		愛媛県立図書 館
L013	愛媛県管内漁区全図	愛媛県庶務課編	1881	6 53 × 109	「愛媛県管内全図」に漁区を重記した園。内側に「海面 ノ漁区」と後筆。25万3千8百分の1の鉛版地形図。屋島、餘 瀬ノ瀬、長崎の鼻の記述。		愛媛県立図書 館
L014	屋島山上岡津風	高松市	1950	7 未調査	高松市経済光譲が觀光宣伝用に吉田初三郎の弟子寺本 左近に依頼して作成した鳥瞰図。		高松市歴史資 料館
L015	沿岸案内	高松琴平電鉄	1934 ~	7 26.8 × 38.0	国公立公園以後、高松琴平電鉄発行。琴電の路線図と、屋 島周辺地図有り。観光案内。		高松市歴史資 料館
L016	備讃瀬戸及び備後瀬戸路図	—	—	7 75.8 × 108.0	慶治神から屋島・壱の瀬を望む。 屋島とその周辺の地形と航路を示している。		香川県立ミニ シアム
L017	高松市屋島地区全図	—	—	8 119.0 × 77.0	縮尺五千分の1の屋島地図。		高松市歴史資 料館

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・寸法 (形態)	コメント	所蔵額
M001	讀説名所記と同附錄國史略	—	不明	5 未調査	「歌部山津上屋德大郎氏藏書三巻」である。尾島について現状(相引の浦、今堤)と由緒(此山古は海中にありし故屋島といへ)を記す。清和皇御子ニ大内忠名屋島にてよめるとして、「時鳥鳴く声ければ別れにし故郷さへぞ恋しかりける」の和歌を引く。ただし古今和歌集では読み人知らずとして扱われている。	香川県立図書館
M002	演説書	—	1876	6 未調査	「明治9年県政事務引取書」所収、民有塩田 山田郡西 湘南村ノ製鹽粗場	愛媛県立図書館
M003	官林調查手稿書	—	1876	6 未調査	「明治9年県政事務引取書」所収、尾島山ノ内鹽ノ浦、愛媛県立図書館	五十間瀬生当支那官林、從前へ尾島山ノ字無之、尾山ハ尾島山ヲ分譲シタル官林ニ付此字ノ上江尾島山ノ内ノ
M004	地理科認入金土沢書	—	1876	6 未調査	「明治9年県政事務引取書」所収、山田郡西陽元村屋島	愛媛県立図書館
M005	日香川縣地理關係之事務引取書	—	1876	6 未調査	「明治9年県政事務引取書」所収、第42号山田郡屋島村 豊松町八同村下原代	愛媛県立図書館
M006	行政資料「雑集」	愛媛県立図書館	1877	6 未調査	「明治9年県政事務引取書」所収、第4号元村官有塩田開闢 書、裁判所へ、入札処分、第4号 湘元村官有塩田開闢 書類	愛媛県立図書館
M007	明治拾八年摺合本書	—	1878	6 未調査	明治10年10月15日「屋島神社創建御届」第2大区7 小区小区長安能惟精、愛媛県令岩村高俊、香川県合併時 代の文書類	香川県立図書館
M008	明治拾四年摺合本書	—	1881	6 未調査	明治10年10月15日「屋島神社創建御届」第2大区7 小区小区長安能惟精、愛媛県令岩村高俊、香川県合併時 代の文書類	香川県立図書館
M009	明治十五年摺合本書	—	1882	6 未調査	明治11年山田郡屋島村官林勾白石塙御免願之義三付御申 付上申	愛媛県立図書館
M010	明治十六年摺合本書	—	1883	6 未調査	明治12号山田郡屋島村官林合上(下草刈採) 6号山田郡 西陽元村屋島神社～官有地無代下渡詞、11号山田郡西 鴻元村塩田税金額訂正上申、69号山田郡西陽元村塩田 下司	愛媛県立図書館

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法・cm	コメント	M: 調査・学術 (2)
M011	明治七年摺合本書	—	1884	6	未調査 (形態)	51 号山田郡島村官林内黒石松原年譜向、54 号山田郡 愛媛県立図書館 屋島村官林内黒石施業年譜向、94 号山田郡島村石塙總 代營業取向、126 号山田郡西瀬元村官有畠税金同、163 号山 田郡島村子爵目下算払下向、6 号山田郡西瀬元村屋島 官林恭士屋様向、76 号山田郡島村下算払下向、127 号山田郡屋島村外ニヶ村官林客業採取同	所藏館
M012	[屋島官林内黒石松原]	—	1892	6	未調査	屋島内の黒石松下げを許可する行政文書。図像資料無し。高松市歴史資料 館	高松市歴史資料 館
M013	屋島官林借地願	佐野松太郎(印)	1894	6	24.7 × 16.7	屋島内官林の借地についての行政文書。新印有り。 図像資料無し。	高松市歴史資料 館
M014	[屋島国有林内貸地願一軒]	—	1907	6	1 : 24.1 × 16.5	屋島の貸地願いに関する行政文書。図像資料無し。 2 : 24.1 × 16.4	高松市歴史資料 館
M015	史蹟名勝天然記念物調査報告 香川県史跡名勝天 1922 1	香川県史跡名勝天調査会、 香川県	6	未調査	第一編史蹟名勝の部、第三（目次第四）で屋島を取り上。香川県立図書館 が、「古今にわたる史蹟に富み且つ天下の施景地と號 貢せらる」と記述。屋島城、源平合戦に關する記述あり。 屋島内の名所の説明と写真あり。	香川県立図書館	
M016	屋島 小豆島を中心とする海 上公園	役所觀音園内 三 次元期 / 発行者 水 尾與一	1930	6	27.0 × 38.0	表紙に屋島のイラスト。手前には帆船が描かれている。 地図と写真帖。 屋島山（一）と屋島山（二）があり、前者はおそらく施 治側から、後者は高松池からの写真である。「...屋島、 小豆島を中心とする海上公園は...国民性の訓練、地理 歴史、信仰、国民保健上よりみて我國民は勿論、外客を 誘致して優に我國風光の粹を誇るに足るべき諸条件を具 備せるに近いと信ずるのである」と述べられている。	高松市歴史資料 館
M017	屋島町勢一覧	屋島町役場	1936	6	27.0 × 39.3	昭和11年10月発行の屋島町全図 大字の範囲を記載。香川県立ミュー ジアム 地勢の圖に屋島の地形、由来の記載有り。「山上巣下風 養甚ダク雄大ノ展望ニ富ミ」と山から風景を評価。 「瀬平合戦古跡各所ニ散在ス」の記述有り。諸团体の構 成団体がある。	香川県立ミュー ジアム

M: 調査・学術 (3)

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・寸法 cm (形態)	所蔵館	
M018	香川県神社誌上	香川県神祇会	1938	6 未調査 (形態)	屋島神社、屋島神社・八幡神社、180-181 頁 香川大学図書館	
M019	昭和七~十一年 香川県文書類 公園課	1939	6 未調査	1938年3月に、「体力局施設課長」から香川県知事に照会のあった「国立公園内徒步旅行地」選定に関する回答文書。「旅行地」とは徒步旅行地（鳴門、宍道、神社、仏閣、天然記念物優秀なる風景地を連絡するハイキングコース）で各コースごとに図面で示し、歩道距離・所要時間・費用概算が付されている。回答にあげられたコースは、A 屋島・八栗・御殿山コース、B 屋島・八栗・志度コースほかが2コースである。	香川県立文書館 香川大学図書館	
M020	香川県勢要観	香川県總務部統計課	1940	6 9.9 × 16.3 香川県總務部統計課発行。表題に高松市街北東方向の屋島全景イラスト。「公園」の項目の一つに屋島公園があり。シーム「香川県名勝」の項目に、「瀬戸内海國立公園」が筆頭に記載され、屋島も記述される。眺望・原平台帳・屋島寺・瀬戸内海國立公園の「王峰」との記述有り。	香川県立文書館 香川大学図書館	
M021	木田郡誌	香川県教育会木田郡常磐会郡立編纂部 編 (代表山田卯三吉)、木田郡教育部会	1940	6 未調査	屋島に関する済平合賀、眞庭の行跡などの歴史、名所や高松市中英園甚行事、相談・川柳など的文章、民俗に関する記述あり。館 香川大学図書館 090-82 もこれに同じ。	
M022	香川縣文書類集 朝光・公園	公園課 水年保存 昭和八年屋島山上 盛土工事施工に関する件	1934 カ	6 未調査	屋島の記述あり。「瀬戸内海火山脈特有の溶岩谷で、世界一的に稀有なる古銅安山岩より成れる屋根型の溶岩台地である。頂上は風光明媚で、瀬戸内海の景勝を一望に取め、殊に東方五朝山に対する一帯の地は寿永年間(約七六〇年以前)安徳天皇を擁して瀬平両氏の合戦ありたりる所で、古戰場として世に知られる。」そのほか屋島保勝會の予算案書や昭和8年の屋島山盛土工事にに関する記述あり。マイクロフィルム。	香川県立文書館 香川大学図書館
M023	各郡町村名取調書	—	6	7	屋島・東湯元村 屋島と廣ノ浦・94-99 頁／瀬戸内島嶼のいきさ、合戦の文 芸化、やまと詞花集、247-300 頁／歷代藩主、屋島神社創建、426-429 頁／木田郡七ヶ町村のこと、632-637 頁	愛媛県立図書館 香川大学図書館
M024	新修高松市史 I	高松市史編修室	1964			

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法	cm	コメント	M:調査・学術 (4)
M025	新修高松市史 II	高松市史編修室	1966	7	(形態)	神社、屋島神社、261-262 頁／守陰、屋島寺、294-295 頁／電気、屋島電車、屋島ケーブル、510-512 頁／高松國体和28、昭和天皇の御幸、580-581 頁／水道、屋島町の水道、610-611 頁	香川大学図書館	所蔵館
M026	新修高松市史 III	高松市史編修室	1969	7	(形態)	漁平合戦記、57-84 頁／漁海通記、長草我郎、100-104 頁／伊能忠敬の海岸測量、174-175 頁／駿河白帝院六万寺、547-555 頁／名所・跡、59-629 頁／金石、佐藤次信、634-643 頁／附錄、安徳天皇、672-673 頁／附錄、武士傳説、679 頁／秋風廻路、与謝野寛「冬桜」、296-297 頁／川柳、壇／浦、墨乳子、玉虫、佐藤龍信、弓流し、屋島落、平家蟹、縦引、326-327 頁	香川大学図書館	所蔵館
M027	牟礼町史	牟礼町史編纂委員会	1972	7	(形態)	牟礼町引引津地圖測量、174-175 頁／駿河白帝院六万寺、547-555 頁／名所・跡、59-629 頁／金石、佐藤次信、634-643 頁／附錄、安徳天皇、672-673 頁／附錄、武士傳説、679 頁／秋風廻路、与謝野寛「冬桜」、296-297 頁／川柳、壇／浦、墨乳子、玉虫、佐藤龍信、弓流し、屋島落、平家蟹、縦引	香川大学図書館	所蔵館
M028	「へんろ道 (六)六番宮寺邊～備戸内海歴史民俗 (一)八八番大富寺」調査報告書	備戸内海歴史民俗 資料館	1991 (一)	7	未調査	一宮寺～屋島寺～八八番寺のへんろ道について。	香川県立文書館	所蔵館
M029	平家物語・美への旅	カタログ編集委員会	1992	7	未調査	「降つて空曠の切妻垣に高所に築いた廻ノ瀬戸内海～向つて半島状の跡地極めて少ない淋しい一秦村があまりました。じゅえいの昔此處で源平の戦が行われた黒島あります。此地に時代の先覚者尾原景正は時の藩主松平頼吉の命を受け塩田を築き、これ尾原の堤田の始にして淋しい一秦村に過ぎなかつた地に抜業なるものが出来今日の如き屋島が出来てきたのである」と記述。高松藩主の支援を受けた屋島(湯原景正による18世紀後半の塩田開発と、それにによる屋島(湯原景正)の繁榮を貌見している。	香川県立文書館	所蔵館
M030	牟礼塩業組合・屋島塩業組合沿革史	牟礼塩業センター	1994	7	未調査	海～向つて半島状の跡地極めて少ない淋しい一秦村があまりました。じゅえいの昔此處で源平の戦が行われた黒島あります。此地に時代の先覚者尾原景正は時の藩主松平頼吉の命を受け塩田を築き、これ尾原の堤田の始にして淋しい一秦村に過ぎなかつた地に抜業なるものが出来今日の如き屋島が出来てきたのである」と記述。高松藩主の支援を受けた屋島(湯原景正による18世紀後半の塩田開発と、それにによる屋島(湯原景正)の繁榮を貌見している。	香川県立文書館	所蔵館
M031	源平物語鑑ビレクショニー神戸市立博物館	財团法人 神戸市立博物館	1997	7	未調査	展覧会図録。	京都府立大学附属図書館	所蔵館
M032	謙倉の武士と馬	馬事文化研究会	1998	7	未調査	「平家物語図屏風」と、その解説。屋島の形は見受けられない。	香川県立文書館	所蔵館

M：調査・学術 (5)

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法 cm (形態)	コメント	所蔵館
M033	第二十回特別展「源平合戦図」	高松市歴史資料館	1999	7	未調査	展覧会団員。	京都府立大学附 属図書館
M034	源平の世界—『平家物語』の時	サントリー美術館	2002	7	未調査	「一の谷・量島合戦図屏風」など。	京都府立大学附 属図書館
M035	源平合戦を馬が行く	野事文化刊行会	2005	7	未調査	源平合戦を題材とした絵画の中から、馬が描かれている「平 ものを中心に解説がおこなわれている。江戸時代の「平 野深信の『源義経弓流し図』」などが掲載されている。	香川県立図書館
M036	尾治町史	高松市編	2007	7	未調査	より筆を掲載、「量島の勝負」、「源平時代の「阿字八景記」」 「量島合戦記録」。	高松市中央図書 館
M037	空海の足音 四国へんろ展 香川県立ミュージアム	2014	7	未調査	「量島合戦記録」。	京都府立大学附 属図書館	
M038	高松市量島地区社会実態調査 高松市教育委員会・1951 川嶋 良吉	高松市立量島小学校 校・香川県・教務研 究所共編、高松 市教育研究所	7	未調査	量島地区の実態調査。「要領」に、「元八島と書いていた。 が山の形のが量島ので量島と称するようになつ た」その後により昭和元年に成立のこと— 解説者注) 量島の郷と源平の史蹟とを誇る絶景量島山 の名天下に貢献せし第一次実態調査の「自然的条件」で は、岩石は重して奇麗を呈し」「全山緑の松で覆わ れ、中央から西に突出して凸字形をしているので却つて 山脚部に平坦な土地を作つている」とあり。うち「地質」 の項目で、量石と獅子の靈巖を指して「どちらも科学上 より見て興味のある事象である」とする。「歴史的条件」 では、先史時代から明治末期頃までの通史を簡略して 毎に区分し記述。源平合戦について「源平合戦が量島 の東部に於いて行われたことは現存する旧跡によつても 想像出来る」とあるのみ。	高松市中央図書 館	
M039	ふるさと香川の歴史	香川県、四国新聞社	1992	7	未調査	香川県史附属Ⅲ昔と版。 表紙臉に、武田兵を馬で走り、左手に南風からみた 屋島、右手に南西からみた八栗山と推定されるイラスト を描く。85～88頁に量島合戦の前後についての歴史学 的叙述。	高松市中央図書 館

M：調査・学術 (6)

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法 cm (形態)	コメント	所蔵館
M040	新修 高松市史資料 高松市史編修室／著者 近藤未義 第一巻 通年 高松市生いたち 鮎川一郎著者 近藤未義 屋島合戦	—	—	7	25.5 × 18.0	市史執筆資料。昭和37年3月31日造本。通史編の手書き。高松市歴史資料 き原稿が掲載される。屋島合戦に關わる文学、芸能作品、館 旧蔵・地名の紹介。源平合戦についての記述も多い。	高松市歴史資料 館
M041	屋島古墳調査記	—	—	7	未調査	市史執筆資料。屋島所在の古墳につき、「所在地」「地形」高松市歴史資料 館	高松市歴史資料 館
M042	わたりたちの郷・香川県	—	—	7	21.0 × 14.9	「方向」「現状」「屋島古墳一覽表」付属。 各古墳ごとに説明書きがある。 地区の見方とその利用の項目に、滑岩台地である屋島、香川県立ミニユース 島が取り上げられる。源平合戦に由来する「赤井崎」のシアム 地名ごと、堆積作用による地形変化との関係が説明される。 「かわらけ表げ」の場所についても記述。「めぐらました根 光池」の項目で源平古戦場屋島として取り上げられる。	高松市歴史資料 館
M043	新修 高松市史資料 古高松 香西屋島 多肥地区年表	高松市史編修室／著者 小竹一郎・ 福田専一	—	7	25.7 × 18.2	市史執筆資料。「古高松・屋島地区年表」(神代～昭和33高松市歴史資料 年まで)、「村誌」(『古高松村誌』)カ、「屋島合戦と當村」館 「屋島神社」「古掛松」「相引川」の項目あり。	高松市歴史資料 館
M044	新修 高松市史資料 屋島 太	高松市史編修室／著者 小西英五郎 執筆者 小林	—	7	25.4 × 18.0	市史執筆資料。屋島の地勢・田畠などの紹介。塙田の屋島高松市歴史資料 所では地区あり。	高松市歴史資料 館
M045	新修 高松市史資料 塙業史	—	—	7	25.7 × 18.2	市史執筆資料。塙業の記述。	高松市歴史資料 館
M046	史蹟名勝天然記念物関係書類	—	—	8	未調査	1951～1951年にかけて、指定前後の調査などに関する。史蹟名勝天 館 屋島町・高松市・香川市のやりとりが中心。史蹟名勝天 館 然記念物の構造設計図や屋島城址の石碑の図・屋島地図、 石碑写真あり。	高松市歴史資料 館

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・寸法 cm (形態)	コメント	N: 来日紀行文 (1)
N001	『東洋文庫341・日本風俗備考』(注司三男著、沼田次郎訳、(蘭) 平凡社、1978)	フィッセルル、J.	1833	4 未調査	1820年から1829年まで日本に滞在、1822年に江戸参府記行のとき、瀬戸内海航行。	—
N002	「No. V. Nagasaki, August 22, 1860」, in 22 Dec. 1860 p. 1126 From the Mr. J. G. Veitch's Letters, "The Gardener's Chronicle and Agricultural Gazette."	J. G. Veitch	1860	4 未調査	英國の園芸師で1860年に来日したJohn Gould Veitch が、英國の園芸雑誌 The Gardener's Chronicle and Agricultural Gazette に1860年から1862年にわたりつづけた書簡形式の記行文。1860年8月22日付けで、長崎から神奈川への行程で瀬戸内海を通過する記述がある。瀬戸内海についてには the so-called Inland Sea と記述される。航行を許された4番目の船 the Beronice に乗船。美については The few who have made it describe the scenery as beautiful beyond description.	Lindley Royal Horticultural Society, London
N003	Yedo and Peking; A Narrative of A Journey to R. (英)、John Murray, London. China. (『驚木日本探訪記: 江戸と北京』(三宅馨訳、講談社、1997))	フォーチュン、J.	1863	4 未調査	1860年12月17日横浜を出港→12月21日周防灘。汽船イングラムド号。R.フォーチュンは英國のブランコアトコレクター。瀬戸内海については、描寫體で「…このあたりの海の風光は、船が進むに連れて絶えず移り変わる」とベノラマの風景を記述する。產生や地質の科学的な記述とともに… 膨地としては豊沃でなくとも、眺望の主眼は、奇異で空想的な丘や谷間、峨々たる岩石など、それらの人工を加えない野生のままの自然の風景にある。…この美しい「内海」の海岸に日向ぼっこでもしながらこの海辺に住み、そして「休閒の隠者」となって、そのような風景の中で余生を送りたいと、口をそろえて言う」とビタチャレスクな審美眼により瀬戸内海を記述。	1860年12月17日横浜を出港→12月21日周防灘。汽船イングラムド号。

N: 来日紀行文 (2)

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法 cm	コメント	所蔵館
N004	The Capital of Tycoon. 〔大吉の都：幕末日本都在〕	オールコック ク、R. (英)、 Longman, London, London, 書店、1962)	1863	4 未調査 (形態)	オールコックは、初代美園公徳。1861年6月11日 (文久元年5月3日) 下関発6月14日 (文久元年5月 6日) →兵庫沖に正午に到着、英國艦リックダワ号 (H.M.S. Ringdove)	屋島と呼称しているのが、地形記述から考えて屋島であると推測できる記述がある：「兵庫に近づくと、大変奇妙な山が見えてくる。その山は、1200 フィートほどあるが、その山は、1200 フィートほど高いので、そこから急に西方へ向けて山が低くなっている」。捕鯨もあり。	—
N005	A Lady's Visit to Manilla D'Aguiar, and Japan	Anna, Hurst and Blackett Publishers	1863	4 未調査	1862年 6 月下旬一横浜、蒸気船セントルイス号。 1862年に来日した女性旅行家 Anna D'Aguilar。地理的には周防灘から東が内海だと理解している。島やかな海を船で航行しながら内海を「すてきな漁の通り」と捉えている。	—	—
N006	『島で見る幕末日本』(後藤 唯士訳、講談社学術文庫、 2004)	アーネスト・エ メエ (編西)	1863 来日、 1870	4 未調査	アンペールは、スイスの外交団として来日。瀬戸内海に1章をあてて説明する。1863年4月下旬から神奈川へ向けて内海を航行する：「右、左に開拓なく現れてくる小ささまだまの島の風景を興賞した。これらの島は、複島もあれば、よく茂った島もあり、無人島もあれば、人の住んでる島もあって、内海の航行に大きな魅力を与えていた。」	—	—
N007	The Illustrated London News	—	1861・1868	4 未調査	1861年8月10日号では、特派員 (チャーチルズ・ワードー マン) が行程5日間で5月1日長崎を出発して瀬戸内 海を航行して神奈川へ向かう記述がある。1868年3月 14日号には The Inland Sea of Japan と題する記事が ある。同記事には瀬戸内海沿岸を船からの観点が 5枚の挿絵が掲載されているが、島島は描写されてい ない。	—	—

N：来日紀行文（3）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・寸法 cm (形態)	コメント
N008	『オーストリア外交官の明治維新・世界周遊記・日本編』A. (奥地川健一・松本雅弘訳、新人物往来社、1988)	ビューブナー、 ヒューバー	1873	6 未調査	1871年、オーストリア・ハンガリー帝國の外交官だつたヒューバーの世界一周旅行記。兵庫→長崎。 1873年刊版。 「自然の忠実な再現にすぎないので」と、ビューブナは内海が記述される。
N009	『支那旅行日記』(海老原正雄訳、慶應出版社、1943)	リヒトホーフェン、 F. (独)	1877	6 未調査	ドイツの地理学者リヒトホーフェンは、中国旅行に日本経由で出発する。8月31日神戸出港、9月1日横戸内海、2日下関。「内海の航行は素敵」と記す。さらに、内海について、「このように広い地域にわたつて幸福と榮光の見られる優美な風景は世界的にもあまりなく、世界で最も魅力のある場所の一つとして高い評判をから得」と評価し、「この状態が今後も長く続かん事を私は祈る」と結ぶ。
N010	『グラン特軍日本訪問記』ヤング、 (宮水孝訳、雄松堂書店、J.R. (米) 1983)	J. R. (米)	1879	6 未調査	アメリカ南北戦争で活躍したグラント将軍の随員JRヤングが記述した記録。1879年6月に長崎に到着し、そこから神戸に向かうが、コレラ蔓延のために上陸せず。「どこに目を向けても古の餘や餘のように美しい文明に取り囲まれながら、その美景とロマンスで有名な内海を航行したのである。」(p. 38)
N011	Sketches of Life in Japan Knollys, H. (英)	Chapman and Hall, London	1887	6 未調査	長崎から神戸に向かう。内海の名前について「famed, land-locked expanse of waters called the Inland Sea」と述べる。絶えず変化する自然の美を視覚的に捉えて記述する。
N012	『ジドモア日本紀行 明治の人気車ツアーズ』(外崎克久、Borthers, New York 訳、講談社、2002)	Schidmore, E. R.	1891	6 未調査	初日は1884年。「私が初めてこの魅惑的内海を航行したのは、9月の祝日〔明治17年 帝の節句〕(9月9日)、シドモアが朝日新聞の時期」で、ほんやりとした水平線と紫の光が秋の到来を告げている。…陸地に囲まれた横戸内海は、長さ200マイル〔320キロ〕に及ぶ。

N：来日紀行文（4）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法 cm (形態)	コメント	所蔵館
N013	Japan We Saw It	Bickersteth, M. 英)、Sampson Low, Marston & Company, London	1893	6 未調査	ベッカースティス一家は、キリスト教英国资会の司 祭の一家。一家の娘マリーが本書の著者。日本旅行 を1891年に掛ける。11月に神戸から瀬戸内海を経由して 九州へ出かける。瀬戸内海では美しい景色を愛でるた めに一日中甲板で過ごした。数百の島を過ぎ、數 分ごとに変化する島の見え方、多数の小舟の様子を楽 しみ。	大きな湖となり、島々を豊富に詰め込んで不均等な海構造に 守られています。鮮やかな緑に包まれた魅せる山脈は、 夢のような風景が見事です。走る野性味を帯びています。 普段とした島がグリーブとなり、水路はどこも広 く平らで、人間の宮みと開墾建設の印がどの風景の中 にもあります。」	—
N014	On Short Leave to Japan	Youngusband, G.J. (英)、 Sampson Low, Marston & Company, London	1894	6 未調査	ヤングハズバンドは軍人。休暇で1891年日本旅行。下 関→神戸と船で瀬戸内海航行。内浦は大きき湖 a huge lake のようと記述される。イタリアやイスラの湖 水と比較される。	ヤングハズバンドは軍人。休暇で1891年日本旅行。下 関→神戸と船で瀬戸内海航行。内浦は大きき湖 a huge lake のようと記述される。イタリアやイスラの湖 水と比較される。	—
N015	『ジャボンスコ：ボヘミア人 コジエンスキー 旅行記が見た1893年の日本』、J. (チエコ) (鉛筆文彦訳、朝日新聞社、 2001)	1895	6 未調査	コジエンスキーは、ボヘミアの教育統監であり、世界 一周旅行 (1893-94) で日本訪問した。1893年10月神 戸から瀬戸内海を通り、上海までの船旅であった。	コジエンスキーは、ボヘミアの教育統監であり、世界 一周旅行 (1893-94) で日本訪問した。1893年10月神 戸から瀬戸内海を通り、上海までの船旅であった。	—	—
N016	Rambles in Japan, the Land of Rising Sun	Tristram, H.B. (英)、The Religious Tract Society, London	1895	6 未調査	瀬戸内海を4回航行 (2回神戸→下関、1回下関→神戸、一 回大阪→西国) したと序文に記す。トリスマスはキ リスト教英国资会の司祭 (Canon of Burham)。瀬戸 内海について美しさと勇敢さにおいて世界的有名 世界はないとい述べる。海岸風景において世界的有名 のある場所の要素が瀬戸内海に偏わっていると説明す る。	瀬戸内海を4回航行 (2回神戸→下関、1回下関→神戸、一 回大阪→西国) したと序文に記す。トリスマスはキ リスト教英国资会の司祭 (Canon of Burham)。瀬戸 内海について美しさと勇敢さにおいて世界的有名 世界はないとい述べる。海岸風景において世界的有名 のある場所の要素が瀬戸内海に偏わっていると説明す る。	—

N：来日紀行文（5）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・寸法 cm (形態)	コメント	所蔵館
N017	『日本 第2巻』(中井晶、 夫・齊藤信吉、雄松堂書店、 1978)、『東洋文庫 87・江戸 参府紀行』(齊藤信吉、平凡 社、1967)	ラーヴルト, P. (独)	1897	6 未調査	オランダ商館付医官として1823年來日、1828年帰国。 在任中、1826年の江戸参府紀行の在路 3月2日下関から3月8日まで瀬戸内海経由で後に陸路・船金6月19日兵庫から28日に下關到着。ヨイントごとで絶度の観測を行う。花崗岩の地質、植生について記述、耕作の記述あり。特に蠣島あたりの後城の特徴を多島海と捉えて温かく気候について記述。	—
N018	From Sea to Sea	Kipling, R. (英) Berthold Tauchnitz, Leipzig	1900	6 未調査	キプリングは英国人の作家、長崎から神戸まで、the P. and O. Steamerに乗船する。自然の美しさに満ちた瀬戸内海のルートを通るために、キプリングはタウチナイトの運賃料金を支払ったと記述する。どのような空のもとも、紫、アンバー、グレー、緑、黒と多様に移りゆく島々の美しさを見るためには、支つた傾倒の5倍は価値があったと評価する。甲板には、ツーリストたちがこの景色を眺めるために出てきていて、かれらの感嘆の声が絶えないと織緊した記述もある。	—
N019	『ベルギー公使夫人の明治日記』(長岡洋三郎、中央公論 社、1992)	ダヌタン, E.M. (ベルギー)	1905	6 未調査	外交官夫人として14年来日滞在。 尾道から宮島に船で行楽「美しい春の天気に恵まれて、瀬戸内海の魅惑的な景色の中一日を過しました」 れば、私たちに微笑み語りかけてくる大自然のあくまで愛着いたせらかさを、本当に実感できぬいに違い、ない。こうして過した時間のすばらしさは筆舌につくし難く、決して忘れることができないほどであった。】	p366
N020	『東洋文庫・日本その日その日』(石川欣一訳、平凡社、 1970-1971)	モース, E. (米)	1917	6 未調査	モースは博物学者。東京帝國大学の動物学の教授のおほい外国人。神戸を出発して長崎まで、瀬戸内海を夜に航行した。その名前について記述している「ここは世界で最も美しい航路の一とされている。」	—

N：来日紀行文（6）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法 cm	コメント	所蔵館
N021	The Prince of Wales' Eastern Book: A Pictorial Record of the Voyages of H.M.S. "Renown" 1921-1922	Sir Percival Phillips, St Dunstan, s Hodder and Stoughton, London.	1922	6 未調査 (形態)	英國皇太子エドワード一行のレナウン号による東方周遊。 防1921-1922年の記録。神戸を1922年5月6日に出発して瀬戸内海航行。高松では諱平御の接待を受け、栗林公園と屋島を訪れる。屋島財訪問時の The Princeが掲載される。写真には屋島の山のシルエットを背景にして、日英の国旗を降る人々に歓迎されるエドワード皇太子一行が写されている。写真の撮影場所は、屋島小学校の前通りの道。松平氏はこの半日の歓迎のために、道路整備などに合計10,000ポンド以上を使ったとの説がある。縦いて「一行は屋島を訪れ、瀬戸内の遺物を見学して説明を受ける。」	—	—
N022	A Wayfarer in Unfamiliar Japan (『ウェストンの明治見聞記』) (『瀬戸内海三段、新人物往来社、1987』)	W. Weston, W. Weston & co, London	1925	6 未調査	ウェストンは、1888年に来日したクリリスト教英國聖公会の神戸監区の牧師(1895年まで日本滞在)。本書では瀬戸内海について、靠を費やしてその魅力を語る。「西洋人の旅行者を一層惹きつけるようだ。不思議なことに日本の文学に瀬戸内海の魅力を賞美したものが全く見られないばかりでなく、実際に世間の人々はここに名前をついたなかったのだ。」(p.116)	—	—
N023	『ヴィル船長回憶録』(『影野ウイル、J. (英) 1872頃』)	日廉子訳、北海道新聞社、1989)	1872頃	6 未調査	ジョン・バクスター・ウイルはコロントン出身で、—明治初期の日本やアジア各地で活躍した船乗りである。引退した後は漁船で余生を過ごし自分史 Lookin Back (手稿) を記した。本書は、瀬戸内海で活躍した西欧人船乗りの視点から見た瀬戸内海記述として貴重である。	—	—

N：来日紀行文（7）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代・寸法 cm	コメント	所蔵館
N024	A Diplomat's Wife in Japan (『英國公使夫人の見た明治日本』(横山俊夫譯、淡交社、1988))	フレイザー, M. コーチャンツイ編、 Weatherhill, New York	1889 ~ 1894執筆、 1982刊行	6 未調査 (形態)	1889年4月長崎一東京、ヴェロナ号。 アリー・フレーザーは、東京に英國公使として赴任する夫とともに来日。横戸内外は日本の初印象をつくる「今はもう横戸内にきております。私はすでにこの国の革新にふれだしたようです。その美しさはや遙さでござります。……朝一頃の眺めがあまりうつくしいものですから、直前まで見ていましたが遠ざかっても、悔やむのを忘れてしまいます。私はいろいろなものを見できましたが、松の木に締められた日本山々ほど、ひとつひとつがこの世ならぬ美しさをたたえているものはありません」(p.31)	—
N025	「日本の追憶」『定本モラエ モラエス (ポルス全集)』(花野富藏訳、集英社、1969)	モラエス (ポル トガル)	1899 ~ 1929 日本 滞在	6 未調査 (形態)	ボルトガル人の外交官・ジャーナリスト・作家で、1899-1929年日本滞在、體島にて没。1902年から1913年までポルトガルの新聞に日本の印象記を執筆。「横戸内海、インランド・シイ、これだけ、充分、日の出の帝國を定義できるだろう」p105と幻想的な美しい日本の風景が横戸内海の描写に凝縮。「イギリス人がインランド・シイと呼んでいる横戸内海—英園にも似た風景に驚嘆するあまり、歩行する陸地そっくりの幻想をおこすあの比類のない内海」(p.102)	—

○：その他

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法 (形態)	コメント	所蔵館
0001	黒田家譜 1	—	1688	2	未調査	豊臣秀吉の四國平定の際に、黒田官兵衛が屋島城を攻め 福岡県立図書 記述	福岡県立図書 館
0002	弘化鉛『新編 香川義善 史 神恵院光風 科編 1』(所収)	—	1844	4	未調査	縦真と屋島、源平合戦に関する記述、神恵院光風作 る記述	高松市中央図 書館
0003	小神野辰活『新編 香川義善 史 科編 1』(所収)	小神野與兵衛 著	—	5	未調査	英公(松平頼重)が五十日鉄砲打を船に乗せ、屋島の北 の鼻を日当たりさせた話、高松藩主小神野與兵衛作 る記述	高松市中央図 書館
0004	屋島遊覧電車運賃表	四国水力電氣株 式会社	1923	6	24.1 × 27.1	屋島の図像なし。	高松市歴史資 料館
0005	駆く南海	坂戸税風編	1924	6	未調査	大正11年陸軍特別大演習の記録、振政官(昭和天皇) が屋島を行幸し源平史跡を巡見、「屋島」、日章会本部刊 行	国立国会図書 館
0006	全国産業博覧会スター	—	1928	6	未調査	那須与一の背景に、屋島・高松城天守・洋風建物が描か れ。高松市歴史資 料館	—
0007	モダン讃岐 8月号	—	1936	6	26.7 × 19.3	萬松市西瓦町にあつた南海新報社送行の娛樂雑誌。當時 香川県立ミュ ーージアム の世相や風俗とともに、屋島觀光のよさがわかる。	香川県立ミュ ーージアム
0008	教育歴史画 那須与一刷を 射る図	—	—	6	34.4 × 71.3	「鳥(的)」の裏面、島は描かれているが、白旗が掲げら れれた軍勢(=源氏)とともに描かれており、屋島は描か れていない。	高松市歴史資 料館
0009	【真宗派寺院明細帳】	—	—	6	未調査	古高松村妙覚寺	愛媛県立図書 館
0010	觀光高松大博覽会スター	香川県 高松市	1949	7	未調査	那須与一の背景に、屋島・洋風建物が描かれる。	香川県立瀬戸 内海歴史民俗 資料館
0011	觀光回顧三十年	森裕志、高松 森觀光事業研究 所	1968	7	未調査	日本新八景に屋島の入選を目指した高松市、屋島觀勝会 による活動の回顧録。著者の大阪毎日新聞との折衝な どの記録あり。	高松市中央図 書館

資料編2 文献一覧

今回の屋島の名勝的価値の調査において収集した文献を掲げる。収集に当たっては、高松市立図書館、香川県立図書館に所蔵される郷土資料調査を実施したほか、学術論文の検索サイト(CiNii)等によって屋島の景勝や歴史に関すると思われる論考・書籍および図録類を、可能な限り広く収集することにした。ただし、タイトル等で内容を予測しつつ確認していく方法となるざるを得ないため、内容的には重要であっても収集できていないもののが多数あると思われる。あくまでも、本一覧は調査員が目を通せたものに限られている点、ご了解いただけたると幸いである。

文献については初出年順番に並べてある。このような表記によって、屋島に対する学術的なまなざしの変遷について、およよその流れを理解できるだろう。

(調査員:稻穂将士・井上真美・土杉和央・川口成人・川崎雄一郎・島本多敬・東昇・棟田成紹・百瀬ちぢり・山崎祐紀子)

屋島関連文献一覧(1)

著者	論考名・書名	掲載媒体	出版社	初出	再録
1 後藤丹治	「屋島合戦縁起に就いて」	黒田彰・岡田美穂編 『軍記物語研究論文集』	クレス出版	1924	2005
2 飯田豊	「勝修羅『八島』に於ける屋島合戦の取扱方に就て」	『国語と国文学』2-5		1925	
3 梶原武軒	『復刻讃岐叢書 改訂増補監修 講岐人名辞書』		藤田書店	1928	1973
4 柳田國男	「目一つ五郎考」	『定本柳田國男集 第筑摩書房5巻』	筑摩書房	1927	1962
5 早川孝太郎	『花祭 後篇』		岡書店	1930	
6 能勢朝次	「演能曲目考」	『能楽源流考』	岩波書店	1938	
7 折口信夫	「『八島』語りの研究」	『折口信夫全集第17卷 芸能史篇』	中央公論社	1939	1956
8 森修	「『凱陣八島』は西鶴作なり」	『近松と淨瑠璃』	培書房	1953	1990
9 信多純一	「淨瑠璃史から見た『凱陣』『近松の世界』『八島』作者の問題」		平凡社	1957	1991
10 信多純一	「『出世景清』の成立について」	『近松の世界』	平凡社	1959	1991
11 信多純一	「『津多三郎』と『門出八』『近松の世界』『島』」		平凡社	1959	1991
12 森修	「『凱陣八島』の諸版について」	『近松と淨瑠璃』	培書房	1964	1990
13 池田廣司	「作品研究『屋島（八島）』『親世』35-5」			1968	
14 北川忠彦	「景清像の成立」	『軍記物語考』	三弥井書店	1968	1989

屋島関連文献一覧（2）

著者	論考名・書名	掲載媒体	出版社	初出	再録
15 池田弥三郎	「芸能史の基底—「八島語りの研究」に沿うて—」	『池田弥三郎著作集第1巻 古代および古代』	角川書店	1973	1979
16 笠栄治	「平家物語「那須与一」をめぐって」	『解釈』21-6		1975	
17 大森亮尚	「芸能「八島」序論—民俗芸能からのアプローチ—」	『芸能』17-7		1975	
18 徳江元正	『説曲五番』		桜楓社	1976	
19 武久堅	「合戦譚伝承の一系譜—「屋島軍」の場合—」	『平家物語成立過程考』	桜楓社	1976	1986
20 島津忠夫	「八島の語りと平家・猿楽・舞」	『島津忠夫著作集第11巻 芸能史』	和泉書院	1978	2007
21 天野文雄	「「摂待」考」			1978	
22 北川忠彦	「八嶋合戦の語りべ」	『軍記物論考』	三弥井書店	1978	1989
23 天野文雄	「能における語り物の攝取—直接体験者の語りをめぐって—」	『芸能史研究』66		1979	
24 梶原正昭	「いくさ物語のパターン—「那須与一」の読みを通して考える—」	『日本文学』28-10		1979	
25 永積安明 ほか編	『図説日本の古典九 平家物語』		集英社	1979	
26 松原秀明 編	『日本名所風俗図会14 四国の巻』		角川書店	1981	
27 麻原美子	「諸伝本にみる合戦記・合戦譚」	『平家物語世界の創成』	勉誠出版	1981	2014
28 山下宏明	『『平家物語』の生成—「抜書」ということ—』	山下宏明編『平家物語の生成』	明治書院	1982	1984
29 川本桂子	『『平家物語』に取材した合戦屏風の諸相とその成立について』	『日本屏風絵集成第5巻』	講談社	1984	
30 笠栄治	『『平家物語』「那須与一」の主題とその展開』	笠潤友一編『物語と小説—平安朝から近代まで—』	明治書院	1984	
31 麻原美子	「在外「舞の本」をめぐつて」	『日本女子大学紀要』33		1984	
32 麻原美子	『『平家物語』屋島合戦譚とその芸能空間をめぐつて』	『平家物語世界の創成』	勉誠出版	1984	2014
33 徳江元正	「那須与一の風流」	『室町芸能史論叢』	三弥井書店	1984	
34 麻原美子	「シンポジウム『平家物語』『国文学 言語と文芸』97 を読む」	『国文学 言語と文芸』97		1985	

屋島関連文献一覧（3）

著者	論考名・書名	掲載媒体	出版社	初出	再録
35 池田誠	「那須与一」における『平・論輯』14 家物語』の構成と表現			1986	
36 池田誠	「「那須与一」の源流と流動』	『論輯』15		1987	
37 平田俊春	屋島合戦の日時の再検討 —吾妻鏡の記事の批判を中心として—』	『日本歴史』474		1987	
38 岩崎雅彦	『番外謡曲「屋島寺」の周辺』	『能楽演出の歴史的研究』	三弥井書店	1987	2009
39 伊藤正義	「解題 八島」	『新潮日本古典集成 謡曲集下』		1988	
40 小山泰弘	「地誌・郷土史」	『香川県史第4巻 通史編 近世II』	香川県	1989	
41 島津忠夫	「三道にいわゆる平家の物語—能作者の庖厨にはどんな平家物語があったか—」	『島津忠夫著作集第11巻 芸能史』	和泉書院	1991	2007
42 島津忠夫	「一谷・屋島・壇浦合戦をめぐって」	『島津忠夫著作集第11巻 芸能史』	和泉書院	1997	2007
43 相沢浩通	「屋島合戦譚に菊王丸の矢所を追う—『平家物語』語り本を起点として—」	『古典遺産』41		1991	
44 砂川博	「『壇の浦』と「柳が浦」」	『軍記物語新考』	おうふう	1991	2011
45 栃木県立博物館	『那須与一の歴史・民俗的調査研究』		栃木県立博物館		1991
46 砂川博	『番外謡曲「屋島寺」の成立』	『平家物語の形成と琵琶法師』	おうふう	1991	2001
47 馬の博物館	『絵画にみる平家物語』		馬事文化財団		1991
48 佐伯真一	「いくさがたり」論の展望	村上学編『平家物語と語り』	三弥井書店	1992	
49 田沢裕賀	「平家物語 一の谷・屋島合戦屏風の諸相と展開」	『秘蔵日本美術大観1 大英博物館1』	講談社	1992	
50 藤田成子	『『平家物語』「那須与一扇の的」考—『源平盛衰記』を中心に—』	『伝承文学論「ジャンルをこえて』	東京都立大学 大学院人文学 研究科国文学 専攻中世文学ゼミ	1992	
51 安村敏信	「絵画にみる『平家物語』—中世から江戸まで—」	カタログ編集委員会 編『平家物語・美への旅』	日本放送協会	1992	
52 カタログ編集委員会	『平家物語・美への旅』		日本放送協会	1992	

屋島関連文献一覧（4）

著者	論考名・書名	掲載媒体	出版社	初出	再録
53 三宅晶子	「宇宙を感じる—八島の戦語り」	『新日本古典文学大系月報』48		1993	
54 NHK松山放送局	『平家物語の世界展』		NHK松山放送局	1993	
55 森下友子	「鎌田共済会郷土博物館所蔵の讃岐国絵図」	『香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要』2		1994	
56 染谷智幸	「分水嶺としての淨瑠璃競作—貞享二年の西鶴と近松一」	『シオン短期大学研究紀要』36		1996	
57 森下友子	「高松城下絵図と城下の変遷」	『香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要』4		1996	
58 田中健二・藤井洋一	「冠櫻神社所蔵永禄八年『さぬきの道者一円日記』(写本)について」	『香川大学教育学部研究報告 第1部』97		1996	
59 川鶴進一	「長門本『平家物語』の屋鳩合戦譚—構成面からの検討一」	『早稲田大学大学院文学研究科紀要 第3分冊』42		1997	
60 秋本鉢史	『『出世景清』再考』	『芸術学フォーラム7 効果書房 文芸・演劇の諸相』		1997	
61 神戸市立博物館	『源平物語絵セレクション』		神戸市スポーツ教育公社	1997	
62 佐伯真一	「『屋島合戦』と八島語りについて覚書」	青山学院大学総合研究所人文学系研究センター『研究叢書』12		1998	
63 宮田敬三	「元暦西海合戦論試論—『範頼苦戦と義経出陣』論の再検討一」	『立命館文学』554		1998	
64 深澤邦弘	「教材研究 那須与一——『平家物語』卷十一——」	『武藏野女子大学紀要』33		1998	
65 大橋正叔	「淨瑠璃史における貞享二年」	近松研究所十周年記念論文集編集委員会編『近松の三百年』	和泉書院	1999	
66 信多純一	「大橋正叔氏「淨瑠璃史における貞享二年」批判」	近松研究所十周年記念論文集編集委員会編『近松の三百年』	和泉書院	1999	
67 信多純一	「『出世景清』責め場の形成をめぐって—『牛若千人切り』作者考に学ぶ—」	近松研究所十周年記念論文集編集委員会編『近松の三百年』	和泉書院	1999	
68 高松市歴史資料館編	『源平合戦図絵の世界』		高松市歴史資料館	1999	
69 岩崎雅彦	「『安宅』と淨瑠璃『凱陣八島』『出世景清』」	『能楽演出の歴史的研究』	三弥井書店	2000	2009

屋島関連文献一覧（5）

著者	論考名・書名	掲載媒体	出版社	初出	再録
70 田淵句美子	「1300 年前後—伏見院の時代」	『国文学 解釈と教材の研究』45-7		2000	
71 日下力	「1350 年前後—覚一本平家物語と太平記—」	『国文学 解釈と教材の研究』45-7		2000	
72 岡田三津子	「1400 年前後—応永・永享期の軍記物語—」	『国文学 解釈と教材の研究』45-7		2000	
73 村上美登志一	「1500 年前後—戦国時代—」	『国文学 解釈と教材の研究』45-7		2000	
74 神原千鶴	「1600 年前後—軍記物語と扇面画—五山禅僧による軍記物語享受の一端—」	『国文学 解釈と教材の研究』45-7		2000	
75 兵藤裕巳	「芸能の威力と拘束—將軍家の芸能—」	『国文学 解釈と教材の研究』45-7		2000	
76 胡光	「『水戸学』と高松平家」	香川県歴史博物館編『徳川御三家展』	香川県歴史博物館	2000	
77 御厨義道	「高松平家の成立と徳川御三家」	香川県歴史博物館編『徳川御三家展』	香川県歴史博物館	2000	
78 賴富本宏・白木利幸	『日文研叢書 23 四国遍路の研究』		国際日本文化研究センター	2001	
79 大橋直義	「金仙寺観音講説話の系譜」	『転形期の歴史叙述—縁起巡礼、その空間と物語—』	慶應義塾大学出版会	2001	2010
80 大橋直義	「珠取説話の伝承圈—志度寺縁起の構造と南都・律—」	『転形期の歴史叙述—縁起巡礼、その空間と物語—』	慶應義塾大学出版会	2001	2010
81 木原溥幸・丹羽佑一・田中健二・和田仁	『香川県の歴史』		山川出版社	2001	
82 大橋直義	「『平家物語』の内と外—「異説」をめぐる考察—」	『転形期の歴史叙述—縁起巡礼、その空間と物語—』	慶應義塾大学出版会	2001・2007	2010・2008
83 麻原美子	「歴史語りの『平家物語』をめぐって」	サントリー美術館編『源平の美学—『平家物語』の時代』	サントリーハウス	2002	
84 酒巻智子	「源平の美学—『平家物語』の時代—」	サントリー美術館編『源平の美学—『平家物語』の時代』	サントリーハウス	2002	
85 サントリー美術館編	『源平の美学—『平家物語』の時代』		サントリーハウス	2002	
86 出口久徳	「屋島合戦図断簡」	『チェスター・ペーティーライブラリイ絵巻 絵本解題目録』	勉誠出版	2002	

屋島関連文献一覧（6）

著者	論考名・書名	掲載媒体	出版社	初出	再録
87 出口久徳	「絵画一挙紹・近代絵画一」『国文学 解釈と教材の研究』47-12			2002	
88 橋村愛子	「近世における『平家物語』『国文学 解釈と教材の絵画化とその享受について』『研究』47-12			2002	
89 二本松康宏	「DB: 平家伝説と遺跡 100」『国文学 解釈と教材の研究』47-12			2002	
90 武久堅	「作品研究〈屋島〉一上一」『観世』70-8			2003	
91 武久堅	「作品研究〈屋島〉一下一」『観世』70-9			2003	
92 横道万里雄	「能演出の広がり 八島」『観世』70-10			2003	
93 蔭田治子	「能〈八島〉と平家琵琶」『観世』70-10			2003	
94 野村万作	「那須与市語について語る」『観世』70-11			2003	
95 片山慶次郎	「インタビュー〈屋島〉をめぐって」『観世』70-12			2003	
96 高橋正俊	「日本の国立公園の法的制度—瀬戸内海国立公園を例にして—」	歴史環境を考える会編『歴史環境を考える一人間・生活・地域一』	美巧社	2003	
97 武重雅文	「都市景観の変容—地図に表れた高松の変化から学ぶこと—」	歴史環境を考える会編『歴史環境を考える一人間・生活・地域一』	美巧社	2003	
98 安原真琴	「扇文化の一断面—扇伝承と平家の女性たち—」	小峯和明編『平家物語』の転生と再生』	笠間書院	2003	
99 出口久徳	「屋島合戦図屏風の世界」	小峯和明編『平家物語』の転生と再生』	笠間書院	2003	
100 出口久徳	「平家物語絵画資料・参考文献一覧」	小峯和明編『平家物語』の転生と再生』	笠間書院	2003	
101 高松市教育委員会編	『史跡天然記念物屋島』		高松市教育委員会	2003	
102 野中寛文	「天文10・11年長宗我部氏讃岐国香川郡侵攻の記録史料」	『香川県中世城館跡詳細分布調査報告』		2003	
103 橋詰茂	「戦国期における香川氏の動向—『南海通記』の検証—」	『香川県中世城館跡詳細分布調査報告』		2003	
104 唐木裕志	「戦国期の借船と臨戦態勢&香川民部少輔の虚実」	『香川県中世城館跡詳細分布調査報告』		2003	
105 田中健二	「長宗我部元親の東讃侵攻と諸城主の動向」	『香川県中世城館跡詳細分布調査報告』		2003	

屋島関連文献一覧（7）

著者	論考名・書名	掲載媒体	出版社	初出	再録
106 田中健二	「屋島合戦にいたる源平合戦の軍略」	香川県歴史博物館編『源平合戦とその時代』		2003	
107 香川県歴史博物館	『源平合戦とその時代』		香川県歴史博物館	2003	
108 宮田敬三	「12世紀末の内乱と軍制—『日本史研究』501 兵糧米問題を中心として—」	『日本史研究』501		2004	
109 日下力・鈴木彰・出口久徳	『平家物語を知る事典』		東京堂出版	2005	
110 瀬田勝哉	「伏見即成院の中世—歴史と縁起ー」	『武藏大学人文学会雑誌』36-3		2005	
111 泉万里	「幸若舞曲「八島」とその絵画」	『大和文華』113		2005	
112 御厨義道	「高松藩主の「舟遊」について」	『(香川県歴史博物館)調査研究報告』1		2005	
113 伊藤りさ	「人形浄瑠璃における平家物語受容のあり方を巡って付・『仏御前扇車』論」	『演劇研究センター紀要V 早稲田大学21世紀COEプログラム〈演劇の総合的研究と演劇学の確立〉』		2005	
114 香川県歴史博物館	『時をつなぐ写真』		香川県歴史博物館	2005	
115 NHKプロモーション編	『義経一源氏・平氏・藤原氏の至宝』		NHNプロモーション	2005	
116 石川県立歴史博物館	『源平合戦と北陸』		石川県立歴史博物館	2005	
117 河内将芳	「戦国期祇園会の再興と「祇園会山鉢事」」	『中世京都の都市と宗教』	思文閣出版	2006	
118 大山真充	「近世における神櫛王墓」	『(香川県歴史博物館)調査研究報告』2		2006	
119 野村美紀・佐藤竜馬	「明治十五年の高松一ケンブリッジ大学図書館所蔵の高松城・城下の写真についてー」	『(香川県歴史博物館)調査研究報告』2		2006	
120 山下宏明	「屋島いくさの義経一(八島)ー」	『琵琶法師の『平家物語』と能』	塙書房	2006	
121 胡光	「『高松城下図屏風』の歴史的前提」	『(香川県歴史博物館)調査研究報告』3		2007	
122 野村美紀	「『高松城下図屏風』の基礎的考察」	『(香川県歴史博物館)調査研究報告』3		2007	

屋島関連文献一覧（8）

著者	論考名・書名	掲載媒体	出版社	初出	再録
123 佐藤竜馬	「考古学の視点から見た「高松城下図屏風」—一六四〇～一六五〇年代の高松—」	『(香川県歴史博物館)調査研究報告』3		2007	
124 松岡明子	「美術史の視点から見た「高松城下図屏風」」	『(香川県歴史博物館)調査研究報告』3		2007	
125 大川真充	「『高松城下図屏風』に描かれた製塙」	『(香川県歴史博物館)調査研究報告』3		2007	
126 出口久徳	「中世から近世への平家物語絵の展開」	『ヒーロー伝説 織がれる義経』	斎宮歴史博物館	2007	
127 松田珠美	「斎宮歴史博物館蔵『源平盛衰記画巻』について』	『ヒーロー伝説 織がれる義経』	斎宮歴史博物館	2007	
128 鈴木彰	「明治期の『義経』」	『ヒーロー伝説 織がれる義経』	斎宮歴史博物館	2007	
129 小林保治 編	『平家物語ハンドブック』		三省堂出版	2007	
130 原田敦史	「屋島合戦譚本文考」	『平家物語の文学史』	東京大学出版会	2007	2012
131 市村高男	「中世讃岐の港町と瀬戸内海海運—近世都市高松を生み出した条件—」	『海に開かれた都市—高松－港湾都市 900年のあゆみ』	香川県歴史博物館	2007	
132 香川県歴史博物館 編	『海に開かれた都市—高松－港湾都市 900年のあゆみ—』		香川県歴史博物館	2007	
133 山元敏裕	「古代山城屋嶋城について」	地方史研究協議会編『歴史に見る四国—その内と外と—』	雄山閣	2008	
134 上野進・ 佐藤竜馬	「中世港町・野原について」	地方史研究協議会編『歴史に見る四国—その内と外と—』	雄山閣	2008	
135 上野進	「海に開かれた中世寺院—讃岐国道隆寺を中心として—」	『(香川県歴史博物館)調査研究報告』4		2008	
136 御厨義道	「高松城における海辺利用の変遷について」	『(香川県歴史博物館)調査研究報告』4		2008	
137 田中健二	「生駒時代・高松城下周辺の地形について」	『香川県立文書館紀要』12		2008	
138 川合康	「平家物語とその時代」	川合康編『平家物語を読む』	吉川弘文館	2008	
139 川合康	「内乱の展開と『平家物語史観』」	川合康編『平家物語を読む』	吉川弘文館	2008	
140 志立正知	「平家物語の成立」	川合康編『平家物語を読む』	吉川弘文館	2008	
141 大橋直義	「平家物語と在地伝承—平家物語の内と外—」	川合康編『平家物語を読む』	吉川弘文館	2008	

屋島関連文献一覧（9）

著者	論考名・書名	掲載媒体	出版社	初出	再録
142 宮田敬三	「屋島・壇ノ浦合戦と源義經」	川合康編『平家物語を読む』	吉川弘文館	2008	
143 清水眞澄	「平家物語と芸能」	川合康編『平家物語を読む』	吉川弘文館	2008	
144 出口久徳	「源平合戦屏風の世界——の谷・屋島合戦図屏風を中心にして」	川合康編『平家物語を読む』	吉川弘文館	2008	
145 須田牧子	「朝鮮通信使と安徳天皇」	川合康編『平家物語を読む』	吉川弘文館	2008	
146 香川県立ミュージアム編	『近くでなつかしい昭和展——夢・希望・未来を見つめた日々』		香川県立ミュージアム	2009	
147 三宅秀和	「土佐光吉宛平家絵制作関連書状の再検討—狩野光信研究の視点から—」	『国華』114-9		2009	
148 片桐孝浩	「序—中世港町・野原を明らかにするために—」	市村高男ほか編『中世の讃岐と瀬戸内世界—港町の原像 上』	岩田書院	2009	
149 松本和彦	「野原の景観と地域構造」	市村高男ほか編『中世の讃岐と瀬戸内世界—港町の原像 上』	岩田書院	2009	
150 上野進	「野原をめぐる寺社と領主」	市村高男ほか編『中世の讃岐と瀬戸内世界—港町の原像 上』	岩田書院	2009	
151 乗松真也	「中世港町の漁撈集団」	市村高男ほか編『中世の讃岐と瀬戸内世界—港町の原像 上』	岩田書院	2009	
152 渡谷啓一	「古・高松湾と瀬戸内世界」	市村高男ほか編『中世の讃岐と瀬戸内世界—港町の原像 上』	岩田書院	2009	
153 松田朝由	「中世石造物の流通から見た讃岐の地域性と野原」	市村高男ほか編『中世の讃岐と瀬戸内世界—港町の原像 上』	岩田書院	2009	
154 北山健一郎	「中世港町の地形と空間構成」	市村高男ほか編『中世の讃岐と瀬戸内世界—港町の原像 上』	岩田書院	2009	

屋島関連文献一覧（10）

著者	論考名・書名	掲載媒体	出版社	初出	再録
155 萩野憲司	「中世讃岐における引田の位置と景観」	市村高男ほか編『中世の讃岐と瀬戸内世界—港町の原像 上』	岩田書院	2009	
156 松本和彦	「中世宇多津・平山の景観」	市村高男ほか編『中世の讃岐と瀬戸内世界—港町の原像 上』	岩田書院	2009	
157 市村高男	「中世港町仁尾の実像と瀬戸内海海運」	市村高男ほか編『中世の讃岐と瀬戸内世界—港町の原像 上』	岩田書院	2009	
158 佐藤竜馬	「初期高松城下町の在地的要素」	市村高男ほか編『中世の讃岐と瀬戸内世界—港町の原像 上』	岩田書院	2009	
159 高松市教育委員会	『史跡高松城跡整備報告書 第4冊 高松城史料調査報告書』		高松市・高松市教育委員会	2009	
160 田中健二	「続 生駒時代・高松城下周辺の地形について」	『香川県立文書館紀要』14		2010	
161 大津雄一 ほか編	『平家物語大事典』		東京書籍	2010	
162 屋島風土記編纂委員会編	『屋島風土記』		屋島文化協会	2010	
163 那須与一 伝承館編	『那須家の芸術と学問』		那須与一伝承館	2010	
164 松尾葦江	「屋島合戦記事の形成」	千明守編『平家物語の多角的研究—屋代本を拠点として—』	ひつじ書房	2011	
165 胡光	「四国の大名」	四国地域史研究連絡協議会編『四国の大名—近世大名の交流と文化—』	岩田書院	2011	
166 根津寿夫	「阿波蜂須賀家の交際—彦根井伊家・高松松平家を中心にして—」	四国地域史研究連絡協議会編『四国の大名—近世大名の交流と文化—』	岩田書院	2011	
167 御厨義道	「高松松平家における大名間交流—儀礼をめぐる彦根井伊家との関係—」	四国地域史研究連絡協議会編『四国の大名—近世大名の交流と文化—』	岩田書院	2011	
168 元木泰雄	「延慶本『平家物語』にみる源義経」	佐伯真一編『中世の軍記物語と歴史叙述』	竹林舎	2011	

屋島関連文献一覧（11）

著者	論考名・書名	掲載媒体	出版社	初出	再録
169 鈴木彰	『平家物語』における合戦 叙述の類型—屋島合戦の 位置と〈壇ノ浦合戦〉の創 出—	佐伯真一編『中世の 軍記物語と歴史叙述』	竹林舎	2011	
170 田中健二	「生駒時代の国絵図に見る 讃岐の姿—海岸線と国境 の岐通を中心に—」	『香川県立文書館紀 要』16		2012	
171 山本隆志	「那須与一と扇の的—平家 物語の叙述と構想—」	山本隆志編著『那須 与一伝承の誕生—歴 史と伝説をめぐる相 剋一』	ミネルヴ ア書房	2012	
172 山本隆志	「源平内乱のなかの那須 家」	山本隆志編著『那須 与一伝承の誕生—歴 史と伝説をめぐる相 剋一』	ミネルヴ ア書房	2012	
173 山本隆志	「那須野狩りと御家人那須 家」	山本隆志編著『那須 与一伝承の誕生—歴 史と伝説をめぐる相 剋一』	ミネルヴ ア書房	2012	
174 山本隆志	「那須氏の館」	山本隆志編著『那須 与一伝承の誕生—歴 史と伝説をめぐる相 剋一』	ミネルヴ ア書房	2012	
175 山本隆志	「国家・社会の分裂・統合 と那須家」	山本隆志編著『那須 与一伝承の誕生—歴 史と伝説をめぐる相 剋一』	ミネルヴ ア書房	2012	
176 山本隆志	「戦国期の那須家と与一伝 承の再生」	山本隆志編著『那須 与一伝承の誕生—歴 史と伝説をめぐる相 剋一』	ミネルヴ ア書房	2012	
177 近藤好和	「与一所用と伝える太刀と 矢」	山本隆志編著『那須 与一伝承の誕生—歴 史と伝説をめぐる相 剋一』	ミネルヴ ア書房	2012	
178 近藤好和	「那須家伝来の甲冑」	山本隆志編著『那須 与一伝承の誕生—歴 史と伝説をめぐる相 剋一』	ミネルヴ ア書房	2012	
179 新井敦史	「芭蕉の訪ねる那須家の史 跡」	山本隆志編著『那須 与一伝承の誕生—歴 史と伝説をめぐる相 剋一』	ミネルヴ ア書房	2012	
180 阿部能久	「『那須与一』の復活」	山本隆志編著『那須 与一伝承の誕生—歴 史と伝説をめぐる相 剋一』	ミネルヴ ア書房	2012	

屋島関連文献一覧（12）

著者	論考名・書名	掲載媒体	出版社	初出	再録
181 金田章裕・上杉和央	『日本地図史』		吉川弘文館	2012	
182 田中健二	「続・生駒時代の国絵図に見る讃岐の姿—道と川の変遷を中心にして—」	『香川県立文書館紀要』17		2013	
183 出口久徳	「屋島合戦図屏風を読む—『御堂』イメージを中心に—」	石川透編『中世の物語と絵画』	竹林舎	2013	
184 星瑞穂	「『通航一覧』に見る『贈朝屏風』の画題と外交—『基盤忠信』を中心に—」	石川透編『中世の物語と絵画』	竹林舎	2013	
185 松尾剛次	「中世幕教团と泉涌寺末寺の筑後国への展開—新発見の中世西大寺末寺帳に触れて—」	『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』10	山形大学大学院社会文化システム研究科	2013	
186 溝渕利博	「藩政成立期における藩主の『鶴鷹遺産』的行為の政治文化史的意義—初代黒崎58・59年岐高松藩主松平頼重の藩政における『遊氣』『舟遊』等の位置づけ—」	『(高松大学・高松短期大学) 研究紀要』	高松大学・高松短期大学	2013	
187 今井正之助	「『扇の的』考—『とし五十ばかりなる男』の射殺をめぐって—」	『日本文学』63-5		2014	
188 高松市・香川大学天然記念物屋島調査団編	『天然記念物屋島調査報告書』		高松市	2014	
189 伊藤悦子	「『源平合戦図屏風』の一考—『軍記と語り物』50察—いわゆる「一の谷・屋島合戦図屏風」の分類方法について—」	『軍記と語り物』50		2014	
190 木原溥幸	「讃岐白峯寺にみる高松藩と地域社会」	『香川大学教育学部研究報告 第1部』141	香川大学教育学部研究報告 第1部	2014	
191 柳澤恵理子	『平家物語図屏風』	『国華』120-2		2014	
192 麻原美子	『平家物語世界の創成』		勉誠出版	2014	
193 小松勝記	「四國遍礼名所圖會解題考察」	『四國遍礼名所圖會并近代の御影・墨寫真』	金剛頂寺	2014	
194 橋爪紳也	『瀬戸内海モダニズム周遊』		芸術新聞社	2014	
195 田井静明	「香川県の保勝会の国立公園指定運動と瀬戸内観光の特徴」	香川県立東山魁夷せとうち美術館編『美しき山魁夷せと日本瀬戸内の風景』	香川県立東山魁夷せとうち美術館	2014	

屋島関連文献一覧（13）

著者	論考名・書名	掲載媒体	出版社	初出	再録
196 香川県立 ミュージ アム	『空海の足音 四国へんろ 展 香川編』		香川県立 ミュージ アム	2014	
197 松尾葦江	「源平盛衰記の三百年」	松尾葦江編『文化現 象としての源平盛衰 記』	笠間書院	2015	
198 伊藤慎吾	「『源平軍物語』の基礎的考 察」	松尾葦江編『文化現 象としての源平盛衰 記』	笠間書院	2015	
199 出口久徳	「寛文・延宝期の源平合戦 イメージをめぐって—延 宝五年版『平家物語』の挿 絵を中心に—」	松尾葦江編『文化現 象としての源平盛衰 記』	笠間書院	2015	
200 平藤幸	「与一射扇受諾本文の諸 相」	松尾葦江編『文化現 象としての源平盛衰 記』	笠間書院	2015	
201 石川透・ 山本岳史・ 伊藤慎吾・ 伊藤悦子・ 松尾葦江	「[調査報告] 平家物語・源 平盛衰記関連絵画資料」	松尾葦江編『文化現 象としての源平盛衰 記』	笠間書院	2015	
202 伊藤悦子・ 大谷貞徳	「フランス国立図書館蔵 「源平盛衰記画帖」場面同 定表」	松尾葦江編『文化現 象としての源平盛衰 記』	笠間書院	2015	
203 佐々木英 理子	「図版 源平合戦図屏風」	『国華』120-7		2015	
204 宮崎もも	「忠信次信物語絵巻（八島 絵巻）」	『国華』120-9		2015	
205 真念（稻 田道彦注）	『四国偏禮道指南』		講談社	2015	

報告書抄録

ふりがな	やしまめいしょうちょうさほうこくしょ							
書名	屋島名勝調査報告書							
刷書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	高松市・京都府公立大学法人							
編集機関	高松市・京都府公立大学法人							
所在地	〒760-8571 香川県高松市番町一丁目8番15号 TEL087-839-2660							
発行年月日	西暦2016年3月31日							
所取文化財名	所在地	コード		北緯 °.′.″	東経 °.′.″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	番地					
やしま 屋島	かがわけん 香川県	37201	—	34° 21' 12"	134° 06' 14"	2014.5.26 ～ 2016.3.31	—	学術調査
	たかまつし 高松市							
	やしまひがしま 屋島東町							
	やしまなかまち 屋島中町							
	やしまにしまむら 屋島西町							
たかまつりょう 高松町								
要約	屋島は昭和9年に国の史跡及び天然記念物に指定されている。しかし、屋島の指定については、昭和2年頃から準備が進められており、当初は名勝としての指定が検討されていた。その後、史跡及び名勝としての指定が検討されていたが、昭和9年に屋島を含む備讃瀬戸が日本初の国立公園として指定されたことにより、名勝的価値はそちらに委ねられた。同年の史跡及び天然記念物指定時に名勝としても指定すべきであった屋島を、現代的な手法によって名勝の観点から調査した報告書である。							

屋島名勝調査報告書

平成28年3月31日

編集／発行 高松市教育委員会
 高松市番町一丁目8番15号
 京都府公立大学法人
 京都市上京区河原町通広小路上る梶井町465

印 刷 有限会社 中央ファイリング
 高松市伏石町2157番地7